
おかえりなさい、勇者様。

八木羊子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おかえりなさい、勇者様。

【Nコード】

N6178P

【作者名】

八木羊子

【あらすじ】

「月の御子」は魔王の封印を解く鍵。

女子高生のミヤは、そんな月の御子として異世界に召還された。だが、生け贄の儀式の最中に、魔王はあっさり勇者に倒されてしまう。

勇者は伝説通りに月の御子を助け出すが、ミヤは命の恩人のはずの勇者を殴り飛ばした。

出会いはどうれあれ、ミヤは勇者の許で世界に帰る方法を探すことになる。

ところが頼りの勇者は早々に地方領主としてに左遷され貧乏になったりと、最初から前途多難。

剣も魔導も使えない主人公ミヤが恋に陰謀に翻弄されながらも、「はったり」で乗り切る異世界冒険譚。

登場人物紹介（前書き）

登場人物が増えてきました。

連載だと、これだれだったっけ？とかなるんですよ。

なので名前は雰囲気より覚えやすさ重視でつけています

ストーリーの展開や新しいキャラが登場したら編集します。

ネタバレにならない程度に気をつけます。

登場人物紹介

主要人物

（ ）は愛称

サガワ ミヤ（ミヤ）

進路に悩む女子高生。

黒髪に黒い瞳、発展途上中体型の和風少女。

父と母と弟の4人家族。

「月の御子」として魔王に異世界へ召還される。

ジャン・ルーク・ヴィ・バルザック（ジャン）

エソニア国第2騎士団にいたが、

第4次魔王討伐隊の隊長として魔王をし、勇者の二つなを得た青年。
珍しい黒髪に黒い瞳。

国王よりバルザック子爵の爵位を授かる。

マルコ・スタイン（マルコ）

ジャンの戦友で頼りがいのある元傭兵の赤紙の戦士。

魔王討伐隊に加わり、ジャンを支える。

ジャンより4つ年上。

パット・ルイス（パット）

魔王討伐隊が遠征途中で拾われたツンデレ少年。
ジャンを敬愛している。

金髪巻き毛で碧眼という美少年要素を持つが鼻ぺちやで地味顔。

ピート・ロッド

歴史学と社会学を修め、月の御子や魔王などの伝説を研究している学者。

王子達の教師を勤め、月の御子と王の連絡係兼教師としてバルザック領に赴任。

緑のローブを身にまとった濃い茶髪の、甘いものに目がない男。

ジル・マリー

剣を振るう魔導士で、魔剣の女王とも呼ばれる。

没落貴族の侯爵令嬢で、腕がありながら魔導騎士団の万年準隊員。

短い金髪に薄い緑色の瞳で美人だが、男性に負けない大柄で強靱な身体に加え性格もとても頼もしい。

王都編

・魔王

青白い肌に銀の髪に氷のような瞳の美しい青年の姿をしている魔物の王。

・エソニア王ダルド3世

ジャン達の国、エソニア国の現国王。

国王に就任してから、特に軍備に力を注いでいる武闘派。

・リカルド・ロツジウッド（リード）

魔導騎士隊赤分隊隊長で、ジャンの先輩で、マルコの戦友。

バルザック編

・ラクサ

侍女として領主館に住み込む、ミヤに専属の侍女

・ベルナン

領主館の執事で、館内の責任者兼領主のスケジュールを管理してい

る。

・ハリエツト

領内で一番大きい街の食料品店の女主人で、この街の顔役にして領内の各町村の顔役のまとめ役。夫は地元の漁師を束ねる網元。

・賢者サリーツァ

大賢者とも調整者とも呼ばれ、1200年前から生きてるといわれる。

陰謀編

・ゴウグレリオン（ゴウラ）

魔王の側近で、豹のような頭で二本長い角と牙を持つ黒い魔物。

・イーザ・ダコダ

バロナの薬草を商う商人でダコダ商会の代表。

・エリー

イーザの一人娘。

陰謀編2

・フランセスカ・ドノワール（フランフラン）

ジャンの元婚約者で男爵令嬢。

・ファニタ

ジャンの母で、ある男爵家のゆかりの者だったが、ジャンが6歳の時死去。

・ハインツ・マイア

ジャンの実の父親で、現マイア侯爵。

・黒蜘蛛
クロスケ

黒い導師服を着た魔導士で、裏の世界の運び屋（調達屋）。

1・プロローグ

「月の御子をここへ！」

暗がり到低く魔王の声が響き、オレンジの炎を揺らす。

その声に呼応するように、あたりを埋め尽くす配下の魔物が吠え騒ぐ。

そして波が引くような音と共に、女を閉じ込めた檻がふわりふわりと広間の中央へと運ばれた。

いきついた先は、魔王の前に設置された石の台。

石のベッドに横たわった少女は、おびえた瞳で身体を震わせていた。魔王は彼女に、無言で凍てついた氷原のような青い瞳を向ける。

空に昇る月が欠けはじめると、魔物達は一斉にひれ伏した。

魔王は、黒々と輝く剣を手にした。禍々しいいびつな装飾の闇の剣。

『……其は月が闇に捕らわる時、月の御子の血を贄に最後の封印破られん。』

其は魔王の復活なり……』

古の伝承の通り、魔王が完全に力を取り戻す瞬間が来た。

月は銀糸のようにほそくなり、やがてかき消えて、この世に完全な闇をもたらした。

魔王の手の剣は、聖なる血を求め輝きを増す。

その刃先が彼女に向けられたまさにその時だった。

「やめろ……」

先ほどまで月が光を落としていた天窓を突き破り、硝子と共に男達

が魔王の前に降り立った。

自分と対峙しにらみつける男の手の剣をみて、魔王は不敵に笑った。

「光の剣か。とうとうここまで来たか、勇者よ」

「魔王、もうこれがお前の最期だ。覚悟しろ！」

勇者と呼ばれた白銀の鎧に身を包んだ男は、白く輝く大剣で魔王に斬りかかった。

周囲を囲んでいた魔物は、勇者の連れの者達が次々となぎ倒していった。

黒い刃と白い刃がぶつかり合い、時には魔法の光がはじける。

その時間は永劫に続くかと思われた。

と、次第に防戦一方になっていった勇者が魔王の剣を受け損ね姿勢がくずれた。

ここに着くまで既に満身創痍だった勇者は、氣力を振り絞って魔王に挑んでいた。

多くの人を守れなかったからこそ、残された人々を守らなければ。

そして目の前にいる、白い衣の少女を。

「うおおおおおっ」

自分を奮い立たすように声をあげ、勇者は足に力を込めて再び魔王に斬りかかった。

だが、やすやすと受け止められ、次に来た重い斬撃で光の剣は手からはじき飛ばされた。

ひざをつく勇者に、魔王は黒い刃を振るった。

ここまでか。

そう覚悟したが、その次はなかった。

勇者の前に月の御子が立ちはだかったからだ。
魔王の剣は、彼女の白い喉元すれすれでとまった。

「御子よなぜ…」

「空を、空をみて」

魔王が上を仰げば、再び光が戻り始めていた。
そう、闇の刻が終わってしまったのだ。
力の全てを取り戻す為に必要な儀式の時が。

呆然とする魔王。

その瞬間、勇者は横に飛ぶと落ちていた剣を拾い、渾身の力を込めて投げた。

「ば、ばかな…」

勇者と御子に向き直った魔王の胸には、光輝く刃が深々と突き刺さっていた。

次に魔王が言葉を発した時、陽光のような剣の光があたりを真っ白に染め上げて魔王と、周囲で戦っていた魔物もろとも消え去っていた。

「これで、全てが終わった…」

目のくらむような光が消え、再び夜の闇が辺りを包んだ。
だが、先ほどまでは心まで塗りつぶすような闇とは違い、星と月の照らす平和な夜の暗さだ。

その中でたたずむ勇者に仲間達が駆け寄った。

「勇者様！」

「ジャン、とうとうやったな！」

「ああ、みんなのお陰だ。これで全て終わったな」

抱き合う彼等の横で、ふと気配が動いた。

「大丈夫？怪我はないかい？」

月の光のように、輝く衣を纏った、闇色の髪と瞳の乙女がそこにいた。

まだショックから抜けきれていないのか、顔は蒼白で、足下もフラフラとして危うい。

かけよった勇者は、彼女を抱き寄せ支えた。

「安心しなさい。もう君は大丈夫だ。魔王は滅びたのだから」

勇者ジャンルークはひざまづいて彼女の手をとり、姫君へするような手に口づけた。

魔王によって浚われ閉じ込められた伝説の「月の御子」を、勇者は助け出したのだ。

その時、パンツと乾いた音が鳴り響いた。

勇者は頬の熱を感じながら目を見張った。

彼女は勇者の頬を叩いて悲鳴をあげるように叫んだ。

「なんてことしたの！このトンチキ！」

1 プロローグ（後書き）

このサイトでの初投稿作品です。

完結目指して、書いて出しの連載です。

読み苦しいところも多く、公開後に少しづつ手直ししています。
どうぞご容赦ください。

よろしければ感想を頂けると嬉しいです。

2・異世界の月

「御子、今日はこの宿で休みますよ。明日の昼に城に入りましょう。御子、聞いてますか？」

「あんたとは口きかないって言ったでしょ？」

「ああよかった。お腹が鳴る音がひどかったから、てっきりお腹が空きすぎて死んじゃったかと思いましたよ。さ、宿に着いたらご飯だご飯！」

私は、勇者の背中で深々とため息をついた。

「ちょっと、こいつなんなのよ」

「なんなのと言われても…うちの勇者様ですよ」

横に立つ背の高い赤毛の男は、同情するような目でやさしく応えた。

「こんな天然で、よく勇者になれたね…」

「素直と言ってください。それにやるときはやる人ですから」

「でも、人を疑うことを少しはしたほうがいいよ。無防備に背中向けちゃって」

憎まれ口をたたく私に、勇者は邪気なく笑った。

「あなたは命を投げうって僕を守ってくれた。なんの心配があるっていうのです」

ちがうのに…

心の中でそうつぶやき、

大きなため息をひとつつきながら、彼の背中を拳でポスツと叩いた。

私は、勇者の背中に背負われ…しぱりつけられていた。

街道はもちろん、城下町に入ってから人目が痛い。痛すぎる。

そもそも、私が勇者様ご一行から逃げようとするからなんだけど。

魔王が目の前で消えてから、あつというまの3日間だった。魔王を滅ぼしたこの男達は、くずれ落ちはじめた魔王の城から私を連れ出した。

私は状況がよく分からないまま、手をひかれるままついていくしかなかった。

魔王の影響力がなくなっても、魔王の領土は魔物がいなくなるわけではないからと、勇者一行は朝日が昇るまで進み続けた。

そして、最寄りの農村にたどり着き宿に入るやいなや、私も勇者達も泥のように眠ってしまった。

翌朝は、魔王を倒した勇者達は歓迎する村民に囲まれて話をする暇もない。

人々が、勇者達を歓迎しているということは分かった。

連れの私まで、彼等の仲間として歓迎されたが、私はただこの場から逃げ出したかった。

かといって、勇者達から逃げようとしても、勇者や彼の仲間にくすぐりかかれてしまうのだ。

皆が寝静まった宿屋から、食事中にトイレだと中座して、服屋で試着をするフリをして、街道を歩きながらふいに猛ダッシュして藪に隠れてみたり。

勇者達から10m離れるとすぐに逃げたことがバレ、隠れていても猟犬並みにかぎつけてくる。

猛ダッシュを繰り返すこと8回目。

とうとう根負けした勇者は、私を逃がしてはくれなかった。

時間がないからと、私を背中にしぼりつけて移動するようになったのだ。

その間、私はせめてもの抵抗として何を訪ねられても口を開かなかった。

勇者の背に揺られること2日。

それも今日で終わり。

明日は、いよいよお城で王様に会うらしい。

「御子、ちよつといいかな？」

その晩、身体を洗って買いそろえてもらった寝間着用の木綿のワンピースを着、髪を乾かしてる私の元に勇者が訪れた。

私と同じ黒髪で、頭2つ分背が高いひよろつとした男。

だけど、2日間背中にしがみついたから、鍛えられしなやかな筋肉が身体を包んでることを私は知ってる。

薄着な私の姿に、彼は少し顔を少し赤らめ下を向いた。

童顔で親しみやすいかわい顔立ちだなと思ってたけど、もしかしたら思ったより年下なのかもしれない。

「そのベッドに座るといいよ。お茶飲む？」

私は自分が座っていた場所を勧めると、ポットに入った冷めたお茶をカップに注いだ。

それをすすめ、私もカップを持って隣に座った。

「ようやく口をきいてくれるんだね」

「だって、避けられないってわかったし。ちゃんと話をしなきゃと思っ」

意地になって、口なんかきくものかと思ってた。

昔から腹が立つと、頭の中でぐるぐると思考がまわるばかりで文句がちゃんと言葉にならない性分なのもあった。

だけど、さすがにこの状況じゃこのままだんまりですむわけにはいかない。

助けてくれる家族も友達もいないから…

それに、本当は誰かと話したかったんだ。

「僕も君とちゃんと話をしたかったんだ」

勇者は、私の目をそつとのぞき込んだ。

私と同じ黒い瞳に、ランプの明かりがオレンジ色の星を散らしている。

「ちょっと、まだ許したわけじゃないんだからあんまり慣れ慣れしにくいので」

目がすっかり合ったことが気恥ずかしく、ぷいと横を向く私に苦笑しながら、勇者は話をすすめた。

「ずっと不思議だったんだけど、御子はどうして僕のことを怒ってるの？」

「へ？」

「会ったときから、僕に腹を立てていただろ？」

「そうだけど……」

「僕、君に失礼なことしてた？それとも以前に僕たち会ったことあってその時何かあった？ それ」

私は絶句した。

この人は、私が怒ってる理由に心当たりがなかったのか。この3日間、私って怒り損だったみたい。

私は深呼吸をし、カップの中で揺れるお茶に視線を落としたまま話始めた。

「勇者くんはさ、月の御子のことをどこまで知ってる？」

「僕はジャン・ルーク。ジャンて呼んでよ。月の御子のこととは伝承で知ってる。魔王の最期の封印を解く鍵で、魔王の生け贄と……」

「じゃあ、ジャン。月の御子って誰になるかは？」

「月に選ばれた娘ってことしか知らない」

「じゃあ、どうしてディア……魔王と戦ったの？」

「それはもちろん、彼が人間の脅威で敵である魔王だからだよ」

「そっか……勇者が魔王を倒すのはお約束だもんね」

私は口の中で小さくつぶやいた。

何から話すべきなのか迷い、私は握りしめたこぶしを口にあてた。

「まずは、御子の名前から教えてくれない？」

「私の名前は、サガワミヤ」

「サガワ…変わった名前だね。異国から来たんだね。エステリア？それともマヲラン？」

「サガワは名字だから、ミヤって呼んでよ。あのね、異国じゃないの。私は月から来たの」

「月って？あの？」

勇者は、窓の外に丸く輝く天体を指さした。

「そうらしいよ。とりあえず本当にあの月に住んだのかは分からないけど、チキュウの二ホンてところから来た１７歳よ。家で寝てたら、魔王にこの世界へ連れてこられたの」

あれは呼ばれたとっていいのかな。

あの日の昼間、高校の三者面談で担任の前で親と喧嘩した。

付属の女子大への進学を保証する担任とはなからそのつもりで付属の高校に入れた母親。私は将来料理の道に進みたくて、調理の専門学校を希望していた。

用意されたレールを進むのではなく、ようやく自分で見つけた夢。

それを真っ向から否定され聞く耳を持たれないのが腹立たしくて、

その日は夕食も食べずに部屋に閉じこもり、ベッドの上で枕を抱きしめて泣いていた。

カサリ。

微かな衣ずれのような物音を耳にし起き上がって見渡すが、ドアも窓も閉まったままで一人きり。

虫？とおそろおそろ床に目をやった。

カーテンを開けっ放しの窓。

その日は満月で、その光に照らされくつきりと床に落ちた机の影から青白い輝く手が生えていた。

思わず悲鳴をあげて壁のほうに身体を寄せようとするが、その前に私の足首がつかまれた。

「いや！離して！！おかあさん！おとうさん！！」

無我夢中で残りの足で蹴りつけ必死にもがくが、それは柔らかく冷ややかにまとわりつき離れない。

『お迎えにきました。月の御子』

「なにそれ、人違いよ。たすけて！誰か！」

必死で叫ぶが、家の中も外も、凍り付いたように物音ひとつしない。そして、強い力でずるずると引つ張られるままにベッドから落ち、私は影の中に飲み込まれていった。

海の底にゆっくり落ちていくような、何かに包まれゆっくりゆっくり沈んでいった。

目を開けても何もなく、ただ闇があるだけ。

その闇が、肌から骨、内蔵にまでまんべんなく染みこんでいく。

身体の芯まで冷えきった気持ち悪さ。

もがいてもなにも掴めるものはない。

そのうちに意識を失い、気がつくと石の壁に囲まれた部屋の真ん中に一人横たわっていた。

豪華な天蓋付きのベッドが置かれ、手触りがとてもなめらかな冷たいシート。

学校から帰ってきたままだったのでよれよれの制服姿だったはずが、白くて丈の長いワンピースを着せられていた。

「ここはどこ？おとうさん？おかあさん？」

人気がないのは分かっていたが、そつと声を出してみる。だが、返ってくるのは静寂ばかり。

えっと、部屋で寝てたらおばけの手が…これって霊界？誘拐？拉致監禁？

身体を起こすと、幸い身体は拘束されていなかった。

ここは何処か手がかりを探そうと見渡すが、ベッドの他は家具らしい家具はなくなっている。

まるで、映画に出てくる昔のヨーロッパみたいだ。

床は石造りなので裸足で歩くとひんやり冷たい。

鉄の扉は、押しても引いてもびくともしない。

のぞき窓みたいなものもついているが、今はぴたりと閉まっている。

あとは背伸びしてようやく届きそうな高さに、壁をくりぬいた穴のような硝子のはまっついていない窓が1つあった。

そこから見たのは夜空。そして月だった。

「満月：じゃあ、まだそんなに時間は立ってないのね。変な薬とかガス使われたのかな」

足下はしっかりしているか、あの落下する感覚が残っているのか胃が落ち着かないでムカムカした。

でも理解できる事実がようやく一つ見つかり少しほっとした。

でも、その月を見ているうちに気づいてしまった。

大きさも普通かたちも同じ。だけど違和感がある。

色が少し青みがかって見えるからか。

「わかった！ウサギよ！ウサギがないじゃん！」

子どもの頃、寝物語に聞くのが好きだった「月で餅をつくウサギ」の話。

成長しても、月を見るとついウサギの姿を探してしまう癖があった。その見慣れた、あるはずの大好きなウサギの姿がない。

ただのつぺりと青白く輝く月がそこにあった。

ここはいったいどこの？

その時初めて自分の心細さに気づき、涙があふれた。

2・異世界の月（後書き）

（タイトルを「うさぎのいない月」から「異世界の月」に変更しました。2010・1・11）

3・月から来た御子

「近いと思ったけど、もしかしたらすごく遠くに来たのかも」

一番恐れていたことで頭がいっぱいになり、寝台に戻った私は思いっきり泣き、疲れてそのまま寝入った。

泣きすぎて熱く腫れた顔がひんやりと気持ちいい。

まだ涙に濡れる頬をそっとぬぐわれ、私は目を覚まし目の前のものに驚いて声をあげた。

「な、何？」

そこには青白く薄く光る手があった。

私の部屋に現れたあの手を思い出して恐怖にかられ飛び退こうとするが、手は無遠慮に私の顔を包んでしまい動けない。

私に触れた手は、あの時と同じ冷たさだが、あのまとわりつくような気持ち悪さはないし、よくみると細く綺麗な文様の入れ墨が入っていて、違うみたいだ。

「あれとは、ちがうか…」

ほっとするのもつかの間、手の持ち主を見上げて、再び私は更にその手から逃げ出しかけた。

「だれ、ですか？」

私の問いかけに男は困ったように黙って私を見下ろしている。
ニホンゴ、わかんないのかな？

「フーアーユ？」

拙い英語で話しかける。

今度は、きょんとした顔をされた。

明らかに日本人離れした容姿。

英会話教室の講師達を思い浮かべる。

英語の上達の為にと嫌々通いはじめたが、多国籍な先生達との国際交流が楽しくて楽しんでいただけ、文法そっこのけが災いして成績が上がらずあっさりと辞めさせられてしまった。

勉強は苦手だけど好奇心は人一倍。

目の前の男に悪意を感じないと判断すると、一気に男に興味がわいた。

透けるような白い肌。舞台衣装のような黒ずくめのずるつと長い口ブに映える銀髪。目は宝石みたいに青く深い。

まつげまで銀色だから、キラキラ度が半端ない。

心まで吸い込まれそうな視線に、私はあわてて目をそらした。

高い背と長い手足に北欧系かロシア系？と思ったけど、それにしては顔の彫りが極端じゃなくなだらか。

これは東欧あたりかな。

相手が無言なのを幸いに、こちらは無言のままつい品定めをしてしまつのは女子の性。

なにはともあれ、雑誌の中のモデル以上の美形だった。眼福だ。

「でも、せめてここがどこでどうなってるのか教えてよ、おにいさん」

男は少し考え込むと、いきなり自分の口の中に指先を突っ込んだかと思うと、そこからビー玉ほどの赤く光る玉を取り出した。

そして、それを私の口元につきつけた。

「これを、口に入れると？」

いくら綺麗な光る玉でも、美形とはいえ初対面の人の口の中から出てきたものを口に入れると？

これって何プレイ？

目で催促され、焦りと羞恥に私は顔を真っ赤に染めた。

恥ずかしい極みだけど、このままでも話が進まない。

舐めたいに舐めればいいのか、薬のように飲み込めばいいのか。それとも噛み砕くものなのか。

悩んでいると再び促され、思い切って口をあげると、口内にそっと押し入れられた。

口の中に入れた途端に人肌のぬくもりを感じ、つい嫌悪に眉をしかめてしまう。

だが、重さはなく、何かがそこにあるという抽象的なほわとしたわずかな存在感もまたたく間に消えてしまった。

舌でさぐっても何もない。

驚いて思わず唾液を飲み込んでしまったが、別に味も刺激も感じない。

「なにこれ？」

「心配ない。そなたがこの世界の言語を理解し話せるようにしただけだ。」

「言葉がわかる！しかも二ホンゴ？」

「言解きの術が永続的なものになるよう、術をかけるのではなくあえて私の魔力の一部を直接とりこませた」

「それはどうもありがとう…じゃない、いったいここどこ？この世界ってどういうこと？」

「お前は月の御子だ。だからここにいる」

「は？ツキノミコ？私はサガワミヤよ。もしかして人違いで誘拐？」

なんだ、人違いか。

私はほっとしながらも、犯人の顔を見てしまっていたことことに気づいた。

あわてて目をぎゅっと閉じると更に手で多い隠した。

「私、見てません。犯人が美形とか知らない。ていうかもう忘れたんで。私三歩進むか3秒で忘れてしまう鶏頭チキンヘッドなんです。だからとつとと帰してくださいね」

冗談で終わってくれたらいいな。

夢落ちだといいな。

そんな祈りもむなしく、感情の抑揚のない声が響いた。

「それは無理だ。お前はあの月より召しあげた月の御子だ。お前の血肉で私の封印を解かねばならん……」

私は、あの時の魔王の声を思い出し、肩が震えた。

雪の降る夜のように静かで、そして身体の芯まで冷え切った声を。

勇者、ジャンは合点がいったように何度も頷いた。

「つまり、ミヤは月の世界から魔王に召還されたのか。月の御子つてそういう意味の御子だったのか」

「私もいまいち実感ないんだけどね。惑星や衛星とは違う概念の月なんだろうけど、とりあえずあそこに私の故郷の世界があるらしいよ」

「あの月が異界だったのか。魔王復活を阻止するために、各国が何

年も月の御子を魔王より確保しようとやっきで探してたんだぜ？」

「え、それって殺して魔王復活阻止みたいなの？」

私は蒼白になった固まった。

「いや、この世界で月の御子は特別な力の象徴なんだ。伝説では、月の御子を護る国は英知を与えられるとかで……。だけど、ミヤって英知ってかんじじゃないよな。街で見かける女の子と変わらないかんじだし」

「そりゃ、もともと一般人ですもん。普通の容姿で普通の年相応の学生ですよ。平凡万歳！」

「ミヤって変な奴だな。女つてもつと男の前では取り澄ました生き物だと思ってたのに。それとも月はこれが普通なの？」

「もちろん、人それぞれだけどさ。私の年代だとこんなかんじだよ」

ごめん、ちよつと嘘ついた。

ただでさえ友達はい少なく、その友達相手でも敬語を使うことが多い私。

異世界に来てやけ気味なのもあるけど、こんなにフランクに接することが相手って家族以外はなかったかも。

気安さに暖かさ、やさしさを持つ勇者に、珍しく心を少し開いていた。

「私だって、勇者つてもつと美形で凛々しいイメージだったけど、ジャンで見た目全然普通の人じゃない」

「僕だって一般人だよ。ただ運良く士官学校に入れて騎士団に入れたけどまだ下位だしね」

「でも体力は超人的だと思うよ。さすが勇者！私を背負ってまる一日平気で走っちゃうんだもんね」

「それはミヤが軽いからだよ。もっとしっかり食べて肉をつけなきゃだめだぞ」

軽口にジャンが乗ってくれるので、深刻な状況に沈みそうになる心が救われる。

それにしても、さっきのジャンの月の御子の話に心の中でうなってしまった。

魔王だけでなく人側にも価値がある。魔王側の存在になっっていないかったことに少し安心しつつも、これから面倒ごとに巻き込まれる可能性が高いつてことになる。

欲の絡む利権争いには関わるのはまっぴらだ。

「私、これからどうなるの？」

「そうだな。まずは僕の主君であるこの国の王に報告に報告に行かなきゃ。その時、御前に御子をお連れする。その後は陛下が御子の処遇を考えてくださると思うよ」

「考えてくださる？私の意志は？」

「…御子はどうしたいんだ？」

「すぐさまここから逃げて、月へ帰る方法を探して実行する」

きつぱりと言い放った私にジャンは可愛そうな子を見るような眼差しを向けた

「この世界のこと、何も知らないんだろ？」

うつ…知識もないし、言葉は分かっても文字は読めないみたいなの…。

「お金は持ってるのか？」

うつうつ…手荷物すらありません…。

「身分は？国はおるか領外に出るときは旅証がいるよ？」

うつうつ…旅証ナニソレオイシノ…。

「きつとなんとか…」

「なりません」

きつぱり言い切られ落ち込む私。

言い過ぎたと思ったのか、ジャンは優しい声でお人好しを発動した。

「王への報告が終わって許可をいただいたら、休暇をもらって帰る方法を探すのを手伝うよ。帰れる時まで俺のところにいればいい」

さすが勇者。

どこの馬の骨かも分からないのに、保護者になってくれると申し出てくれた。

今、この世界で頼りになるのは彼しかないのは私も分かっていた。ジャンは、しぶしぶ頷く私を抱きしめて頭をなでながら、もう逃げないことを約束させた。

天然でお人好しで押しが強い勇者ジャン・ルーク。

彼は、この世界で初めて出来た私の友人で保護者になった。

「ジャン！」

おやすみと挨拶をして出て行こうとする彼を私は呼び止めた。

「なに？ミヤ」

「色々ありがとう」

ジャンはほほえみながら頷いて、ドアを閉めた。

結局、部屋を訪ねた目的の「私が怒ってる理由」のことを彼はすっかり忘れていた。

人が良く扱い易い奴。

私を助け出したのが彼で良かった。

だけど、あのことは今は誰にも話しちゃいけない。

それでも、遅かれ早かれ彼には言うことになるだろうな…

私は再びベッドに腰を下ろすと、窓の外の月に目をやった。

3・月から来た御子（後書き）

最後にちよつとミヤの黒いオーラが出ていますが、これからどんな本性が出てくるやら。

数少ない美形成分の魔王様は、これからも少しづつ回想で登場します。

さ、次は勇者とその仲間達の「仲間達」の登場です。

4・朝食会議

「あの女って絶対詐欺ですよ！確かにあの黒い髪と瞳は御子らしくみえるけど、顔も身体も平坦だし態度もレディらしくないし、何よりジャン様への態度は許せません。その場にいなきゃ、ボクは絶対月の御子だって認めないところです」

「まあまあパット、落ち着けよ。そんなこと言っても彼女の意志で御子になったわけじゃないんだからさ、可哀想じゃないか。それに彼女はなかなか可愛いぜ？」

「あれが可愛い？マルコ様の趣味悪すぎ」

朝食を食べに食堂に向かった私は、自分のことが話題になってるのが聞こえて思わず立ち止まった。

確かに身体はまだ発展途上だし醤油顔だけど、女の子みたいな華奢で金髪巻き毛に青い瞳だけど鼻ぺちゃ地味顔なパット君に言われたくないんです。

魔王討伐に途中から加わった彼は、騎士や戦士ではないけれど得意のボウガンを手にも果敢に魔物と戦ってきたそう。

ジャンを崇拜しているせいか、私と歳が同じせいか、私に敵意を燃やし事あることに絡んでくる。

その向かいで彼を諫めている赤毛の戦士が、マルコ。

自己紹介された時から、彼を見ると私の頭の中で猿を肩に乗せて母親を探す少年がてくてく歩く。

名前は可愛いが、それでも歴戦の強者だそう。

堅い筋肉で覆われた身体に傷だらけの身体、アゴも割れてて凜々しい眉毛に優しい瞳。

ジャンとは別の種類の「気のいいお兄さん」で、世慣れている気配りの人。

この人がこの一行のムードメーカーなのはすぐに分かった。

ジャンと仲が良く、道中二人の漫才のような会話は、ジャンの背中に縛りつけられた私を和ませてくれた。

早朝に出立する為、無理を言って宿に食堂を早めに開けてもらったので、今は私たち勇者ご一行様しかない。

つまり魔王討伐隊は、実はジャンを除くと他はこの2人しかないかった。

RPGなら、魔法使いや賢者や僧侶が1人ぐらいは必須だけど…と思っていると、魔導士が1人いたが、魔王の城の扉を開く時に魔力を使い果たして戦線を離脱し、近隣の村で休養しているらしい。

よく、たったこれだけの人数であんな所に乗り込んで…と改めて感心しながら、私は食堂に踏み入れた。

「マルコ、パット、おはようございます」

予想はしていたが、パットは私のほうを見ないまま独り言のように声をあげる。

「起きてから支度に時間がかかるのは、一応女の端くれってことか」

「おい、パット朝からやめろよ。おはようミヤ、よく寝られたかい？」

「ええ、マルコさん。昨夜持ってきて頂いたお茶のお陰で朝までぐっすりです」

そして私は、にっこりと笑いながらパットにも声をかけた。

「待たせてごめんね。あら、可愛い鼻に卵がついてるよ。とってあげようか？」

「う、うるさい、そんなことわかってる」

「そっぢじゃないよ、反対だよ」

「もう、こっち見るな！」

パットは慌ててナプキンで顔をごしごしこすった。

マルコは私達二人のやりとりに苦笑いしながら、隣の椅子を引いてくれた。

椅子に座った私の前に、オムレツに野菜のスープとパンが出された。シンプルだけど、間違いないメニュー。

この世界というか今いる土地の食事は、見慣れない食材も多いけど味覚はあまり変わらなくて助かった。

電気やガスのない中世くらいの生活なので、調理は塩味のシンプルなものが多いので、手間のかかった濃い味の料理に慣れた私には少し物足りない。

ソースとかケチャップが欲しいな…

心の中でつぶやきながらも、素材の味の美味しさを存分に味わい終わった頃、勇者があくびをしながらまだ寝ぼけている顔で現れた。

「おはよう」

「おい、ジャン遅いぞ」

「ジャン様、おはようございます」

ついさっきまで忌々しい顔で私を見ていたパットは、ジャンの姿を見た途端に嬉しそうな笑顔になり、ジャンの世話をする為にいそいそ立ち上がった。

こういう時の彼は可愛いんだけどね。

だるそうに私の向かいに座ったジャンの前に、食堂のおばさんの仕事を奪ったパットがてきぱきと料理を並べていく。

私たちの皿にはないおおぶりなハムが何切れも乗っているのは、敬愛の証なのだろう。

ジャンは食事をしていたが、既に食後のお茶を飲んでいる私達は、今日の予定の打ち合わせを始めた。
進行はもちろんマルコ。

「あと半刻ほどで城から迎えが来る。今日中に謁見は出来ると思うが、パット、ミヤ、覚悟しとけよ」

「覚悟ってどういうことですか？」

「時間がかかるってこと？」

「二人とも城は初めてだろ？城には色々な決まりや怖い人がいっぱいいてだな。時間もかかるし、色々大変なんだ」

「つまり、面倒だってこと」

マルコの説明にキョトンとしている二人に、ジャンが助け船を出した。

「そう。パットは俺たちの仲間だけど、それじゃあ城には入れないんだ。直接任命された討伐隊員じゃない上に、兵士でもない。だから今からお前は俺の従卒だ」

「身分については城に入れないのも覚悟していましたから。でも俺はマルコ様ではなくジャン様の従卒がいいです」

「気持ちには分かるが我慢しろ。これはお前の為だ」

不満の声をあげるパットを、マルコは真剣な声で諫めた。

「それからミヤ」

「はい？」

「君は、月の御子として城に入ることになる。この意味は分かるか？」

「うん。昨夜ジャンに教えてもらったから少しは…」

「勇者のジャン以上に、皆が君に色々な思惑を持つと思う。君は英知を持つ者だ。先代の御子は隣国の国母になったと言われる。それは政治的にも価値のある存在を意味する。だから自分に損にないように気をつけて行動するんだ」

「国母？」

「建国した王の後つてことだ」

「つまり王妃様？玉の輿？」

ジャンの言つてた『月の御子を護る国は英知を与えられる』で面倒になりそうということは昨夜覚悟したつもりだったけど、王様と結婚の可能性もあるなんて聞いてない。

「ま、先代は政治的なものじゃなくお互いが恋に落ちてだし、陛下は正妃をお持ちだからその心配はないだろ」

「よかったー」

「気を抜くな。それでも王子達もいるし、貴族だって手ぐすね引いてるんだからな」

「じゃあ、例えばどんなことに気をつけたらいいの？」

「その言葉遣いや態度だな。俺は好きだけど、この国の城に住む連中は違うからな。今のままじゃ足元を見られるぞ」

パットもマルコも、私が異国から浚われた庶民の少女としか思っていないはずだ。

そんな彼等からすると、身分の高い人の中に放り込まれる私が心配なのだろう。

深く頷く私に、パットが意地悪そうな顔をして言った。

「そんな付け焼き刃でミヤがレディになれるもんか」

「パット、今は口を挟むな」

「まあでも、パットの言う通り、もともとお嬢様やお姫様なキャラクターじゃないしな」

両親が色々な意味で頑張って入れてくれた、幼稚園からエスカレーター式のお嬢様学校。

確かにクラスメイトには本物のお嬢様達だったが幼稚園から通う彼女達と違い、中学から入った家柄ではなく成績で入った一般人の私は「途中組」と呼ばれ、お嬢様達との間には常に壁があった。間近で見てきたぶん、多少お嬢様な猫もかぶることは出来ても本質的なお嬢様と並ぶとかなわないことも身をもって知っている。

「要はパットが言っていたような、月の御子のイメージ通りじゃないと色んな人が困って、それは私も困るってことね？」

「まあ、そういうことだな。それで、今朝方までジャンと俺で考えたんだが…」

どうやら私の部屋を出た後、ジャンはマルコに私のことを話していたらしい。

ということは、私がジャンに話したことも聞いたはず。

自分で説明する手間がはぶけてほっとしながら、ジャンとマルコの考えた「作戦」を聞いた。

「いっちょ、皆さんの期待に応えようじゃないの」

フフフフと含み笑いをする私に、パットはおびえた顔で身を引く。こうして私は、お嬢様ではなく別の猫をかぶることになった。

4・朝食会議（後書き）

1話にも出てきた赤毛のマルコは、仲間の良きマッチョお兄さん。
パットは鼻ぺちやがコンプレックスないじられっ子です。

次話は、いざ城へ出陣！

5・謁見の間

「よくぞ戻った、ジャン・ルーク。そなたの功績を称え、ここにバルザック子爵の爵位を授ける」

「はっ」

ジャンは赤い絨毯の上を頭を下げたまま一步一步進み、王の前に跪いた。

すると、王の横に控えていた老人が手にしたトレイを恭しく王に差し出し、王はそれに乗せられたメダルを手に数歩前に進むとジャンの首にかけた。

「よくやってくれた。今後も一層国の為に励むように」

「身に余る光栄、この国のためなら命も惜しまぬ所存です」

「よろしく頼むぞ」

ジャンは深く頭を深く下げ一礼すると、顔を伏せたまま私の横へと戻ってきた。

ここは、エソニア城の中の謁見の間。

体育館よりも広く、軽く3階分ほどの高さに相当する天井と壁には様々な紋様の彫刻が施され、要所要所に色石が嵌め込まれ煌めいていた。

中央奥の一段高い所には、エソニア王ダルド3世と重臣達が、一段下がった両脇には貴族と呼ばれる臣下達がひしめいていた。

その広間の中央、大理石の上に敷かれた赤絨毯の上にジャンは跪いているが、私は棒立ちになっていた。

二人とも、王に謁見する前に、念入りに身体を磨かれ城で用意されていた衣装に身を包んでいる。

並ぶ私達の後ろには、やはり衣装を改めたマルコとパットがやはり跪いて控えていた。

勇者とその仲間達、そして月の御子の4人は、謁見の間に通されると大臣達から順に労を労い、マルコとパットは多大な報奨金の目録を渡された。

その後王が入室し玉座につき、ジャンが呼ばれ、次ぎはとうとう…

「月の御子、これへ」

来た！私の番だ。

着慣れない丈の長いドレスの裾を踏まないよう、私は慎重にゆっくり足を運んだ。

幸いなことに、ドレスに合わせる靴はヒールのないバレエシューズとルームシューズを足して割ったようなものだったので、ドレスの心配だけすればよかった。

歩みは遅いが、ジャンとは違い胸を張って前へ進む。

そんな私をみて周囲の人々は眉をひそめ言葉を交わした。

臣下は王を見据えてはならないからだ。

ジャンが跪いた場所で立ち止まった私は、深く一礼すると背中をまっすぐに伸ばし王を見据えた。

離れていた時は、風格ある壮年の王かと思ったが、近くで見ると意外に若いことに驚いた。

マルコより少し年上くらいかもしれない。

見かけ通りなら、だけど。

短い金髪にがっしりした体躯で威厳のある強面。

碧の瞳には尊大さと狡猾さが入り交じり、鋭い目で私を見つめる。目をそらしたら負けだ。

私は息を深く吐き気持ちを落ち着かせると、静かにゆっくりと声を出した。

「この度は、陛下にお目通りでき大変光栄に存じます」

「これ娘！そなた陛下に対して無礼であろう」

見かねた側近達が私を諫める声をあげるが、私は王から目をそらさない。

「そなたが月の御子か。なるほど、ただの娘ではないようだな」

「私はあなた方のおつしやる月の御子。サガワミヤと申します。私はこの国の者ではない為、我が国の儀礼をもって陛下にご挨拶させていただきます。ご無礼がありましたらご容赦ください」

「ほう、どこの国の者か？」

「それは皆様がご存じないこの世の果てにある異国の地の者、とし
かお答えすることは出来ません。魔王に生け贄として送られてきた
為、この国からどの位置でどのくらい遠いのか分からないからです」
「なんと、まだ我々の知らぬ国がこの世の果てにあったとは」

「はい。故郷の手がかりすらないこの身、帰る道を探す間この国で
の当分の滞在を慈悲深い陛下にお許しいただきたいのです」

私は目に憂いを宿し、深々と頭を下げた。

「乙女が一人異国の地で、なんと心細いことであろうか。もちろん
そなたを我が国の王の客人として迎えようぞ」

「身に余る光栄、寛大なお言葉をいただきありがとうございます。
そこで甘えついでにもう一つお願いがございます」

「申してみよ」

「ここが勝負どころ…」。

私は国王にほほえんでみせた。

「国元へ帰る為には、この国を知らねば帰る手立てを見つけること
も出来ません。その間、私の命の恩人であるジャン・ルーク殿の元
でお世話になることをお許しください」

「それは、ならぬな」

私の笑顔に応えるように、王も口元をゆるめた。
だが目はらんと陰呑な光を放って口調も強まった。

「そなたは自分の立場が分かっておらぬようだ。月の御子は侯爵

ごときの手にあつてはならん。この国にある限りは我が王の庇護におらねばならん」

「陛下、おっしゃる通り私は「月の御子」。魔王の最後の封印を解く最後の鍵。その魔王は勇者様によつて滅ぼされましたが、私のここには魔王亡き今も魔王の魔力がございます」

私は喉もとをそつと押さえて見せた。

「まさか！信じられん」

「私自身での証明は出来かねますが、魔王に浚われた時に確かにここへ与えられました。魔導などの高い力をお持ちの方はわかりになるのでは？」

「神官長、御子が言うことは誠か？」

王の横に居並ぶ中から白い衣の老人が進み出ると、薬草の匂いをプンとただよわせながらのそのそと私の側にやって来た。

私の喉元をのぞきこみ、なにやら目をこらしていたが、あわてふためいてとびさすつて、畏怖を込めた目を向けた。

「おお、これは…赤き闇の星…確かに魔王の魔力の欠片！この乙女の申すことは誠にございます！」

「なんだと、月の御子が魔王の魔力を宿してるとは」

「魔王は滅びたわけじゃないのか？」

「先代までの御子でそんな話は聞いたことがないぞ」

臣下達はざわめきおびえ、王の周囲は事あれば王を護る為に王の側へ駆け寄った。

「陛下、皆様、ご安心ください。これは皆様に害をなすものではないでございます」

釣り針にかかった。

私は心の中でほくそ笑む。

「御子は清き乙女。封印を解く前の魔王は触れることが出来ぬのではなかったのか」

王は、未だ信じ切れぬ様子で私をにらむ。

あれ？なんの話かな。すっかり触れられてましたけど。

それに封印を解くための生け贄を、封印を解いた後で触れられるって意味なくない？

伝説はあくまでも伝説ってことか。

魔王が魔力を分け与えてくれたのは確かだけど、昨夜ジャンに話した通りただ言葉を理解する為と、彼は言わなかった「御子に敵意を持つ魔物は触れられない」という2つの力しかない。

王が一度手似入れた月の御子を手放さないことはジャンとマルコは予想していた。

それに反発すれば、力尽くで閉じ込められてしまうだろう。

かといって、王の人形になってしまえば、都合よく使い捨てられてしまう。

控えの間で長く待たされている間、うんざりするほど沢山の人々が私達の元を訪れた。

ジャンを労い娘や贈り物を餌に取り入ろう貴族達。そして私に取り入ろうとする者も沢山いた。

それを見ていたので、私も王の「月の御子」への執着はすぐに納得がいった。

国王に縛られない為には、逃げるのではなく国王のほうから遠ざけられるのが一番。

これがマルコが授けてくれた作戦。

嘘を言う必要はないけれど、本当のことを言う必要もない。使えるカードを最大限に利用するだけだ。

「まず魔王は確かに勇者様、ジャン・ルーク殿の手によって滅びました。それはご安心ください。」

月の御子が魔王の封印を解く鍵なのは皆様ご承知だと思いますが、魔王は封印を解くまで私に触れることは出来ません。

それでも、自分の魔力を私に分け与えることは出来ました。

魔王から離れた魔力は既に魔王とは別のものです。

あくまで魔王の城で私を生かす為に与えられた力で、その目的以外のものはありませんし、まして私が意図して使うことは出来ません。

「

「何の保証があつてそれを信じろというのだ」

王は不愉快そうに吐き捨てた。

「確かに、私の国には魔導は無く未知の力で魔力への私の見解を保証することはできません。

それにただ、魔王城を出て、また魔王がいない今この力に変化が起きないとは言えません。だからこそ、勇者様のお側にお置き頂くようお願いするのでございます。

私も皆様にご迷惑をおかけすることは本意ではございません。万が一、私の預かり知らぬ魔王の力が働くかもしれません。その時に魔王を倒した勇者様がお側にいればいつでも一刀をもつて私を切り捨てていただけますから」

「御子は、ジャン・ルークに切られ死ぬことも厭わないと言つか」

「ええ。生け贄の儀式で魔王の刃が振り下ろされる時に覚悟した命です。助けて頂いた勇者様に手をかけて頂けるなら本望です」

私はジャンのほうを振り向くと、信頼を込めて穏やかにほほえんでみせた。

ジャンも私を見つめ重々しく頷く。

あとは、最後の一押しだ。

私は再び国王を見つめると先ほどより穏やかに語った。

「陛下、月の御子は守り手に英知を与える伝説があると勇者様に伺いました。私は月の御子とはいえ、祖国では若輩の学徒でございます

した。

皆様にお役に立てることは少ないと思いますが、お世話になるこの国、そして陛下の為に、この身出来る限りなんなりとお伝えしたいと思います」

「おお、月の御子が英知を授けてくださると！」

「勇者殿が陛下に尽くすよう、御子を解いてくださったのか」

先ほどまで恐れおののいて騒然とした広間が、今度は明る浮き足だった。

魔王の魔力という脅威で、王の側に置けない理由、ジャンの側にいる理由を作る。

そして、脅威を排除させない、私を生かしておくための餌が「月の御子の英知」だ。

王も、自身が乞う前に御子からの進んでの協力の申し出に満足したのか、居住まいを正し改めて命じた。

「では、ジャン・ルークに月の御子の保護を命ず。万が一御子の中の魔力により危機が起これば、即刻御子を処断するように。よいか」「はっ。我が名と名誉にかけて。」

「そして月の御子よ。そなたが示してくれた信頼に感謝し、我が国に尽くしてくれる限り、国も我もそなたの力になろう」

「ありがとうございます。陛下のご温情に感謝致します」

再び深く一礼し、しずしずとジャンの横へ戻ると、ジャンとマルコはよくやったと目で伝え、パットは狸に化かされたような顔で呆然としていた。

こうして私は、曰く付きの「月の御子」として晴れてジャンを保護者にすることが出来た。

5・謁見の間（後書き）

さすが腹黒参謀マルコの入れ知恵。

なんとかみんなを納得させちゃいました。

その代わり、近づくな危険の「爆弾付き」レッテルを貼られてしま
いまいましたが…

6・噂の二人

城の中に用意された賓客を遇する為の客間。

客間といっても1部屋ではなく、居間と主寝室と副寝室、そしてベッドが2つある従者部屋が用意されている。

その居間で、謁見を終えた私達は思い思いの姿でくつろいでいた。

「ジャン様、おめでとうございます。子爵におなりだなんてすごいです！」

一人はしゃぐパット。だが他の三人は難しい顔をしている。

「ジャン様嬉しくないんですか？マルコ様、ミヤ、どうして皆も喜ばないんです？」

「もちろん喜んでるさ、ありがとう。パット」

「僕だつて、すごく栄誉なことだと思ってるよ」

「そうね、そういえばちゃんとお祝い言ってなかったね。おめでとう勇者様」

「そろそろ許してくれないか、ミヤ。その勇者様っていうの」

「私、結構気に入っちゃったんだけど」

「いや、ミヤに言われるのなんか気持ちわる…」

「何が気持ち悪いって？」

「ナンデモアリマセン」

「そうだ、ミヤっていったい何者なのさ。陛下にあんな口聞くなんて恐れ多すぎて息もできなかったよ」

「私？陛下にもいった通り、この世の果てにある異国の女子高生よ」

「ジョセイコウセイ？」

「私やパットくらいの年の子どもは義務じゃないけどだいたい学校に通って勉強が生活の中心なのよ」

「僕は子どもじゃないぞ。もう立派に戦えるんだからな」

「わかってるわかってる。私の国の成人の年が遅いだけよ」

そう言いながら私はパットの黄金色の頭を撫で回した。

「わわっ やめろ！おまえ気安く触るなよ。マルコ様、離してください！」

暴れまわるパットは隣に座ってたマルコに押さえつけられ、私は遠慮なくパットの背後から抱きつき存分に巻き毛のモフモフ感を楽しんだ。

「お嬢様や姫になるのが無理なら、学者はどうだ？」

あの朝、マルコがたてた作戦は「異国の流儀で押し通す」ということだった。

「ミヤは、学問を学んでたんだろ？学者で十分通じるだろ」

「いや、学者と違って、私はまだ高校生だし…今後変に期待されてもこまっちゃう」

「ミヤの国の文化はこと全然違う所のだろ？じゃあ大丈夫だつて」
「なるほど。でも、こういう時の「御子」とかって神秘的な存在つて、定石で神聖な巫女とか無口で大人しいタイプだとおもうんだけど？」

「ま、それが普通の発想だよな。伝説を知る者は皆そつちをイメージしてると思うぜ。だが、それはうちの陛下には逆効果だ。もの言わないお人形さんはひねりつぶしたがるタイプだ」

「ひいい、なにそのサド国王！」

まるで、うちの父みたい…という言葉を私は飲み込んだ。

もつとも、父のサドっぷりは半端なく、魔王レベルなだけだね。つて、魔王つて呼ぶのはこの世界で出会った魔王に失礼だな。

その父にまだまだかなわない私が、その王に果たして太刀打ちできるのかな。

「大丈夫。ミヤならやれるよ。早く城を出て、一緒に帰る方法探そうぞ」

頭の中でごちゃごちゃと考えてた不安を、ジャンの笑顔が吹き飛ばした。

「じゃあ、はつきり言うほうが効果的なのね」

「ああ。常に言葉の裏を計るような人だから。だけど、つけ込まれないように言葉を選ぶことは大事だがな」

なるほど、研究者タイプなら空気読めなくてもしょうがないって思ってもらえるし。

身分制度のない異国から来た私は、相手が国王であれども敬意は示しても従属する必要はない。

面倒で嫌だったけど、「ごきげんよう」が当たり前な礼儀に厳しい学校に通っていてよかった。

こうして、心の中で「あれはうちの陰険おやじのパチモン……」と唱え、事前に言葉遣いを練習してなんとか国王との直接対決を乗り切った。

もつとも、切り札の魔王の魔力については、その場のノリでの思いつきが、思った以上の効力だった。

お陰で、まるで触ったら呪われるかのような扱い。

それは側にいる勇者のジャンにも飛び火し、せっかく勇者の凱旋なのに、目出たいムードまでぶちこわしてしまった。

後でやりすぎたことを謝った私に、ジャンはよくやったと私の背中をたたき喜んでくれた。

優しさのこもったあの黒い瞳で微笑まれると、心からほっとする。

ただし、「あの陛下まだまだね。所詮中ボスレベルだわ」とつぶやくとまたたくまに恐怖の色に染まっていたけど。

予定されていた3日間の祝宴は、王の命で謁見の後に用意された簡単な夜会のみで打ち切られ、一日置いた翌々日にはジャンはバルザック領へ赴くことになった。

まだ魔王の影響で国の乱れが治まっていないからというのがその理由。

そして、勇者達も傷と疲れを癒すためという言い訳もとってつけたようについていた。

ジャンは、祝宴の費用を魔王討伐の途中で命を落とした討伐隊員遺族への慰労金にと進言したが、それは国王からの命として公布された。

そもそも謁見の際に私の中に魔王の魔力があることを知った貴族達は、自ら私に近づくことはおろか目を合わせようとせず、体調がすぐれないのでと中座する人が続々出た。

自然、私の側にいる勇者とも距離をとることになってしまい夜会は全く盛り上がらなかった。

勇者の帰還は勇者が賞賛され祝福される場であるべきなのに。

これで、大きな借りが出来ちゃったな。

私のせいで思うと申し訳なさでいっぱいになり、ジューズを手酔に酔っぱらいのようにパットに絡んで、ジャンを笑わせることに必死だった。

私がジャンに同行することにももちろん王は最初反対した。

バルザック領は、この国の南西、王都から1日馬車に揺られた場所にある。

大公と公爵領に挟まれた海沿いのちつぽけな領地。

さほど距離があるわけではないが、諸公の圧力などで、彼らに英知を独占されることを恐れたようだ。

さすがに、先日の謁見で強気で押しすぎたのでここでは引こうかと思っただが、弱気なところは見せられない。

国民のために役立つという判断があれば誰にでも授けるつもりであること。

ただし、譲歩として、諸公が独占を避ける為、授けた英知は記録し

王に提出するが、バルザック領内においての報告は私の自主性に任せること。

そして王がつけた条件は、王が選んだ人物を側に置き、その人物が記録及び提出を担当し王とのパイプ役になる。

どうせこの国にいる限りは王を切り捨てることは出来ないんだからこれで十分。

願ってもないという顔でそれを受け入れながらそのかわりと条件をつけることを忘れない。

後は、王の人选が最悪でないことを祈るだけだ。

王都で過ごす最後の日の夕方、荷造りを済ませくつろいでる私たちのもとに訪問者があった。

「ジャン！よく帰ってきたな」

「リードじゃないか！久しぶりだな」

「すまん、もっと早く駆けつけるつもりだったんだが遠征に駆り出されててさ。明日には城を出るって聞いてあわてたぜ」

ジャンはリードと男らしくがっちり抱き合って再会を喜ぶと、部屋に招き入れた。

赤黒い金属製の鎧に赤いマント。

城内で見かける兵士の鎧よりかなり派手だ。

施された装飾の見事さはさるもの、マルコ並みのマッチョだが、長めの蜂蜜色の髪に包まれた整った顔や物腰には品と繊細さがあり、育ちの良さを感じる。

が、より男所帯度を増したこの部屋は、いよいよもって男臭い。

「マルコ、さすがお前も生き残ったか」

「当たり前ですよリード卿。俺様を誰だと思ってるんですか」

マルコも知り合いらしく、立ち上がり破顔して彼の手を握る。

「お、このちび達2人もお前達の仲間なのか？」

普段ならパットが「おちび」という言葉に食いついて吠え立てるはずが、ただ呆然と客の姿に魅入っている。

パット君？もしかして惚れた？

そんな視線を彼に向けると、最近私の心の声（パット君向け限定）が聞こえるようになって来た彼はとんでもないとかぶりを振った。

「その鎧、あの、もしかして魔導騎士隊の方ですか？」

「ああ。私は魔導騎士隊赤分隊隊長のリカルド・ロツジウッドだ。リードと呼んでくれ。以後よろしく頼む」

「ぼ、ボクはマルコ様の従卒を勤めます、パット・ルイスです。よろしく願います」

パット君、声が裏返っちゃってるよ。

ここは私も自己紹介しとく流れだよな？

「私はサガワ ミヤです。ミヤと呼んでください」

私の口の聞き方に首をかしげた彼は、ひょっとしてという顔をした。

「ミヤ、君はもしかして噂の月の御子かい？」

「はい。そうです」

「そうか、君がか…」

「ミヤ、パット、リードは僕の先輩で友人だ。マルコは僕たちの戦友ってとこだな」

「魔導騎士？」

「陛下の近衛には、剣で陛下をお守りする親衛騎士団と魔導でお守りする魔導騎士団があるんだよ。リードはその魔導騎士団の隊長だ」
パットがさかさず説明してくれた。

「騎士は、血統の良さと実力が伴った人しかねない。そのなかでも隊長を勤めるといのはだな…」

リードはもういいよと苦笑しながらパットの頭をポンポンとたたくと、すすめられた椅子に座った。

パットは、空にもものぼるような足取りで、憧れの魔導騎士にお茶を用意している。

「リード卿、積もる話がありすぎるが、明日出立で時間があんまりないんだ。難しい話は無しで頼むぜ」

マルコはリードに向けて手をひらひらと振ってみせた。

「ああ。お前の出世に騎士団の連中悔しがってたぜ。時期がここまですくなくれば自分が行ったのにつて」

「持ち上げないでくれ。本当に運がよかっただけなんだから」

「謙遜するな。あきらめていた魔王の封印が解けるのも防いで、このお姫さんを助け出したんだろ？今城内で噂になってるぜ」

「やれやれ、どうせろくな噂じゃないんだろうな」

「他にもあるぜ。お前さんらが、先代の月の御子みたいに恋に落ちてるとか」

ぶぶぶっ！

私とジャンは、同時に口にしていたお茶を吹いた。

「なんでそんなことに」

「何その展開の早さ！」

顔を真っ赤にする私たちに、リードはしてやったりという顔で得意そうに噂を教えてくれた。

マルコは始終ニヤニヤしているし、パットもすごい形相で私をにらむ。

「魔王の呪いを宿した御子を勇者が命をかけて守ると誓って。特に女官達が身もだえてたぜ」

「陛下に拝謁した時のアレだな。背後で見てた俺たちも赤面ものだったもんな」

道理で、城内の人たちに距離を置かれているとはいえ、遠巻きに見る働く女性達の目が妙にキラキラしてるとおもった。

すれ違い様に小声で「がんばってください」と言われて、てっきり遅しく生きてねってことかと思ってたなら…。

勇者様と月の御子か。

ちらっとジャンの方を見ると、うつかり目が合ってしまった。

行き場のない恥ずかしさを、「ありえない！」と本人達以上に叫ぶ

パットの耳をひっぱることで解消した。

リードはジャンやマルコと今後の事を話したり連絡先を交換し、仕事に戻るからと去っていった。

結局その日は晩まで、私とジャンのツーショットがマルコのツボを刺激するらしく、彼は事あることに笑い転げていた。

6・噂の二人（後書き）

ちっちゃいラブフラグ。

これは回収したのか折っちゃったのか：

新たなキャラ、ボンボン魔導騎士のリードさんが登場。
たまにしか出てきませんが、心強い味方になる人です。

7・勇者と英雄

王都を出て、馬車で進むこと4日。

東西と南北の街道が重なるビノン市街から西へ進み、国を縦断しているムルカ山地を超えると、海が見えた。

海沿いに広がる大きな街が、街道の西端の街バロナ。

バロナは「海獅子」と呼ばれるエソニア艦隊を率いるマドカナル伯爵の所領の抱えるもつとも大きな交易の要所で、そこから半日南下するとバルザック子爵領に入る。

「ホントに、海だ！」

真つ青な空と、緑がかつた明るい海。

山道を下つていくと、徐々に気温もあがり、私たちはコートを脱いだ。

外洋だが、側に群島がある為、波は比較のおだやかだ。

海原にはポツポツと小舟が浮かんでいる。

山もそうだが、海沿いの街で育った私にとって見慣れた景色に心が踊る。

「うわー！これが夏だったらな。泳ぎたいな！！」

「泳ぐ？漁をするの？」

馬車の窓に張り付く私に、ジャンがけげんそうな顔で尋ねる。

「海水浴つてないの？砂浜や波打ち際で遊ぶの」

「ミヤは海が恐ろしくないのか？」

「そりゃあ、海の事故は怖いけど、深いところに行かなきゃ大丈夫でしょ。このあたりの海は危ないの？」

「海は、海神ホッセの神域だから、彼を祀り加護を持つ海の民以外が入ると怒りに触れるんだ。」

だから、船旅をする人は無事に渡りきるように、もし海に落ちても神の怒りをかわないように、必ずホッセのお守りをもらうんだ。」

そう言つて、ジャンは昔のだけだと断りながら懐から小さい袋を取り出し、赤く染め上げた爪先ほどの貝殻を見せてくれた。

内側には墨で紋様が掘つてある。

この紋様は、ホッセへの祈りを表し、海に入ると濡れてそれが消えるので、また船に乗る前に神殿で新しいお守りをもらうシステムなんだとか。

「なるほど、じゃあ遊ぶと罰当たりつてことなんだ。こんなにきれいな海なのにもつたいないな」

「この国の人間は泳いで遊ぶのは川だな。海の民の子供くらいじゃないか？海で遊びながら漁を覚えるつて聞いたことあるぜ」

「ほんと？じゃあ全然駄目つてわけじゃないんだね」

向かいの席で眠っていたはずのマルコがいつからか私たちの会話を聞いており教えてくれた。

彼の左腕にはパットがもたれて高いびきで眠っている。

「ミヤは海の民だったのか？」

「うーん、私の国にも昔は海の民とか山の民つていう言い方もあったみたいだし、海に囲まれた島国だからそもそも海の民といってもいいのかもね。」

それよりももっと根源的に、私たち人間は海から誕生したつて言われているの」

「ミヤの所にも海の神がいたのか」

「これは神様とは関係なくつて、生物学的に進化の…えつといいや。とにかく、海と人と月は深い関係にあるつて言われているの。月の満欠けのリズムが私たちの体のリズムに沿つてるように、海も満ち引きとかに影響があつたり、

海の水の成分と、赤ちゃんがお母さんのお腹にいる時の羊水つて液体と成分が似てたり」

「これが、月の御子の英知…」

二人は感嘆の声をあげ、私は赤面した

「こんなのが英知つて言われても…私の世界では皆知つてることだ

し、学生の浅い知識でしか話せないし。この世界では違いかもしれないしね」

まだこの世界の文化がよくわからないので、私の世界との違いが分からず「月の御子の英知」がどんなものを指すのかさっぱり分からない。

確かに文化レベルが違うから役に立つことも多いだろうけど、宗教が絶対的な力を持っているこの世界では地雷を踏んでしまう危険も高い。

ミッシェンスクールという一面を持つ学校で、「神が人を創りたもつた」と創造論を熱心に説くシスターに進化論で議論を持ちかけたクラスメイトが泥沼の平行線の末力尽きたのを見た時に、出来ればこういう論議には関わるまいと固く誓ったのを思い出した。

「とにかく私の国では、海で泳いだり遊んだり、砂浜で波の音を聞きながらゆつくり過ごす習慣があるの」

「そうか、じゃあきつとバルザック領も気に入ると思うぞ。小さいがきれいな砂浜がいっぱいあるんだ」

「ジャンはその生まれなの？」

「いやまさか！僕は王都の出身だよ。ただ前バルザック侯には色々お世話になって、何度か招待されたことがあったんだ。

5年前に彼が後継者を残せず病で亡くなった為に召し上げられ、ここは王の直轄地である王領になった。だからこれも何かの縁だろうな」

感慨深く頷くジャン。

そこで私は一つの疑問を投げかけた。

「どうして勇者が子爵なの？もつと高い位で陛下をで支えたり、王女様と結婚したりしないの？って私の世界では定石なんだけど…」

「僕はこれでも分不相応だとおもっているよ」

ときっぱり言い切るジャン。

マルコは苦笑している。

「城では聞けなかったし、そのことも気になってたんだけど、ジャンで陛下から嫌われてるの？」

私たちが一刻も早く城を出たかった理由はそこにもあった。省略された祝賀、陛下との謁見もジャンは1度きり。

城内の人々の対応も、道中歓待してくれた村や街の人々と違い、ていねいだが冷めた態度でどこかよそよそしい。

用意された部屋に通された時、兵士の性なのかさっそく部屋の中を検分していたマルコがそつと私達に耳打ちした。

「盗聴の魔法が使われている。ここにいる間、口は慎しめよ」

それはてつきり、異国の民であり曰く付きの私を監視する為だと思っていた。

そして、私のせいでジャンが冷遇されているのだと。

だけど、謁見の時に私の前に叙勲されたジャンが与えられたのは子爵。

男爵に次ぐ下位2位の叙勲で、一国ならず世界をも救った勇者にしては扱いが悪いように思う。

地図で見せてもらったバルザック領も、広大なマドカナル伯爵領とコラッド公爵領には生まれ豆粕のよう、と言ったら言い過ぎか。手のひらが隣接する各領地とすると、小指ほどの大きさだった。

「僕には、分相応だと思ってるよ。それに魔王討伐は一人の力だったわけじゃないからね」

「ばーか。国王は、お前が英雄になるのを恐れてるんだよ。」

勇者と呼ばれるうちはまだいい。

本人の武勇が認められ広まるだけだからな。

英雄になれば話は別だ。英雄は国をも動かす。

ジャンの腕と人柄なら、王の側にいれば必ず次々と武勲をたて続け、人々の信頼と尊敬を得る英雄になる資質がある。

陛下は武王だが、特に武勇に優れているわけではない狡猾な知略の王だ。

だから、ジャンに悪目立ちされては困るんだろうな」

「なるほど。さつさとほどほどの恩賞をあたえて僻地へ飛ばしてしまえば、素直に喜んで、のりくらりと余生を送ってくれそうだな」

私はジャンの平和そうな顔をちろりと見た。

「いいじゃないか。僕は宮廷のどろつとした人間関係向いてないし。戦わなくていい道があればそれでいいさ」

「じゃあ、自分は領主には向いてるっていうんだな」

「えっ」

「いくら小領だからって、領主の仕事は半分以上が事務仕事だ。覚悟しろよ」

「なんでマルコがそんなこと知ってるんだ」

「昔いた隊の一応侯爵の上司に聞いた」

「一応って…大丈夫、なんとかなるさ。それにマルコやパット達に頑張ってもらうから。そうだ、ミヤも文字をマスターしたら手伝ってもらおう」

「自分でやれ」

「最初からあてにしないで」

二人につっこまれ、ジャンは外の空気を吸ってくると、御者台へと移っていった。

「さっきの、国王から疎まれてるって、ジャン大丈夫なの？」

「ああ。もともと上昇志向がある奴じゃないけど、このまま消えていくやつじゃないさ。それにミヤがいるしな」

「私？」

「地方へ飛ばしてしまえば人は勇者のことなんて忘れるって思ってたのが、手元に置くはずの月の御子までついてきたんだ。

諸侯の注目は続くだろうし。でも例の魔王の力つてやつで、むやみに手出しもされないだろうしな」

「私のせいで、ジャンが困らなきやいいんだけど…」

「ま、魔王を復活前に倒した強運の勇者様だ。あいつは大丈夫だ！」

ジャンが赴任先の領地に赴く際に、ジャンとともに戦った仲間達はそのまま彼の配下として共に行動することを選んだ。

まだ面識のない療養中の魔導士も、追っ付けジャンの許に来るらしい。

元領主や王領で執政官の配下だった者達が希望すれば出来るだけ雇うつもりだとジャンは言っていた。

さっきはああ言ったけど、私は元の世界に戻るまではジャンの世話になるんだ。

出来ることはなんでも手伝うつもりだけど、女子高生だった私に出来る仕事ってあるのか。

色々と不安はあるが、まずはこの世界で暮らしながら帰る方法を探す日々が始まる。

私はぐんぐん近づく海を眺めながら、決意を込めて唇を噛んだ。

その晩、私たちはようやくバルザックの領主館にたどり着いた。

7・勇者と英雄（後書き）

（2010・2・13）王領のくだりがもう少し分かり易くなるよう一部改稿しましたが、まだ分かりにくかったらごめんなさい。

補足

5年前バルザック子爵が亡くなる。

後継者がいない为王の直轄地（王領）となる。

新たにジャンが子爵位をバルザック領と共に与えられた。

（王領は、領主は国王である為、官吏の執政官が領主の仕事を行います）

8・館の人々

小鳥のさえずりで目が覚めた。

薄い白いカーテン越しに、木の葉の陰が踊る。

ベッドを裸足のまま抜け出し、風に揺れるそれを引くと、生い茂る緑ごしに、木漏れ日がこぼれ落ちた。

胸いっぱい空気を感じ込むと、どこか甘い味がした。

「なんてきれいな所！」

領内に入ったのはちょうど日が落ちた頃で、この館に着いた時はすっかり深夜。

外観も中から外の景色も全く分からなかったが、この館は少し高台にあるらしい。

太陽が上ってくる方向にこじんまりした街が見える。

正面には馬車から見た以上の美しい海が広がり、手前の丘に沿って果樹園が広がっていた。

「御子様、お目覚めになりましたか？」

私より2つ年下くらいの、長めの赤毛を編み上げた小柄な少女が、水を張った盥を手に部屋に入ってきた。

昨夜、部屋に案内してくれた私付きの侍女だったはず。

「ありがとうございます？ええと……」

「ラクサですね。よくお休みになっていたので、お館様が休ませておくようにとのことで。皆様、ちょうど朝食を召し上がっていますよ」

「そうだった、ラクサちゃん。昨日は疲れててほとんど頭が動いてなかったの。ごめんね。私はミヤ。御子様じゃなくてミヤって呼んでね。改めてよろしく」

「かしこまりました、ミヤ様。こちらこそ、至らぬことも多いですがよろしくお願い致します。それで、朝食はいかがされますか？」

「すぐに食堂へ行くわ」

「ではすぐにお召しかえの準備を」

「あ、あのラクサちゃん、お願いがあるの」

「はい」

「私のお世話をしてくれることがあなたの仕事だって分かってる。だけど私は出来るだけ自分のことは自分でさせてくれない？」

「でも…」

「私の国では、着替えや入浴や洗顔みたいな自分出来ることは自分ですることがすごく大事な。そのかわり、ラクサちゃんには別の事をお願いしてもいい？」

「なんででしょうか」

「私はこの国に来て日が浅いの。女の子の知り合いもないし。知らないことが多いから、色々私の相談に乗って助けてちょうだい」

「私でお役に立てるなら喜んで！」

城に滞在した時、貴人に対する女官や侍女達の世話のやきつぷりには驚いた。

顔を洗う時には、ベッドに洗面器を運び、タオルを差し出す。

着替えは、服選びから着付けまで侍女任せ。

トイレだって、お尻を洗うためにスタンバイしてる。

お風呂なんて、恥ずかしがる暇もなく流れ作業のように洗われていく。

やばい、これはボケる！絶対ボケる！

これが私の第一印象だった。

侍女達と交渉してみたものの、すぐに無理だと観念した。

なにせ、それぞれ、タオル係、着付け係、髪をとかす係、服をぬがす係、髪を洗う係、身体を洗う係、身体を拭く係：

細かく厳格に分担され、それぞれがプライドを持って仕事をしているのだ。

1つ断るとその侍女の仕事を奪うことになる。

そのことが彼女の生活まで左右しかねない。

ただここはジャンの館。

私の精神衛生の為に、普段の生活はなるべくストレスのかからないライフスタイルを確保したい。

その為に、私は朝から戦闘モードのスイッチを入れた。

まだろくに衣装を持っていないので、旅の途中で買った間に合わせの黒いワンピースに袖を通し身支度を整えると、ラクサの案内で食堂へ向かった。

落ち着いた色彩で天井の高い廊下は、窓が開け放たれていてすがすがしい。

食堂はテラスに面しており、開け放たれた窓辺で3人が食事をとっていた。

「おはよう！遅くなってごめんなさい」

「気にしないでいいさ。疲れはとれたか？」

さすが勇者様は朝からさわやかだ。

「ありがと。寝心地のいいベッドでぐっすり寝ちゃった。ここってすごく気候がいいところね」

「だろ。もう少ししたら夏に入ってかなり熱くなるけど夜は過ごしやすいし、冬もあまり寒くならないんだ」

「文句なしな土地じゃない。海も近いし、山もあるし、街道はちょっと離れるけど遠くはないし」

「ミヤは変わってるよね。普通女って、海がキラキラして宝石みた

い！とかなんとかいうんだぜ」

「パット、お前知ったような口きいて。お前はそんな女が好みなのか？」

「普通の女の子はミヤと違ってもつと繊細だって言ってるだけ」

パットは、皿に残っていたフルーツを口にほおりこみさつさと食べ終わると立ち上がった。

「さつて、ボクはもう行くよ」

「これからどうするの？」

「まだ荷物を解いてないから、それをやって終わったらマルコが剣の練習をみてるんだ。ね！」

「お前、元気だな。俺なんてまだ揺られてるようで尻が痛いっていうのにさ」

「そういう時は動いたほうがいいんだよ。じゃ、また後でね」

パットは、うきうきとした足取りで食堂を後にした。

そして私の前に、朝食のトレイが並べられた。

献立は、焼きたてのパンにスープ、そしてフルーツと牛乳だ。

せめて朝食だけでも和食が恋しいな…と心の中で懐かしみながらも、美味しくもりもりといただく。

ここのコックさん、家庭の味で素朴なメニューだけど、味付けが好みだな。

後で挨拶に行こう。どんな人かな。

そんなことを考えながら食べていると、

ジャンとマルコが食事を終え席を立った。

「今日は何をするの？」

「ジャンは、これから人事の話し合いらしいぜ。俺も参加」

「そっか、忙しいんだね」

「ミヤはどうするの？」

「私は館や周囲を探検したいんだけど、いいかな？」

「ああ、かまわないよ。だけど不案内だし、誰かと一緒にいてくれる？」

「じゃあ、ラクサちゃんに案内してもらってもいい？」

「彼女の仕事を邪魔しなければいいよ」

「お館様、とんでもありません。喜んでお供させて頂きます」

「この人を頼むね。もし何かあったらいつでも僕のところになさい」

「はいっ」

ラクサちゃん可愛いな。ジャンを見つめる瞳がキラキラしてるよ。

「ミヤも、皆さんに迷惑かけないように」

「はいはい」

こうして、領主様のお墨付きをもらった私たちは、朝食を終えるとさっそく探検に繰り出した。

まずは、そんなことをさせられないとおしとどめようとするラクサちゃんを押しつけて自分の食べたトレイを手にし厨房へ向かった。

「ごちそうさまでした！美味しい朝食をありがとうございます」

厨房には、親方らしき壮年の男と助手の若い男の二人が後片付けをしていたが、闖入者の私にあっけにとられた。

「あーん、ミヤ様、せめてそのくらいは私にさせてくださいよ」

「ごめんごめん、でも一緒に運ぶほうが効率いいでしょ？」

そう言つて、ここでいいですかと、手にした食器を流しの横に置いた。

なんなら洗い物もさせていただきますがとわたしに手を伸ばしたところで、とうとうラクサちゃんに阻止されてしまった。

「もしかして、昨日着いた新しい親方様の？」

「手下その4です。ミヤといます。よろしく願いますね」

「いやあ、えらい方がこんなとに来てくださるなんて感激だな。

わしはこの料理長のジェイ、これは息子のケイですわ」

「やだな、私は役職なんてついてないですし、ここでは学者みたいなことをすることになってます。どうぞミヤと呼んでください」

「学者さんか。かしこそうな顔してると思った。この息子にも少しかしこさを分けてもらいたいのう」

「とーちゃん、やめてくれよ」

ガハハと笑いながら、親方改め料理長は恥ずかしそうにしている息子の背中をバンと叩いた。

豪快な父親と反対に気の弱そうな息子は私の2、3年上に見える。

料理人修行か。私も本当なら来年はこんなふう白い制服にエプロンで包丁を握るはずだったのに。

ま、先のことより目先のごはん。

私は、恐る恐る申し出た。

「あの、私は異国から来たものなのですが、時々故郷の食べ物を作ったり、この土地の料理を覚えたいと思っていますのです。

よかつたら、時々調理場をお借りできませんか？あと、お料理教えてもらえませんか？」

「ああ、かまわないさ。ここにあるものはお館様のもんだから、お館様のご許可さえあれば好きにするといい。お前さん料理が好きなのか？」

「好きです！食べるのも好きだけど作るのもっと好きなんです」

「じゃあ、お前さんもわしに異国の料理を教えてくれるか？」

「ええもちろん！」

これから館を周った後近所を散策に行くと言うと、親方は館を出る前に寄るように言ってくれた。

二人分のお弁当を用意してくれるらしい。

私たちは元気に礼を言うと、勝手口を抜けて洗濯場へと向かった。

洗濯場では、料理長の妻で洗濯や掃除を担っているスージに挨拶をし、ふらふらしている私たちを不審に思い呼び止めた侍女頭のグリーンに改めてラクサをつけてくれたことに礼を言った。

そしてラクサの同僚のミツチとメイに紹介してもらい、庭師のビリーと馬屋番のトンバに、昨夜の荷下しを手伝ってくれたことにお礼を言った。

城を経験した後だったので、私はこの館で働く人が思いのほか少ないのに驚いた。

後は、ジャンの側に控えているベルナンで全員だった。

本当はもつと沢山いたのだが、執政官が都に戻る時に、若手を全て引き抜いて連れて行ってしまったのだとか。

その穴を埋める為に、近くの村に住んでいたラクサ達3人は、ベルナンの頼みで家族に応援されてここで住み込んで働くことになったという。

「最初は都から勇者様が武官の皆様と赴任なさるって聞いて、皆色々心配していたんですよ」

朗らかに言い放つが、心配していた内容は朗らかには言えない内容だろう。

「あの勇者様なら何も心配はないと思うよ。たよりなさそうだけどいい領主様になると思うよ」

「え、心配ないのですか？」

ラクサちゃん、そのがっかり顔は何？

彼女を見てみると、他校の男子生徒やアイドルのことで一喜一憂してはしゃいでいた同級生を思い出した。

皆どうしてるかな。

私がここで過ごしてるだけ、皆の時間も進んでるのかな…

一抹の寂しさに、涙がにじみそうになる。

そんな私の表情の変化をラクサちゃんは少し心配そうに見ていた。この子、意外に出来るかもしれない。

「よし、じゃあそろそろ外に行きますか！」

私は郷愁を吹き飛ばすように声をあげると、お弁当を貰いに厨房へ向かった。

8・館の人々（後書き）

急に人がいっぱい出てきましたが、
働く人の名前はとりあえずラクサちゃん以外覚えなくていいですよ
）

9・顔役

勇者が領内にやってきたことは、翌日中には領内隅々の女子供まで知るところとなった。

もともとバルザックは狭いところなので、領館のあるヒルガルデから一日あれば領地のどの端まで行く事が可能なのだ。

情報通な街や村の顔役達はネットワークを作り、独自の通信網を構築していた。

その領内最大の街ヒルガルデの顔役にして、顔役達の代表者が就任の挨拶に館に訪れる。

まさにこの領内の人たちの第一印象を決める最初の大事な会合が行われていた。

夕方、ご近所探検から戻ってきたミヤが呼ばれたのはそんな時だった。

「この街の大事なお客様が御子様にお会いしたいそうで、お館様がお呼びです」

執事のベルナンは、伝言を伝えながらもミヤの姿に眉をひそめた。自分でもひどい格好をしているのは分かってる。

街を一通り散策し、

ランチを食べようと、館から歩いて10分程の海岸に立ち寄ると、以前ジャンが言ったようにこじんまりとしながら完璧な砂浜だった。近場にこんな素敵なお客があるなんて。

久しぶりの海に興奮を押さえきれず、砂浜や波打ち際を駆け回ってきたから、足下は砂と海水でどろどろなのだ。

「今すぐ着替えて参ります。10分ほどお待ちくださいな。あ、御子としてお呼びなんですよね？」

「はい、あなたのことをその、少し心配していらして会ってみたいと……」

御子がおまけでくつついてることはもちろん、曰く付きがもう噂になってるんだ!?

田舎の情報網、恐るべし。

銀縁の眼鏡がキラリと光る知的な青年は、館に到着した時から体育会系な勇者ご一行が苦手な優等生タイプで、有無を言わせぬ目力があつた。

整った顔なのだが、眉間の皺に苦労人な雰囲気があつてもつたいない。

そしていかんせん無表情なので絡みにくい。

ラクサは「ベルナン様はクールビューティーで、あの氷のような態度がたまらないんです」って言っていた。

近在の娘達の憧れなんだそう。

そんな相手と一緒にいても楽しくないだろうにと言ったら、もつとフェチ的なのところにも目を向けてくださいと説教されてしまった。

私は部屋に戻ると、朝から着ていた格好はまずいと判断し、ドレスを着ることにした。

お城で用意されたドレスが大量に荷物の中にあつたと、早朝に荷解きしていたラクサが発見していたのだ。

こんな所で必要ないと思っていたのだが、私のために用意していたものだからとクロゼットにあつたものが全部詰め込まれていた。

でも、改めて買い直すことなんて高くて出来ないし、いざとなれば売ったらいい。

私は城で部屋着として使っていた黒絹のワンピースをとりだした。

これなら歩きやすいし、一人ですぐに着る事が出来る。

部屋着といっても、市井では十分フォーマルに見えるはずだ。

数は少ないが、同じくドレスと一緒に詰められていた銀の花細工のペンダントをつけ、

この世界に来て着実に肩下まで伸びた髪をポニーテールにする。ラクサが紐でしばってくれ、そこに花瓶から白い花をとり刺しにくれた。

御子らしくないと言われ続けてきたし、自分もそんなの柄じゃないと思っっている。

だが、価値があるからこそ、大事にされ、信頼を得、人を動かすことが出来る。

この世界に来た16歳の私には、実績や能力という価値はない。はったりをきかせすぎることは無理だが、

「月の御子」なのは事実に変えられない。ならそれを有効に使うことが、今の私が唯一選べる道なんだ。

執務室の前に行くと、ベルナンが待っていた。

私の頭のとっぺんから足の先までチェックするとひとつ頷いた。どうやら、これで正解だったらしい。

「御子様がいらっしゃいました」

「入ってくれ」

「失礼致します。お召しにより参上しました、ミヤともうします」

私は入り口で一礼するとしとやかに部屋の中へと進んだ。

「あつれ、ミヤちゃんじゃないの!」

「あれ、ハリエツトさん?先ほどはありがとうございました」

私は見知ったばかりの彼女ににっこりと笑いかけた。

「え、いつの間に知り合ったの?」

驚くジャンの向かいに座っていたのは、この街を取り仕切る顔役。それは先ほどミヤ達が街で立ち寄った、食料品店の女主人だった。

ラクサが美味しいお菓子を売ってるんですというのでついていくと、四辻に立つ赤い屋根の大きな店があった。

中に入ると、粉ものや瓶詰め、飴やクッキーといったお菓子を売っていた。

この地方の食文化を凝縮したような店に興味津々なミヤに声をかけたのが、この店の主人ハリエツトだった。

貫禄のある身体を薫色の髪によく似合う水色のワンピースにみ、人の良さそうな顔の上には赤いベレー帽が乗っている。

年はミヤの母親くらいだろうか。

「ラクサちゃん、その人もお館の新しい人かい？」

「いえ、この方は……」

真正直に説明しようとしたラクサを遮って、私は自己紹介をした。

「昨晚、ジャン様のお供でこの地に参りましたミヤです。ラクサちゃんにお願いして街を案内してもらってたんです」

「そうかいそうかい、王都からこんな魚臭い田舎に来てびっくりしてるだろう？」

「いえ、私の故郷は海の側の街だったので、この香りがすごく懐かしくて嬉しいの。だから旅の疲れも忘れて朝からはしゃいでしまっ
て」

私は正直に気持ちを打ち明けた。

海辺に構えられたこの街に入ると、元いた世界と同じ潮の香りが身体を包んだ。

この嬉しさをさっきから誰かに伝えたかった。

「そんなにここを気に入ってくれたなんて嬉しいね。うちのダンナはこのこの網元をやっているね、よかったら後で魚を届けさせよう。

「本当ですか？ありがとうございます」

「ところで、何か欲しいものがあつたんじゃないか？」

「そうよハリエツトさん、この後砂浜でお弁当食べるの。そのデザ
ートにあのケーキを食べていただこうと思って。まだ残ってる？」

「なるほど、じゃあこれだね」

ハリエツトが取り出したのは、彼女のお手製だというカップケーキだった。真ん中に穴があけてあつてバタークリームが詰まっている。「これからごひいきに、よろしくね。じゃあこれはおまけ！」
そういつて果物の砂糖漬けを少し小さい袋を持たせてくれた。

「ミヤちゃんのことを旦那に話したら、ぜひ食べて欲しいって大きなマナマナを持たせてくれたから、夕食を楽しみにしとくといいよ」
「嬉しい！後で料理長さんに見せていただきます」

「それにしても、見違えるわねえ。街で来ていた服もよく似合っていたけど、異国風の顔とそのドレスがよく似合ってますごくきれいだよ」

「ありがとうございます！」

「えつと、ハリエツトさん？それで彼女が先ほどご紹介した月の御子なんですか？」

まだ平常心に戻れないのか、ジャンの語尾が全部疑問系になっている。

「へええ、あんたが？いやいやまったく、噂つてあてになんないもんだね」

「どんな噂に進化してたんですか。じゃあ一番偉い顔役さんてハリエツトさんだったんですね」

二人は顔を見合わせて笑い合った。

「月の御子は魔王の成れの果ての魔人だと聞いて、えらいもんが来たつて肝を冷やしていたんだよ。なんだ、拍子抜けだねえ」

魔人って、私が魔人？なにがどうなつて魔人なの…

気のせいか、横のジャンと背後に立つマルコが何かをこらえるように震えている。

「ハリエツトさん、その噂なんとかしてくださいよ。確かに私の中には魔王の魔力のきれっぱしが入ってるんです。だけど、それで私が魔力を使えるわけじゃないし、そう、身体の中のホクロみたいな

ものなんです。

それにほら、私に何かあってもこの勇者様が守ってくださいるから何も心配ありません！」

私は隣のジャンに抱きついて安心感を持っていることを見せた。

力を持つ物達の手が出ないほどの脅威であるのはいいが、領民が恐れるような存在になってはだめだ。

ジャンがさも便りになるように演出しにつこり微笑んでみせると、

ハリエツトさんも合点がいったように頷いた。

「そうか、それはえらい誤解で災難だったね。なあに、私にまかせんさい。ちゃんと誤解を解いておくからね。勇者様、いや領主様。しっかりミヤちゃんを守ってくださいね。」

皆さんが信頼出来る方々のようなので安心しました。

お話が出来てよかった。これから私たち領民をよろしくお願いします」

「はい、尽力します」

私たち一同はハリエツトさんに頭を下げた。

こうして、ハリエツトさんは「うち息子の嫁にと思ったけど、あれはあれで、ふふふ」と意味深な笑いを残して館を後にした。

それから、「魔人の月の御子」というとんでもない噂はすっかり消えたが、代わりに「麗人の月の御子を勇者が王の手から奪って駆け落ちした」という更にとんでもない噂が広まった。

私に何かあっても、勇者が皆さんを守るので大丈夫ですよと言いたかったのだけど、ハリエツトさんは違う受け取り方をしたみたいだ。

つつこみどころしかない噂だったが一気に領民達の心をつかんでしまい、今更訂正をしてまわるわけにもいかない。

マルコはやっぱり私たち二人を見てはお腹を抱え涙を流しながら笑

い転げた。

パットはまたお前のせいでジャン様の汚点にとプリプリ怒り、ベルナンの眉間のしわが一本増えてしまったのは少し申し訳なかった。

こうして、私たちの新居での生活がスタートした。

9・顔役（後書き）

なんとか領民の皆さんの「うさんくさい」という印象は解消できたようです。

それにしても伝言ゲームの底力。怖いですね。

登場人物がごそつと増えたり、後ほどリストに追加しておきます。（タイトルを噂の魔人にしてたら、噂の二人とかぶってましたね。なので変えました）

10・闖入者

「ねえねえ、ミヤ様ってやっぱり勇者様の事が好きなの？」

私は持ち上げかけたカップを取り落としソーサーにぶつけガチャンと派手な音をたててしまった。

背後で、侍女頭のグリーンが作法がなっていないと鋭い目で訴える。あわてて頭を下げ、そっとカップを置いた。

「なななな、なんでそんなことを？」

「だって、勇者様と月の御子様のことって有名ですし」

「それはハリエツトさんが流した噂で……」

「先代のお二人は結ばれたんでしょ？」

侍女三人組の攻勢は止まることがない。

なんとか隙間を見つけて主張する。

「あれはあれ、私は私よ」

「ミヤ様、動揺していますよ。女の子たるもの助けてくださった人にときめくのは当然です！」

吊り橋効果ってやつよね。

「ジャンはもちろんいい人だけど。私はそいうのはなかったわ」

「いい人すぎるってかんじですか？でも絶対戦いに出られたらとても凛々しい方だと思う！」

恋バナガールズトークは、どの世界でも変わることはないらしい。

休日、遅い時間に朝食と昼食が一緒になったものを食べる。

その片付けが終わった頃に、私は料理長に厨房を借りた。

なんでも使っていていいと言われたが、心づもりがあって買いそろえている食材をそう気軽には使えない。

砂糖や小麦粉、香り付け用のお酒だけ使わせてもらっ

近くで農場で卵とバターやクリーム、色とりどりの果物を売ってもらった。

そしておもむろに作り始めたのは、フルーツたつぷりのショートケーキ。

こつちの世界はケーキといえば焼き菓子主流で、バターはあつても、クリームはバター製造過程のものに過ぎず料理やお菓子に使われることがないらしい。

もちろん、冷蔵庫がないこの世界で日持ちを考えても扱いが難しい。だからクリームといつてもバタークリームしかなかった。

甘いもの好きなラクサに私のお菓子のお話をしていたら、ぜひ一度食べてみたい！と懇願され作ってみることになったのだ。

慣れない薪オーブンでどこまで出来るかな。

チャレンジ心に燃えた私は、庭師のビリーに、竹によく似た植物を細く割いてあぶって曲げてもらい泡立て器を作ってもらった。

焼き型は、料理長がいつも使う焼き菓子用のものを使う。

困ったのは、秤の単位が私の世界と違うことだった。

小さい頃から何十回も作ったレシピだ。卵の重さを目安に、覚えていたレシピの分量の比率から計算して割り出した。

最大の問題だったオーブンの温度は、使い慣れている料理長にお願いしてこの型を使う焼き菓子と同じように焼いてもらい、あとは中の様子をみて取り出すことになった。

私のケーキ作りに料理長は興味津々で、手元から目を離さず、合間に細々と質問してきた。

作ってもらった泡立て器には、特に興味津々だった。

「泡立てる」というのは、端を何本も縛ったような道具を使っていたので、いつも一苦労だったと目を輝かせていた。

電動に慣れた私には手動は一苦労なだけ。

心の中でばやきながら、卵を泡立てバターを加えると、ヘラで手早く粉を混ぜていく。

焼き型3つ分に入れたら、料理長があたためていたオーブンに入れ、

そこから二人並んでひたすら中に目を凝らしていた。
やっぱり、火力は強め。

レンガの上で炎に照らされふくらんでいくケーキを見守っていたが、いつもより5分ほど早めに切り上げ外に出してもらった。

炊け串を出して焼き具合を確認すると申し分なくてほっとした。

スポンジケーキはそのまま冷まし、

その間にフルーツを切り、クリームを用意する。

いつも家では1ホール作るだけだったから、3ホール分になるとかなりの量になるが、久しぶりに無心でお菓子を作るのはとっても楽しかった。

完成すると、ラクサに用意してもらった庭のテーブルに移動する。
スポンジが無事焼き上がり、これなら食べてもらっても恥ずかしくない、館の人全員をお茶に招待しケーキを振る舞うことにした。
庭であれば、気兼ねなく参加できるだろうし、同じテーブルに座ることを不遜だとこだわるジャン達ではない。

それに館の者と話せるチャンスだと喜んで、手近にいる人達と嬉しそうに談笑していた。

お茶がいきわたったところで、料理長達の手でケーキが運ばれる。
皆が歓声に湧いた。

色とりどりのフルーツが乗ったケーキは見た目も美しく、シンプルな作りなので男性にも受け入れやすい。

やはり火力の加減で私としては焼きすぎに感じたが、初めて食べるスポンジのふわっとした軽い食感やバタークリームと違うなめらかで豊かな風味の生クリームはとても新鮮だったらしい。

甘いものが好きなジャンやパットはもちろん喜んで食べ、あまり得意でないというマルコも、一口食べてこれならと一切れ全部をたいてらげてくれた。

マルコの残りを期待していたパットは残念がったが、すぐに皿におかわりを1切れ乗せてもらうと上機嫌になった。

もちろん、女性陣には触れるまでもなく大好評だ。他にも料理長が用意した軽食などをつまみながら和やかな時が流れる。

私はラクサとミッチとメイの侍女3人娘に囲まれて、ガールズトークに強制的に加えられていた。

もちろん話のネタは目の前で談笑している男性陣。

領内で評判のクールビューティーの執事や、国を守った勇者様、弟にしたいナンバーワンで人気急上昇中のパット。

彼らが話題に出るたびに、きゃーっと嬌声があがる。

「きゃ、きゃー？」

私も棒読みで声をあげてやり過ごしていたが、とうとう矛先が向いてしまった。

逃げようとするが、三人にがっちりと手足を押さえられて動くこともままならない。

「勇者様じゃなかったら誰がお好みなんです？」

「まさか、マルコ様とか？ いやーん、私はもうちょっと繊細な方がいいな」

いやまでまで、マルコはちゃんといい男だと思うぞ？ ジャンよりもずっと大人だしね。

でもフォローして「ミヤ様はマルコ様のことが…」ってなっても困るし。

「じゃあ、この方以外で好きな方とかいるのですか？」

好きな人…

私の心の底が、つきんと痛んだ。

私の好きな人。

私の心に住んでいる人。

目閉じると浮かぶ、いつも悲しそうな顔をしていたあの人…

「ミヤ様？大丈夫ですか？ミヤ様？」

「あ、うんごめん。ちょっと別のことを考えててさ」

「いえ、何かお気に障る事をいつてしまったら申し訳ありません」

「うつん、そうじゃないの。あれ、誰だろうとおもって」

話をそらそうと、あたりを見回し目に入った一人の男を指さした。

緑のローブに藁色の髪の毛の、青年と呼べないくらいの年頃の男。

彼は、テーブルの上のケーキを自分で切り分けてはせっせとほおばり、また切つてはほおばりを繰り返し返していた。

「あー！一人であんなに沢山食べてる！！」

「ずるい！私もおかわりしたいのに！」

「はしたない、そんな大声をあげてはいけませんよ」

ミッチとメイが大声をあげると、せっせとお茶のおかわりを継いで歩いていった侍女頭のグリーンがたしなめた。

「私、館の人とは全員会ってるはずなんだけど、あれ誰？」

「そういえば、私も初めてお会いする方ですわ」

危ない侵入者にマルコやジャンが気づかないとは思えない。きっと危険はないのだろう。

だけどいったい何者？

その場にいた人達の注目に気づいたのか、男は皿に乗せたケーキを最後まで食べ終わりお茶をすすると、一同に頭を下げた。

「領主様を訪ねて王都から来た者ですが、甘い匂いにつられてつい玄関でなくこちらにまわってしまいました。いやーこのケーキ美味しいですね！生地の上つとりふわふわ感に、クリームとフルーツのハーモニーの素晴らしさ！！わたしの知らないお菓子がまだあったなんて。世界は広いですね」

男の言葉に周囲はざわめく。

「お客、様？」

「普通に混ざってケーキ食べてたし」

「玄関のベル鳴ってなかったよね？」

困惑した使用人達に笑顔を向け、ジャンはこの家の主人としてこやかに立ち上がり男を迎えた。

「気に入って頂けてよかった。それはそのミヤが作ったケーキなんです。ところで私はこの館の主、ジャン・ルーク・ヴィ・バルザックです。あなたの名前を伺えますか？」

「あなたがあの勇者様でしたか！お会い出来て光栄です！！ではこちらの黒髪のお嬢さんが月の御子様ですか？」

ジャンへの挨拶もそこそこに、私が頷くやいなや、彼は飛びつかんばかりに私にかけよると、ふりまわすように握手し、そのまま私に抱きついた。

男の肩越しにマルコとジャンが腰に手をやっているのが見えたが、目で大丈夫だと伝える。

「あなたはどなたなんですか？」

男は私から離れ一歩下がると、ジャンと私を見上げるかたちで膝を折った。

「申し遅れました。私は陛下の命で参りました、王立学院のピート・ロッドです」

「ではあなたが？このたびは、私の我がままにおつきあい頂くことになってしまい、ありがとうございます」

「いえ、とんでもない！あんな悪ガキ、いえ殿下方の教師から解放してくださり、なによりこれからあなたのお側にいれるなんて研究者として光栄の極み！感謝しきれませんよ」

「それは、ありがとうございます」

「なんかこの人、今すごいこと言わなかった？」

「ミヤ、陛下の命令ということはこの人が言ってた陛下との連絡係？王宮から文がきていたが10日後くらいに着任されると聞いてた

けど」

「ボク、怖いお役人がくると思ってただけだ。この人大丈夫なの？　なんかめげそう」

どうしてパットって私が絡むとこうつかかるのか…

私はパットをひと睨みし、ヤンの横に立つと改めて彼を紹介した。

「ロッド様は私と陛下の間に立つてくださる方ですが、私の家庭教師としてご滞在いただきます」

「教師？」

「そう。だからちゃんと敬意を持って接してね、パット。私にこの国の文字や、歴史をはじめとしたこの国や世界の国々について教えてください。陛下に人をよこして頂くなら是非学者の方をお願いしたところ、王子様方の教師をされていたロッド様をご紹介くださいました」

「まだ若いのに王子の教師を？　すごい人なんだな」

「そんなエリート先生がどうしてこんな田舎に…」

「あの、もともとはただの歴史と社会学の学者なんです。特に勇者と月の御子にまつわる伝承を研究していたのです。それがたまたま歴史学を教えられる者が他におらず、私が王子様方をお教えしておりましたが…歴史は陰気で嫌いだと申されて授業をお休みされて、しまいにはもう不要とおっしゃられてしまい。

ちようどその折にこのお話を頂きまして、指定日より早かったんですが、いてもたってもいられずすぐに来てしまいました」

それは結局左遷されたということじゃ…

連絡係は王のスパイ。そのため、警戒心が解けたわけではないが、それでもいくぶん親しみと哀れみが少しこもった笑顔が向けられた。

私は、王に連絡係を側に置くかわりに人選に条件を出していた。

この国で役立てる英知は、この国のことを知らなければ生かすこと

が出来ないので、博識の学者であること。

そして月の御子にまつわる伝承について詳しい知識を持つ権威で、これから共に研究出来る人。

その方になら、私は心から信頼して惜しみなく英知を渡しましよう
と。

今後側にいて私を監視する人だ。

下手な役人が来ていばられても困るし、出世欲がある人も困る。

私が伝えることを私欲で使われては困るからだ。

出来るだけ無害で、私の役に立ってくれる人だとありがたい。

ジャンやマルコは、歴史や伝承についての研究はかなりマイナーな分野だと言っていた。

それに私と一緒にという、今この王宮で恐れられていることを構わず王都から離れて来るような物好きは、政治とは無縁の変わり者の
はず。

もちろん、そんな都合の良い人間はなかなか見つからないだろう。

それならもっと好都合。違う人間が送り込まれれば、条件が違うと
つっぱねればいい。

そんな私のもくろみは、希望通りの人間が王の鼻先にいた上に、本人が張り切って予定よりずっと早くに到着してしまったという結果
に終わった。

「ではロッド先生、よろしければケーキをもう一切れいかがです？

その後でちゃんとお仕事してくださいね」

「もう仕事ですか？」

「このケーキは、国王がおっしゃる『月の御子の英知』ですから」

「は、はい！もちろん喜んで！ いやあまさかこんな素晴らしい英知を授けてくださるなんて、私は感激です！」

「先生、一切れといったでしょ、今その机の下に隠したお皿はなん

ですか」

「いやこれは、拾ったというか置いてあったというか」

「…食べ過ぎでお腹壊さないでくださいね」

「甘いものならどれだけたべてもお腹を壊したことがないのが自慢です」

「それは自慢じゃないと思いますよ」

こうしてにぎやかに休日の午後が過ぎていった。

10・闖入者（後書き）

ようやく、最後の主要人物、ロッド先生が登場です。

甘いものに目がない学者で、おっとりキャラ。

役者も揃ったので、これから月の御子の謎へと迫っていきます。

11・魔力開発

ロツドの最初の授業は、文字とことばの成り立ちだった。

村の学校から、入学したばかりの子供用の手習い帳をやらされそうになったが、

そもそもミヤの耳に入る言葉の音が魔力で日本語に変換されているので、元の言語の音との齟齬が生まれてしまう。

例えばこの国の本来の言語「ロイロ」という音がミヤには「鉄」と変換されて聞こえる。

つまり、音はもちろん文字数も違う。

この国の文字は、ひらがなとよく似ており音と密接に関係している。言語本来の音が聞けないミヤには、文字を読むためには全ての言葉の文字を覚えるという暗記地獄しかなくなってしまった。

「もーいや、文字むり！絶対むり！私読めなくていい」

さじを投げ、頭を抱えて机にうつつぶしてのたうちまわるミヤに、ロツドがひとつ提案した。

「私は魔導については専門外であり詳しくありません。ですがこちらの視点から、ミヤの魔力の言葉を操る能力のほうをなんとかしてみませんか？」

「翻訳能力のこと？」

ジャンは私の言葉を手でさえぎると、改まった口調で語りかけた。

「私のこのコトバ、分かりますか？」

「？うん」

「今私が言ったことに何か感じました？」

「ううん。あ、先生がちょっと舌つたらずで萌えたかも」

「萌えた？」

「ああいえ、ちょっと口調が変わったかなって感じただけです」
ロツドはため息をついた。

「なるほど、やはりそういうことなんですか」

「どういうことですか？」

「今私は他の国の言葉で喋ったのですよ。口調少し変わっていたのは、その言語の発音が悪いからでしょう」

「ほうほう」

「つまりどんな言語を耳にしても、ミヤには自国の言語として聞こえる。そして恐らくミヤが喋ると聞く者の母国語に聞こえる」

「へー、なんと便利な！」

これならどんな国に行っても大丈夫ってことね。すごく助かるわ。

一人感心していると、ロッドは難しい顔をして首を降った。

「確かに便利ですよ。けど言語の区別がつかないのはある意味危険なのです。」

「諸刃の剣ってこと？」

「その言葉は言い得て妙ですね。この世には言語の使い分けというものが存在し、様々な理由を持つものです。例えば聞かれたくない会話だったり、国を偽っていたり、理解できないふりをしたり。それをミヤは気づかないうちに暴いてしまう可能性もあります。またあなたはそういった使い分けが自分の意思で出来ないということなのです」

「うーん、そんなこと考えなかったです」

「ただ、誰でも母国語と全く同じように他国語を操ることは不可能です。私のように口調が若干変わったり、急に訛りが入ったり、言葉の使い回しが変わったり。先ほどミヤが気づいたように、そういった口調の変化で見極めるしかないのではないのでしょうか」

「私は言葉に関しては特に気をつけないといけないってことですね。それで文字なんですけど……」

「耳と口の反応ではなく頭の中で情報を処理する魔力の干渉ならば、文字を読むことも魔力が解決してくれるはずなんですがねえ」

「聴くのと同じように読めるようになるんですか？」

「それであれば、どんな文字でも読むことは出来るでしょう。ただ

し、書く方は簡単にはいかないかもしれません」

「…もしかして、書く時にどの言語で情報を出せばいいか特定出来ないから？」

「あなたは聡いですね。もうそこまで理解しましたか。まあ、絶対に無理なのは置いておいて、まずは出来そうなことからひとつづつやってみませんか？」

「先生つて、教え上手ですね」

「ありがとうございます。あの悪ガキどもがもう少しあなたみたいだったらどんなにやりがいがあったことか」

「そんなに悪ガキだったんですか？王子様たち」

「そりゃーもう、時間になってもこない、途中で逃げ出す、まじめに聞いているかと思えばいたずらの仕掛けが発動するのを待ってて上の空、本はらくがきだらけでまともに読むこともできません」

「色々大変だったんですね」

「私は研究者なので、手習いのように子供を教えるのは苦手なんですよ。今みたいな議論のスタイルだとやりやすいんですがね。王子達ももう少しお年が上だったら…」

宙をみてぶつぶつとつぶやくロッドはしばらく現実に帰ってこなかった。

王子達が彼にどんなトラウマを残してしまったのだろう。

「じゃあ、見た文字を処理するよう魔力に働きかければ読めるようになるのね？」

「そうですね。ちょっと試しにやってみましょうか」

「ところで、魔力に働きかけるってどうしたらいいの？」

「え、それは感覚的なものなのでどう説明したらいいか…最初に魔力を使っ言葉と話した時はどんな状況でした？」

「ええと…」

魔王が口で出した赤い玉を口に含まされてそれが…

あのシーンを思い出し、私は赤面して身もだえてしまう。

「大丈夫ですか？」

「あ、はい。言葉が通じないことが不安で会話をしたくて話したい一心でした。その時に口から魔力の固まりみたいなものを入れられて、それを意識したとたんに消えてしまったんです。それからすぐに喋れるようになって…」

私は指でそつと唇に触れた。そしてそのまま喉を通り鎖骨の真ん中のところを押さえた。

「ここに、何かあるのが分かるんです。温かい力のような何かが」

「そこを意識してみてください。私はささやかな魔導しか使えませんが、魔導は身体の中の魔導エネルギーを一部に集中させ、呪文を唱えながらイメージをそこに重ねると発動するのです。試しにお見せしましょう」

そういつて、ロッドはお茶を入れていたカップを目の前に置き、右手の人差し指を胸の前に持つてくると呼吸を整えた。

すると指先に白い光の玉が現れ、同時に口の中で小さく3単語つぶやいた。

私は目の前のカップの変化に目を見張った。

すっかり冷めていたはずのお茶から湯気がたつたのだ。

カップに触れると、入れたてのように熱い。

「私の能力では、水瓶くらいまでの量のお湯を温めたり、小さい光で照らしたり、たき火に火をつけたりといったささいなことしかできないんですよ」

「すごいです！私、魔導を初めてみちゃった！感動しちゃいました」

「え、そうなんですか？」

「うん、これだけの力でいろんなことできそうじゃないですか。本当に魔法ってあったんだなー。私も使えちゃったりしないかなー」
一人興奮して盛り上がる私は、照れて恐縮するロッドのつぶやきには気づかなかった。

「でも、学者としてはあなたの能力がどれだけ羨ましいか…」

「じゃあ、まずあなたの感じる魔力に集中してみてください」

私は楽な格好と言われ、長椅子に横たわった。

まっすぐに仰向けになり、のど元の魔力に両手を置いて意識を集中させた。

目は、ロッドが差し出す紙に書かれた記号の羅列のような文字に向ける。

「では、見ているものに集中しながらあなたの知っている文字をイメージしてください」

私の知っている文字、ひらがな、カタカナ、漢字…

集中しているうちに、目の前がぼうつと赤色に染まる。

そしていきなり頭の中がひっかきまわされるように、文字のイメージの洪水が起きた。

痛みはないが、頭がしびれるような感覚に私は思わずうめいた。

「ミヤ、ミヤ、大丈夫ですか？」

ロッドは手にした紙を投げ捨て、あわてて顔をのぞきこむと青い顔で呼びかけた。

「うん、だいじょうぶ。心配しないで」

私はよろよると起き上がった。

「無理しないで休んでください」

「わかってる。ねえ、さっきの紙を見せてもらえる？」

床から拾って手渡された紙を目にした私は、身体をよじらせて笑った。

あれだけ必死に解読しようとしていた文面には、

『ぴーとぷーのきょうだいは、きょうもげんきにおならをします』
から始まる、幼い子向けの物語が書いてあった。

「よりによつて、おならって…」

「学校で適当に借りた教材で、一番簡単な言葉が使われてたのがこれだったんです」

「だからって、初めて読めた文字がおならのお話ってうけるわー」
「確かに、いくらなんでもレディーにこれはなかったですね」
涙を流しながら笑う私につられ、ロッドも一緒になって笑った。

「ということで、読めるようになりましたー」

ジャンの部屋でロッドと並んで報告した私に、二人はあきれた顔を見せた。

「1日で読み書きをマスターするって、やっぱりミヤはすごいね」

「いや、すごいってより規格外だろ。魔導でもこんな力聞いた事ないぜ」

「あ、ちなみに書くのは無理だから」

「は？」

「魔力の力は書くのだけは無理みたいなのよね。試してみたけど、どうしても私の国の文字になっちゃうの」

「どうということなんだ？」

「この魔力は言葉を操る力とはちよつと違うの。特定の相手への情報の伝達能力で、聞いたり読んだりといった情報を受け取ることと、言葉や文字といった情報を相手が理解できる形で伝える事はできるのよ。」

「ただど文字だと特定の誰かってわけじゃないから、私の国の文字になっちゃって、それはフォローしてくれないみたい」

「ジャンもマルコも、分かったような分からないような顔してる。」

「私も、なんとかこういうもんだなと自分に言い聞かせている状態なので、いまいち説得力のある言い回しが出来ない。」

「名前のサインと数字だけは練習するから大丈夫！」

「何が大丈夫だよ、せっかくあてにしてたのに。名前書けるだけじゃあ仕事を押し付けられないじゃないか」

パコン

なんとなくむかついたので、手にしたノートでジャンの頭をまるめてはたいた。

「ちよつと、なんで叩くんだよ」

パソコンパソコンパソコン

「ミヤ、そのくらいにしといてやれ。ジャン、お前から二人に伝えることがあつたんだろ？」

「伝えること？」

「そう、前にミヤには今後のことで少し話したけど、ロッドさんも含めて二人にお願いしたい役目があるんです」

居住まいをただしたジャンは改まって話をすすめた。

「まず、本来は領主館では、生活を支える使用人の他に領主としての勤めを助ける者達が詰めるものなんだ」

「あれ？そんな人達まだみてないよ？」

「その通り。本来なら前領主の代に仕えていた者が自分の部下をそのまま登用するのだけど、年配者はもう引退したし、若者は前任の執政官と都に行ってしまったんだ。だけど僕はもとと武官でそういった配下はいないうえに」

「王に用意してもらえなかったのね」

「うわ、ストレートに言い過ぎ」

「でも、ミヤの言う通りだよ。小領でおだやかな気風が幸いしてあまり大きな問題が起こることもないから少人数でもなんとかまわせるんだけど、まだ今はその人手すら確保できないんだ」

「マルコとパットだけじゃとうてい手が足りないのね」

「パットは当面領民の窓口担当になってもらったよ。さっそく今日は朝から街に行ってるよ」

道理で、今日は朝から静かだなと思ってたのよね。

「俺は人事と物資調達担当だよ。だけど当面は兵士の確保と育成に走り回ることになると思うぜ」

「兵士？」

「ミヤ、ロッド先生が館に着いた時に誰も気づいてなかったの覚えてるだろ？俺たち、いつものように自分の身を守る為の警戒はしているが殺意がないものには無警戒なんだ。

だけど、必ずいつも俺たちどちらかがこの館にいるとは限らない。自分たちだけじゃない、館の人達はもちろん、領内を守るだけの最低限の武力は領主として必要だ」

「今の時代は他領から攻め込まれるという心配はないけど、山賊や無頼の集団などはよほど領内が安定しないと無くならないものだからね」

「なるほど、てつきりそんなのが不要なほどのどかな土地柄かと思つてたよ。でも育成もつて大変じゃない？傭兵とかどっかから兵士を一団もらうとかできないの？」

「すごく言いにくい話だけど、ここ数日かけてベルナンに領内の現状を教えてもらった結果、お金がほとんどないことが分かったんだ」「へ？」

「つまり俺たち、っていうかこの領地はものすごく貧乏だから、優秀な人材を雇うような金がないんだよ」

私は首をかしげた。この来てから毎日近隣を散策しているが、決して豊かではないものの不景気特有のすさんだ雰囲気は特に感じなかった。

「でも、街の様子では特に思わなかったけど？」

「ここは領主のお膝元で体裁を整えるために比較的税率が低いんだ。だが、地方に行くにつれ税率が高く設定されていてかなり生活も厳しいみたいだよ。しかも、昨年までの領内の収入がゼロなんだ」

「ええー」

「過去の領主の資産は国に没収された上に、昨年までの税収は国のものだからと執政官と共に引き上げられたんだ」

「てことは、本当にど貧乏じゃない」

「とんだ置き土産だよ。それが陛下の支持なら、俺たちは徹底的に力をそぎおとされたってことだな」

最近ジャンが疲れた顔で食欲もあまりない様子だったのはこのせいだったのか。

「俺たちの生活や当面どうしても必要なものは魔王を倒した報奨金で当面はなんとかなるんだけどあくまで私財で限度もあるし、これで領内を管理する経費にまわせないからな」

「わかった。なんでも手伝うよ！それで私は何をすればいい？」

「僕の側で領主補佐件代行として動いてほしいんだ」

「具体的にどんなことするの？」

「領内の問題を一緒に考えて欲しい。それから僕が動けない時に代行をお願いしたいんだ」

「私なんかが代行に？むりよ」

「ミヤなら大丈夫。あの陛下とも渡り合えるんだから」

「むー、あれは必死だっただけなんだけだな…」

かなり強引にお願いされ、かといってせっぱつまった事情に断りきれずにしぶしぶ引き受けることになった。

「それからロッド先生、客人のあなたにこんなことをお願いするのはとっても申し訳ないんですが、半日でいいので私の文官を勤めていただませんか？」

「私に役人仕事を？無理です無理です」

「あなたは社会学にも造詣が深いとか。ミヤの補佐と、文官として書類に問題点があれば指摘して頂きたいのです。もちろん給金はお支払います」

「私は研究のためにここに来たんですがね」

とまとった顔のロッドに、ジャンは頭を下げる。

確かに、体育会系三人組に文字が書けない私達に足りないのはブレインで、学者で専門分野もマッチして申し分ない。

私達3人は期待を込めた瞳でロッドを見つめる。

「だ、だめですよ！僕は学者です…」

「わかった、週に1度お菓子をつけましょう」

「え？お菓子ですか？」

私の提案に、ロッドの声のトーンがあがる。

「私の国のお菓子です。週に一度作ってあげます」

「やります。やらせていただきます」

「はやつ」

「よく考えたら、生徒であるあなたの時間が開かないと私の研究が進まないんですね」

いや、どう考えてもお菓子に釣られたでしょうアナタ！

心の中でつつこみながらも、こっそりジャンにガッツポーズをしてみせた。

「ロッド先生、ありがとうございます。それでは文官兼顧問としてよろしく願います」

「あれ、なんか増えてませんか？」

「いやあ、心強いな。僕、デスクワークが苦手で参ってたんですよ」

「まあこれもミヤのこの国を学ぶいい教材になるでしょう。もちろん、私の研究にはきっちりつきあってもらいますよ、ミヤ」

「ひー、お手柔らかに願います」

こうして勇者達に心強い味方を得て、バルザック貧乏脱出大作戦が開始された。

11・魔力開発（後書き）

何事にも必ずメリット・デメリットがあるということ、魔王の力も万能じゃなかったようです。

こんな感じで、ミヤの御子の力がちよつとづつ解明されていきます。

12・貧乏脱出大作戦会議

「それでは、第1回バルザック貧乏脱出大作戦会議をはじめます。司会はわたくし、作戦実行委員長を仰せつかったミヤがつとめさせていただきます。」

「ミヤ、その会議名はちよつとどうだろ……」

「どうして？開き直ったかんじで、やる気がでてこない？」

「そのものずばりでいいんじゃない？きれいな呼び方でごまかしてもしようがないし」

「パット、珍しく気が合うじゃない。おねえさんは嬉しいよ」

「ボク達同年なんだから上目線やめてくれるかな」

バルザック領主館2階の執務室では、ジャンとパット、ミヤにロッド、そしてベルナンにラクサという顔ぶれが集っていた。

マルコは昔の知り合いをスカウトするといって2日ほど留守にしている。

彼がいなのは残念だけど、今日が私の初仕事。

税収があがる秋までの約半年間、どうやって「お金がない」危機を脱するか対策を考えて実行するのが私の最初の役目。

「あの、どうして私が皆様の中にいるんでしょう」

「忙しいのに悪いね。ラクサは、領内の庶民代表として意見をきかせてくれないか」

「わ、私なんかがお役に立てるんでしょうか。ミヤ様」

「だいじょぶだいじょぶ。いつもみたいに思ったことを言ってくれたらいいんだよ」

「わかりましたあ」

納得したようなしきれないような顔を浮かべたラクサをそのままに、私は本題に入った。

「では、昨晚お配りした紙をごらんください。今日の議題は、今すぐ収入が得られる事業のアイデア出し。といってもいきなりじゃ難しいと思うので、ロッド先生と私が相談していくつかポイントをとめてみました」

「ミヤは妙に手慣れてないか？」

「慣れているっていうか妙に偉そうですよ、ジャン様」

「そこ！私語する暇があったらどんどん意見だしていく！」

ジャンとパットがこそつと声を交わすのをみて、びしっと注意した。小学校の頃から、委員長だの生徒会だのを経験しているので、こんなものかなと進行していく。

「じゃあロッド先生、まず一般的に収入を得る手段についてわかりやすく説明をお願いします」

「えー、本来は永続的に収入を得られる方法を見つけることが大切なんだけど、今回は切羽詰まってるので単発でもいいでしょう。手段としては、労働の対価、物を作って売る、サービスを売る、仲介手数料を得る、相場を利用し転売して差分を得る、などがあります。ただし今回はすぐに動かせる資金が必要なので、支払いが現金かすぐに換金できるものに限ります」

「先生ありがとうございます。二枚目の領内の特産品一覧や三枚目の領内地図など資料も目を通していただけてますよね。ということで、具体的なアイデア出しに試してみましようか」

「ハイハイ！」

「お、元気があっていいねー。パットどうぞ」

「もう、いちいち上目線でムカつく。えっと、名産の果物やオリーブの油を使った今までないような商品を今回限りで作って売ったら？」

「限定商品の開発ね。私の国でもそうやって注目を集める方法が確率されてたな。季節限定やご当地限定とか色々出来るよね」

「やっぱりこの土地ならではのものを使うのはポイントですね。生産農家の保護にもつながりますし。ただ、商品開発に生産ラインの確保、そしてそれが人気でも口コミで広がるのにある程度時間がかかります。ですからすぐに成果を出せるものではありませんが、早くからとりかかるにこしたことはないでしょう。起動に乗るまでは大変でしょうが、ノウハウが確立できればその後は領内の人達に任せるのもいいですね」

ロッドにお墨付きをもらい、パットとはびはねるように立ち上がるとおじぎをした。

「これは時期がきたらパットにまかせるよ。その時はミヤとハリエツトさんに相談にのってもらうといい」

「ありがとうございます！ジャン様」

自分の意見をジャンに認めてもらい、パットは心から嬉しそうにしている。

「じゃあ次は、領主様どうぞ」

「えーと、僕が考えたのは、夏にカーニバルっていうのはどうだろ。春の女神様の祝福、秋の収穫祭、冬の年越し、ってあるけど夏はないだろ。名所がないぶん、お祭り目当てで来てもらうんだ。そして外から人を呼べるしな」

「なるほど、イベント開催ね。沢山人を集められたらそれだけ外貨（他領のお金）が流れ込んでくれるよね。それに夏のお祭りはここにぴったりだと思う」

「確かに、そういう目玉は領地の名を売ることができますね。けど外から人が集まればそれだけトラブルが起こる。今の現状では警備どころか運営までに手がまわらないでしょうから難しいのでは」
「すっぱりと却下されジャンはちよつと肩を落としているが、来年か再来年からでも始めたいねと皆とても乗り気だ。」

「あ、はいはい！」

「ロクサちゃんまで考えてきてくれたのね！よいいってみよう」

「あのー、せっかく勇者様と月の御子様がいらっしゃるので、お名前を冠した何かを売るとかだめですか？これを持ってるって愛が生まれちゃうよ！きゆるるん（はあと）的な」

『生まれません』

ジャンと私のつつこみがハモる。

「商品に付加価値を付けるのですね。たしかに国内ではお二人の愛の噂がとびかっってますしな」

ふつつつ、と楽しそうに身体をゆすって笑うロッドさんに、私はじと目を向ける。

「それなら、剣の勇者モデルを発売とかがいいと思う」

「ミヤ様、残念ながら当地は武器の生産はゼロです」

「さ、さようですか」

ベルナンのつつこみに苦笑しながら、私は生産物リストを眺めていていて気づいた。

「そういえば、この月光草ってなに？」

「この地方にだけ生息するこの地特産のハーブです。魔を払う薬草としが、いかんせん見た目が地味な上に知名度が低くて…」

でも、とある効能に効くと一部の好事家には非常に好まれている薬草なんです、とベルナンがほんのりとはじらいながら説明した。

ジャンはなにやら窓の外を見、ロッドはなるほど深く頷いている。

「ほら、ミヤ様の枕元に私が下げたじゃないですか。」

「あ、あの甘くてちよつとスパイシーな香りの葉っぱのリース？あれってそのハーブだったんだ」

ラクサの帰省のお土産で安眠できるからと下げてくれたそれは、笹というか菖蒲の葉に似た固い葉だった。

「私たち地元の女の子は、好きな人との恋のおまじないにとデートの時に下着の端に縫いこんでおくんです。彼のお泊まりの時にあのリースをかけたりね。女の子にはリラックス効果があるだけですが、

男性はその気になりやすいつて密かに人気なんですっ」

部屋の空気が軽く固まる。

ちよつとまで、その気に？

私は男性陣の反応がおかしかったことにようやく合点がいった。

「ラククサちゃん！あれは安眠のためだつて言つたじゃない！」

「きゃー！ごめんなさいごめんなさい！ミヤ様のところにいつ勇者様がいらしてもおっけーなようにと思つて……」

「なにがおっけーなのよ！このこのエロエロラクサ」

私がこぶしでラクサのこめかみをぐりぐりすると、ひゃーひゃー叫びながら謝つた。

後で撤去しなくては。

でも、男性をその気にさせるハーブ。これはちよつといいかもしれない。

「ねえそのハーブ、本当に男性に効果があるの？」

その場にいる男性三人に問うと、微妙な空気が流れた。

「教えてくれないと、食事に仕込むわよ？」

「私は古代魔除けの儀式に使われたことかしりません。煎じる時はお湯でなくきつい酒を用いるなんてことは知りません」

と首を大きく振るロッド。

「あくまでも月光草は素材の一部として薬師が独自の調合して煎じると聞きます。単独で煎じてもうまく効能が引き出せないんだそうですよ。そのかわり香りでも若干は催淫効果があるとは言われてますが。あ、これは当地に住む者として当然の知識です」

ベルナンのやけに細かい説明でだいたい分かつただけど、せつかくだからとジャンのほうを見ると、目をそらされた。

ん？

身体を後ろにそらせて目を合わせようとすると、反対側にそらされた。

本当に、この人は分かりやすい。

「で、効果はどうだつた？」

「…あぶなかった」

リアルな回答に全員が吹いた。

「勇者だつて歓待された村とかで、よくあの匂いがする酒を振る舞われそうになつて大変だつたんだよ。勇者つて呼ばれていいことないよ」

さんざんだつたとい首を振るジャン。

「えー、そんなにモテたの？」

私が驚きの声をあげると、ラクサが

「私でもやるかも」

とぼそつとつぶやいた。

それが耳に届いたのか怯えた顔を見せるジャン。

「それはジャン様の魅力でしょう」

よっぽど不憫に思つたのだろう。

ロッドは柄になく空気を読んで慰めの言葉をかけた。

「絶対ヤバいと思つても断れないし、飲んだふりしていたら強硬手段とられたり、女つて怖い…」

まじめなジャンにとって、相当ひどい目にあつたらしい。

思いかげず悲壮感が漂つてきたので、話を進めることにした。

「ともかく、それなりに効能があるつて認められてるみたいだから、これで『恋のお守り』でも作つて売っちゃおうか」

「それつて素敵です！」

さつそくラクサがくいついたが、男性陣は微妙な顔をしている。

「こういうのつて身分に関係なく女の子つて好きなのよ。効き目があるつて噂になれば、遠出したつて買いにいくの」

「へー そんなもんなのか？」

ジャンがあんまりかかわりたくないという顔をしている。

「持ち歩けるように、そつと懷に忍ばせれるくらいの小さな香り袋にするの。匂いがきつくないように少量でいいからね。女性好みのセンスのいいデザインにして…」

「いいです！それ絶対私買います！！！」

「ありがとうラクサちゃん。本当は由緒ある神殿で、ちょっと悲しい恋物語の縁起なんかつけて売るのがベストなのよね。そうすればここでしか手に入らないレア度も増すし、観光収入にもなるですよ？」

「…なあパット、女ってつくづく怖い生き物だよな」

「まったくです、ジャン様」

キャッキヤと盛り上がる少女二人を尻目にため息をつく男性陣だった。

12・貧乏脱出大作戦会議（後書き）

ラクサちゃんがつっぱしってますな。
会議はもう少し続きます。

13・サリーツアの宝

「やだ、つい盛り上がってもうこんな時間。なかなかいい意見がでたと思うけどどうですか？ ロッド先生」

「そうですね。今後を考えるとどれもこれから進めていく価値のあるものだと思います。ですが、我々にはそれを始めるための元手もないのです。」

まずそこをどうするかというアイデアが欲しいですね」

ロッドの駄目出しで振り出しに戻り、ため息をつく面々。

そこで、私はまだ意見を出していない人物を思い出した。

「じゃあ最後、ベルナンに期待してみようか。他の人とかぶっててもいいから言ってみて！」

「私ですか？」

まさかここで自分に振られるとはと驚くベルナン。

ふむと腕組みし、考えながら話を切り出した。

「そうですね。あれは6年前になりますが……」

珍しくやや夢見がちに話し始めた彼の話を要約するところだ。

旅する異国の貴婦人が道中この館にしばらく逗留した。そして館の脇の海岸を散策していて金貨を拾ったという。

それはみたことのない紋様が象られた金貨で、旧時代のもだった。

「古代人の落とし物がこの手の中にあるなんてロマンチックですね」と微笑む貴婦人は、私と同じ黒髪の、美しい南方人だったらしい。

「それで、それが今回のお金儲けとどう関係が？」

うるわしの貴婦人の思い出にトリップ中のベルナンは、申し訳なさそうなジャンの問いかけにはたと我にかえた。

「失礼しました。実はここから南にしばらく行った所に洞窟があるのです。」

海賊の隠し遺産があるとか王の隠し財産とか地元では昔から有名で、岬の先の岩棚の下の方の隙間から時折潮の満ち引きで中の宝物がこぼれ落ちると言われていました。

商人ギルドの鑑定家に確認してもらった所、金貨は確かに過去こぼれ流された宝物と同年代のものだということでした…」

「宝物までたどりつけないか戻ってこれない？」

「いえ、恐らくまだ誰も入ったことがないかと」

「それはおかしいですね。宝といえばトレジャーハンター達が血眼になって探しているはずですが」

「あの洞窟には、200年ほど前に賢者サリーツァが魔物を封印を施したという伝説があります。

それで昔は宝探しをする為にこの地に訪れる者が多かったのですが、入り口の大賢者の封印を破れる者がおらず、

岩棚から魔法を使って入ろうと試みたものも少なくなかったのですが、賢者によって障壁が張られ傷をつけることも出来ないそうです」

「それはまた徹底的だね」

「賢者サリーツァ？」

「およそ1200年前からこの大陸で暗躍しているという大賢者ですよ。彼が現在の世界秩序の基礎を定めたと言われており、最後に表舞台に出てきたのが今から88年前。

以来彼はこつ然と姿を消しましたが未だに裏の世界でパワーバランスを操作してると言われています。ゆえに調整者とも呼ばれているんですよ」

ちゃんとノートに書いておくんですよと、ロッドが授業のように説明してくれる。

「まだその賢者さんは生きてるの？」

「はい。彼は様々な道を極め不老不死を手に入れたとも言われています。この大陸にはサリーツァの遺物と呼ばれるものが点在し、危険なものや人には扱えない宝に封印が施してあるといわれています。こん

な所にもあつたのですね」

感嘆するロッドとは反対にジャンは難しい顔をして考えこんでいる。「ただの戦士やトレジャーハンターであればとうてい手がでないものですが、勇者であるあなたでは可能では？」

ジャンはその問いには答えなかった。

「え、ジャンってその大賢者の封印を解けるの？」

「ものを見ないとわからないな。だけどその宝物はサリーツア殿の……」

「しゅうりょー！皆様ご苦労さまです」

急に大きい声を出した私に全員がきょとんとした顔をしている。

「貧乏脱出大作戦会議、第一回のチャレンジは、ベルナン提案の海賊の、もと大賢者の宝探しに決定しました！」

「ちよつとまでよ、これはジャン様が決めることじゃないか」

「おだまりちびっこ。どうせ人の宝を盗ることになるとか迷ってるんでしょ、ジャン。でも資金のない今の私たちに出来ることを考えてみて」

「むう」

私は執務机の上に片膝を乗せると、ジャンの鼻先にびしつと指をつきつけた。

「ジャン、あなたは確かに皆を救う勇者。でも今はこの領主なの。別に正義を捨てるとか言ってるんじゃないの。自分に出来ることをすればいいのよ」

そのまま勢いで机の上に正座する。

そしてかがみこむと、ジャンの頬を両手ではさみ、じつと目を合わせたまま続けた。

「大賢者の封印？そんな偉い人の封印なら意図があつて封じてあるのでしょう。でもそんな意図は私たちに分かる訳ないじゃない。だけれども、その封印をジャンが解くことが出来たならそれも賢者の意図。その後は突き進むしかないんじゃない？」

「ミヤ…」

私の言いたい事がうまく伝わったかな。

ただ、半端な正義感を口に出してほしくなかったただだった。でも、目をみていて分かった。彼は名ばかりの勇者じゃない。

「ごめん、私余計なこと言っちゃったね」

「いや、僕のことを考えてくれてありがとう」

「ミヤ様、レディがジャン様の机の上に乗ってはなりません」

「なんか、ミヤが怖い」

「これが月の御子の本性ですか？」

「や、やっぱりミヤ様とジャン様って…」

外野がうるさい。

と、ふと我に帰ると、まるでキスするようにジャンと私の顔がぎりぎりまで接近してた。

「んきゃ！」

焦って下がろうとして、机の上だったことを忘れてそのままバランスを崩す。

「危ない！」

後ろに座っていたロッドが受け止めてくれ、なんとか無事着地することが出来た。

驚いたせいかジャンのせいなのか、顔が熱く胸のドキドキが治まらない。

こうして、最後はぐだぐだになったが、無事会議は終了した。

ジャンは宝探しに行く事を決め、マルコが戻るまで準備をととのえ、その後洞窟に向かうことになった。

「賢者サリーツァ。調整者か。」

風呂上がりにバルコニーで風にあたりながら、私は1000年以上も生きているという大賢者に思いをはせた。

それだけ生きて世界に干渉してるってことは、魔王のことも知っているはずだ。

そして月の御子のことも。

彼を探して話をきけば、元の世界に戻る方法を知ってるかも、いや手がかりを得られるかもしれない。

彼が調整者であるならば、私が異界の人間というイレギュラーな存在である以上、そのうち会う日がくる気がする。

その時、彼にきくことを書き出しておかなくちや。

肩が冷えてきたので部屋に入り、燭台の火をふきけす。

毎晩闇夜の中で感じる孤独と恐れと不安が、今夜はいつもより強い。私は、枕元にかかった月光草のリースの香りを胸いっぱい吸い込むと、ベッドに入った。

13・サリーツアの宝（後書き）

前回の続きで少し短め。

地味な人達ばかりなので、人外魔境な賢者さんが登場！

といっても本人登場はまだ先の予定ですが。

動きの少ない場面ばかり続いていましたが、次はようやく外で冒険です！

14・大賢者の遺物

「ねえ、ジャン。何か気になることでもあるの？」

「いや、思ったより複雑な封印で手こずってるだけだよ」

サリーツアの残した宝を探すため、洞窟探検の準備をすすめた私たち。

ロツドと共に現地調査に行っていたジャンは、戻ってくると難しい顔をしていた。

「あまり無理したらだめだよ。命は大事！ 賢者のお宝がなくなつて、他の方法をまた皆で考えればいいんだから」

結局、幾度か尋ねるも「なんでもない」とかわされてしまった。

つい先日マルコが戻ってきたので、今日は彼も加え、ジャンとロツドとパットの4人で「調査」に向かった。

ジャンが調査でかける度に私は領主代理として執務机に座り、ベルナンに手渡される書類に目を通してはハンコをついていた。

ほとんど魔王の城に乗り込むようなもののいいでたちだった3人、なんの調査をするんだか。

でも、今日は見送った後からなんだか胸にもやもやしたものがわだかまっている。

いやな予感というか、むしろように心配になるというか。

ハンコを押しながら、朝に見送ったジャン達のことを考えて、ふと気づいた。

装備して調査？

装備して乗り込むってことなんじゃないの？

「あーーーーー！私に黙って抜け駆け！？」

賢者のお宝発見には立ち会いたいから当日は一緒に行くからねとさ

んざん釘を刺していたのに。

危ないからと笑ってとどめられ、じゃあ洞窟の外で待ってるから宝を見つけたら読んでちょうだいと約束したのに。

ベルナンを見ると、私が気づいたことが分かったのか、ふいと目をそらされた。

私は、書類をトントンと揃えて置くと思立った。

「ミヤ様、まだ仕事は終わっていませんよ。どうぞ続けて…」

「知ってたのね？」

「いえその、はい。思ったより現地が危ないからミヤ様を近づけさせるなどご命令なのです」

「では、領主代行として命令するから。すぐに案内を連れて洞窟へ連れていって。なんだかやな予感がするのよ」

「ミヤ様…」

「御子としての勘なの。信じて！もし何もなかったらそれでいいから。それが確認できたらちゃんと代行の仕事をするわ」

御子としての勘というのは言い過ぎだと思ったけど、ベルナンは納得して馬車を用意してくれた。

彼自身が手綱をとり走らせること1時間。

「ミヤ？どうしてここへ」

洞窟の入り口には、ロッドが待機していた。

「先生、ジャン達は？」

「もうすぐ入って一刻くらいいたつけど…」

ロッドの視線の先には、洞窟があった。

だが、紋が刻まれた石の戸で封じられている。

これが、大賢者の遺物…

「どうしてこの入り口が塞がれたままなの？」

「あれは封印であって入り口なんですよ。この岩戸は資格があるものが触れると一時的に入り口を開き通り抜けることが出来るようなんです」

そういつて、ロッドは岩戸をぺちぺちと叩いてみせるが、何も起る様子もない。

自分は戦力にならないのでここで待機組なんですよと言うロッド。

だが、私もと岩戸に触ろうとすると、ロッドに抱きすくめられた。

「ミヤ、君は駄目です」

「どうして？はなしてよ。なんだかちよつとやな感じがするの。私がいかになくちゃ。私なら入れるかもだし…」

「それは月の御子の予感？」

「いや、そういうほどのものじゃないかもしれないけど…」

さつきははつたりの意味で言いきつたが、先に言われると自信ない顔で頷くしかない。

「確かにこの洞窟は危険だ。だがジャン達も覚悟して入っていったのですよ」

「やっぱり危険だと分かってたんだ？どうして…」

私はあることに気がついた。

入り口を塞ぐ石に刻まれ、黒いものを刷り込まれ浮かび上がる紋様。
「私、これ見たことある…」

魔王に生け贄として乗せられた台座の周囲に刻まれた紋様。

そして…

私をこの世界に連れてきた光る腕に刻まれた黒い紋様にひどく似ていた。

「やっぱり気づいてしまいましたか」

「どうということなんです？」

「領主殿はあなたに黙っているようにとおっしゃっていたけど、あなたは月の御子だ。やっぱり知らないままじゃ済ませられないんです」

ロッドは、岩戸のすぐ脇にある自分が座っていた切り株に導き、私を座らせて自分は膝を折った。

「まずは私の話を聞いてください。月の御子は魔王の最後の封印を解く鍵なのはご存知ですよ」

私は、こくりと頷いた。

だから私はその世界に攫われた。

「ではその封印は誰が施したと思いますか？」

「それが賢者なの？」

謎の歯車がひとつカチリと鳴った。

「勇者が倒した魔王がなぜ復活するのか。なぜ毎回封印が施されているのか。なぜ月の御子という鍵を用意するのか。魔王が復活を繰り返す歴史の中でそれは常に議論的でした。

魔王が、賢者が私たちに与える試練だという説もあります。

これはおいしい、世界のことをお教えした上で、ゆっくりとお話していくつもりでした。

実は魔王の城も賢者の遺物だったのです。

領主殿はあなたが生け贄にされた、魔王に捕らえられていた時のことを、賢者の遺物に触れることで思い出させたくないとおっしゃっていました。

ですが、私は別の意味でこのことをお教えするのを躊躇していたのです」

ロッドは一息つくと、空をみあげた。

海岸から森に一步はいりかけたそこは、

梢の上には青い空が広がり、木漏れ日が降り注ぐ。

針葉樹のむせるような香りを時折潮風がけちらす。

「私の説では魔王や月の御子そして勇者は大賢者の駒ではないかとあなたがたの存在は、大賢者の意図、いえ意思そのものだと思っているのです」

「大賢者の意思……」

「ここに来た時、封印を見てそれを確信しました」
そういうと、封印の石を指さす。

「右下に書いてある文字、これは古代ラスタシア文字で書かれています。がきつとあなたなら読めるはずです」

私は目を凝らした。

紋様の一部だと思ってたが、それを文字と認識したその時私は理解することが出来た。

？試練二打ち勝テシ　我が意思ヲ継グ者ヨ　我が鍵ヲ持チ進メ？

「我が意思を継ぐものがジャンてこと？」

「彼が言っていました。魔王を倒す為に、勇者として賢者の遺物の封印をいくつか解いたことがあると。その時にある場所で「我が意思ヲ継グ者」と呼ばれたそうです。魔王討伐を「シレン」と言っていたと。そして私の持論が正しければ……」

「鍵は私ね。やっぱり私も必要なはずなのに……」

「ええ。鍵を持たずに入ることのリスクをあの方達は分かっている行かれたのです」

私は立ち上がると、ロッドの制止する手をすり抜け岩戸の前に立った。

「ミヤ、駄目です」

「ミヤ様危険です」

咎める声を背中に、私は思い切って右手で岩戸の中心に触れた。行ける。

お風呂に張ったお湯の中に手を入れるように、ほのかに熱をもった空気の中を手がするつと抜けた。

私は目をつむり、躊躇なく地面を蹴った。

磯くさい。それに真っ暗。

洞窟の中は光もなく、目が慣れても何も見えない。

勢いで飛び込んだことを軽く後悔しながら手探りで鞆の蓋をあけた。もともと洞窟に入るつもりだったので、機動力の高い厚手布でできた短いワンピースにロープという旅装を出してもらい、ロープの下にしのばせた肩かけ鞆には侍女の夜間巡回用の小さな魔法ランプやロープ、護身用のナイフやお菓子などアウトドアで必要そうなものを詰めていた。

ランプを探り当て点灯したところで、背後にうめき声が聞こえた。

「だっ誰っ!？」

「私ですよ、ミヤ」

灯りを向けると、ひっくりかえって腰を押せているロッドがいた。

「ロッド先生？どうしてついてきたんですか」

「あなたを一人で行かせるわけにはいかないじゃないですか。入り口が閉じる前に飛び込んだんですけど、入ってすぐに滑ってしまっ
て」

「苔が生えてるから滑りやすいみたいですね。おけがはないですか？」

「大丈夫、ちょっと打っただけです。それより……」

ロッドは口の中で詠唱すると、胸に差していたペンに魔法をかけオレンジ色の灯りをともした。ランプよりも広い範囲がぼんやりとした光に包まれ、周囲2メートルほどの視界が開けた。

「これで少しはましに歩けるでしょう。ただし、先に言っておきますが私は攻撃の魔法は使えませんし、腕力ありませんからね」

こうみえても学者ですからと明るく笑うロッドに、私は暗闇への恐怖を少し解きほぐされた。

「私が守ってさしあげます。こうみえてもただの学生ですけど。」

そういいながら、私は鞆から紙袋を取り出した。

「それはなんですか？」

「少し危ないものですよ」

袋いっぱいこの街の市場で買った粗悪な激安小瓶には、油を詰めてきつちり蓋をしてある。

油といっても、灯油に近い揮発性のある地油。

魔導の力が強いこの世界では燃料としてはあまり需要はないようで、精製し汚れ落としや貧しい人達の燃料として安価で売られていた。

これを投げつければ目つぶしになるし、瓶の口に結びつけた紐に火をつけて投げれば多少はダメージを与えられるはず。

映画で見た火炎瓶なイメージで作ったそれが実際に役立つ分からないけれど、戦闘力のない私はこんなことしか出来ない。

怖い。それでも私は進まなければと思った。

瓶の入った袋を鞆の一番取り出しやすいところに置きなおすと、小型の魔法ランプに通した紐を首にかけ、最後にナイフを取り出し右手に握った。

「じゃあ先生、いきますよ」

地図を見た時に、洞窟は短いものだと思っていた。

地上をまっすぐ歩くなら、10分もかからない距離のはずだ。

だけど、すでに10分以上歩くが、岩をアーチ型に削られた一本道は上り下りがあるもののほとんど景色が変わらず、魔物どころかコウモリー一匹でてこない。

「ジャン達、どこへ進んだんでしょうね」

何もない道を進む二人。

心細くなり、最初は灯りを持つロッドの後ろを歩いていたが、今は隣に立ち、ロッドのロープの端をきゅつと握った。

もしかして無限回廊？なんて嫌な単語を想像しながら進んでいくと、奥から光がちらちらとまたたき、かすかに金属の高い音が響いた。

「ジャン！マルコ！パット！」

「ミヤ、一人で行っては駄目です」

私は握っていたロープから手を話すと、全力で走った。
彼を今失えない。

いや、あの仲間を失いたくない。

揺れる灯りはだんだんと大きくなり、灯りが揺れているのではなく
戦いで影が揺れているのだと分かった。

14・大賢者の遺物（後書き）

貧乏脱出大作戦全編です。

おいてけぼりにされたミヤ。

なんとかジャン達と合流です。

15・火竜イティファース

灯りのもとにたどり着くと、道は終わり、高い天井の広い広間のようなところに出た。

足下を照らすように転がるいくつかのランプは、私が首から下げているものよりはるかに強い光を発していた。

この広間は天然のものらしく、薄暗い天上には沢山のつららが下がり、周囲も昔水の浸食を受けた名残か壁や柱はともなめらかな曲線を描いていた。

「ミヤ！どうしてここに？」

「みんな大丈夫？怪我はない？」

「ミヤ、今は戦闘中だ、お前はひっこんでろ」

マルコの声に我に返った私は立ちすくんだ。

ジャン達の前に立ちはだかる大きな黒い影。

いや、その影を落とす巨体を。

トカゲ？恐竜？

「ミヤ、あれはドラゴンです！まさかここに封じられてたなんて」
大型トレーラーほどの大きさで、

全身がごつごつした鱗で覆われ、それが青白い光を花っている。手足に生える死神の釜のような鋭い爪が床の岩にめりこんでいる。

三本の長い尾が独立した生き物のようにふるわれ、ジャン達に遅いかかる。

「キャア」

思わず目を塞ぎそつとあけると、ジャンは白金の剣で跳ね返し、マルコの両手持ちの件は鱗を砕いた。

だが、パットはよけ損ねたのかこちらにはじきとばされぐったりと横たわった。

「パット！」

私はパットに駆け寄ると、彼の足を引きずり通路までひっぱりだし、ロッドに託した。

そしてジャンの背後に駆け寄った。

「邪魔だ、下がってろ！」

ジャンに背中越しにどなりつけられるが、私はひるまない。

ナイフは通用しなさそうなので、かわりに両手に小瓶をにぎりしめた。

火を吐くドラゴンなら、これは効かないかもしれない。

でも、あの三つ目にかかれば目つぶしくらいには…

「どうして私を置いていくのよ」

「それは、ミヤを危ない目にあわせないために」

「違うでしょ、大賢者にかかわらせたくなかったんじゃないの」

ジャンの背中が動揺した。

「魔王の生け贄にされたことが心の傷になってると思ってるでしょ」

ジャンの脳裏に、魔王の城で天窓から中をのぞいた時の光景、異形の魔物達にとり囲まれ彼らを従える魔王が黒い刃を向けたあの光景が蘇った。

時折りおぞましい夢をみる。あの時もし助けだせなかった時の少女の運命を。

そしてミヤもまた、夢を見て辛い声をあげる事があるのを知っていた。

だが、目の前の黒髪の少女は暗い笑顔で首を振った。

「邪魔しないでちょうだい。私はこれから大賢者を探すわ。私が元の世界に戻る残された手がかりなのよ。」

そして、ジャンの横をすりぬけざまに彼にだけ聞こえるようにこうつぶやいた。

「勇者様が魔王を倒してしまったからね」

ジャンの前に立つと、ドラゴンと正面から対峙する格好になった。
青ざめるマルコやパットに下がるように頼み、

私は恐怖にこわばる足に叱咤し、一歩前にすすんだ。

「私は、月の御子のサガワミヤ。賢者サリーツアの鍵よ」

三つの瞳が揃ってぎょろりと見下ろした。

『そなたがカギか』

地面が鳴るような音だが、明らかに言葉だ。

ドラゴンが喋った！

異世界すごいなと感心しながら、会話ができることにほっとした。
そしてジャンを振り返り、彼とドラゴンに笑ってみせる。

「この人の忘れ物を届けにきたの」

『ふむ、イシをすぐモノとカギがソロったか。ならばカギよ、ワレ
のフウをトクがいい』

「封を解く？ おいまして！」

私をとめようと肩をつかむジャンの手をそつとほぐすと、私は手に
した瓶を鞆にしまうとナイフを出し、ドラゴンに近づいた。

ドラゴンが突起や鱗に覆われ、むきだしの鋭い牙が並ぶ顔を私に近
づけた。

荒い鼻息に、私の髪やローブがはためく。

「ミヤっ！！！！」

「このばかオンナ、何やってんだよ」

「ヒトのコよジャマするな」

マルコが剣を振り上げ私にかけ寄ろうとするが、ドラゴンのはの尾に

はねとばされる。

「みんな、大丈夫だからちょっと待ってて」
安心させるように笑顔をふりまくと、私は

指先に刃をあてそつと引く。

朱の染があらわれ、端のところでは球になる。

それをドラゴンに差し出した。

すると歯列が割れ、鮮やかな赤い歯肉の奥から炎のように揺れる細い舌がちろちろと這い出た。

細いといっても、私の太ももほどの幅を持つその先には、見覚えのある黒い紋様が描かれていた。

サリーツアの封印？

私の細い指先に狙いをつけるのが難しいのか、狙いを定めようと舌が左右に揺れる。

「あーもう、まどろっこしい」

私は指を紋様に押しあてた。

すると、いきなりドラゴンの身体が輝き光の洪水が起こった。

あまりの眩しさはまぶたをも通り抜け目に痛みを与え、私たちは悲鳴をあげながら、腕で目を守った。

「もうよいぞ、イシをツぐモノとカギ、そしてヒトのコよ」

私たちが目をあけると、あたりは元の明るさだったが、それに慣れるまでしばらく時間がかかった。

「ミヤ、大丈夫？」

私より先に立ち直ったジャンとマルコは私の前で剣をかまえ、パッ

トが横で私の肩を抱いていた。

私たちの前に立つ竜は先ほどと姿は変わっていないが、薄く発していた白い光は、赤い光に変わっている。

警戒するジャン達に竜は愉快そうに喉を鳴らした。

「剣をしまうがよい。ワレは火竜イティファース。サリーツアの盟友にしてこの地の古き守護者。鍵が開きし今、我は再びこの地の守護者となるう」

私たちはドラゴンを手に入れた。

「うわっ、なんて超ファンタジー的展開！そうか、私はそういう世界にいたんだっけ」

一人でぼけつつこみをする私の頭をポムポムとたたくマルコは、「こんなちっちゃいのに、ドラゴンを手なづけてしまうなんてな」とつぶやく。

横ではパットが「ドラゴンが守護するとはさすがジャン様」とあっけにとられているジャンに抱きつき勇者様大好きモードに入っている。

いやいや、私たちの目的はドラゴンじゃないんだってば。

私はおずおずと、目の前でしっぽの鱗がかけた所をなめている竜に声をかけた。

「あの、ドラゴンさん？」

「そなたは鍵。我の名を、イティファースと呼べ」

「呼びにくいっていうか覚えにくいな。じゃ、イティ。私たち、宝を探しにきたんだけど何か知らない？この先にも道がある？」

「タカラとはナンぞ？ここにいるはワレだけぞ」

「金貨とか宝石があるって聞いたの。ドラゴンてそういうキラキラ

したものの好きなんじゃないの？」

ドラゴンに通じるかは分からないが、上目遣いに甘えた口調で問いかけた。

「ああ、あのがらくたか」

「え？」

「タシカに、ドウゾクのナカにはヒかるものがスきでためこんでいるモノもおるが、ワレはカンシンはない。

ソウイエバ、スアナにシタトキ、ここにがらくたがツんであったが、ジヤマだったのでソウジしてハきだしたわ」

ホレと身体を横にずらすと、背後に岩が縦に避け隙間があらわれ、そこから潮の匂いが強くただよってきた。

その隙間は私がぎりぎり入れる広さで、ランプ灯を向けると1メートルほど先で斜めに暗い水底へと続いていた。

恐らくこの先が、例の岩棚の裂け目なのだろう。

足下を照らせば、水の中へ続く手前に、色石や金貨がいくつか砂の中に埋まっていた。水の中にあるものが揺れる光をかえしてくる。

もとはこの穴に押し込めきれないほど沢山あったが、満ち潮ごとに少しずつ流れ消えるので、時間はかかったが全部なくなつてすつきりしたぞと笑う竜の足下で、私たちはがっくりと膝を落とした。

私たちが洞窟を出るとすっかり日は傾き、ベルナンが呼びつけた侍女達に手伝わせたき火を起こしていたところだった。

「領主様！ご無事でしたか」

「ただいまベルナン」

「ミヤ様もご無事なようで本当によかった」

「心配かけてごめんなさい」

私の姿を見て心からほっとした顔を浮かべるベルナンに、私はしっかり頭を下げて謝罪した。

「ミヤ様！怪我はないですか？怖くなかったですか？」

ラクサは私にとびつき、身体を確かめる。

「大丈夫。危ないことはなかったよ」

「大変！指を怪我されてるじゃないですか」

あの時切った指は、すぐに血はとまったが化膿してはと心配され、マルコが簡単に消毒してくれ布を巻いてくれていた。

竜にはじきとばされたマルコは、軽い打撲と擦り傷だけで骨などには異常もなく、普段の訓練以下のダメージだから心配ないと笑い飛ばしていた。

「その傷は軽い切り傷だけだから心配ないよ」

側にいたパットの面倒そうな口調に、なら心配ないのでしょうが……とほっとしたラクサだったが、パットの血がにじむ膝を目にすると「まあまああ！急いで手当しませんと！早くズボンを脱いでくださいな！」

と、嫌がるパットを押さえつけ、ズボンを脱がせにかかった。

「やめろ、ボクは大丈夫だってば」

「でもミヤ様と違ってまだ手当してませんか？ラクサにおまかせください。弟で見慣れております」

「ボクは慣れてないんだって！イヤー！ジャン様助けて」

こうして、私たちの貧乏脱出大作戦は、ドラゴンと戦うという派手な演出がありながらも、巢のゴミ吐き出し口に残った宝石金貨が少々という結果になった。

だが、腐っても宝。

後日マルコがバロナで鑑定に出したところ、特に希少価値の高い金貨が数枚あったとかで計200万ダル。最低必要な金額の半分くらいにはなることが分かった。

一部の宝石を残して換金されると、さっそく公費にあて、念願の衛兵を数人雇い入れることが出来た。

そして腐ってもドラゴン。

イティファアーサは封印が解けたのに外に出ることが出来、領地の東にある古巢の山、ヌルカ山に移り住むことになった。

休火山であるその山は、緑で覆われた山々の中でぼつりと黒っぽい姿をしており、竜が住む山として人々に恐れ敬われていた。

もともと岩と草ばかりで立ち木が少ない荒れ地の為に、竜がいなくなっても立ち入る者もほとんどいなかった。

なのでイティファアーサが住むことに問題はなかったが、竜が戻ることとで不安にかれる人々がいたり、挑む戦士達が出てくるのは間違いない。

既に、山に戻る為に空を翔るドラゴンの目撃情報がいくつも寄せられていた。

隠せるものでもないしと、ジャンは領主として着任して最初の命を公布した。

『ヌルカ山に、この地の守護者である火竜が戻った。

再びこの地の守護をするとを誓ったので心配は無用。

よって、彼を脅かすことがなきよう領民、領外の者に限らず山の立ち入りを禁ずる。

もしこの禁を破った者は領主であるジャン・ルーク・ヴィ・バルザック、また竜の盟友である月の御子からの制裁が下るだろう』

領内にいくつかの竜の伝説が残っていたが、この地を見限って離れていったという説が多かった為（実際は、大賢者のお供で留守にしていただけだったが、その際に深い傷を受けてしまいあの洞窟で癒しの眠りについていただけらしい）竜の帰還は恐れより喜びで受け止められた。

そして、勇者である領主と月の御子のお墨付きの触れも功を奏した。ミヤは自分の名がでることを嫌がったが、子爵である自分の命だけでは、官位が上の者達の手が伸びた時には守りきれないかもしれないな

い。

その為、王にも対当相対する月の御子との連盟にしたのだ。そのくらい、この世界で竜は畏怖と共に関心と欲望の対象でもあった。

この触れについてはロッドの指摘によるものだった。

大陸全土の歴史の中で、しばしばドラゴンにまつわる事件が起こっていた。

崇められ、時には悪の象徴となり、欲望の対象となり竜狩り人と呼ばれる人々がいた時代もあった。

100年以上この国で姿をみせなかったドラゴンが再び現れた今、争乱の火種にならないように打てる先手は打っておかねばならない。月の御子の名がどこまで抑止力になるかは分からないが…

竜騷動の顛末を王へ送るために書きまとめながら、ロッドはドラゴンになつきじゃれつ黒髪の娘の姿を思い出しくすりと笑った。

火竜に火の攻撃をしかけるところだったよと竜の固い鱗をなでるミヤに、

「ウマソウなニオイがスル」と鼻面を押し付けるイティファース。

「イティ、私は美味しくないよ」

「ワレはヒトはクわぬ。そのヌノキレからのようだ」

「このことかな？」

鞆からとりだした小瓶をイティファースはミヤの手から舌でひったくると、ミヤの頭より大きい歯でカシャンと噛み砕いた。

あたりに地油の油の匂いがただよったかと思うと、イティファースは天上を向いて火の息を掃き出す。

高温でガラスは炎を青く染めた。

驚いて腰を抜かすパットやロッドにドラゴンは喉を鳴らして笑いながら、上機嫌にもっとくれとねだる。

地油はドラゴンにとって酒のようなもの。

そうロッドが説明すると、ミヤは「お手」「おあずけ」などと言いながら、無邪気にいかつい口に瓶を投げ込んでいた。

それに喜んだイティファースは、

「カギよ、ワレがこの地のシュゴであるとオナじく、おヌシのシュゴシャにもなるう。だからたまにミヤゲをタノむ」

そういつて、自分の身体に生える鱗の小さい二片をはがし、ジャンとミヤに守護の証だと渡した。

『――今回の件を通し、月の御子の力は英知を授けるだけでなく、大賢者に縁を持つ者だと判った。

彼女も火竜も我が国を好意で守護する存在であり、また両者を国に従わせ礎となる義務を課した時、我らはその守護を失うと考察する

――』

今回の顛末を必要最低限に記したた最後にそう所感を書き添えると、ロッドは今月の御子の英知、パットお気に入り「グラタン」と、ロッドが本を読みながら食べれると絶賛する「薄切りパンのサンドイッチ」のレシピと一緒に封筒に入れた。

封をし、赤い蠟をたらすと陛下の手元に直接届けられる証となる印璽を押す。

こうして2日後に、エソニア王ダルド3世は巷を騒がす国内ドラゴン出現騒動の真相を、領主の報告書と連絡係からの2通の手紙で知ることになった。

竜が捨てた国と周辺国で密かに揶揄されていた為に、王はドラゴンの復活を心から喜んだ。

また噂のドラゴンの宝物も、彼らの立場を強めるどころか領内の経済を立て直すにもほど遠い量だったことに安堵したが、竜が領地と

月の御子を守護するものになったことは王にとって新たな脅威だ。英知は手にしたいが、身の内に魔王の魔力を持つ少女を飼う不安。さらに彼女を守護するというドラゴンまで加わり、大賢者まで絡んでいるという。

「これは、またあの方に相談せねばならぬか」

王は重々しくため息をつくと、人払いしていた書斎を出、御子の英知である「グラタン」なるものが供される夕餉の宴に向かった。

15・火竜イティファース（後書き）

ドラゴンまで登場して盛り上がったものの、肝心のドラゴンの宝で
の一発逆転はならず。

まだ貧乏脱出大作戦は続きます。

16・月夜の二人

今夜の月は、いつもに増して青い。

星達もそれに同調するように青白く瞬いている。

私は寝付けず、ベッドを出るとは出しのまま部屋のバルコニーの手すりにもたれ、空を眺めていた。

波の音は届かないが、潮の香りを運んでくる風が髪をゆらす。

そろそろ首もとが暑いから、ポニーテールにでもしようかな。

夏はまだこれからというのに、元の世界で7月くらいの気温。

夜でも、今着ているような薄い木綿のワンピース1枚でそこそ快適に過ごせる。

この国では、女性は身分が高いほど足の露出は低いほうがいいとされている。

パーティーのドレスなどは中世ヨーロッパさながらの裾をひきずるものばかり。

私は、普段くるぶし上の長さのロングスカートかワンピースを着せられていた。

元の世界はパンツか膝上のスカートばかりだったので、動きにくいし暑くるしいしで未だになじめずにいた。

旅の途中で間に合わせで買った、街娘用の服は膝下丈だったが、館で着ようとすると淑女としては短すぎると、日頃の行儀作法も含めグリーンやベルナンに怒られてしまった。

やっぱり、庶民育ちの私にはこういう格式ばった生活はなかなか慣れるものではない。

「魔王に勇者にドラゴンに賢者か。王様もいたな。剣に魔法、次はお姫様とか王子様が出てくるのかな」

口にすると、逆にリアリティがなくて笑ってしまう。

この1月で、自分の前に想像の産物でしかなかったものが現れた。

本当ならもつとパニックになって泣きわめいたり、自我崩壊とか起こしたほうが女の子らしいのかな。

元の世界に戻りたいという切実な思い。

今の私の願いはこれだけ。

だけど、元の世界にもどれば、またしがらみに手足をとられ自分の抱える問題とにらめっこの日々。

そういえばもう長い間、ただ純粹に「今を楽しむ」ということがなかったつけ。

常に周囲に、友達に、親に気を使い、心を配っていたが、最近は自分のことをまず考えるようになったように思う。

父と向き合う時は、いつも父の威圧的な空気に飲まれてしまい最後まで自分を通すことが出来なかった私が、

この国に父より小物とはいえ一国の国王に偉そうな態度をとってしまった。

振り返ると顔がひきつるが、それでも清々しさのほうに勝っていた。元の世界で停滞していた自分が、異世界に飛ばされて、なにかひとつふっきれた気がする。

今なら、もう一度両親と将来のことを話せるかもな。

両親と話がしたい。

そう思ったところで、郷愁の念で胸がいつぱいになった。

急に目頭があつくなり涙がこぼれた。

「くふっ……」

嗚咽をこらし、これ以上涙がでないように月を見上げる。

「ミヤ？」

この上ないタイミングで、私に声をかける者がいた。

みると、ジャンが4部屋先の自室のバルコニーからこちらをみていた。

驚いて、涙を隠すことも忘れて顔を向けた私を見た彼は、いきなり隣室のバルコニーに飛び移り、そのままバルコニーをつたって私の

もとへやってきた。

そしていきなり抱きしめた。

「えっ、やだ、はなして」

「いいから黙って」

「はなしてっば、やあだ…」

「駄目だ、離さない」

全力でもがいても、ジャンの腕はぴくりとも緩まない。

深夜で皆が寝ているし、こんな姿を見られたくないので大声も出せない。

背の高いジャンの腕の中で石けんに混じった彼の甘い匂いと体温を感じ、私の鼓動はどんどん早くなった。

そして、もともと全開になってた涙腺は、再び涙をこぼしはじめ、さつきはこらえていた嗚咽が響く。

ジャンは抱きしめる腕の力をそつとゆるめ、片手を離し私の頭をやさしく撫でた。

その手があまりにもやさしくて、私は自分からジャンにしがみつikirkan 思う存分波だを流した。

「悪い夢でもみたのか？」

気が済むまで泣いた私を、ジャンはバルコニーに置いている椅子に座り膝に乗せた。

もちろん最初は降ろしてくれと暴れたが、すぐにあきらめた。

今夜のジャンは、抵抗を許してくれない。

そして私も、心から嫌がらない。

今だけ、この腕に甘えたいと思った。

「うっん、最近は見なくなっただな。月光草のリースのお陰かな」

「あれ、まだかけてるんだ？」

ジャンが微妙な顔をしたので、私はくすりと笑う。

「部屋に男の人入れないから大丈夫。それより、魔除けの効果を期待してるの。でも、私の中にある魔力は「魔」に入らないのかな？」

「たぶん、魔除けの魔は「悪意」のことだと思うよ。魔物といっても全部が悪いわけじゃない。ペットのように懐く魔物もいれば、守り神として崇められるドラゴンだって魔物なんだよ」

「え、ドラゴンも魔物なの？」

「ああ。魔物っていうのは、魔を宿した者ではなく、魔力を持つ生物だって昔母に教えてもらった」

「ジャンのお母さん？」

「僕の母は、ここよりもっと南の大陸に住む南方と国の男の間に生まれた人でね。」

ミヤと同じ黒髪の綺麗な人だったんだ。

南方人は黒髪に黒い瞳そして褐色の肌をしてるんだ。

僕はその血を継いでるから、ミヤと一緒になんだ。

いつも母は、僕におばあさまから聞いた南の国の物語を聞かせてくれてたよ」

「今お母さんは？」

「僕が9つの時に病気で亡くなったんだ」

「そっか。ごめんなさい」

「いいんだ。だから家族と離れる辛さや寂しさは少しはわかるつもりだよ。だから一人で我慢しないで」

「ジャン……」

「時々、夜中にこのバルコニーで月を見てたのを知ってたんだ。でも、今夜は泣いてたから……」

こんなこととしてゴメンと、彼は小さく謝った。

私はそんなことないと言をふる。

「月を見ると、家族を思い出すの。元の世界に帰りたいの。家に帰りたいの」

「そっか、ミヤには待つてる人がいるものな」

私はどうなっているのだろう。あちらの世界はこの世界と同じように時間がたってるのかな。

これだけ時間がたつてれば、誘拐ではなく家出だと思われてるんだ

ろくな。

お母さんも、あのお父さんも心配してるよね。

出尽くしたと思ったのに、腫れぼったく熱を持った頬にほろりと一筋の涙が流れる。

それをみたジャンは、すっと顔を寄せると、唇でそっとぬぐった。

「!？」

何が起こったかわからずきょとした私をジャンはじっと見つめ、再び顔を近づけた。

間近で見る彼の顔。

年上なのに、童顔で気安い存在の彼は、今夜は大人の男の顔をして少し怖い。

でも、閉じられた目をふちどるまつげは相変わらず長くて濃く、南方人って南米系に似てるのかな、なんて気を取られているうちに、ジャンの暖かい吐息を唇で感じた。

やばい、もう触れちゃう？

どうしよう。

心の中は迷っていたはずなのに、答えは出てないのに私の右手は動いていた。

グーに握った拳が彼の頬を貫く。

いや、ジャンの頬に当たった手のひらが乾いた音をたてた。

「それは、イヤ」

「ごめんなさい」

「ちようしのりすぎ」

「許してください」

「うむ許そう」

月を背に、少し寂しそうに微笑むジャン。

さっきの紙一重で感じた彼の熱を思い出し、私は顔を赤らめる。
微妙な空気に絶えられなくなった私は、ジャンの寝間着のシャツで
鼻をかんでやった。

「これはないだろ、ミヤ」
「ふふんだ」

なさけない声をだすジャンの膝から降りると、私はバルコニーの手
すりに座った。

「二度目だな」
「ん？」

「ミヤになぐられたの」

「私も人に手をあげたのは2度目よ」

何故かジャンが嬉しそうな顔をしている。

「何故喜ぶ。変態なの？」

「ちがうよ。そうだ、これだけはどうしても聞いておきたかったん
だ」

私はジャンが口にするより先に言った。

「一度目のことでしょ？」

「うん。僕、ミヤの気に障ることを何かした？」

「…」

「やつぱりどうしても気になるんだ。よっぽどのがあったんじ
やないかって。あの時のパンチは今のとは全然違った」

「あれは本気の本気だったしね」

「やつぱり」

「でも言いたくない」

「教えてくれるまで今夜は寝かさない」

その言い方は…私は身構えた。

「いや、違うんだ。ごめん。」

「ばか」

「はい」

そのままうやむやにしておもうと思った。けれど、ジャンは許してくれなかった。

強引に私を手すりから抱き上げると、もがく私をかついで寝台へと運んだ。

「な、なんでここ!？」

「いや、そろそろ限界だからさ、その格好」

「ただの寝間着だよ？」

ジャンはため息をつく。

「ミヤの世界ってどういう世界だったんだよ。普通レディは男性にこんな布1枚の姿は見せないものなんだ」

この着心地の良いやわらかい寝間着は、月明かりの中で包む身体のラインを浮き上がらせ、濡れたような黒い髪を映えさせ、それがジャンの目には扇情的に映っていたことを私は気づいていなかった。

「1枚って、ちゃんと下着も着てるよ？」

下着という言葉に、ジャンが真っ赤になる。

「男に下着とか言うんじゃない。ともかく、そんな薄着で男の前にいるのは誘ってるんじゃないんだからな」

「誘ってる？私が？」

ジャンは苦笑しながら上掛けをはぎとると、私の肩にかけた。

なんだ、襲うんじゃないかって隠すためだったのね。

私は緊張を解いた。

夏は、いつもタンクトップやキャミに短パン姿が部屋着で寝間着なだけで。ここではそれがセクシー下着みたいに思われちゃうのかな？

「めんどくさいな。元の世界だと、こんなの全然露出少ないんだけどな。」

「なんて破廉恥でうれしい、いやけしからん！」

ジャンさん、あなた何か想像しましたね？口元がゆるんで鼻の下伸びてますよ？

「じゃ、私はそろそろ寝るわ、おやすみ」

「ここらまちなさい」

手をひらひら振ってもそもそとベッドに横になろうと下私を、ジャンは無理矢理座らせた。

「さ、話を元に戻そう」

「ちっ」

「で、俺が何をしたんだ？遠慮なく教えてくれ」

私は、ジャンを見つめた。

やさしくて、強くて、ちょっとかわいげがあつて、色々不憫な勇者様。

「私は、ジャンのこと嫌いじゃないよ」

「俺はミヤのこと好きだよ」

どういう好きよ、とつつこみたいところだけど今はスルーして続ける。

「いい人だし、私のことをここまで助けてくれた。信頼してるし、大事だと思う。」

「だけど、どうしても許せないことがあるんだ」

「なんだ？」

私はためらった。

でも、もうここですうしかない。

「あの時その手で魔王を倒したことよ。どうして彼を殺したの？」

16・月夜の二人（後書き）

新章に入りました。

しよっぱなから、勇者様ちよい甘モードでしたが、さっそくがつんといきます。

次回はようやくのプロローグの伏線回収です。

17・魔王と魔

「ミヤ、あれは魔王だ。僕は魔王が倒すのが使命だったんだよ」

魔王と勇者は、どの物語でも宿命の敵同士だ。

だから、言っても仕方が無いと思っていた。

でも、もう今のままでは無理だと悟った。

私は、何度も胸の内ですばやいた言葉を投げる。

「何故魔王を殺したの？」

「魔王は国を乱した。民を襲って村を焼き尽くし魔物を率いて民を脅かした。その民を守り国を守るのが僕の使命だ。その為に命を捧げる覚悟で挑んだんだ」

「彼はただ魔王だっただけよ」

「彼？ミヤ、君は魔王に肩入れするの？」

私は、無言で目を伏せた。

「奴は君を殺すところだったんだぞ？生け贄にするところだったんだぞ？」

「ちがう」

「僕があの方に飛び込んだ時、君には刃が向けられてたんだぞ？その剣を持っていたのは魔王だぞ？」

ジャンは、しぼりだすように叫ぶと、私の肩をつかむと強くゆすつた。

私が痛みにも声をあげると、彼は手を離れたがそのまま握られた拳は震えていた。

「魔王はそんなことする人じゃないの。あそこに捕らえられている間、彼は猛る魔物達を押さえていたのをみてた。だけど封印で統べる魔物を制御できなくて、力が完全に戻れば統べる事が出来るのにつてくやしがつてたのよ。だから封印を解かなきゃいけなかったの」

ジャンは、冷めた目で私を見た。

「君はいいように説得されて、生け贄になるのを承諾したのか」

「私は生け贄なんかじゃないの」

「ミヤの世界では知らないけど、この世界では命を奪って対価を得ることを生け贄っていうんだよ」

「知ってるわ。私の世界でもずっと昔そいう風習が沢山あったものの」

「じゃあ、君は魔王のなんなんだ。生け贄でなければあの儀式はなんだったんだ」

「あれは命をとるんじゃないで、血が少し必要だったの」

「うそだ！あれは魔王だ。血だけで終わるわけがないじゃないか」

「ジャン、あなたはさっき言ったわ。魔物は魔力を持つ生き物だつて。じゃあ魔王はなんなの。魔力を持つ生き物の王じゃないの？魔王は悪じゃないと駄目なの？」

ジャンは言葉に詰まった。

「この間の、イティの封印を解いた時のことを覚えてるよね」

「ああ、血をやつの封印紋に触れて封印を解いてたな」

「どうして私がやり方を知ってたと思う？」

「まさか…」

「彼は言ったわ。自分の封印を解くために血をくれと。だけど魔王の封印はただ血を与えるだけじゃだめだった。蝕で月が完全に消えたあの時、あの台の上で血を長洲ことで封印を解き力が取り戻せるそれが、あの時あの場所だったの」

「どうしてあの場で殺されないという確信があったんだ？」

私は、唇を噛み締めた。

これを口にしたら、この人はどんな顔をするだろう。

「…約束したから」

「何を？」

「あの人は、儀式が終わって力を取り戻したら、元の世界に戻して

くれるって言ったのよ」

「それを対価に血を与えようとしたのか？」

「なんかその言い方むかつく。まるで悪の魔王を私欲の為に手助けしたみたいじゃない」

何が違うのか。ジャンの顔が語る。

私は悔しくて涙をにじませ叫んだ。

「私は魔王が、彼が悪だなんてこれっぽっちも思っていないわ。彼はとってもやさしかった。私にだけじゃなく配下の魔物達にもいい王だったわ。」

彼は魔物達が穏やかにくらせるように国を守りたかっただけなのに。その為に私が異世界に連れてくることになったことを、心から悔やんでたわ。

だけど、彼にはどうしようもなかったの。

返したくても、私を元の世界に戻すには完全な魔力を手に入れなければならなかったのよ。

彼が何をしたっていうの！どうして彼を殺したのよ！あなたが殺さなければ今も私がここにいなかったのに！私を元の世界に戻してよ！！」

「奴は、魔王はボクのパパとママとマリアーヌを殺した」

「パット？」

私たちは我を忘れ、すっかり大声を出していたらしい。

いつのまにかドアが開き、パットが青い顔をして立っていた。

「お前、今の話を聞いてたのか？」

ジャンの問いはパットの耳に入らない。

私を燃えるような瞳でみつめ、歩み寄った。

「あいつらは、ロンやサムエルも、メルおばさんもヤンさんやハンス先生を殺した。」

僕の村の皆を殺して全てを焼いたんだ。

あいつがいいやつ？そんなわけないだろ。僕の村だけじゃない、いくつもの村が魔王のせいで消えたんだ！」

魔王の手によっていくつもの村が襲われ全滅したと聞いた。

パットはそんな村の唯一の生き残りの孤児で、討伐隊に加わったのはマルコから聞いて知っていた。

でも、ここでひるむわけにはいかなかった。

「それは勘違いよ。魔王がそんなことするわけない」

「おい、ミヤやめろ……」

「魔物が襲ったのを見たの？」

答えを知ってて尋ねた。

パットはその時を見ていない。村が教われた日まで1週間、親類の手伝いで隣村に止まっていたから。

「あの日、僕が村に戻った時まだ村は燃えてる途中で、物が燃える匂いと人が燃える匂いで満ちてたよ。

まだ死んだ人達は燃えきってなくて、首や手足がばらばらになってそこらじゅうに落ちて煙をあげてた。

とうさん、かあさんもだ。

今でもあの時のことは全部覚えてる。

マリアンヌは、マリアンヌはお腹を割かれてた。一週間前に僕がブレゼントした空色のリボンをつけたまま血まみれになって死んだんだ」

あまりに凄惨な光景の中を一人安心して歩いていたパット。もう涙の出ない乾いた瞳が泣いていた。

「こんなこと、魔王以外の誰がするんだ」

「人しかいないわ」

そう言った瞬間、私の頬が鳴った。

ジャンがパットの腕を押さえる。

私はやめなかった。

「魔王が、魔物達がやったところをみたの？姿をみたの？」

「人間があんな残酷なことをするものか。ひどいことをするものか」

「するわ」

「おい、ミヤそのへんでやめろ」

「やだ。私は人が殺されるのを見た事はないわ。まわりにそんな人もいなかった。

只知道ってるよ。人間がどんな残酷なことをするかって。魔は人の心にこそ宿るのよ。

彼の中には魔はなかった。人に向けるのは憎しみじゃない、悲しみばかりだったのよ。」

私は、魔王のことを、城で見たことを話聞かせた。

銀色の髪の魔王は、時間があればいつも私の許を訪れた。

最初は、冷淡な声に感情の乏しい表情から、最初二人きりは居心地が悪かった。

だけど、すぐに気づいた。

感情を押さえてるようにみえて、瞳の中は違った。

無口だったが、私の話を興味深く聞いてくれ、その目は驚きや笑いに踊っていた。

怖い夢を見て目が覚めれば、彼が枕元でやさしく髪を撫でてくれた。いつもひんやりとした手だったけれど、私はその手が好きだった。

時々馬鹿な質問をすると、あきれるのではなく困った顔になるのが好きだった。

そう、私は彼が、魔王が好きだった。

だが、儀式の数日前から、彼は忙しく私の所に来れない日が続いた。そんな時は、彼の配下の魔物が食事を届けたり世話をしてくれた。

豹のような頭で二本足で歩く黒い生き物。

鋭い牙と長い角を持つ異形の者は、ゴウラと名乗った。

魔王に言いつけられたのか、怯える私に彼はにこつと笑ってみせた。本人はそのつもりだったそうだが、私には「とって食くぞ」という威嚇にしかみえずひたすら固まっていた。

次第に見た目に慣れてくると、魔王という共通の話題で打ち解けた。ゴウラは、魔王がどんなに魔物達から慕われているか、良き王であるかを教えてくれた。

だが、彼の力はまだ完全ではない為、彼が抑えきれない魔物がいること。

封印を溶いて、魔物達は魔王に守られ幸せに暮らすのが悲願だということ。

だが、そんな彼らを邪魔するものたちがいた。

それは人間だった。

魔物の住む地は人が住めない地だったが、同時に人が望むものを持つ地だった。

金鉱、宝石鉱、癒しの泉、地油、不老不死をもたらすと言われる生物、様々な効力を持つ草花、巨大な木々……

様々な資源が手つかずで残っていた。

それらは魔物にとって不要なもので、ただそこが安住の地であるだけでよかったのに。

人間が欲のために魔物の住む地に侵入し脅かしたのだ。

魔物達は憤り、魔王は鎮静化に奔走した。

力が完全であれば、人間が立ち入らぬよう国全体に封をほどこすことが出来るのに。

だが、いくら月の御子が手にあるとも、蝕の時を待つ他はない。

魔王は魔物達をなだめ、一匹、一匹と人間にほふられていく者達を悼み悲しんだ。

そしてあの日、魔物達は歓喜した。
とうとう、自分たちの安寧の時がやってくると。
魔王が力を手に入れてくれると。

「馬鹿な。魔王は魔物を操り人を滅ぼそうとしていたんだ」
「ジャン様はそれを防いでくれたんだぞ」

私はゆっくり首を振った。

「滅ぼされた村で魔物の死体や痕跡はみつかったの？」

魔物の仕業なら、何か原因があるはずよ？そういうきっかけはあったの？

それに――

少しためらったが、パットの目を見ながら続ける。

「人を殺してバラバラにするのは人間にも出来るわ。私の世界では、戦争中も、平和になってもそういう事件が絶えずあるわ。」

そして、事件の後に現場に火を付けるのは都合の悪い痕跡を消せるからよ」

毎日、新聞やテレビで報じられる陰惨な事件。
悪意以外の何がそんなことをさせるだろうか。

目の前であの人が殺された時から、
今まで胸の中に詰め込んで蓋をしていた。

異世界でただ一人。

元の世界に戻るのに、目の前にいる人達を失うわけにはいかなかった。

前に進むしかないから。

家に帰れたらそれでいい。

この世界がどうなるうが関係ない。

魔物と人がどうなるうと。

毎晩、彼が切られた時の夢を見る。

悲しみと心残り、そして約束を果たせなかった謝罪のこもった眼差しが、鮮血に塗りつぶされていく夢を。

その蓋を開けた所でどうなるものでもなかったのに。皆が傷つくことも判ってたのに。

ジャンはパットの肩抱くと、私を一瞥し部屋を出た。

17・魔王と魔（後書き）

ようやくプロローグにつながりました。

長かった。

でも、無事ここまで運ぶことができたほっとしました。

最近どんどん読んでくださる方が増えて、感激してます。

ありがとうございます。

まだここからが佳境にはいっていきませんが、これからもよろしくお願ひします。

18・吟遊詩人デビュー

明け方、私はそつと身支度を始めた。

前回の太賢者の遺物の洞窟へ入った時のように必要そうなものを布かばんにどんどんほおりこむ。

自分のお金を持っていないので、城から持ち帰ったドレスに散りばめられた小さい宝石をほどこき、小分けにして包む。

ひとつを鞆に入れ、残りは布でまとめて身体に結びつけた。

国王から発行された身分証明書のような小さい石の棒とイティファ―サにもらった竜の鱗は、革ひもをつけてもらっていたので、首に下げて服の中に押し込むことにする。

本当は、男装するつもりだった。

マルコが、女の一人旅はほとんどないと言っていた。

旅慣れていない女はかどわかされ、乱暴されることがあると。

だけど、男装に必要なズボンがない。

かといって、今からそれらしいものを縫ったり調達する時間もない。

仕方が無く、そのままワンピースを着て、上からローブを着る。

ランプの光に照らされた自分を姿見ごしに見て苦笑した。

ひどい格好。

まだ顔の腫れはとれず、頬に張りついた髪の毛そのままだ。

旅慣れてるように見せるにはどうすればいいか。

この国で黒髪はとても目立つ。

かといって、この暑いのにフードですっぱり隠すのは怪しまれてしまう。

しばらく自分の姿を見ながら悩んでいた私は、チェストにかけてあった深い青に細かい模様の入ったオリエンタルな布地をナイフで裂き、頭にぐるぐると巻き付けてみた。

黒髪と判るが、それより巻いている布の印象が強い。

更にその布を同じ幅に全部裂いてしまい、首、両手首に巻く。
余ったものは鞆へ入れた。

机の中にしまっておいた小さい豎琴を取り出すと、革ひもで首から下げるようにした。

ハーピアと呼ばれるB5のノートほどの大きさのそれは、木で出来ていて軽い。

出せる音はシンプルで少ないが、音がよく響き印象的だ。

ラクサに少し教えてもらったばかりで曲をかなでることはできないが、簡単なコードをつまびくだけなら出来た。

この世界に来て着せられた服はどれもコスプレみたいと思っていたので、今更抵抗感のない自分に苦笑する。

設定は、異国の吟遊詩人の女の一人旅。

これなら旅慣れているように見えるし、こんな奇抜な痛い格好で目立つてると、逆に手が出しにくいはず。

それに吟遊詩人ならこの旅に都合がいいはず。

私はペンにインクをつけると、

「昨夜はごめんなさい。しばらく旅に出ます、心配しないでください。」

とだけ書いた。

もちろん日本語だ。

誰も読めるわけないと分かっているけど書かずにはいらなかった。

今夜の騒ぎは皆に聞こえてたはず。

魔王のことが好きだったって告白も。

ジャンやパットの言うことはもちろん理解できる。

パットの抱える苦しみも痛いほど分かった。

だけどひたかくしにしていた私の中のものを曝け出した今、今までと同じに過ごすことはできない。

明日からどんな顔をして皆に会えばいいか分からない。

この自分の気持ち、魔王を信じている気持ちを変えることが出来ないから。

だから自分で出来ることをして、はじめをつけようと思った。

そして出来るなら、私はまたここに、ジャンやみんなのところに帰ってきたい。

バルコニーに出ると、すぐ側まで張り出した太い枝を伝い、幹に張り付いた蔦にぶらさがるように降りた。

街道へ向い歩き出した私は、足を進めながら館を振り返った。空がゆつくりと白み始めたが、まだ館は眠っていた。

こんなに歩いたのはどのくらいぶりだろう。

既に太陽は空の真上にあがっている。

街道にたどり着いた私は、マドカナル領のバロナへと向かった。

以前、地図を見た時にマドカナルの北、ドストから伸びる大きな半島一帯が魔王の地だった。

パットはドストの半島近くの村だと前に言っていた。

そこに行けば、真実が分かるはず。

履いているサンダルは、慣れてはいるものの長い距離を歩くのにはあまり向いておらず、いつのまにか靴連れが出来てしまった。

じんと痛む足を気力で動かし少しでも早くこの領を出ようと進むが、最初から無理をして後が続かなくても困ると休憩をとることにした。

街道沿いに流れる小川があり、その冷たい水で喉を潤し顔を洗った。そしてサンダルを脱ぐとそっと足をひたす。

冷たい水に痛みが和らぎ、足の疲れも少し癒えた。

裸足でサンダルはやはり足に良くない。

私は布を取り出すと足の皮帯が当たるところに布を巻いた。これで少しは楽になるはず。

狙い通り、それ以上靴連れが起こる事なく、体力の限界と正面から向き合いながら進んでいった。

日が落ちる頃に、マツカという村へたどり着いた。

宿屋を見つけて、主人のおじさんに宿代を引いて両替してもらえないかと宝石を一粒差し出した。

「お嬢さん、すまんの。うちは田舎の宿屋やけ渡せる持ち合わせがないんじゃないわ」

「これって、だいたいいくらぐらいだと思いますか？」

「わしは、目利きじゃないからのう」

「私もそうなんですよ。ただおじさん商売上手そうだもん。勘でいいから言ってみてください」

「そうか？うーん、昔女房にやった指輪についてた石は、うんと小さくて2万ダルだったが、これは透き通つとるし大きめだから4万ダルくらいじゃないかの」

村の宿屋の一番高い部屋が朝食付きで3000ダルだ。物価は推して知るべしだ。

あのドレス、いった総額いくらくらいしたんだろう。

苦笑しながら、それでは馬小屋でもいいので屋根のあるところをお借りできませんかと頼んだ。

すると宝石を持っていながら現金がないということで逆に不審がられた。

私は考えておいた、南方から来た吟遊詩人でこの国に入って追いはぎにあい財布を盗まれてという話をした。

「以前、貴人から頂いた宝石を隠し持っていたので、それでまかなえればと思ったのです」

「それは困りんさったの。そうだ、ちょっと待ってな」

おじさんはばたばたと宿屋とつながる隣の食堂へ向かった。そして一人の男を連れて戻ってきた。

今夜宿に泊まっている、常連でバロナの商人だという。

穏やかな顔をした男で、濃い茶の髪に白いものが混じっている中年の男だ。

清潔感のある身なりと、怪しげな私にも嫌みのない丁重な物腰で、好感が持てた。

私が差し出す石をみると、石の鑑定は専門ではないのでと断りを入れながら5万ダルと鑑定してくれた。

手持ちが4万ダルしかないが向かう方向が同じだし、手付けで2万ダル渡して残りをバロナの店に戻って払わせてもらえないかと打診され、あっさり交渉成立した。

もし足下を見られ安い値を言われたとしても、今は現金が必要なのでそこは目をつむることにした。

しかも、一緒に馬車に乗せてくれるという。

半金の2万ダルをもらうと証書と交換で宝石を渡した私は、男に連れられて隣の食堂と一緒に食事をする事になった。

食堂は、村の独り者の男や宿の客でにぎわっていた。

中座していた男の席には、同行者という彼の店の者達がいた。

主人の男はイーザ・ダコダ。

バロナでダコダ商会という店を構え、薬草を売買しているのだという。

連れの小柄な男はマグ。大柄な男はタツタという。大柄といってもマルコと違いずんぐりとした体型だ。

三人ともきさくに私を迎え入れてくれた。

私は、改めて南方の国からきた吟遊詩人のサーワと名乗った。

最初サガワと名乗ったが、発音が難しいらしく聞き返されたので、サーワにしておいた。

イーザは南方に縁があるらしく、知り合いに似た名の者がいますよなどと言われ、ほっとする。

バロナの旅のよま話や、マグやタツタの体験したハプニング談など、とても楽しい食事の時間を過ごした。皆が食後酒を飲み始めた。

村の特産地鶏のもも肉1本を、下味につけ込みをまるごと炭火で焼き上げた名物料理を始め、素朴ながらも美味しい料理に舌鼓を打った私は、

満腹と疲れて少しぼうつとしていた。

そこに、イーザが願いがあるのですがと申し出た。

「はいはい、なんでしょう？」

「せっかくのご縁ですから、何か一曲お聞かせいただけませんか？」

「え、一曲」

「ええ、あなたのお国のものでいいのでぜひ」

そういえば、私は吟遊詩人というふれこみだったんだ。

私は首から下げた琴をみた。

ほどよく酔った、マグとタツタが声をあげて手を打ち、それを聞いた周囲も期待の声をあげた。

食堂のおかみさんが手慣れた様子で木箱をいくつか並べ、その上に椅子を置いて私を招いた。

コスプレだけで済むとは思ってなかったはずよ。

今更背に腹はかえられない。

頭を抱える暇もなく、私は客達の暖かい手に送られて、あっというまに即席舞台の上へあげられた。

恥ずかしくて真っ赤になる顔を見られないように伏せ、首からハーピアを外し抱えた。

吟遊詩人といってもまだかけだしなのでよろしくとはにかみながら挨拶し、深呼吸をし気持ちを落ち着かせる。

人前で歌うなんて、音楽の授業がカラオケでしかないのに、いきなり総勢30人ほどの酔っぱらいの前での吟遊詩人デビュー。歩いてるうちにレパートリーを考えておけばよかった。

3つの弦を、ゆっくり順にはじく。
よし、ちゃんと音を出せた。

それをまた同じ順で繰り返し返していく。

ゆっくりと、ゆっくりとペースをつくる。

そして何度目かの最初の音で、私は歌い始めた。

私が選んだ曲は、演歌だった。

演歌なんて、紅白歌合戦や歌番組で耳にした曲しか知らないけれど、歌が上手なわけじゃないから、インパクトでごまかすしかない。

しかも日本語であれば適当でもいいが、皆が理解できる言葉なので歌詞の内容も気にしないといけない。

それで、大人の男の人ばかりのこの場にはこれだと思った。

場末の酒場を舞台にした、男と女のせつない恋歌。

たまに鼻歌で歌うくらいに馴染んでいるメロディーだけど、歌詞の怪しいところは即興でごまかす。

ゆっくり、ゆっくり、感情を込めるように歌い上げる。

最後にこぶしをきかせまくって終わると、その後に訪れた一瞬の沈黙にひやりとするが、その後に大きな拍手と歓声が食堂の中に響いた。

私は、スカートをちょいとつまんで一礼すると、照れた顔で席に戻っていった。

「いやあ、サーワさん素晴らしかったですよ」

「ありがとうございます。楽器は苦手なので緊張しちゃいました」

「吟遊詩人というと、王侯貴族や夢物語を歌った奇麗なものばかりかと思ったら、こんな情念のこもった庶民の歌語りをお持ちなのですね。たいしたもんだ」

「いえ、まだかけだしで……」

イーザの賞賛を受けながらも心の中では、「吟遊詩人て、歌を歌うんじゃなくて物語を歌うのか」と自分の勘違いに盛大に冷や汗をかいていた。

その後、ひっきりなしにかかるリクエストの声に明日の朝早いからと断り、宿屋に用意してもらった部屋へ戻った。

この世界で宿屋に泊まったことは何度があったけど、一人で泊まるのはじめてだなと気づいた。

ベッドと椅子と小さい机が所狭しと並んだ小さい部屋なのに、がらんとしてるように感じる。

心細さを振り切るように、私はお湯をもらって運び、長時間歩き砂埃にまみれた身体を拭いた。

残り湯で下着や足に巻いていた布を洗って部屋の上にかけられたカーペットに干すと、私はすぐに布団へもぐりこんだ。

とても疲れているので朝が不安だとチップを弾み、朝食の前におじさんにドアを叩いてもらうことになっているので寝坊の心配もない。私は、横になった途端、深い眠りに落ちた。

18・吟遊詩人デビュー（後書き）

パットとジャンと自分の為に、真実を知る旅（家出）に出たミヤ。
コスプレな吟遊詩人のつもりが、本気で歌うはめに。
吟遊詩人ミヤの旅はまだまだ続きます。

19・友情のしるし

「お嬢さん、日が昇ったで、もうすぐ朝飯の時間だよ」

ドアを軽快に叩く音で、私は目覚めた。

足が筋肉痛で悲鳴をあげる。

今日は一日このまま寝ていたい。

そんな誘惑を振り切り、私は鉛のように重い身体をベッドから起こした。

このまま歩き続けることを考えると、今日馬車に乗せてもらうちャンスを逃すわけにはいかない。

支度を済ませ荷物をまとめて食堂で朝食をとると、既にタッタとマグが幌馬車の準備をしていた。

挨拶をすると、昨夜と同じ笑顔で応えてくれる。

少しして、イーザさんが宿の主人と談笑しながら出てきた。

「イーザさん、おはようございます。今日はよろしくおねがいします」

「いえいえ、こちらこそよろしく」

「おじさん、お世話になりました」

「ああ、昨日はいい歌をありがとうな。道中気を付けて、また立ち寄ってくれるのを楽しみに待つとるけ」

「はい。また来ます！」

「それでは参りましょうか」

タッタとマグは御者台に乗り、私はイーザさんと座席に座った。

こうして私たちは、一路バロナへ向かった。

ところが、バロナへの足を確保してほつとしたのもつかの間、私は大きな問題にぶつかった。

「もうすぐ領境ですが、旅証はお持ちですか？」

生まれ育った土地を離れる時は、民は身分を証明する旅証が必要だ。以前教えてもらったはずのそれを、私はすっかり失念していた。私はこの国の民ではない。

そのかわり、国王の発行した「証印」というものを持っている。旅に出る時に首に下げていたが、これを使うと一発で月の御子だとばれてしまうのでよほどのことがない限り使いたくない。

「追いはぎに金品をとられた中に入れていて……」
と顔を曇らせる。

本当に心から困っていたのだが、イーザは私の言葉を信じたらしい。荷物の中から、奇麗な緋色の布をダスト、私の頭をすっぽりとかくした。

顔だけが出るようにし、布の端を耳にかけ、首に巻く。
そして、布が落ちないように襟元に金のブローチで止めた。

「あなたは私の娘です。家出して連れ戻され父親に怒ってる娘、できますか？」

「は、はい」

「では向こう向いていて。適当に話を合わせてください」

「わかりました」

領壁と呼ばれる関所では、赤い鎧のマドカナルの兵が領証の確認をしていた。

すぐに私たちの馬車の番が来る。

領証を求められ、御者台の二人にイーザさんは渡したそれぞれ懷から出して見せる。

「おい、そっちの女は？」

「エリー、こちらを向きなさい」

イーザさんに腕を引っ張られ、私は仕方なくといった様子でむつつりとした顔を向けた。

「申し訳ない、この子は領証を持っていないのです」

「どうということだ？」

「これは私の娘ですが、縁談を嫌がり、うちの下男に唆されて家出したのです。」

その男がこの近くの村の出だとかで、私たちをまくために隣山を通って領越えをしたらしいのです。

幸いマツカでなんとかこの子を見つけて連れ戻せました。ご覧の通り強情っぱりで。いやはやお恥ずかしい」

「ご主人大変だったな。ところで相手の男はどうした？」

「うでつぶしの強いのを連れてきましたからね。二度とマドカナルの地を踏もうとは思いますまい」

「はっはっは。おぬし、なかなか面白い男だな」

「おそれいます。ところでこういう事情なので、このことが記録に残っては娘の将来に差し支えないよう穏便に済ませられないでしょうか」

「よかるう。おい娘ご、これからはおやじさまの言う事をきいて孝行するのだぞ」

私はちらりと衛士に目をやると、つんとまた窓の外に目を戻した。

「ありがとうございました。本当に助かりました」

「いえ、このくらいは雑作もないこと。ちよつとしたスリルも楽しめましたしね。それより今後はどうされるつもりです？」

「私は、勇者の歌を集めるためにドストに向かいたいとおもっているのです。」

でも領証がないですし、この国へも正規ではない方法で来たものですから再発行もちよつと…。

世間知らずでお恥ずかしいですが、どうにか手に入れる方法をご存知ないですか？必要な費用は払いますから」

イーザの先ほどの手慣れた様子から、そういうことにも通じているうだと賭けてみた。

もし駄目なら、奥の手は自分の証印を使うしかない。

彼はしばらく考え込んでいたが、引き受けてくれることになった。

バロナの街の住宅街に近い大通り沿いに、赤い屋根の大きな店がダコダ商会の本店だ。

この世界ではあまり見ない三階建てで、店というには立派な作り。マグが、上の階は旦那の自宅で娘さんと二人で住んでるんですよと教えてくれた。

「おかえりなさい旦那様」

「お父様！おかえりなさい」

馬車を片付けるマグとタツタを外に残し、私とイーザは緑に塗られた扉を押して中に入った。

すると、一人の少女がイーザに飛びついた。

「ただいま、エリー」

イーザさんと同じ濃い茶色のふわふわとしたウェーブの入った髪の毛に囲まれた緑の瞳が揺れて私を見た。

「あら、こちらはどなた？」

「バルザックからご一緒した南方の唄詠み殿だ。少し仕事の取引をしてね」

「そうなのですか。初めまして、娘のエリーでございます」

「はじめまして、サーワといいます」

「まあ、エリーは黒髪の方って初めてみましたわ。しかも吟遊詩人様なんですか？素敵！」

領境を越える時、イーザさんが呼んだ私の名は本当に娘さんのものだった。

「イーザどの、色々用意を整えるのにしばらく時間がかかります。それまでお茶でも飲んで、街を歩いてみられては？エリーに案内させましょう」

「え、でも娘さんに付き合っていたいでいいのですか？」

こんな素性もしれぬ者と大事な娘を二人きりにしてよいのかと戸惑

いの瞳を向けると、イーザがやさしく微笑んだ。

「安心なさってください。ちゃんと用意しますから。それにこれらの旅でその履物だと寒いですよ。色々必要なものがあるでしょうし、うちのエリーは本当に買い物上手なんです」

「サーワ様、任せてくださいまし。私はバロナの商人の娘。買い物は得意中の得意で……」

さくらんぼみたいな可憐な唇から、ふふふと不適な笑いがこぼれる。

「エリーさん、私はサーワと呼んでね。それじゃあよろしくお願いします」

「じゃあエリーとお呼びになって、サーワ」

それから半日ほど、私は2つ年下のエリーに街を連れ回された。

変わった出で立ちの私にほとんど目を向ける人がいないのは、さすが指折りの交易の街だけある。

この国に吟遊詩人はいくらかおり、王侯貴族のもとに逗留する者達は、貴族に劣らない仕立ての派手な装いだそうだが、旅の吟遊詩人は普通の旅人と変わらない姿だそうだ。

なので、私の姿はその中間の、貴人にも聞かせる腕を持つ旅の吟遊詩人と思われたらしい。

なんだ、普通の格好でよかったのか。

恥ずかしい格好をしてしまったと肩を落としながら、エリーの見立てで、厚手の帆布を藍色に染めたおとなしめなワンピースと皮のブーツを買った。

少女達に評判のカフェで甘い焼き菓子とお茶でお腹を満たし、船で運ばれた異国の小物売る店や、安い装飾品を売る店、石けんや香水のお店など、女の子らしいショッピングを楽しむ。

といっても、実は私よりエリーの買い物量が多い。

私は旅の途中なので、鳥のついたブローチ、匂いのない石けん、色

とりどりの飴が詰まった瓶、そしてハーピアに似た異国の小さな弦楽器ギルタを購入した。

夜盗に会った時に壊れたのと言いつけていたのだが、ハーピアでもこのタイプは街娘が手習いで使うものだとしてエリーに指摘され、店で見かけたギルタを思い切って購入した。

ハーピアよりも心持ち大きいので、革ひもを通し鞆と同じたすきがけにする。

エリーがすっかり値切ってくれたので、今日の買い物はエリーにこ馳走したお茶代も含めて、予算の半分の5000ドルで済んだ。

「サーワ！みてくださいこの帯の赤、なんて鮮やかなんでしょう」

「そうだね。黄色の鳥の刺繍がまるで金色に見えるね」

「ほんとに。サーワの黒い瞳によく映えますわ」

エリーは頬をあからめ、私を潤む瞳でうっとり見つめている。

「あ、ご主人これをいただきますわ」

そして、私の頭に巻いた布をほどくと、手にした布で巻き直す。

「ちょっと、エリー？」

「サーワ、これはあなたのお近づきの印よ」

「そんな、安くはないでしょ？もらえないよ」

5センチ幅だが2メートル以上ある柔らかい帯は、1000ドルはしたようだ。

お嬢さんとはいえ、今日は既に色々買い物をしているし贅沢に育てられているようにも見えない。

「よいのですよ。私と一緒にだともってこれを纏って旅をしてくださいませ。そしてまたこの街に戻ってきたら旅のお話を歌を詠んでくださいまし」

「エリー……」

顔を少し傾け、手を前であわせて「ね？」と微笑む彼女の笑顔はめまいがしそうなほどまぶしかった。

「エリー、こっちにきて」

私は彼女の手首をつかむと、近くの色系を売る露天に向かった。そこで彼女の瞳とに合わせ、つややかな緑の絹糸を少しと、金糸を数本購入した。

「それをどうするんですの？」

「見ていて」

私は来る途中でみかけたオープンカフェに座るとお茶を頼み、さっきの絹糸を取り出す。

そして緑の糸を3つの束に分け、4つ目には金糸の束をつくり、端に2つ結び目をつくる。

そして、ギルタの弦を締める金具に端の糸の輪をかけて編みはじめた。

中学生の頃にクラスで流行ったミサンガ。

私もいくつか作り、中の良い友達と交換したりした。中には片思いが成就するようにと願掛けして身につけている子もいた。

ただの刺繍糸で作ってたそれを絹糸でつくと、全く違う光沢のある折り目があらわれる。

4段なら30分くらいで出来るはず。

私は手早く糸を動かし結び目つくっていく。

10巡した頃には、既に細い帯のような形が分かるようになってきた。

「これは、組紐ですか？」

「うーん、そんなかんじかな？私の国、というか他の国から渡ってきたミサンガってアクセサリーでね。願いをこめて手首や足首に結んでいるの。いつも身につけていて切れた時に願いがかなうらしいよ」

せっせと手を動かしながら、エリーのおしゃべりにつきあう。

「おまじないですか？」

「そうね。あとは、仲のいい友達に友情のしるしにプレゼントすることもあるの」

その言葉を聞き、エリーは顔を赤らめた。

この子、本当にかわいいな。

「お友達になった印に受け取ってくれるかな？」

「は、はい！喜んで！！」

それからしばらく、エリーが通う学校や友達のことなど女の子らしい雑談に興じた。

ただ、女の子の中で今一番のアイドルである勇者のことになると、私は笑いをこらえるのに必死だった。

エリーの説明では、ジャンはとんでもなく美化されていたからだ。

「サーワと同じ黒髪に黒い瞳だそうですよ。異国の王子だった方だとか。サーワも勇者様のことを知ったら絶対惚れますわ」

目を潤ませ、頬に手をあてイヤイヤと可愛い仕草をするエリーに、この子をジャンに合わせたらどんな顔をするかな。

「そんなに気になるなら、バルザック領主様でしょ？合う機会あるかもしれないじゃない」

「でもでも、もう月の御子様がお側にいらっしゃるのに、勇者様とお会いして本気の恋に落ちたら辛いじゃありませんか」

「お側にいらっしゃる？」

「そうですわ。魔王の城から月の御子様を救い出された勇者様は、御子様を気に入られた王から奪いご領地に連れてお側に置いているとか。

まるでおとなりの国をつくられた、先代の勇者と御子様のように。やっぱりお二人は運命の愛で結ばれていらっしゃるのよ」

私はその後も喋り続けるエリーの話聞き流しながら、手を動かしつつジャンのことを考えた。

あの夜の、抱きしめられた彼の腕にこめられた力の強さ、胸の広さ、そして……

私に向けられた燃えるような瞳が、氷の刃のような冷えたものになった時の胸の痛み。

私の心は魔王にあるのに、どうしてこうジャンのことを考えてしま

うのか。

私は唇を噛み締めると、座りなおし編むことに没頭した。

「ほら、エリー手をだして」

差し出されたエリーの細くて白い手首に、緑色の帯をぐるりと巻く。そして両端の細く伸びる紐できゅっと結んだ。

「本当はとれないように固く結びつけるものだけど、不自由なこともあるのよ。」

だからここをひっぱれば解けるようになるわ。」

「サーワ、このまま結びつけて。私はあなたの旅の無事を祈って、また会えることをおまじないにするわ」

「わかった。気持ち嬉しいよ、ありがとう」

私はエリーの髪の毛をそつとなでた。

「でも本当に奇麗。すぐにこんなものを作ってしまうなんて、お上手でいらっしゃるのね」

日の光の下で絹糸はつややかさをきわだたせ、斜めの金色のラインがきらめく。

「これは、色石ですよ？」

「なんの石かはわからないけど、たまたま持っていたから。エリーの瞳と同じできれいでしょ？」

宿を出る時に、換金しようと追加で鞆に出した宝石に、エメラルドのような石があったのを思い出し、服に縫い付けるために空けてあった穴を利用して編み込んでいた。

路銀のつもりだったけど、こういう使い方もいいよね。

何者か知らない私と素直に打ち解け、こんなに大事に想ってくれるエリーがとても嬉しかった。

「こんな素敵なものどこにも売ってませんわ！」

「私もこの布、大事にするからね」

「私もですわ！」

私たちは姉妹のように手をつないで散策を再開し、日が落ちかけた

頃ダコダ商会に戻った。

その日は、エリーに是非家に泊まって欲しいとくどかれ、イーザにも客人というより娘の新しい友人として気持ちよく迎えてもらい和やかな夜を過ごした。

もちろん、私が歌うはめになったのは言うまでもない。

買い替えたギルタの練習がてら、私は穏やかな歌唱曲を歌った。

ギルタの音はハービアよりも低い落ち着いた音を奏で、適当につまびいてもなんとなく雰囲気がある。

さすがに奏でるといふより鳴らすという相変わらずの腕なので、旅の途中でもうちよつと練習をしようと、自分に宿題を課した。

その夜、遅くまでイーザに北の土地のことを色々教えてもらい、それを細かくメモしていった。

私の手元をのぞきこんだイーザは、ひとつも理解できないその文字にやはり異国の方なのですねと納得していた。

19・友情のしるし（後書き）

ちょっと寄り道してしまいました。

あまり殺伐しするのとも思ひ、癒し要員でエリーを投入で一息いれて。

次回は一気に旅が進む予定です。

20・人売り

剣と魔導が力の象徴であるこの世界で、電車やバスという乗り物はもちろんない。

身分の高い人やお金持ちは、持ち馬車を利用する。

馬車を持たない者が長距離を移動する場合、懐に余裕のあるものは借馬車を、一般的な庶民は乗り合い馬車を利用する。

街から街へと移動する乗り合い馬車は、たいがい一日1、2本の定期便。

そこから計算すると、バロナからドストの領境側の街へは2日。

故郷へ戻る者、街へ戻る労働者や商人達に混じり、私は馬車で揺られた。

最初は様子も分からず、ただ黙ってローブをかぶりじつと座っていたが、

3回目の乗り換えを経験した頃には乗り合った乗客と声をかわしたり、リクエストがあれば小遣い稼ぎに歌ったりもした。

さすがに曲のリクエストは、この国に来たばかりだと断らずをえなかったが。

それでも異国の歌詠みを楽しんでくれた。

今回は、若い人達が多かったので、J・POPの中で歌いやすいものを選んだ。

歌詞に出てくる電車とか携帯は何かと尋ねられ、

電車は、乗り合い馬車の座席の部分が沢山連結された乗り物で、携帯は離れている人と声のやりとりができる道具で、デンキという魔導が使われてるんだと説明した。

この世界には機械という概念があるのか分からないし、皆「魔導」という一言で納得してくれるからだ。

その日の晩は、ヨナキという小さな街に一泊し、翌日は朝一番の乗

り合い馬車に乗ると、一気にドストの領境側の街ラクダに向かった。乗り合った乗客にドストのことを尋ねると、この領はマドカナル伯爵の善政で民も豊で潤っていてこうやって旅も安心して出来る。

だけどドストは貧しい領の上に、魔王の影響で荒れているそうだ。夜盗も多く、魔王が倒れてから、魔物があらわれることが増えたらしい。

乗り合い馬車も護衛が着くため値段も高いが、それでも襲われることがしばしばあるのだそうだ。

領主のドスト公爵は国元を嫌い王宮で夜会三昧のまま戻ろうとせず、病弱な弟のエスキー卿が管理を任されているがほとんど放置されているらしい。

なので、ドスト側入ることは容易いが、この領に入るのはならず者が越境しないよう審査が厳しいとのこと。

イーザからだいたい様子は聞いて予想はしていたけど実際は更にひどいらしい。

私がドストに入るのを知ると、皆危ないからやめたほうがいいとめられた。

やっぱりいくら吟遊詩人といえ、ドストに入ってからはかなり危険なようだ。

だからといって、ここで怖じ気づいて引き返すわけにはいかない。意地でこのまま帰れないもある。それ以上に、前に進む為にはどうしてもやらなければならないから。

ドストの領境は、バルザックに似ていた。

街道に立ちふさがるように石造りの壁があり、

マドカナルに入る側には立派な鎧の衛士達が守っていた。

バルザックの時よりもはるかに厳しい顔に口調だったが。

だが、ドストに入る側は、衛視というよりも、村の青年が一応鎧を来てますといった風体だった。

緊張しながら旅証を渡す私に、無遠慮な視線で身体をなめまわす。変に絡まれてはたまらない。

足早に抜けると、すぐ側にある村へと降りていった。

なるほど、ドスト領に入ると急に人氣が少なく、気温も一度下がったような、そんな寒々しい空氣が横たわっている。

村も走り回り遊ぶ子供達の姿も見れず、用があり外出した村人達も足場やに下を向いて歩いている。

私は早々に乗り合い馬車に乗ると、領地の北へと進んでいった。

途中に通り過ぎる村は、最初に見た村とあまり変わらない。

日が暮れる頃に到着した街ヨールトは、街道沿いでは一番大きな街ということ、さすがに人が行き交い活気があった。

だが活気といっても猥雑なもので、宿や食堂などが立ち並ぶ場所は柄の悪そうな男達がうろつき、色っぽい女の客引きがいたところで嬌声をあげていた。

私は明るく清潔そうな宿に入ったが、満員だからと申し訳なさそうに断られた。

だが、私の姿をじろじろと見ていたので、客としてそぐわないと思われるたんだらうと気がついた。

仕方なく、側にあつたもう一件の宿に入る。

不機嫌そうなひげ面の主人に2000ダルを前金で求められ、渡すと二階の部屋に案内された。

カビくさい空氣がこもり、ランプをつけるとほこりだらけだ。

このぶんじゃ、布団も期待できない。

この部屋であの値段は高すぎる。

そう文句を言いたいのを、ここで追い出されたらたまらないのでぐっところえて部屋のドアを閉め鍵をかけた。

さすがにこのあたりは用心が悪いだって、鍵は2個もついている。

私は荷物を椅子に置くとベッドに倒れ込んだ。

さすがに馬車に揺られているだけといっても、隣の人にぶつからないようふんばっていないといけないので体中が疲れている。

疲れているけれど、お腹空いた。

天井に向かってお腹が悲鳴をあげていた。

少し重いけれど手荷物を置いておくのはなんとなく不安があり、鞆を肩にかけると部屋を出る。

宿の主人に近所の食堂を教えてください、私は早足で向かった。

途中で何度か声をかけられるが、聴こえないふりをして立ち去る。

教えてもらった、青い板にグラスの絵が書かれた看板が見えた時、酔っぱらいに腕をつかまれた。

私は夢中で振り切ると、怒鳴り声を背中に受けながら走って店にかけこんだ。

この街の食堂は日が落ちて少しすると閉まってしまう。

私が宿探して手間取っているうちにそういったお店が閉まってしまったので、食事が出来る酒場をすすめられた。

ドアをくぐると、入り口付近の客が値踏みをするように私を見て、口笛を吹くものもいた。

労働者風の者もいれば、兵士くずれの格好をしている者もいる。

私は厨房の近くに空いている席を見つけ、あわてず落ち着いているように歩いてそこまで行った。

椅子に座って、ほうつと安堵の息をつく。

こんなに緊張して歩いたことって国王への謁見以来だ。

比べるなんて本当は恐れ多いのかもしれないが、まだあの時は危険を感じることはなかったな。

店員の男が来たので食事が欲しいことを伝えと、壁にかかっている板を指差した。

その中から選べってことらしい。

早く出せるというので、肉のシチューにパンとサラダを頼んだ。

待っている間、手持ち無沙汰であたりを見ていると、隣の席の若い男が声をかけてきた。

「ねーちゃん一人かい？この店で見かけないが？旅人さんかい？」

「はい。食堂が閉まつちゃったんで、ご飯食べにきました」

「そうか、さすがにこの時間女の子一人は危ないぜ」

「迷ったんですが、空腹に負けちゃいました」

「あはは、そりやあしょうがないな。俺はハリス。石工職人だ。連れのこいつは恋人のピリ」

同じテーブルの女性は、興味深そうに私を見る。

「そんなローブ着込んで暑くないの？」

「このあたりは涼しいので大丈夫ですよ。それに女の一人旅なので一応用心をつて、ピ、ピリさん？」

既に酔っているのか、どれどれーと私の隣の椅子に移ってくるとフードの中をのぞきこんできた。

「フードで隠したらもつたいたいわよ。そんな可愛いのに」

「あつ、駄目、だめですつてば」

無理に押しのけるわけもいかず、彼女の手を抑えきれずにローブのフードを脱がされてしまった。

そんなやりとりをなにげなくみていた周囲がどよめいた。

灰色や茶色の地味な色合いの服の中で、緋色の帯を巻いた渡しの頭が浮き上がる。

「ハリス！この子歌詠みさんみたいよ」

「俺、歌詠みに何人か会った事あるけど女の子は初めてだ！」
さつそく目立ってしまった。

私が吟遊詩人だと分かると、あつちこつちから依頼の声があがった。断ろうとするが、ピリが腕を持って前に立たせようとする。

「ちょ、ちょっとまってください。じゃあ、後ほど歌わせてもらいますから、まずはごはん食べさせてください。」

もう、お腹空いちちゃって空いちちゃって力尽きそうなんです」

お腹を抑えて困った風に言つと、皆笑つて納得してくれた。

私がようやく来たシチューにがつついていてみると、そんなにひもじかつたのかと周囲の人達が、自分たちの皿の肉を焼いたのや魚のフラ

イヤチーズなんかを分けてくれた。

最初は親切から、途中からおもしろがって皿に盛り、一食分の量になった。

とうてい食べきれないので、紙袋をもらって持ち帰れそうなものを詰め込み、無理そうなものを食べることにした。

食事も終わり、サービスで出してもらったジュースで喉を潤すと、私はギルタを抱いて前に出る。

「私は、南の異国から来た吟遊詩人サーワです。立ち寄ったヨールトで皆さんにお会い出来て嬉しいです。私はこの国の歌を知らないのです、私の国の歌を詠ませてもらいます。お気に召したら、この腕に志をお願いします」

スカートをつまんで膝を折っておじぎをする。

拍手の合間に、下卑たヤジがとびかう。

こういうのにも少し慣れてきた。

私は、懸命に手を叩いてくれるピリににっこりと微笑み、ギルタの弦をひと撫でする。

すると、店内がしんとした。

伴奏に弦を鳴らせるものは鳴らし、ならせないものは、爪で棹を叩きリズムを刻む。

今夜は、中学生の時、毎年の合唱祭で歌った歌を。

故郷を思う歌や海の歌、草原の歌、大地の歌。

リクエストをとらないかわりに、4曲歌った。

合間に歌の情景を説明したりしていたので、時間をとってしまった。さすがに疲れてしまい、明日早いのでこのへんど切り上げた。

歌はおおむね好評で、おじさん達が次々とお金を腕に入れてくれた。少し困るのが、酔っぱらいは前まで歩くのを面倒がり、おもしろ半分で硬貨を投げてくることだ。

「ちよつとそこのおにーさん、そこのおじさまもストップ！それあたるとイタイから。おにいさんコントロール良さそうで怖いよ。今

からいただきにいきますから、ちよつとまっつてね」

そういうと皆が笑い、投げようとした人はそつと腕を降ろす。

私はお店の人に会計を済ませると、鞆をかつぎ、お碗を持って席を練り歩いた。

時々おじさんに捕まり、酌をしるだの一緒に飲もうだの強引に誘われそうになるが、

今日は会えて嬉しかった。私の旅の無事を祈ってもらえますか？と上目遣いで微笑むと、頭を撫でてくれ、奮発して1000ギルコインを入れてくれたりもした。

この世界では紙幣はなく全て硬貨だ。100ダルまでは、小貨と呼ばれ、銅のような材質で四角い硬貨。刻印はそれぞれ違うが人手に渡るうちに摩耗してしまう為、1ダル硬貨は3箇所の角が欠け、10ダルは2角が、100ダルはどの角も欠けていない。

これなら、ポケットの中に入れていても手で触るだけでどの硬貨が分かる。

また、1000ダルからはなじみのある丸い硬貨で大貨、黒っぽい薄いものが1000ダル。5000ダルは、赤い色をして周囲に縦の筋が入ってぎざぎざしている。そして流通で使われる一番高い硬貨が10000ダル。銀で出来ており、ひとまわり大きいサイズになっている。

この他に、実はもう一種類の貨幣が存在する。王貨と呼ばれる金貨で、その時代の王の肖像が刻印され、王により価値が設定され、次の王になるまで変わることはない。今の王貨は1枚が10万ダル。王が臣下に下賜する際に使われあまり数が多くない為、一般国民が手に渡することは少ない。

それでも、古い王貨幣はコレクターズアイテムとして人気が高いそうだ。

マルコやパットは魔王討伐の報奨金としてこの王貨を授かっていたので見せてもらったが、

王侯貴族でなければまずめつたに目にすることはない。

一通りまわると私はお椀の中身を袋に入れて鞆にしまい、見送りに来た店の主人にお椀返すと礼を言つて店を出た。そしてまた、フードをかぶり一心に宿屋に向かつて足を早めた。

ところが、宿の手前の細い路地の前にさしかかったところで、いきなり腕が伸びると、私はひきずりこまれた。

「何するの、離して！」

無我夢中で手足を動かし抵抗するが、顔にナイフをつきつけられ、驚いて動きをとめてしまった。

その隙に口を抑えられ、二人掛かりでかつがれ、路地の奥へと連れ去られる。

暗くてよくみえないが、男が3人、かついでる男達の他に先頭をいく男が一人いる。

行き止まりの空き地のようなところまでくると、私は降ろされた。

「どんな歌がご入用ですか？吟遊詩人への用はもちろん歌詠みしかありませんよね？」

私はおびえを隠し、口元はほえみながら強気でにらんだ。

「唄詠み？しかもガキじゃないかおまえ、金になりそうな女が歩いているつて言つたじゃないか」

「だって、頭に高そうな布巻いてるんですよ。それに珍しい黒髪だし」

「これか？」

フードを外され、巻いている帯に触ろうとした手を私は払いのけた。

「このがきや、何しやる」

「それは私の台詞よ。用があるなら、ちゃんと名乗つて声をかけなさいよ」

「ば、ばかつ 盗賊が名乗れるわけないだろ」

やっぱり、悪い人たちだったのか。

「盗賊でも、立派な盗賊はちゃんと名乗るわよ」

「そうなのか？」

「私の国では、イシカワゴエモン、ネズミコゾウ、カイジユウニジユウメンソウ、アルセーヌルパン。名だたる盗賊は皆紳士って相場がきまつてたわ」

「なんかどれも強そうな名前だな」

「お前、なにこの娘のペースに乗ってるんだよ」

ボスらしき男がよく喋る男の頭を殴った。

そして、私のローブの首もとをつかみナイフをつきつけた。そして、刃を喉から胸の先まで滑らせていく。

「歌詠みの嬢ちゃんよ、あいつは盗賊だけど俺は人売りよ。お嬢ちゃんみたいな一人でふらふらしてるのを捕まえて売り飛ばすのさ。お前ならいくらで売れるだろうな。珍しい色してるし、きつと好き者の変態貴族様が高い値つけてくれるぜ」

まだ有り金はいってってほうがよかった。よりによって人売りはとも危険と言われていたのに……
なんとか逃げなきゃ。

「私は用があつてドストに来たの。お金をあげるから見逃して！」

「金はもちろんもらうさ。だけどもまえももらう」

「私はあげれないわ。お願い、帰してよ」

「生意気なガキ、痛い目に会わなきゃわかんないのか」

「げほっ」

いきなりお腹を蹴られ、私はその場にうずくまった。

今度は、背中をけられ、頬を足でふみつけられる。

逃げなきゃ、走ってあの路地に向かって走らなきゃ。

そう思うけど、暴力に身体が怯えて動かない。

痛いのは嫌だ。

でも、死ぬのはもっと嫌。

私は、ジャンの所に帰るんだから。そして元の世界に帰るんだから。

「やっと身の程がわかったようだな」

足を下し、私は仰向けに転がされた。

空にはいつもの青い月がのぼっていた。

ぐったりと倒れ込んだまま、ぼんやりとした目でそれをみつめてみると、

「おい、こいつを持っていくぞ」

そういつて男は後ろ振り返り手下に声をかけた。

今だ。

私は隙をついて立ち上がると、背後から硬貨の詰まった袋で殴りつけた。

「何しやがる！」

「大丈夫ですか」

ボスにかけよる二人に袋を投げつけると、小銭がつぶてになって男達に降り注いだ。

三人が躊躇する隙に、私は思い切り走り出す。

人気のあるところに行かなきゃ。

路地に飛び込み、必死で走った。

だけど、すぐ背後に追ってくる足音が近づいてくる。

角を曲がると、先に光が見えた。

さっきの通りだ。あそこまで行けさえすれば。

そう思った瞬間、

「逃げるなコラ」

そう怒鳴られ、翻ったローブの裾をつかまれた。

20・人売り（後書き）

治安が悪い街でさつそくのトラブル。

どう考えても一人旅は無謀ですから。

ということで次回、ミヤは無事に逃げ切れるのか…

21・ウルノーゼの瞳

「やだっ！　だれか助けて…」

渾身の力をこめて声をあげるが、引つ張られた勢いで壁にたたきつけられた。

咳き込む私に、男は抜き身のナイフを光らせながら私の側にしゃがみこんだ。

顔はよく見えないが、怒りくるっているのがわかる。

「やりやがったな。お望み通り売るのはやめてやるよ。そのかわりお前は俺のものにして姦りつぶしてやるぜ」

私は髪の毛をつかまれ無理矢理壁に押し付けられ、頬を叩かれる。膝に力が入らずがくがくする。

その間に男の足が入り太ももを割った。

「や、やあだ」

声をださなきやと思うが、喉をおさえられかすれた声しか出ない。すぐそこで、明りの中で人が行き交うのが見えるのに。

「安心しな、誰もきやしねーよ」

男は通りの光に私の顔の左右をあてると満足げにほえんだ。

男の顔にも光があたり、下卑た笑いを浮かべる冷酷そうな顔が浮かび上がる。

太ももをなであげられながら、スカートの中に手が入っていく。

男の顔が首筋に埋まった。

恐怖とおぞけで涙があふれ、視界がぼやけ光だけが揺れる。

――やめて！！誰か助けて！ジャン！！！！

声にならない叫びをあげた時、男のおさえつけていた力が抜けた。

「え……」

「このバカ女」

支えを失い崩れ落ちかけたからだを細い腕が抱きとめた。

見上げると、見知った顔があつた。

「パット？ どうしてここに？」

「いいから他の奴がくる前に行くぞ」

「パット、こっちです」

「え、ロッド先生も？」

私はパットに抱きかかえられるように連れられ、今日私が断られた宿の中へ連れていかれた。

清潔な部屋の2つ並ぶ寝台の上で、私は放心状態で座っていた。

「ミヤ、大丈夫ですか？」

覗き込む二つの顔。

パットが水を口にあててくれ、こくりと飲んだ。

医者と呼ばうと相談する二人に、打ち身だけだから冷やせば大丈夫と止める。

だが、身体のいたるところが悲鳴をあげ、動かすことが出来ない。

ロッドの手が触れようとしたが、私は身体を強ばらせたのを見て引く。

大きな男の人の手。

それに恐怖を感じた自分に驚く。

「ご、ごめんなさい。身体が言う事きかなくて」

「私は大丈夫ですよ。それより横になつてしばらく休んだらどうですか」

ロッドはパットをうながした。

彼はとまどった顔をしていたが、そつと私に手をかけた。

助けられた時は驚き何も考えずに身を任せていたが、今も不思議とパットの手は怖くなかった。

ローブを脱がされ、ブーツを脱がせてくれる。

「医者はいらないといっても痛むしこれから熱があがるでしょう。

私は薬草を調達してきますから、後を頼みますよ」

「ロッドさん？僕がこいつを？」

ロッドはパットに何か耳打ちし、微笑みながらドアから出て行った。彼はしかたなさそうな顔で、私の側に戻ると横になるのを手伝おうとした。

「汚れてるから、布団が汚れちゃう」

「そのくらい気にするな」

「服、脱がせて」

「ボクが？」

あっけにとられるパット。

「それに、身体に貴重品をつけてるの。ちょっと苦しいから、とって」

「巻いてる？どこに？」

私は胸の下を差した。

「と、とれるか、ばか」

「いたいとこにあたってるの。ほら、だから脱がせて」

「お前、ボクが触っても怖くないのか？」

「男の人まだ怖いけど、パットはなんか平気」

「なんでだよ、ボクも男だぞ」

「パット、だからかな」

ファスナー代わりに胸元が編み込まれたワンピース紐を示すと、ぎこちなくそれをほどく。

腕をあげれないので、紐を全て外して腕を降ろしたまま袖を抜き、足元から抜き取ってもらった。

パットは脱がすところから私のほうをみないようにして、最後に下肢にローブをかけてくれた。

首にかけていた証印と竜の鱗はサイドテーブルの上に置かれた。金持ちや上流階級の女は下着にコルセットのようなものをつけるが、庶民は丈の短いタンクトップのようなシャツがブラジャーの代わりだ。

恥ずかしがってる余力は、今の私にはない。

「これめくって」

「むりだよ」

手をだそうとしないパットに、私はため息をつき、痛みをこらえて裾を持ち上げた。

肩より上にひじがあがらず、双球の下半分までが薄明かりにさらされた。

それを持ち上げるかのように、

青い布に包まれた帯が二つ身体に巻き付けられている。

「これ……」

「わかったから。服降ろせ」

私の手をシャツから話すと、背中にまわり改めてシャツをめくり、結び目をほどいて身体から外す。

「ありがと」

「馬鹿女、お前あちこち腫れてるし赤くなってるじゃないか。相当痛いだろ」

「骨は折れてないはずだから、すぐ直るよ」

パットは顔を赤らめながらも、真剣な目で怪我の場所を検分している。

それが終わると背中を後ろに倒してくれ、首もとまできっちり上掛けをかけた。

「パット、ここにいて」

「うん」

パットは私の手をぎこちなく握った。

女の子みたいに細い指だけけど、手のひらには剣ダコが出来てごつごつしている。

暖かい手につつまれ、私は心が休まるのを感じた。

思わず、涙が一筋こぼれる。

「ロッドさん帰ってくるまで寝ろよ」

「痛くてむり」

「だったらじっとしてろ」

しばらくお互いに無言が続いた。

それを破ったのは私だった。

黙っていると痛みが気になってしまうので紛らわせたかった。

「助けてくれて、ありがとう」

「なんでこんな所を一人でふらふらしてんだよ。この国は男一人でもやばいんだよ。なのに目立つ格好しやがって」

「目立ちすぎて連れ込まれたりしないかなと思ったんだけど、うっかりローブのフード被っちゃって意味なかった」

「なんだよその短絡的発想。だからお前は馬鹿女なんだよ」

馬鹿だ馬鹿だと怒りながらも、パットの眼は不思議とやさしかった。

「いつものパットだ」

「お前、他の人とボクとの扱い違いすぎないか」

「だって、パットだもん」

私はくすくす笑いかけたが、途端に痛みの返り討ちに会い一人悶絶した。

「あの時は言い過ぎてごめん。でも言ったことは謝らないよ。私は間違っていないから」

「俺もたたいてごめん。でもだからってお前が言ったことを認めた

わけじゃないからな」

私たちは見つめ合い、お互いぎこちなく微笑んだ。

「そういえば、どうしてここにいるの？」

「今頃かよ」

「私を見張ってたの？」

「追いかけてきたんだよ」

「お前、黙って抜け出したから次の日えらい騒ぎだったんだぜ」

「ちゃんと手紙置いてきたよ」

「誰が読めるか！」

ミヤが館を出た翌朝、

置き手紙らしきもので、拉致ではないこと判断し一同は心をなで下ろした。

だが、ほとんど外の世界を知らないミヤがどこへ行ったのか。

使用人達は心配し、手分けをして近くの村や街を探した。

そして、奇妙な格好をした少女が街道を歩いていたと証言が集まり、マツカの村で少女はバルロへ行ったことが分かった。

ジャンは保護者である自分が探しに行くと言い張ったが、マルコに止められた。

「お前は領主としての勤めがあるだろ。そろそろ自覚を持てよ」

「ならマルコ、お前が行ってくれるか」

「俺も駄目だ。衛兵隊の隊長は着任したけど、やる事が色々あるから無理だ。」

かどわかされたならまだしも、家出に付き合う余裕はないね。

だからパット、お前行ってこい」

「なんでボクがあんな奴」

「マルコ、あんなことあったばかりで酷だろ。パットにそんなことさせられない」

「あんなこと？ミヤが魔王の肩を持った事か？」

「お前も聞いてたろ？ミヤが、あの子があんなことを言うなんて……」
マルコはパットと共にあの時ドアの前にいた。

パットは中に入っていたが、使用人達がこないよう外で話を聞いていた。

「僕達は見ただろ？パットや周辺の村の惨状を」

「だからパットに行かせるんだ。パットもミヤも、自分たちでしかケリをつけれないことなんじゃないか。」

「マルコ、ミヤの言ったことを信じるのか？」

「少なくともミヤは、お前らみたいに感情だけで喋ってなかったぜ。自分の中でずっと溜め込んだものを整理してたんだろうな。そのうえで本音を言ってたよ」

「何がしたい」

「パットが感情的になるのはしょうがないよ、目の前で家族を失ったんだ。」

だがジャン、お前はそれでいいのか。

楽な解釈を選ぶんじゃない、事実を見ろよ」

「どんな事実があるというんだ？魔王が、魔物が村を襲ってないという事実がどこにある。沢山の人々が殺され村を焼かれた事実があるだろ」

ジャンは友人につかみかかった。

だがマルコは動じることなく、冷やかな目でジャンを見下ろし続ける。

「どうしてお前は討伐隊に加わったんだ？」

「国を民を守る為に決まってるだろ！俺はおちこぼれの隊にいたが、心は騎士だ」

「第1討伐隊が編成された時から不思議だったんだ。

国の存亡を揺るがす一大事の筈なのに、王は悠長に希望者を募り、精鋭とは呼べない者達を送り込んでいた。」

「だけど俺たちは魔王を倒したじゃないか」

「ああ、倒したさ。でも、それまでに何十人も兵が死んでいった。その討伐隊にお前が加わっていたことは、王の誤算だったんじゃないかとも薄々思ってた」

「僕が、誤算？」

「お前は腕がたち、勇気もあり、ツキもある。お前がいたから魔王は倒せた。」

「だけど、王の側には騎士団に魔導騎士団がいる。

奴ら一人はお前の足下にも及ばないかもしれない。

だが、一個中隊ならどうだ？なぜ最初にそれを投入しなかった」

「それは、国の守りで人出を避けなかったからだ」と

「隣国の一領主が騒いだのが国存亡の危機か？魔法騎士団全部動かすほどのもんだったのか？

騎士団で身边を固めるほどの内乱を心配するほどの騒ぎだったか？」

「それは陛下がお考えになることで、俺らが推し量れることじゃないだろ」

「あのな、あの旅の途中で。パットの村に着く前日に、俺は炭焼き小屋のじいさんから聞いたんだ。

黒い鎧の兵が朝霧に包まれた森の中を行軍するのを見たとな」

「黒い騎士つてまさか…」

「魔物のせいで悪い夢か幻影を見たんじゃないかって俺はとりあわなかったんだ。

だけど手にした盾に目がついていたというのがずっと引っかかってた」

「ワルノーゼの瞳か！」

ジャンは額をおさえ椅子に座り込んだ。

「ジャン様、ワルレーゼの瞳ってなんですか？」

「王位を譲られたクライモン先王陛下は王家の習わしで神殿に入れたが、当時の親衛隊長が腕すぐりの騎士や魔導騎士を集めて編成した先王陛下の神殿兵だ。」

ひとたび剣を抜けば、そこにいる全ての命が消えると噂され、黒い鎧をまとい盾には光彩のはいつた赤い竜目石の珠がはめられている。その珠は戦いの女神であるワルレーゼの加護を受けており、その隊は「ワルノーゼの瞳」と呼ばれ畏れられていた。

立場上、王の住む神殿を守り戦や国内の諸問題で動くことはないはずだった。

もし動けば、親衛隊、魔導騎士団と同等、いやそれ以上かもしれないため、国王の権威を脅かすこととなる。

「まさか、何の為に奴らが動くんだ」

ドルト伯爵は野心があるが決して国王に逆らうことはない。謀反の可能性がない以上魔王討伐絡みだろうが、それなら自分たちにも連絡が入るだろうし、森の中を移動することもない。

「あの時は俺たちに考える余裕はなかったろ。」

言い訳にならないかもしれないが、滅ぼされた村を見た時のことは今も夢に見るくらいに衝撃的だったよ。

だからこのことがそこまで重要だと思いつかなかった。

だけど王が魔王が滅びたことをさして喜んでなかったことに違和感を感じてきてな。

最初は単にお前が嫌われ恐れられてるだけだと思ってたんだ。

ミヤへの執着も予想より軽かった。

ロッド先生ひとりを寄越すだけだったからな。

あの先生一人で十分なほど力のある人なのかもしれないが。

本当は兵をあげて魔王を襲いあの土地を征服するはずが、魔物の動きが火種になるほどじゃなくて、それで討伐隊でお茶を濁しなが

ら機会を伺ってたんじゃないかな」

あくまで俺の推論だが、とマルコは念を押した。

「それでご自分の兵は使えないから、ワルノーゼの瞳を……」

「じゃあ、陛下が魔王の土地欲しさに、村の人を殺して火をつけてまわってたってこと？」

震えた声をあげるパットに、二人は否定しなかった。

21・ウルノーゼの瞳（後書き）

危機一髪。

助けたのは勇者様といきたいとこでしたが、あえてパットくです。
いつもはジャンにデレだけど、

ようやくミヤにデレる時がきたのかどうだか…

そして陰謀の糸も次第に露になってきました。

22・ソロモンの石

「当たらずとも遠からずってところでしょかね」

「ロッドさん、いつから…」

「いつからもなにも、ずっとここにいたんですが」

部屋の角に据えられた机に大量に書類が積まれ、その影からロッドが現れた。

「ジャン、お前人払いしてたんじゃないかったのか」

「すまん。そういえば先生のこと忘れてた」

ジャンとマルコがロッドに剣呑とした目を向けた。

二人とも既に手元の剣に手をかけている。

どんなにいい人であろうと、ロッドは王が送り込んだ人材。スパイだ。

もし王の陰謀が本当なら、今それを知ったことを知られてはまずい。

「私も読書に夢中になっていていたのですが、興味深い話だったものだからつい聞いてしまいました。」

ちよつと手を降ろしてくださいよ。皆さん何か誤解していらっしやる」

「誤解ですか？」

「さっきマルコさんもおっしゃってたじゃないですか。」

月の御子は王にとつてもともとたいして重要ではなかったって。

実際その通りで、いわばオマケだったようです。

それが、ミヤが魔王の魔力を持っていることから厄介払いであなたに押しつけたんですよ。

あの方はご自分を脅かすものは決して側に置こうとされないですから」

「ではあなたは、本当にただの連絡係だとおっしゃる？」

「私は研究のためにここにいたのであって、その条件が連絡係とい

うだけにすぎません。

国に有用な御子の英知や、彼女が関係した出来事が周囲に知れる前にお伝えしているに過ぎませんよ」

「それは本気でおっしゃってるんですか？」

「もちろんですよ！このチャンスを逃したら死んでも死にきれません。」

私が王命でここに送り込まれたと思っていているのならそれは誤解ですよ。私は人を探しているのを知り志願して来たのです」

「はあ」

「陛下から人事の打診が学院に来た時、自ら申し出たのは私だけだったんです。」

それに私はここに来るために妻とも別れましたし」

「えええ！ロッドさん、結婚してらしたんですか？」

三人はロッドの発言に仰天した。

「いやあおはずかしい。」

王立学院の研究者になった時に、僕に期待した上司が進める男爵家の娘との縁談を断れなくて。

研究馬鹿の僕に彼女はとつくに愛想をつかしてたのですが、こつちに来ることを選ぶなら離婚だと迫られましたね」

頭をかきながら「こつちをとっちゃったんですよ」とロッドはほがらかに笑った。

三人はそんなロッドに困惑しながら、立ち入ったことを聞いてしまったことを詫びた。

「そういうことなので、私自身の為にも御子の自由があるあなたの元にいることが不利にならないように心がけているつもりです。」

すぐに信用してもらうのは難しいでしょうが、それでも構いません。勇者と御子の二人が目の前にいるような美味しい状況、陛下だろっが邪魔させるもんですか」

「先生、最後に本音が出てますよ…」

「おっと、話がそれました。

マルコさんは謀略が読めまた謀ることができる人ですね。

あなたの見解はかなりいい線をいつてると思います。

ただ、あなたの持つ情報が少なすぎるから、すでもっと大きな謀略に巻き込まれていることに気づけていないのですよ」

そこがもう一步なんですと、ロッドは先生が生徒を褒めるようにマルコに微笑んだ。

「あなた方は魔王が復活する時まで、国民の魔王への不安を諸外国へアピール駒だったのですよ。

マルコさんが言ったように、魔王領の取り合いで各国が牽制する中、村や街がいくつも滅びるといふ甚大な被害で国力を挙げて攻め込むことが出来る。

だけどそれなら魔王の力が復活する前に、もっと早くことを運ぶほうが手間がかかりません。

魔王が復活すれば、魔物達は兵士となり軍勢となりますから。」

三人は、真剣に聞き入っていた。

悲惨な事実感情に入り交えぶつけて導きだした答えをこうも冷静に解き明かされると、

気持ちで納得しきれなかったものがずっと洗い流されていくようだ。

「もちろん王は魔王領の資源を欲しがった。けども一つ欲しいものがあつたのです。

伝説では、魔王が復活すると魔王は魔物を完全に統制することが出来ます。

その魔王の体内にある魔力の結晶「ソロモンの石」を手に入れば、魔王の力を得て魔物を、ドラゴンをも統べるといいます。

恐らく狙いはそれだったのではないかと」

「ソロモンの石？」

「勇者はあなたで4代目。先代はあなたと同じように最後の封印が解ける前に魔王を倒しましたが、その前の2代は魔王が復活した後、に倒しているんです。」

そしてその石を使い、勇者は魔物達を操り人々に平和をもたらしました。

ですが、その石を悪用し世界征服を企む者達が出た為に、石は破壊され、ソロモンの石は禁忌の伝説となりました。

なのでこの国では神殿の長老達たちの口伝でしか残っていないのです。

私は、他国の古い書物で知ったのですが、その書物もその国の内乱で失われ知る人も少ないはず」

「先代以前の魔王の伝説がほとんど残されていなかったのはそういうことだったんですか」

ジャン達は、神殿や村の長老などから伝説を聞かせてもらい魔王の城に乗り込むための情報を得ていた。だが、先代以前の勇者や魔王の話は全くでてこず気にしてもいなかった。

マルコはロッドの知識の深さはもとより、それを組み立てるだけでここまで謀略を露にしたことに感嘆した。

「ただ、私にも疑問があったのです。あの陛下がなぜソロモンの石のことを知っていたのか」

「王ならそういった禁忌の伝説は伝わっているのでは？」

「いいえ、ソロモンの石を利用しようとする王がいたからこそ、消された伝説なのです。」

陛下は武王で、2年前までは魔王にも興味をお持ちではありませんでした。

私が作成した大作「魔王の顕現と賢者の相互性」をページも読まずに王子達の遊び紙にされたぐらいに」

ロッドが悔しそうに歯ぎしりする。

「では、誰かがソロモンの石のことをお耳に入れたということですか？」

「もしくは、それを欲する誰かが王を動かしているのではないかと」
ジャンは、ロッドとマルコのやりとりを苦々しげに聞いていたが、腑に落ちたように静かに言った。

「ウルノーゼの瞳が動いていたということは、先王陛下が後ろで動いているかもしれないと」

「ええ。君たちの話で、ようやく最後のピースがはまった気がしました」

三人は、脱力して座りこんだ。

そんな巨大な陰謀のほんの一駒だった自分たちが、台無しにしてしまったのだ。

「よく僕たち生かされてるな」

「八つ当たりで罪を着せられてもおかしくないな」

「村をそんな理由で消していたなんて……」

「皆さん、そんなにのんきにしていって大丈夫ですか？」

三様の思いに浸っていたジャン達をロッドが厳しい顔で言った。

「ミヤはバルロに向かったそうですが、そこから更に北の地へ向かったのだと思うのですが」

「北って、ドスト？もしかして僕の村のことを調べるために？」

「今私たちが話していたのは、全て情報から導きだした答えです。」

あの子は、その確証をもってあなた達を説得しようとしているんじゃないかと」

「あの馬鹿女、ドストは旅人が一人で歩くような場所じゃないのに」

「あのお嬢ちゃんの性格ならいっちゃんだろうね」

「ジャン様、マルコさん、僕行ってきます。行ってあいつを捕まえ

て帰ってきます」

「パット、行ってくれるか」

「私も同行しましょう。彼女の動向が王に伝わっても私が一緒であれば調査という面目もたちますし、ちょっと行きたい所があるんですよ。それにただ連れて帰るだけじゃミヤも、そしてパット君も納得しきれないでしょ？」

「僕が？僕はジャン様やマルコさんのおっしゃることを信じます」

「でも、あなた方の置かれた状況を考えると、きちんとした確証を得ておくことも必要だと思いますよ」

「ではロッド先生、二人をお任せしてもいいですか？」

「まかせてください。といたいいところですが荒事のお役には立てませんが」

「パットもだいぶ腕をあげたし頼りになりますよ。」

でもドストは魔物の話も聞くし、護衛を手配しておきます」

「お任せします。では少しでも早く彼女を捕まえましょう。やはり彼女一人というのは心配ですから」

「ロッド先生が心配した通りの展開になってどうする、馬鹿女」

「ごめん、無茶して。来てくれてありがとう」

「でも、そうじゃなきゃここまでの話にならなかったしさ。」

それにボクも振り返りたくないからって考えることをやめてたんだ。だから僕もありがとうって言わなくちゃ」

パットと二人きりでこんなに喋ったのははじめてだった。

いつもジャンかマルコにくっついて、私に威嚇する少年。

弟が出来たようで私が一方的に絡んでいたけれど、彼から私に向かってきてくれたのはあの夜が初めてだった。

あの時嫌われてもう今までの様にはいかないと覚悟したけれど、
今、手をとり笑い合えている。
それがとても嬉しかった。

「お邪魔してもいいかな？」

「ロッドさん、おかえりなさい」

「ロッド先生、あの、ご迷惑をおかけしました」

「いえいえ、あなたとこうやって無事に会えて本当によかったですよ」

「来てくれて本当にありがとうございます。やっぱり私一人じゃ何もできなくて…」

「ここまで来ておいて何いってんだよ。普通の女じゃ旅証もないのに2つも領境を越えたりできないぜ」

「まあまあ。話はまた明日にでもしましょう。そろそろ熱が出てるんじゃないですか？」

今夜はゆっくり休まなきゃいけませんよ。

この薬湯を飲んで、あと塗り薬をもらってきますから塗っておいてくださいね」

ロッドに渡されたカップの中には、抹茶のようにどろりと濃くて苦いお茶が入っていた。

それをむせながらもなんとか飲み干す。

「パット、これよろしくね」

「おい、よろしくってなんだよ、ボクに塗れっていうのか？」

「他にいないし。よろしく」

「馬鹿女！お前に憤りてないのかよ」

「薬塗ってもらうのと憤りてなんの関係があるの？」

「だつ、だから、男に簡単に肌を見せるな触らせるな！」

「手が届かない背中だけ頼むくらいいいじゃない。そのくらい我慢できないくらいケダモノだったんだ？」

「なんでボクがケダモノなんだよ」

「ミヤ、あまりパットをいじめないであげてくださいね。じゃあ私は隣に部屋を借りたのでそちらにいますから、何か余計なことをされたら叫ぶんですよ？」

「もちろんです。その時はまたかけつけて助けてくださいね」

「いや、さっき助けたのはボクなのに」

「それではまた明日」

「先生、おやすみなさい」

「ボクを無視するなー！」

ロッドがもらってきた打ち身用のかなりきつい匂いのある薬で湿布を作り、照れを隠しキャンキャン文句を言いながらうパットに貼ってもらった。

彼は隣の寝台で休み、夜中に熱でうなされる私の額に冷たい布をあててくれ、時には冷たい水を飲ませて看病してくれた。

翌日の昼過ぎ、目覚めた時には熱も下がり、身体の痛みもだいぶ引いた。

相変わらず湿布を貼ってはいたがなんとか動けるようになった私は食堂から食事をとってもらい、大事をとってもう一晚このまま宿に滞在することになった。

そして起きている間は、寝台の中で逃げ場のない私と巻き添えをくったパットに、ロッドはひたすらこの国のことや魔王についての歴史的見地について語り続けた。

22・ソロモンの石（後書き）

ロッドさんバツイチエピソードを出せてほくほくしています。

マルコはもつとワイルド系にする予定だったのですが、

しつかり屋なのが仇になり、本来はロッドさんをあてる予定だったお父さんポジションにはまってしまいました。

なのでロッドさんは言いたい放題やりたい放題してもらいましょう。

23・魔剣の女王

私はヨールトを出ると再び北へと向かった。

もちろん、パットとロッドと一緒にだ。

旅馬車で移動するつもりだったがこの後は村が点在するばかりで、旅馬車の本数も1日1本になる。

もちろん、魔王に滅ぼされたという村々へ向かうものはないらしい。それで私たちは貸し馬車を調達した。

北端の村まで向かうというとは北へ向かう場合返還率が低いので保証金で5000ドル、レンタル料と合わせて1万ドルをとられた。無事に戻ってきたらそれは返してもらえるが、魔王が滅びた後からは魔物が多く出るようになり帰ってきたことないんだよと貸馬車屋のおじさんはため息をついた。

少しくたびれた二頭の馬が引く幌馬車は、旅馬車より小さいけど快適だ。

御者台にはパットが座り、私とロッドさんが荷台に座る。

気持ちが悪く落ち着いたからか、あの夜のようにロッドさんが側にいても大丈夫になった。

ただ、触られるとまだ少し体が固くなってしまうけど。

街道沿いでも時折夜盗や魔物が出るといので、出発前に装備をととのえた。

パットはボウガンと中剣を持ってきていたがそれでは心細いので、中古の小剣を一振りとロッドが使える弓を1組。

武器も魔導が使えない私は、洞窟に行った時のように兵器もどきをつくった。

地油を小瓶に詰めての火炎ビンもどき。

そして食料品店で、この地のアルコール度の高い地酒と、小麦粉、

香辛料に塩を購入し、荷台に乗せた。

街を発した時に、私は後ろを振り返らなかった。

あの嫌な思いはあの街に置いていこう。

今の私にはやらなきゃいけないことがあるんだから。

「ミヤ、その格好一緒にいるのが恥ずかしいんだけど、なんなの？」
半日ほど麦畑の中の一本道を進んだ。

ここは安全だというパットの言う通り、一面の麦の青い穂が風に波打ちまるで海原のようだ。

荒んだ空気も感じず、牧歌的な雰囲気に私はギルタを適当につまびいていた。

馬車を進めながら振り返ったパットは、頭に布を巻いた私にあらさまに眉をひそめた。

「南からきた吟遊詩人よ。私のことはサーワと呼びなさい。パットは用心棒にしとく？」

「はあ？なんでボクがそんなこと」

「今の世を忍ぶ借りの姿は、勇者の歌詠みのために伝説を求めて旅する吟遊詩人サーワなの。よそ者がこんな田舎をうるついでたら不審者でしょうが」

「確かに、私たちが国王の陰謀をかき回ってることを知られるのはまずいですし、土地の者にいららない心配を与えます。

ミヤは旅証もサーワの名になってるようですし。
ということとでその作戦に乗りましょう。

私はどうしましょうかね。用心棒とは言えませんが……」

「先生は先生でいいんじゃないですか？被害調査に来た学者で、たまたま街で知り合い意気投合したってかんじで」

「いいですね。私の肩書きは王立学院所属となっていますし、何かあって問い合わせあれても問題ないですから。

じゃあ、パット君はこの土地の出ということで案内人をお願いしましょう。

用心棒はもうすぐ合流しますし」

「用心棒？」

「マルコさんが手配したと言っていました。ほら、見えてきましたよ。」

海に浮かぶ島のように、唐突にこんもりとした森があった。

その入り口に白い壁の家が集まる集落がある。

「あれがリウトの村です」

「パットちゃんじゃない！」

「ジル！」

村の入り口で、金髪を顔のまわりで短く切りそろえた大柄な女性が待っていた。

パットは馬車を止めると、ジルと呼ばれた女性に駆け寄った。

「怪我はもう大丈夫なの？」

「ええ、ほらもうこの通り！」

ジルはいきなりパットを抱き上げぐるぐると振り回した。

「うわあ、ジルやめてー」

「うふふふ、マルコ殿に鍛えられてるのかしら？ちよつとは身体が出来てきてるじゃない」

「うふふじゃないよ、早く降ろしてよ」

その後10回ほどまわされたパットは、解放されると気持ち悪そうによろめいていた。

「あなたがマリーリィさんですか？」

「ええ、マルコ殿から手紙をもらいました。

あなたが学者のロッドさんですね。」

「ええ、はじめまして。ロッドです」

「私はジル・マリーリィ。ジルって呼んでくださいな。そしてこちらのが月の御子様ね」

「初めまして。サガワミヤ、ミヤって言います。」

あの、今変装中なので人前ではサーワと呼んでください」

「まあまああ！ジャン殿と同じ黒い髪と目なのね。日に当たると象牙色なのに近くで見ると白くてすべすべ！私の妹になってくださる？」

金の髪のお姉様は強引に私を抱き寄せ、肯定の返事をするまで離してもえなかった。

「ジルさんは、マルコやパットとお知り合いなんですか？」

「あら聞いてなかったの？私は魔導士。魔王討伐隊の一員でお二人やパットと一緒に戦ったのよ」

そういえば、魔王の城の入り口の封印を解くのに力つきた隊員が、近くの村で療養していると以前聞いたつけ。

「あれがジルさんのことだったんですね。もうお体は大丈夫なのですか？」

「ええ、怪我をしたわけじゃないし、10日もひたすら寝たらこの通り体力も魔導力も戻ったわ。

すぐに皆の所に行く予定だったのだけど、このあたりは最近夜盗の被害が多くて討伐を手伝ってたのよ」

魔導士は、各国の魔導院に所属しており導服が定められているのだそう。

王宮でも何人か見かけていたが、ジルは修道士に似た首から足下まで包む青い長衣に身を包んでいた。

長衣はウエストから下が開き、白い腹の下、腰から伸びる長い足をびったりと覆う水色のズボンに黒い厚皮のブーツが、神に祈りを捧げるのではなく戦う存在であることを示している。

ジルはジャンと同じくらいの背丈で、魔導士と思えない鍛えられた身体と豊かな胸が、導服の中で窮屈そうに見える。

魔導士は文系のような人達かと想像していた私は、お日様のような笑顔と頼もしい雰囲気、美人だけど女性版マルコだなとこっさり思った。

その印象に間違いはなかったようで、後でパットから彼女が「魔剣

の女王」という二つ名で呼ばれていることを教えられた。

魔導と並び剣術にも秀で、他の魔導士が術の発動に杖を使うが彼女は剣に術を纏わせて戦うのだそうだ。

私たちは、ジルに案内されて彼女がお世話になっているという村長さんの家を訪れた。

人の良さそうなお年寄り夫婦に歓迎を受けて

私たちは昼食をごちそうになった。

ジルは村人にとっても感謝されているらしく、ロッドが王都から来たと知ると皆が王都に戻ったら功績を伝えてくれるように頼んでくる。そして夜には、村中で歓迎の宴を開いてくれることになった。気を使わなくて欲しいと頼むが、好意なので断われきれない。

「なかなか落ち着けなくてごめんね。

娯楽とかない村だからお客さんが嬉しいのよ。

だから今夜は楽しんでね」

ジルは村の女性達と宴の準備を始めたので、私はパットと子守りを請け負った。

パットは男の子達に囲まれて、剣術ごっこに付き合っている。

私は女の子や小さい子達を集めて、シャボン玉遊びをすることにした。

お椀を1つ借りお湯をもらってくると、石けんをナイフで削って溶かし石鹸水を作る。

稲のような茎の中が空洞になっている雑草を探し、ナイフでストロ―ほどの長さに切ったのを何本か用意した。

広場の木の下に腰を下しシャボン玉を吹く。

私の手元からきらきらと虹色に輝く珠がふくらんでいくのを目をまんまるにして見ていたが、

それが私の手元から離れてふわふわと浮かび飛んで行く姿を見て歓声をあげる。

次々としゃぼん玉をつくと、それを追いかけて走り回った。

ただどしゃぼん玉はふいにはじけて消えてしまう。

捕まえようと手を伸ばした子どもの手に触れるとパチンと割れてしまう。

目の前のシャボン玉を失い驚いて泣き出す子もいたが、またすぐにシャボン玉が飛んでくると笑顔に戻って走り回った。

「おねえちゃん、これって魔導なの？」

「うっん、シャボン玉っていうものだよ。」

お洗濯で使う石けんを溶かしたものにこうやって筒の先をつけると、ほら、先に膜ができてるでしょ？」

「ガラスみたい！」

「そうね。ガラスと違って柔らかいから、こうやって息を吹いてあげると膨らむの。」

で、空気がいっぱいになるとひとりでに珠になって飛んでいくんだよ」

私は女の子達に茎を手渡すと、石鹸水の器を置いた。

女の子達が作る大小のシャボン玉は、日の光を受けてきらめきながら次々と空へとのぼっていく。

木の枝を振っていた男の子やパットが、手を止めてぽかんとこっちを見ている。

私は子ども達の様子に目を配りながら、首にかけていたギルタを外すと、音をはじく。

シャボン玉を追うのにくたびれた子達が、音に惹かれて私の周りにくっついて座った。

「何か歌って！」

「じゃあ、シャボン玉の歌ね」

世界は違うけど、子どもの笑顔は変わらない。

私も小さい頃、家の庭でお母さんと一緒に歌いながらシャボン玉遊

びをしてたな。

そんなことを思い出しながら、懐かしい歌を歌う。

子供達も覚えて一緒に歌えるよう、1番をくりかえす。

3回目になると、もう一緒に歌える子がでてきた。

6回目になると、全員で大合唱になる。

空に舞うシャボン玉を追いかけるように、子供達の歌声が村中に響いた。

「驚いたわサーワちゃん、本物の吟遊詩人みたい！」

夕方になり母親達が迎えにきたので、私は手を振って見送っていた。そこへやってきたジルが私を豊満な胸に抱きしめられる。

私が助けを求めるようにパットを見たが、あきらめると首を振られた。

「僕もびつくりしたよ。あのシャボン玉っていうの。ミヤが魔導を使えるのかと思っちゃった」

「水系の人達が使っあんな泡を出す攻撃呪文があるから、最初見た時焦ったわ。魔導なしでもそんなことが出来るのね」

「私の国は魔導がないから、自分たちの手で色々作ったり理論的に解明する科学が発達しているんです。」

「本当にあなたは、遠い別のところから来たのね」

そしてまた、ジルに呼吸困難になりそうなほど抱きしめられた。

その晩、私たちはその広場で宴に招待された。

キャンプファイアーのように木材を組んだき火の周りに布が敷かれ、その上に食べ物や飲み物が所狭しと並べられる。

前の街で買ったお酒の瓶を1つ提供すると男達から歓声があがった。私は果実酒をお水で割ったものをもらう。

パットは大人達に混じって同じお酒をもらっていた。

ロッドは村を訪れた時から今も、ずっと長老の側に座り語り合っている。

そしてジルはというと…

「サーワちゃん、このお肉はベリーの实のソースが絶品なのよ。あ、お肌のためにお野菜は大事よ。ちょっと、そのサラダをとってくださる？」

「一人で食べれますから降ろしてもらえませんか？」

「だってまだ身体の痛みはとれてないんでしょ？遠慮しないでいいから、ほら食べて」

…私のお尻の下にいた。

いや、正しくは彼女の膝の上に私は座っていた。

宴の前に連れて行かれた彼女の部屋では、湯浴みの支度がしてあった。

一人で出来ると断るも抵抗むなく、にこやかかつ強引に素っ裸にされた。

そして私の身体を見た彼女は、痛々しい暴力の跡を目にし、ドアを閉めるのを忘れるほどすごい勢いで部屋を飛び出していった。

この広場に来た時、二人がジルを見て怯えていたことから、どうやらジルに締め上げて色々聞き出されたらしい。

それからはこの通り、彼女は私に過保護なほど世話を焼きだした。

パット曰くもと世話好きなんだそうだが、彼女に向けられる村の男達の熱い視線の中で彼女を独占している私はとても居心地が悪い。

「サーワちゃん、ほらあーん」

ジル手づから一口大に切った肉を私の口に入れてくれる。

私が頬張りもぐもぐと口を動かしている間に、木の実を練り込んだパンが盛られたお皿が置かれる。しかもいつの間にか木いちごのジヤムまで塗られてる」

「ジルさんも食べてくださいね」

「私はサーワちゃんでお腹いっぱい胸いっぱいよ！」

「わ、わかりました……」

その晩、私が彼女から解放されたのは村人に歌詠みを乞われた時だけだった。

23・魔剣の女王（後書き）

すっかり忘れかけていましたが、ジャンの隊にもう一人いたのでした。

男ばかりだったので素敵なお姉様を登場させたつもりでしたが、会話を見ると「オネエ」な匂いがするんですね…

今回は「魔剣の女王」ジルが暴れます。

24・魔導と科学

剣士であれば、出自を問わず実力を持つものは認められ、讃えられる。

だが、彼女は魔導士だった。

魔導士の世界は血統が重視され、力が強ければそれだけねたみやそねみの対象となる。

ジルは没落した侯爵令嬢だった。

高い魔導の力と技術を持ちながらも、魔導士達が野蛮と影で厭いあざ笑う剣を好んだ。

本来は魔導騎士団の隊長クラスの力を持つのに万年準隊員なのは、剣を魔力に宿し魔剣とする彼女の力を異端とみなされてるからだその後日ジャンが語った。

だが、騎士の心を持ちいかなる時でも威風堂々とした彼女は、実力を認めるものには敬意を込めて、悪意あるものには傲慢と揶揄され、魔剣の女王という二つ名で呼ばれる。

こんなにすぐに彼女の腕を見ることになるとは思わなかった。

私たちは、一番近くの滅びの村「リーゾ」へ向かう森の中の道を進んでいた。

宴の二日酔いで苦しむパットの代わりにジルが手綱を握っていた。

その馬車が急に止まり、

彼女の鋭い叫び声が聴こえたと思ったら、何かをはじき落とす音と馬車の幌の屋根付近を突き抜けるものがあつた。

「夜盗のようですね、私たちは後ろを守りますから、あなたは隠れてください」

ロッドとパットはそれぞれの飛び道具を手に盾となるよう一番後部に置かれた木箱の影に構えた。

私が首を出すと、馬の前にジルが仁王立ちになり、その前に立ちふさがる男達とにらみ合う。

ジルの肩越しに私に目を留めた真ん中に立つリーダーらしき男がにやりと笑った。

「乳臭いがもう一人女がいたのか。ついてるな」

「お前達、命が惜しければこのまま去れ」

「おねえちゃんが噂の夜盗狩りをしている女か。魔導士が剣を持つなんて珍しいが、これだけの人数を倒せるかな。

それだけのべっぴんなら殺すのは惜しいな。

ちようどいい注文があつたから生かしといてやるよ」

人売り？ 私の顔は青ざめた。

街で私を襲った男のことを思い出し頭がパニックになる。

「では引かぬというのだな」

ジルは剣を盾に構えると詠唱する。

すると彼女の白銀の剣が真つ赤なベールを纏った。

夜盗達は一瞬腰が引けたが、リーダーの「術を使う前にやれ」

という声に一齐に駆け寄ってきた。

だが赤い刃が振るわれると、炎を纏った旋風を起してふるった先の男をなぎ倒し、横から切り掛かった男の刀を彼女の剣は易々とはじき飛ばした。

金色の髪を乱すことなく赤く燃える剣を手に舞のように戦う姿に、私はすっかり魅了されていた。

前方にいた男達をあつというまに彼女がなぎ払い、彼女が馬車のほうを振り向いた瞬間顔色を変えた。

私が怪訝な顔をしたところで、森の木々に隠れて馬車の側面にまわった男達が飛び出してきたのだ。

「え、やだ、きゃーーーーー」

私は悲鳴をあげた。

ジルの剣を右側の男に向け振るい炎の弾丸で打ち倒したが、左側の

男達はそれより早く馬車の側に寄ったので攻撃が出来ない。
パットが剣を手に荷台から飛び降りたので自然男達は私がいる先頭のほうへ押し寄せた。

「やだ、こないでー」

私はさつきから手元に用意していた小麦粉の袋をやぶると、男達にぶつけた。

不意の攻撃？に男達の動きが止まる。

「きらい！変態！どっかにいってー」

もうもうと白煙が立つところに、地油の瓶のお手製ダイナマイトに火をつけ、馬車から１メートルはなれた所に投げつけた。

道端に炎があがった瞬間、

ボウツという音突風の音をはらむ炎の固まりが下から上へ嘗め上げるように男達を包んだ。

その炎は馬車の横に広がったが、あっというまに消え失せた。

物を燃やすような火力でもなく、防火加工を施してある馬車の幌には焦げ後ひとつつかない。

だが、男達は悲鳴と叫び声をあげてしゃがみこんだり、髪の毛についた目を転げ回って消している。

「パット！ジルさん！今よ早く！」

私の声に立ちすくんでたパットとジルはすぐに動き、剣をつきつけて男達をひとところに集めた。

「ミヤ、今のも魔導ではないのですか？」

私の後ろで慣れない小剣を構えようとしていて一部始終を目撃したロッドは、目を光らせながら詰め寄ってきた。

これって、教えて大丈夫なのかしら。

どう説明したものかと悩んでいたら、ジルの声が助けてくれた。

「ロッド殿、それは後にしませんか？ 彼らにお聞きになりたいこ

とがあるのでしょうか？」

「そうでした、つい興奮してしまってますみません」

「あなた達はリーゾや滅びの村が今どうなってるか知っていますか？」

「こやかに丁寧に見る。」

男は誰が教えるかとそっぽを向こうとしたが、その背後に立つジルの「滅びの村？ああ、魔物にやられてなくなった村だろ。あそこに向かったのか？」

「他にも何かあるのですか？」

「てつきり俺らのアジトを襲いにきたのかと??」

「おい」

「あ、やべえ」

「この森は滅びた村全てに繋がってるからって他の村の人達もあまり足を踏み入れないと聞いていますがどうしてですか？」

「俺たちも最初は気にしてたけど、黒い悪魔が出るのは魔王領側のラーデあたりだから、平気なのさ」

「黒い悪魔？」

「村が滅びた時、黒い悪魔の軍団が森の中を歩いてたって、もとこのへんを根城にしていた奴らがみたって噂しててさ。そいつらも、リーゾが滅びた時に一緒に消えたんで、俺たちが今アジトにしてるんだけどよ。」

あれは噂通り悪魔にしか出来ないひどさだぜ」

男達は滅びた村の跡をみてるのだろう、怯えを見せた。

「でも、まだ黒い悪魔が出るっていいましたよね？」

「ああ。噂がまちまちなんだが、魔王がいなくなったっていうんで魔王城のお宝を狙おうとした奴らはやられるらしい。」

近くに裏街道があるんで、そこを通る旅人や商人なんかは、何も合わなかったっていうんだがな」

「あ、俺もその黒い悪魔のことは聞いたぜ。なんかやたらでかくて

斧を振るってたって」

「なるほど、そうですか…」

「ロツド殿、そろそろ行かなくちゃ、このあたりは小物ですが魔物も出るのでここで夜を明かすのはまずいかと」

「では、この人達はどうします？」

「ここに縛り付けて置いてもいいかしら…」

「か、勘弁してくれ！こんなところで縛られてたら明日の朝までに死んじゃう」

「だからって野放しには出来ないのよね」

考え込んだジルさんは、面白い事を思いついたとばかりに婉然と微笑んだ。

「ま、少しは怖い思いをしてもらいましょう。パットちゃんとロツド殿、ロープを持ってきて皆をその木に縛ってちょうだい」

二人は倒れてる者も含めて全ての夜盗を木に縛り付け、持っていた武器や防具を全て取り上げた。

それらをジルが魔法で燃やし灰にする。

その威力を見て怯える夜盗達のまわりに、今度は私が拾ってきた小石を取り囲むように置いていく。

ぱっと見ただの石だが、渡した時に手の中で術を込めたのが分かっていたので、何か仕掛けなのだろう。

そして、彼女が手首のブレスレットに向かって何か唱えると、一羽の青い鳥が現れ飛び立った。

「あなた達は一晩ここで過ごしてもらうわ。私が命だけは保証してあげる。世が明ければ迎えが来るからそれまでいい子にお待ちなさい」

悪魔だ魔女だと悲痛な声の罵倒を背に、私たちは出発した。今度はパットが手綱をとり、ジルと私は並んで座る。

「ジルさん、あの人達大丈夫なんですか？」

「ええ、日が落ちている間はウサギより大きいものは入れない守りの壁の術を仕掛けて置いたから大丈夫だと思うわ」

「あの石が術の？」

「そうよ。あれが境界線になるの」

「魔導ってそんなことも出来るんですね！ジルさんすごいなー」

私が感嘆の声をあげると、私に抱きついて顔をすり寄せる。

「サーワちゃんだってすごかったじゃない。あんなことが出来るなんてびつくりしたわ」

「そういえば、あれはどういう仕組みなんですか？何か白い粉を投げてましたが」

「あれは小麦粉ですよ」

私はそういつて、足下に置いている私の戦闘道具を入れた袋から、ひとつつみの袋を取り出した。

「これは、先日街の食料品店で買ったものですよね？」

この世界、というかこの国の主食はイモかパンで東欧の食文化と似ている。

機械がないので、かなり荒い製粉が主流だけど、ちょっと奮発して高いのはかなり細かく挽かれた真っ白な見慣れた小麦粉だ。

粉屋さんで量り売りしているのを、何袋かに分けてもらい買い込んでいた。

「ただこの袋をナイフで破ってぶつけるだけなんです。で、粉が舞っているところに、この瓶に入ってる地油の瓶で粉の待ってるあたりに火をつけると、ボン！」

私がパチンと手を鳴らすと、身を乗り出していたロッドがおおげさに後ろにのけぞって驚いた。

「これは粉塵爆発といって、可燃性の細かい粉が沢山空气中に舞っている時に火をつけると、その塵が燃えて爆発みたいになるの。」

小麦粉だといった間に消えちゃうからダメージはあまりないけ

ど、びつくりはさせられるでしょ？

授業で先生がやってるのを見せてもらったけど、外だと風があるし、うまくいくか心配だったんだけどよかった」

「ミヤの国の少女少女は様々な分野学ぶと言っていました、こういう戦い方も教えるのですか」

「ロッド先生誤解しないでね。これは戦うためじゃなくてただ原理を知ることと事故を防ぎましょうっていうか……。私がやったことは絶対やってはいけませんって言われてることなので真似しないように」

「なるほど。事故を防ぐための知識ですか。」

「この国ではないんですか？小麦粉みたいな穀物の粉を作ってる工場、作業場っていうのかな？あとは家畜の飼料を矯めてるところなんかで偶然、粉塵が発火して爆発する事故。家庭の台所だって起こることがあるかな。」

多分、実際にはそういうものだってかんじで漠然と知っている人はいると思いますよ。

ロッド先制、これって兵器にも繋がることだから陛下には内緒にしてもらえませんか？

自分達で考えたことならいざしらず、私はそういうことに使って欲しくないから」

ロッドは報告書には乗せないことを約束してくれた。

魔導で火を操ることが出来るジルだったが、そういったことが火災の原因になることに驚いていた。

火災にかかわらず、人が亡くなった時には故意か事故かは「監察官」が調査にあたる。

彼女も一時期勤めたことがあるという監察官は、状況も検分するが主に魔導で思念や術の痕跡を拾い判断するのだそうだ。

悪意があれば犯人を捜査し、なければ「事故」として扱われ細かい事故原因の調査などは行われぬ。

滅びの村でも監察官が調査にあたったが状況証拠を調べるのではなく、村にうずまき強烈な思念が魔物に教われた者と同じ恐怖の色だったことから「魔物の襲来」と断定されたのだそうだ。

この世界には魔導があり、物に込められた思念や思考すらつまびらかになるからこそ、事実から理論的に解明していくことがあまり重要視されず意識が薄い。

「事故の原因を特定しかったら、再発防止が出来なくない？」

「そうだね。それは確かに私たちの社会が目をそらしている問題点の一つだよ」

ロッドは歴史学者として、社会学者として何百年も社会、そして文化の発展性が低いことを指摘した。

彼の研究が重きを置かれないように、冷静に時代を検証する者があまりにも少ないからだ。

私たちの世界は魔導がないからこそ科学が発達し、ロッドが求めるものに近い社会かもしれない。だけど、それが決して平和ばかりでも皆が幸せなわけでもないんだけどな。

話がどんどん専門的なものになりジルが相づちを入れたり質問を投げるが、ついていけなくなった私は二人が交わす議論をぼんやりと聞いていた。

あたりが黄昏色に染まる頃、私達は予定よりも遅くにリーゾへ着いた。

森の中に拓かれたその村の光景に言葉を失った。

村の入り口にもつけられた広場から放射状に道が広がる。その両端に並んでいた家々があつた場所には、影のように黒々と炭化した柱や梁が積み重なっていた。

そして広場の中央には大きな土山が3つ並び、その前にしおれた花が手向けられていた。

滅びた村での埋葬は、一人一人を埋葬するには死者の数が多すぎるのと一体ごとに遺体を揃えることが出来なかったので、このように

一緒になっているのだとパットがぽつりと説明した。

皆で村の外にそよぐ白い花を手折り土山の前に添えた。

そして私は手を合わせて、各々なりのやり方で死者の冥福を祈った。

24・魔導と科学（後書き）

今回はちょっと理屈っぽくなってしまいました。

粉塵爆発は、女の子が投げつけられるような量の小麦粉で屋外という条件では濃度があがらなくて難しいんじゃないかなと思います。

そのへんは、目をつむってくださいまし。

むーん。

もう少しシリアスに進みます。

25・古木の傷跡

私たちは滅びの村々を巡った。

廃墟となり誰も住まない村で、瓦礫を調べ魔物の爪痕を探す。

村を取り囲む森も調べるが、大型の獣の侵入の形跡すらみつからなかった。

4日目に訪れた村は、パットの故郷のだった。

彼が語った凄惨な日のことを思い出し、その場所を訪れることに心配していたが、杞憂に終わった。

自宅があつた場所に、道中摘み集めた花束を手向け、静かに祈っていた。

そして、一軒一軒の家を巡りながら、かつてここに住んでいた人達のことを語った。

あの時には出来なかった、別れを告げるように。

この村は他の村と少し違うことがあつた。それは、樹齢を重ねた杉のようなミゼという大木が周囲に多く、長老の家の裏にはこの村のシンボルだったという巨木があつた。

人の頭の上の高さで裂かれ枝葉があつたであろう梢はない。大部分を焦がし失いながらも、火のあたらなかった幹の一部は生き残っていた。

パットは、大人が三人取り囲んでも手がまわりきれなかったという炭化した木の周囲をゆっくりまわる。

きっと色々な思い出がある木なんだろう、私たちは少し離れて瓦礫の様子を見ていた。

すると、パットが声をあげ、私たちはかけつけた。

幹のほとんどを失いながらも、一部だけ焼けずに残り、傷跡の横から新しい命が芽吹いていた。

「この木は、村ができるずっと前からこんなに大きかったんだっ

て。

皆、村の守り神だつて大事にしてたけど、子どもが大好きな遊び場だつたんだ。

村長のじつちゃんのとこのニッチと、よくこの木のどこまで登れるか競争した。

初めて上った時は枝3つ目までだつたけど、10になる頃には一番上の枝まで登れたんだ。

でも二人とも降りられなくなって、あの時はめっちゃめっちゃ怒られたよ。

決めた枝まで最初に上った方が、自分の名前を刻むんだ。それも跡でじつちゃんにばれて無用に木に傷をつけちゃいけないって一日ご飯抜きだった」

ん？

傷：傷跡？

皆、パットが思い出を語るのを聞きながら再生の息吹に心を奪われている時、

私は幹の細長い挟られたような跡を見ていた。

「ねえ、この木のここ見て？」

「ミ、サーワ、どうした？」

未だにサーワと呼びにくいらしく一発で出てこないパット。

私は三沢さんじゃないぞ。

名前の使い分けは今後必要かもしれないから、柔軟に対応してよ。

「これ、なにか尖つたものでついた傷だね。あ、ほらここには何か固いものが擦った跡がある」

「何かありましたか？ミヤ」

ロッド先生は…しょうがないか。

これには最初からあきらめている自分がいる。

何かあった時はうまくフォローしてくれそうだしね。

「ジルさん！」

「はい、なんででしょう？」

「確か思念の残滓を見る術を使えるんですよね？」

「元監察官ですから思念抽出の魔導は使えますわ。ただ、物に移った思念は火が消してしまうのです。

動植物、遺体は完全な炭か灰にならなければ読みとることはできませんけど、調査報告では、燃え残った遺体からかろうじて思念回収は行われたものの、黒い悪魔という恐怖に全てが塗り込められていたと…」

なので、ここでこの術は役に立たないんです」

パットに目をやりながら残念そうに告げた。

「ですがジルさん、このミゼの木、この傷を受けたところはまだ生木ですから…」

「そういえば！」

「これなら行けますわ！ちょっと皆さんは慣れてくださる？」

ジルは皆を下がらせ、傷跡に触れながら妖艶な赤い唇を動かし術を唱えた。

すると傷口からするりと白い光球が生まれて浮かび上がり、それはスクリーンのようにある光景を映し出した。映像だけの無声映画みたいだった。

それは燃える村だった。

向いの家から出た人を切り裂く黒い騎士。

赤ん坊を抱え逃げ惑う女に容赦なく振るわれる黒い剣。

そして、いきなり映像に黒いものが遮った。

それはどんどん遠ざかり、この木があった家の裏口から出てきた老人を正面から一刀に切り捨てた。

「ちょ、長老っ」

パットが小さい悲鳴をあげた。

揺れる細い肩をあわててロッドが抱き支えた。

そして、煙に巻かれ、倒れ込むように扉を出てきた小柄な少年を見た時に絶叫に変わった。

「ニツチ逃げる！やめろー！」

パットの制止が届くはずもなく、少年の胸に剣がめりこみ身体ごと持ち上げられると崩れかけた建物の中に投げ込まれ、炎の中に消えていった。

私は声も出さず動くことも出来ず、端から見れば映画かTVでも見ているように目の前の映像を見つめていた。

それから兵達の姿が消え、ただ燃え盛る炎ばかりが映されこれで終わりかとおもった時に、一人の男が木の下にやってきた。

「ヤンさん！リールー！？」

ヤンと呼ばれたのは右手にさびた剣を持ち、もう一方の手に幼い娘を連れていた。

ここまで走ってきたのだろう。息を切らし木にもたれて休んでいたが、そこに再び黒騎士が現れた。

先ほどの黒騎士とは違い、黒い杖を持っている。

魔導士？

そう思った瞬間に映像は炎に包まれた。

娘を抱きかかえ地面に転がるイチの姿が映像の端に移った。

ヤンは娘を木の後ろに向かって、映像の外に背中を押しやった。だがすぐに、娘を見送ったヤンの顔が歪む。

何があったのか！？

私たちは彼より手前、木の後ろから黒い剣が向けられていたことで察した。

ヤンは叫びながら、なりふりかまわぬ拳を振り上げ剣に向かって飛びかかった。

そして…

魔導士は、先ほどより少し時間をかけて呪文を唱えると、映像は長い間炎ばかりを映していた。

白い光は消えた。

ジルは、木の傷をそつと撫でた。

「長老、ニツチ、リールー、おじさん…」

膝をついたパットは、地面を叩き、かきむしり、顔を土にまみれながら叫び泣いた。

この村に来て、はじめて流した涙だった。

「ミヤ、大丈夫ですか？」

ふいに肩に手を置かれ、私は肩を強ばらせた。

「… 顔色が悪いですよ。馬車で少し休んできなさい」

「ーごめんなさい、ただびっくりしたただけなんです

そう言っただけだったけど口から声が出てこず、

心配そうなロッドに背を向けて村の入り口へと一人向かった。

私はショックを受けていた。

木に残された思念の映像ではない。

それを見た自分のことだった。

凄惨な光景なのに、まるでTVのニュースを見ているかのように一人冷静だった自分が怖かった。

この間の夜盗で教われた時は、夜盗達に怪我を追わせたことより、自分や仲間が助かった安堵しか心になかった。

私はどうして傷つけた人を見て何も感じなかったの？

私はどうして理不尽に殺される人を見て平気なの？
この村に起こった悲劇に涙が出ないの？
そして、どうして安堵しているの？

馬車に戻った私は、

荷台の片隅で膝を抱えてうずくまっていた。

――胸が痛い。

ガラスが肌を突き抜けるような痛みが胸を貫く。

何が痛いの？

何が苦しいの？

自問自答しても分からない。

ひとつ分かるのはその痛みが心の内側からだということ。
そしてその内側にたゆたう混沌の海に浮かぶひとつの感情…

私たちは夜通し馬車西の魔王領境へと馬車を走らせた。
今夜の私たちはとても無口だった。

ジルが魔導で車のヘッドライトのように前方を照らしながら手綱を握る。

パットは疲れたのか馬車でロッドにもたれて眠っている。

ロッドは村を出てからじっと考え込み、

私は、荷台の後ろの見張りをとめながら物思いにふけっていた。

村の人達に手をかけた、火を放ち滅ぼした黒い騎士のことをすぐに
戻りジャンに伝えるべきだとパットが主張したが、ロッドとジルは
首を横に降った。

いくつもの村が犠牲になった事件を、1つの思念抽出だけで答えの全てとするには弱いからだ。

それでもう一つの噂、今も民を脅かす黒い悪魔のことが気になる。その黒い悪魔があゝの黒騎士なのか、それとも別の何かなのか。

このあたりは魔物との遭遇率が高いと言われている。

今まで遭遇しなかったのは幸運だった。

その幸運を逃さない為にも魔物の動きが鈍る朝まで走り続けた。

そして翌朝、いよいよ幸運が尽きたのか、私たちの行く手を馬車と同じくらいの体長の一匹の魔物が立ち塞がった。

明け方御者を交代していたパットは手綱を絞って馬を強引に止め、ジルは剣をもって馬の前に、魔物の鼻先へと踊り出た。

ロッドと私も、それぞれ手近な武器を手にとつて構える。

もしかして、これが黒い悪魔！？

朝日を浴びてきらきらと輝く黒い毛並みに夕暮れのような黄昏色の瞳の魔物が、人の言葉で語りかけた。

「姫様！」

25・古木の傷跡（後書き）

おまたせしました。

どうしても通らなきゃならなかった、パットの里帰り。

重い話が続いてごめんなさい。

次回から少しずつ軽めにしていきます。

ということ、久々に魔王様（思い出バージョン）が出てくるはず……

26・黒き疾風

「姫様、おでましく下さい」

「姫様つて、ジルのこと？」

私はジルの背中に尋ねる。

「いえ、私にはこういった知り合いはいないわよ。サーワちゃんじゃないの？」

「私は城でも領主館でも姫なんて呼ばれなかったし…もしかして…いや、でもそんなおっきいの知らない」

「姫様、我輩でございます！お忘れですか」

魔物が飛び上がった一回転すると、ジルより頭一つ高い二本足で立つ人に近い姿になった。

豹のような顔で頭上に長い角がみえる。

見知った顔がそこにあった。

「あれ、やっぱりゴウラだ！？私のこと分かるの」

「当然でござる。あなたの中には我らが王の力を宿らせているのですから」

一応変装しているし、やっぱり見た目からして鼻が利くのかなと思っただけ、違っただけだ。

私の中の魔力つて、もしかしてGPSみたいな機能もあるのかな。

私はパットの制止を大丈夫だからと振り切り、よいしょと馬車を降りてジルの横を通り抜けようとした。

彼女は目の前の魔物に剣を向け、私の前に片腕を出して押しとどめた。

「人のメスよ、どくがよい」

「偉そうね。あなた、うちのサーワちゃんになんの用？」

「我輩は魔王様の命で姫様をお世話し守るゴウラ。姫様をお返し頂こう」

「生きてたのね！…ゴウラ、魔王様のことごめんね…」

どうして、どうして魔王のことになると、凍り付いていた涙腺がいつも簡単に溶けるのか。

「姫様、悲しまれることはありません。

魔王様がこの世に生まれしも滅びしも運命ですぞ。

ですが魔王様の運命の輪は常に巡るのです。

我々は今まで通り再び王の再臨を待つだけなのですから」

私はジルの制止の手をすり抜け、ゴウラの側に行きそつと手をとった。

見た目より柔らかくさらさらした黒毛の中に、私の指より太く長い鋭い爪が伸びている。

その爪は、私を傷つけないようにそつと内側へと向けられた。

「だからといって、魔王様を倒した物達に姫様を奪われお側を離れることになるとは、我輩一生の不覚でした。」

ゴウラは膝を折り私の靴先に口づけた。

あの時も、こうやってゴウラは私の足に口づけた。あの城のあの部屋で。

何度か顔を合わせ私が彼に慣れ始めた頃、魔王は彼が好きかと尋ねた。

「おっきい猫みたいなのに二本足歩行なところがきもかわいくて。いいヒトです」

ヒトと言ってよかったかなと戸惑いながらも、気に入ってることが伝わればいいなと思った。

「まじめで冷静そうに見えて、あのしつぽは実に感情表現が豊かな

の。

あなたと一緒にいる時や私とあなたの話をする時はご機嫌な印、つまり上に向かってぴいんと伸びるの。

私が言いつけを守っていないと左右に揺れながら床をたたいてイライラさせたのが分かるし。

一度は苦手な魔物に出会ったのか、しつぽをふくらませて部屋に入ってきたことがあったよ」

そんな彼の様子を思い出しクスクス笑うと、

「名だたる黒き疾風のゴウラも形無しだな」

と魔王は苦笑した。

そして翌日魔王は彼を伴って部屋にやってきた。

「月の御子。この者はこれから私が側にいない時はそなたを守る者となる」

「守る者？」

ゴウラは、私の足下に膝をついて礼をとる。

「月の御子、いえ姫様。私は今からあなたの下僕としてお仕えすることを近います」

「下僕って、ちょっとまってそれはやり過ぎだよ」

「御子、彼に最後まで言わせてやってくれ。これは彼のけじめだから」

魔王は銀の髪をさらりと鳴らしながら首をかしげやんわりと言ったが、その言葉には有無をいわせぬものがあつた。

「ごめんなさい、続けてください……」

「我輩はゴウラ。ゴウグレリオン。姫様がこの世においでになる限り、我輩の命が続く限りお守りすることを魔王様にかけて誓う」

そしてゴウラは私の爪先に口づけた。

足の甲に彼の鼻がひやりと当たったり笑いそうになるのをしかめっ面でこらえた。

「ゴウラは私の命に従う者だが、御子とも誓約を交わした。もしそなたが彼に命じる時は、真の名を呼ぶがいい」

「ゴウグレリオン、あなたの命を大事にしてね。これからよろしく
お願いします」

私は三つ指について挨拶し、さっそく彼をおおいに慌てさせた。

「このまま城へお連れしたいところですが、口惜しいことに王亡き
この地は、統制を失った魔物達の巢となり果てました。
それに人間どもが今まで以上に侵略の力を強めており、姫様におい
でいただける場所ではございません。

この者達と共に行かれるのであれば、どうぞ我輩をお側にお置きく
ださい」

「人間？もしかして黒い鎧の？」

「いいえ、黒ではなく、それ、その馬車の坊主みたいなナリのも
つと立派な格好の奴らです」

「そっか」

私は少しほっとし、銀系のようなひげが生えた頬を撫でた。

「ちよつと待っていてくれる？仲間：私の仲間にきいてくるから」

私はジルの手をひき、馬車へ戻って事情を説明する。

「拾って帰ってもいい？」

「馬鹿女、あれは猫かよ」

「明らかにネコ科じゃない」

「ミヤ、獣と魔物は違う種ですよ」

「ゴウラは主人から私を守るようにって命令されてるの。彼は死ん
じやったからゴウラが死ぬか私がいなくなるまでその使命は絶対な
の」

彼を縛り続ける

「サーワちゃん、あの口の悪い魔物は危険ではないのですか？」

「ゴウラはいいヒトだよ。私を守る為なら、仲間の魔物でも拳をふ

るってくれるヒトなんだ」

「つまり信頼に値するということなのね？」

「ゴウラは私に誓ってくれた。私を守るという使命は絶対だけど、それ以外のことなら私のお願いを聞いてくれるから皆に迷惑はかけないよ」

「分かりました。ではちゃんと自分で世話をするんですよ。それにジャンとマルコは自分で説得してくださいね」

「はい！！」

私はゴウラの所にかけ寄った。

「ゴウグレリオン、一緒に行きましょう。ただし、あなたは今日から私たちの仲間の一人。皆と仲良くね」

「おお、姫よ。これからはもうお側を離れませぬぞ」

「ありがとう。ところでゴウラ、私は人間が沢山いる所で暮らしているわ。だからその姿はちよつと……」

「心配めされるな。変化の術など雑作もないことです。

姫様はどんな姿の人間がお好みですか？見目麗しき若き騎士か？それとも歴戦の戦士にもなれますぞ」

「ねこ」

「…即答でござるな」

「ねこでお願いします」

「それは小さい獣でござるが…それならあの小僧のような小姓の姿もよろしいかと」

「これ以上男所帯度アップは嫌」

「わ、分かり申した」

ゴウラは、私から少し離れると再び宙返りをする、一匹のクロネコになった。

私たちは古い狩猟小屋にたどりつくと、井戸で喉を潤し身体を洗い、仮眠をとることになった。

「ただ私は久しぶりの再会に興奮し、なかなか寝付けないでいた。」

「ゴウラ、可愛い！」

「ひ、姫様の手に抱かれるなど恐れ多い！お、おやめください！我輩は黒き疾風と呼ばれる戦士でござる、そんなもふもおやめください。あつ、腹は駄目でござる！腹は駄目えー」

「ミ、サーワって、時々とてつもなくすぐて馬鹿だね」

「お褒めの言葉をありがとう。そして私は三沢さんじゃないですから」

「姫様！この無礼な小僧はなんでござるか！おぬし、姫様にお詫びせぬか」

「このネコ偉そう。ミ、サーワ、ペットを買う時は最初が肝心だよ」

「こ、小僧！ペットとは我輩になんたる侮辱！」

「ゴウラはオレンジの目を光らせ威嚇するように毛を逆立てた。」

「ゴウラ、仲良くっていったでしょ！めっ！」

「姫様……」

「大丈夫よサーワちゃん、じゃれあってるだけよ」

「そうかなー」

「それより、サーワちゃんがその黒髪と同じ色のネコちゃんを抱くこの姿！たまらないわー！

あ、せつかくだから首輪とつけて可愛くしてはどう？

野良のネコちゃんと思われてトラブルになってもいけないから」

この国では、ネコはありふれた生き物ではない。

東の地よりもたらされた貴人達の愛玩動物で庶民にはほとんど縁のない動物だ。

だから飼い主は、首輪といった所有の印をつける。

「首輪かあ。ゴウラは変身できちゃうからな。うつかりつけたまま変身したら…」

つい怖い想像をしてしまった。

「じゃありボンはどう？かしこいネコちゃんだから自分でほどけられるようにすればいいんじゃない？」

「おい、そのメス！さつきからネコちゃんだのと我輩を愚弄するか！」

「あーら、そのメスの手の中でごろごろ喉を鳴らしてるのはどのどなたかしら」

「うつつ」

「そうだ！ゴウラ、私とお揃いでどう？」

私は自分の頭に巻いた帯をほどくと、30センチほど切り取りとり、細く折ってゴウラの首に巻いた。

赤地に黄色の刺繍がゴウラの橙色の瞳に馴染む。

「これは私の友達から貰った大事なものの。ゴウラも大事にしてね」

「姫様の手づから巻いて頂くとは身に余る栄誉！我輩の一生の宝といたします」

重々しく礼を述べたゴウラは、ジルのしなやかな太ももの上で仰向けにされ、喉や腹をなでまわされていた。

「皆さん、早く寝てください。起きたらすぐに出発しますよ。魔物が多いこのあたりで長いは無用ですから」

「その心配はいらんぞ」

ロツドの言葉に、ゴウラは口元をにやりと曲げた。

「ゴウラ殿、それはどういう意味でしょうか」

「おぬし、この中で唯一礼儀を心得ておるようだの。感心感心」

「ゴウラ、話をそらさないで。ゴウラがいるから魔物の心配がいらないってことなの？」

「姫様がいらつしやるから、このあたりを徘徊しているような小物は恐れをなして寄つてきませぬ」

「私がいるから？ 魔力のせいで、危害を加える魔物は直接触れられない程度だと思つていたけど……」

「失礼ながらかなり大雑把な記憶力ですな。正しくは、魔王様と誓約をたてた我輩のような魔物、もしくは姫様より触れられた魔物以外が姫様に触れられぬのです。」

魔物が近づいてこないのはそれとは別で、姫様の中に魔王様の力を感じ、下級の魔物らは畏れて姫様に近づけないのでござるよ」

私たちは今まで運が良かったのではなく、魔王の力で魔物に合わずに済んでいたのか。

彼はこのことを、自分が使命半ばで散った後の私のことを考えてくれていたのだろうか。

無駄な血が流れず無事にここまでこれたことに、私は素直に感謝した。

こうして私たちは、昼過ぎには出発し、元来た道を引き返した。

色々な村を経由してきたが、帰りは一直線にリウトを目指す。

村には、日が暮れてしばらくした頃にたどり着いた。

無事の帰還に村人達から喜ばれ、私たちは再びお世話になった。

帰って早々、この村に来た時のようにジルさんの手で強引に湯浴みをさせられ、私達は湯冷ましにヒヤツカの葉の冷たいお茶で喉をうるおしていた。

私はジルさんの必要最小限な布だけで被われた身体から目をそらしながら、尋ねた。

「ジルさん、これからどうするんですか？」

「そうね。ここには私以外の人手はあるけど、ジャン殿には私が必要でしょうから。それにサーワちゃんの側で悪い虫がつかないようについてなきや」

明日一緒にたつわとふんわり笑うジル。

もともと戦いの途中でここに運び込まれたので、身の回りのものは少なく、いつでも村を出れるようにしていると言い切る。

「でも、ここの人達はいいい人ばかりで名残惜しさはあるのよ」

「村の人達も皆さんジルさんが大好きみたいですしね」

「そうね。そして私たちはあなたが大好きよ、サーワちゃん、いえミヤちゃん」

「ジルさん…」

ジルは、私の隣に座って私を胸元へ抱き寄せた。

「あなたは、私たちには言えないことをいっぱい抱えてるんでしよう。」

それは私たちだって同じよ。

ただと言えないことは、罪でもなんでもないの。

今がそれを言う時期じゃないだけよ。

だから胸を張ってなさい。

自分の大事だと思う気持ちに自信を持つのよ」

「あ、ありがとう…」

「パットちゃんからね、あなたに言ってくれて言われたのよ」

「パットが？」

「魔王が好きだったんですって？」

「うん、でも皆とたたかった敵だし…言わなくてもいいでしょ」

「それでなのね。好きな人のことを口にする時とっても辛そうな顔してたって言うってたから。」

「どんな人だったの？」

「…やさしくて、気高くて、奇麗で、繊細で…あの月のような人」
私は窓の外の月を指差した。

「それは最大の賛辞じゃない。あの子も大変ね…」

ともかく、魔王でも勇者でも王子様でも、あなたは誰でも好きになつていいのよ。

それで思いが通じて相思相愛になつたらこの世で一番幸せなことに

「違うわ」

「ちよつと、そこでなんでジャンが出てくるんですか」

「ものの例えよ。別にジャンで限定してないけど？」

「そ、そうですね」

私は自分の勘違いに真つ赤になった。

「ほんと、ミヤちゃんは面白い子ね」

「ジルさんて、ロマンチストですね」

「そうかしら。ロマンチスト過ぎるからこの年まで独り身なのね、きつと」

「そんな、引く手あまたでしょうに」

「私は自分よりたくましく強い騎士が好きなのよ。」

そして年上の、渋めのおじさま系なんていいわね」

ジルさん、ぜったい若い子が好きなんだって信じきってました。下手すると男女関係ないのかと思ってました。

「これは、期待に応えたほうがいいのかしら？」

うつかり、心の声が口から出てしまっていたらしい。

ジルは私の手をとると薄い布越しに重力に反して盛り上がる胸におしつけ、顔を寄せられて耳元にささやきとも吐息ともとれるものを吹き込まれた。

私はあわてて彼女の身体を押しやった。

「からかわないでください！」

「うふふふ、ミヤちゃんには私はいつでも全力よっ！」

「もう勘弁して」

もしもゴウラが人間だったら、ジルさん好みだったかもしれないな。ジルとじゃれ合いながら、今度こそ心の中だけでつぶやいた。

26・黒き疾風（後書き）

26話とだいぶ長い話になってきてますが、読んでくださってありがとうございます。

話のキリが良いところでページを切るつもりが、ついつい長くなってしまう。

ようやく重いシーンを抜けた反動で、渋キャラのはずのゴウラさんが癒しキャラになってしまいました。

もふもふとしたものが欲しかったのでちょうど良かったのですが…
次回は、3章のラスト回です！

27・帰るところ

「エリー！」

「サーワ！おかえりなさい」

バロナの街に着いた私たちは、ダコダ商会を訪れた。
馬車の音で外を見に来た店の人が、私を見てエリーを呼んできてくれた。

私は馬車を飛び降り彼女と抱き合って、再会を喜びあった。
遅れて、イーザも店の外へ出てきた。

「無事でもどられてなによりです。よく寄ってくれました」

「ありがとうございます、イーザさん」

「ねえねえ、後ろの方達はどなた？」

そういえば、私は吟遊詩人で一人旅なんだった。

旅先で知り合った仲間と言いたところだけど、心から迎えてくれたエリーに、友達のエリーにこのまま吟遊詩人と名乗っているのは心苦しい。

そして、イーザさんには話しておきたいと思った。

イーザさんは、そんな私の迷いを読み取ったように「お疲れでしょうから美味しい薬草茶でもいかが」と中へ招いてくれた。

ひとまず皆の名前だけ紹介し、エリーに先導され私たちは2階の広い応接間へ通された。

以前招かれた住居の居間と違い、商談でも使われるそこはシンプルだが重厚な調度品でまとめられ、バルザックの領主館を思い出させた。

私は、エリーにドスト名産のケーダの木の樹液で作ったシロップと、鳥の羽や木のビーズで作った耳飾りを渡した。

イーザさんには例のきつい地酒を。

「それで、勇者様の歌は集まりました？」

ダコダは物騒なところだとききますわ。

危ないことはありませんでした？

もしかして魔王領まで入っていったりしましたの？」

エリーは、私の髪と同じ色のゴウラをすっかり気に入り膝の上から離そうとしない。

ゴウラには他の人がいる時は言葉を話さないようにと頼んでるので、

時折不器用に

「に”ー”やお」

と声をあげている。

「実はお二人にお話したいことがあったのです」

私は、カップになみなみと注がれたミントティーのようなお茶で口をしめらせた。

「さっき紹介したパットとジル、彼と彼女は魔王討伐隊の、勇者の仲間なんです」

パットは、美少女のエリーにまじまじと見つめられ、照れくさそうに下を向いた。

ジルはカップを手に品良く微笑んでいる。

「そして、ロッド先生は王立学院の学者で、私の先生でもあります」

「薄々訳ありなのは察していましたが。もしかしてサーワは勇者様の縁の方では？」

勇者様はあなたと同じ黒髪と黒い瞳といますから」

「じゃあ、サーワは勇者様のお妹！？」

「いいえ、血縁はないんです。」

私は確かにこの国の人間ではなく、ただで南方ではない異国からきた「月の御子」なんです」

私は立ち上がると、二人に頭を下げた。

「ごめんなさい。私、嘘ついていました。私の名前はサガワミヤ。今はバルザックの領主である勇者様に保護して頂いている者です。ドストで調べたいことがあってこっそり出てきたんです。」

二人には親切にしてもらったのに、素性を嘘ついていました」

私はこれが身分証です、首に下げていた印証を机の上に置いた。

頭を下げたままの私を、いつの間にか側に近づいたエリーが抱きしめた。

「話してくれてありがとう。」

私はサーワが誰でもこうやって仲良くなれたと思うわ。

サーワだってそうでしょ？

まさかあの月の御子様だとは思わなくて、それはちよつとびっくりしたけど」

「例の噂は、事実無根だからね」

「そうなの？それはこれからじっくり追求するから覚悟しなさい」

「私が嘘ついたこと、許してくれるの？」

「許すも何も、悪意があつてついた嘘じゃなくて必要だったからでしょ？」

だから気にしていないわ。それよりこれからもお友達でいていいのよね？」

「それは私の台詞よ。これから、私がこの国を出る時がきても友達でいてくれる？」

「もう私たち、友情の誓いは済んでるわよ」

エリーはドレスの袖をめくり、白い手首をふちどる緑の細い輪を見せた。

「可憐な少女達の友情を確かめる姿、なんて愛らしいの！」

急に頭上から声が降ってきたかと思うと、私たちは抱き上げられ、腰を降ろしたジルの膝の上に乗せられた。

「お、お姉様お離しくださいます」

あ、エリーそれは逆効果…

顔を赤らめ遠慮がちに「お姉様、降ろしてください」と言うエリーにジルは恍惚の表情を浮かべながら抱き寄せる。

私はその隙にジルの膝の上から逃げ出す。

「ふわっふわで、素敵なラベンダの香りがするのね。姿だけでなく香りまで愛らしいわ」

「さ、サーワ、助けて」

私たちはイーザさんの好意に甘え、その日は泊めてもらうことになった。

ロッドは国中だけでなく国外へも商用でまわるイーザさんと意気投合し、夜遅くまで語り合っていた。

パットはマグやタッタといった若い店員達に連れられて、夜のバロナを堪能したらしい。

そしてエリーと私、そしてジルの女三人は、旅の話やジルの王宮話などお菓子やお茶をいただきながら話は尽きなかった。

エリーは、最初はジルに「お姉様」と呼ぶよう強要されていたが、帰る頃にはすっかり心酔し、頬をバラ色に染め涙ぐみながら「お姉様、また私に会いにきてくださいませ」と別れを惜しんでいた。

バルザック領に入ると、潮の香りが一段と濃くなる。

海の色は明るさを増し、街道脇には畑や果樹園が広がり空が広い。馬車に揺られながら、それが私にはひどく懐かしいものと思えた。ここで過ごしたのは、まだそう長くないのに。

バロナでエリーが「おかえり」と迎えてくれて、迎えてくれる場所があることが素直に嬉しかった。と同時に、とても恋しくなった。私の一番帰りたい場所のことを。そしてこの暖かく明るい土地を。仲間が、ジャンが待つ館を。

「ねえ、パット。皆怒ってるかな？」

「あつたりまえだよ。全員心配してるよ」

「私、帰ってもいいんだよね？」

「やっぱり馬鹿おんなだな。帰ったらしばらく外出禁止とか覚悟しとけ。」

マルコさんなんてお仕置きだつて、板割りの練習してたから」

「お仕置き！？私、縛られてマルコに××とか××とかされちゃうの？」

「ば、ばかばかーっ！全然伏せ字になってないじゃないか。ほんととはしない馬鹿おんな！」

「やだ、パットが実は自分でしたかったのね！私の身体を狙ってるのねー」

貞操の危機だわ！と私は両手で身体を抱いてパットから遠ざかる真似をする。

「ジ、ジルさん誤解ですよ！こら、ねこひつかくな！勝手に話をつくるなよな大馬鹿おんな！」

ゴウラに追い回され荷物の間を這いまわるパットに、私たちは笑い転げた。

「さ、帰ったらやるわよ！貧乏脱出大作戦パート2！」

「もしかして、イーザさんと夕食後に何やら話し込まれてたのはその件ですか？」

「さすが先生！お見通しでしたか。色々相談してたら、イーザさん

がすごく乗り気になってくださって、領内の商人さんではまわらないところをダコダ商會が支援してくださることになったんです」

「ほほう、それはジャン殿にはいい土産になりますな」

「先生にも手伝って頂きますからね。もちろん、パットにジル、ゴウラもね！」

まずはジャンと館の皆に謝って、マルコの拳骨をもらっただけだね。

丘の向こうに、木々に囲まれた白い壁の館が、私たちの家が見えてきた。

27・帰るところ（後書き）

ようやく第3章が終了です。

お疲れさまです。

無事、勇者と愉快な仲間達が出そろいました。
4章はいよいよ悪の親玉に賢者が登場します。

その前に、怒濤の更新をしてきたのでちょっと一休み。
ここで番外編を入れようかと思えますので、お楽しみに。
続きを楽しみにしてください。いる方は少々お待ちください。

番外編 1・月の御子様の専属侍女

コロコロコロコロ

柄付きの鍋の中で、豆を転がす。

これが朝一番の私の仕事。

出入りの農家の旦那が厨房の入り口で不思議そうに見ているけれど、説明している暇はない。

なんせ、煎り加減が一番大事重要だから真剣勝負だ。

無事煎り終わった豆は「ミル」という手持ち臼で粉にする。

そして口金のついた木綿の布の袋に入れてポットに乗せ、上からお湯を注ぐ。

今日は、うちの田舎から送ってきたポジョという豆を使ってみた。本当は「こーひー」という豆を使うそうだけど、この国にはないので、色々な豆で試している。

ミヤ様はこの茶色い汁にスプーンでお砂糖1杯と牛乳2杯を入れて混ぜて、私は牛乳と砂糖をたっぷり入れたのがお気に入り。

「ミヤ様、おはようございます」

「おはよう、ラクサちゃん。今朝もいい匂いね！」

髪も瞳も珍しい夜色をしたこのお嬢様が、ミヤ様だ。

新しい領主様がいらっしゃるといのでこのお館に雇われた私たち貴族様のお館なのに、侍女と侍女頭で4人。後は料理人や庭師といった専門職の人達だ。

しかも私たち侍女3人はお勤めするのが初めてというど素人の村娘。ご領主様がいらっしゃるまで、毎晩このまま逃げ帰りたいと不安でいっぱいだったか。

初めて玄関でお迎えした時驚いた。

深夜に到着されたのは、夜の精霊のような漆黒の髪と瞳の領主様とお嬢様。

この国ではほとんど見かけない色合いのお二人は、ご兄妹だと思った。

でも、領主様は魔王を倒し、この国を、世界を救われた勇者様。

そしてお嬢様は、勇者様に救い出された月の御子様だと知り使用人一同仰天した。

そんな方々のお世話が私たちだけで勤まるだろうか。

しかもその晩、ベルナン様に呼ばれた私は、月の御子様の専属になるよう命じられた。

生まれてこのかた、あの夜ほど胃が痛い思いをし眠れなかったことはない。

「ミヤ様、いかがでしたか？本日の豆は」

「そうね、お砂糖を焦がしたカラメルみたいな香りと甘さがいいね。ラクサちゃんの煎る腕前が確実にあがってるよ！」

「ありがとうございます。この豆は味をつけなくてもほんのり甘いから子どものおやつ定番だったんです」

「なるほど、じゃあこれをお菓子に使うのもいいね。うーん、魅力的！」

「さ、それでは朝食のお時間になったらお迎えにあがります」

「よろしくね」

「それではまた後ほど」

こうやって、朝一番からお茶をご相伴させて頂けるなんて。あの時に戻れるなら、なんて顔してたのと笑ってやりたい。

ミヤ様に限って、そんな心配毛の先ほどもないのよって。

異国から魔王に攫われていらしたと聞き、
一人知らない国でどんなに心細いか、お寂しいかと思った。
それと同時に、この国の暮らしに慣れていらつしやらないというの
で、どれだけお世話が大変かと覚悟していた。

ところが、初対面から私を「ラクサちゃん」と気安く呼んでくださった。
った。

そして「月の御子様」とお呼びする私に、「ミヤでいいよ」とお名前
前で呼ぶことを許してくださった。

黒髪をさらりと揺らし美しい黒い瞳を優しく怪しく細めながら私の
名を呼ぶミヤ様に、私は蕩けた。

このお方に全身全霊でお仕えしたい！

この想いをぶつける為にもお世話したい！

ところがミヤ様は理想的なご主人様でいて、侍女の天敵のような方
だった。

なんて神様のい・じ・わ・る！

ミヤ様は何でも一人でやってしまわれる。

着替えからベッドメイク、洗顔に湯浴みまでだ。

ご自分の面倒だけでなく、厨房を借りてお料理やお菓子作りもされ
料理長も真つ青な腕前。

油断してれば部屋の片付けやお掃除もご自分でなさろうとする。

しまいには、書齋でご本を読まれている間に使用人の控え室で休憩
をとっていると、洗濯係のスージさんが血相を変えて飛び込んだ。
き。

かけつけると、

袖をまくりスカートをたくしあげ、洗濯場で気持ちよくシーツを踏
み洗っていらした。

「外をみたら今日はお天気だったから、シーツを洗ってしまおうと

思って」

とても楽しそうな清々しいお顔で思わず同意しそうになったところで、侍女頭のグリーンさんがかけつけ青筋をたてて怒りながら館内へひっぱっていかれた。

後でご本人からお聞きした話では、グリーンさんとベルナン様のお二方に挟まれて1刻もお説教をされていたらしい。

ちなみに領主様、マルコ様、パット様、そして客人として滞在されているロッド様もご自分のことはご自分でされる質なので、ご用がしがないのよと他の侍女二人も愚痴っていた。

朝のお世話をしにお部屋に行けば、読書をしていらつしやるお一人をのぞいて皆様外で武芸の訓練をしていらつしやるし、お掃除やお洗濯は従者を勤めるパット様と奪い合いになるんだとか。

でも、ミヤ様はそれに輪をかけて私の仕事をご自分でなさってしまふ。

お国では割と裕福な商家のお生まれということで、庶民的な中に育ちの良さも垣間見えて納得した。

「自分の身の回りのことは自分でしないと、早くにボケちゃうんだよ？」

そうさらつと言いつつ切られ、確かに私もミヤ様の立場であれば同じ事を思うなと納得しそうになったけど、私はミヤ様の侍女なのだ。

そこで、私はミヤ様と話し合い私の仕事を決めて頂いた。

朝のお支度はご自分でなさるので、私は「こーひー」を用意し、そしてその日のご予定の確認や雑談などをしながら「もーにんぐこーひーたいむ」をこー緒する。

その後、お部屋でお勉強などされる間に洗濯物をスージさんの所へ運び、食堂の朝食の準備が出来たらお部屋へお迎えに。

朝食の間にお掃除や衣類の整頓を。

館にいらしてすぐの頃は、ミヤ様がここでの暮らしに慣れるまで常にお側に待ってお話相手をしたり、外出のお供をした。

ただ最近は夜までロッド様とお勉強なさったり、領主様のお仕事を手伝われたりするので私の仕事はますますなくなってしまうた。なので、ミヤ様からの御用がない限りは、グリーンさんのお手伝いをしている。

後は、夕食後の湯浴みの準備と片付けは私がしてそのまま下がるか、少しお話のお相手をする。

私はとってもとっても不満だった。

ただでさえお世話することが少ないのに、今ではすっかりミヤ様よりもグリーンさんと一緒にいる時間がはるかに多い。私はもっとミヤ様に必要とされたいの！

思い詰めた私は、ある行動に出た。

「ラクサちゃん、えーと、何してるの？」

「お側に控えているのです」

ベルナンに執務室から追い出された。

「ラクサちゃん、ここで何を？」

「御用があればお声がけくださいませ」

ロッド様に部屋から追い出された。

「：外で待っていてもらえる？」

「お背中をお流し……」

石けんと一緒にお風呂場から叩き出された。

「私、そろそろ休みたいのだけど」

「お休みまでおそばで見守っておりますので」
ミヤ様は困った顔で私を見ていたけれど、今度は出ていってとはおっしゃらなかった。

「ラクサちゃん、何かあったの？」

「いえその、何かあったわけじゃないんですが」

「今日一日、すごく様子がおかしいわよ？遠慮しないで言ってみて」
なんてお優しいミヤ様。

私を寝台に座らせると、心配そうにのぞきこみながら、ほつれ落ちた赤毛をそつとなでつけてくださった。

「ご迷惑をおかけしてごめんなさい。私、その、最近ミヤ様をお世話する時間が短いのが寂しかったから、今日は出来るだけ一緒にしていたかったです」

「ラクサちゃんは仕事が欲しいの？」

「ミヤ様のお側でお仕えるお仕事が欲しいんです！」

ミヤ様はちよつと困った顔をされていた。

そのお顔を見ていると、私は侍女の方で分を越えたことを口にしてしまったという後悔がうずまいた。

恥ずかしいやら申し訳ないやらで、ほろりと涙がこぼれた。

「ちよつと、ラクサちゃん泣かないで。ごめんね、私の侍女なのに、ラクサちゃんのこと考えてあげれてなかった。これ、前にグリーンさんから叱られたのよね」

「いえ、私こそ出過ぎたことを申し訳ありません」

「いいのいいの。じゃあ、ラクサちゃんにお願いしていいかしら」

「なんでもお申し付けください」

「私、ジャンにこの領内の財政難を解決しろと指令を受けたのよ」
「すごいですミヤ様！政に関わられるのですね」

「それで、ラクサちゃんを助手に任命します！」

「えええ！でも私は学もないですし、無理ですー！！」

「ラクサちゃんはさ、この領内で生まれ育った人でしょ？」

「はい」

「私はついこの間この国に来たばかりだし、ジャンやマルコ、パットにロッド先生だって、結局よそ者なのよ」

「いえ、もうこの領は領主様のものですからよそ者だなんて……」

「この場合のよそ者っていうのは、土地のこと、気候のこと、風土のこと、歴史のこと、そして住んでる人のこと、そういうことを全然知らないってことなの。」

それで、この領を良くしようとか、政を行おうとかって、よくないと思うの。わかるかな？」

「はい、なんとなくですが」

「特に、私のまわりにこの土地の人って、ベルナンやラクサちゃん、この館で働いてる人しかないの。」

私に足りない、私たちにこの地に住んでいる人のことを教えてくれて、声をきかせてくれる人にラクサちゃんになってほしいの。私の側でね」

そう言うのと、ミヤ様は私の手をきゅっと握ってくださった。

身体が触れるくらいのお側でこんなこと言われて、私が首を横に触れるわけではない。

「それでね、ラクサちゃん。私から一つ提案です」

ミヤ様は、するりと私の側を離れ、寝台の真ん中で、枕をぱふぱふと叩きながら私に微笑んだ。

「私からのお願い。これって命令って言ったほうがいいのかな？」

これから月に一度、私たちは作戦会議をします。

場所はここに集合。

時間は湯浴みの後から朝までになると、もちろん仕事に差し支えないよう睡眠時間も確保します。

雇用契約にまづいことあるかな」

「ななななな、ないです！やります！やります！サービス残業でも喜んでやります」

「…ラクサちゃん？よだれでてる…」

「ふあつ、失礼しました。ほほほ。本当によろしいんですか？その、寝台に入れていただいて」

「だって、一日働いて更に座ってるのは疲れるでしょ？それに女の子は一緒に寝る時にこそ、腹を割って色々話せるものなのよ」

確かに、故郷で友達のジェシカとお泊まり会をしては、夜遅くまでおしゃべりがとまらなかったっけ。

「一応、私のほうからグリーンさんに許可とっておこうけど、多分一緒に寝るとかはうるさそうだからそれは二人の秘密ね！」

「は、はいい！」

ミヤ様と秘密の共有。
なんて甘美な響き。

有頂天になっている私の側で、ミヤ様が「暗号名かサークル名みたいな決めなきゃね」なんてことをぶつくさいいながら、とにかく素晴らしくキラキラした目をなさっているのを見て、私は更に幸せの国へはばいた。

後日、ミヤ様のお部屋でお掃除をしていると、サイドテーブルの上に「ラクサちゃんへ」と私宛の手紙が置いてあった。

すぐさまハタキをほおりなげて、手紙を手にとる。

異国からいらしたのでまだ字の勉強をはじめたばかりのミヤ様の、貴重な直筆の手紙。

このまま封を開けずに家宝にしたいくらい欲望に身悶えていたけれど、観念して開封した。

そこにはミミズがのたくっていらっしゃる文字で、

—————

ラクサちゃんへ

グリーンさん、許可、もらった。

明日の夜、第1回パジャマパーティー、決行。

ミヤ

――――

と書いてあった。

パジャマパーティーとは、ミヤ様の国で女同士のお泊まり会のことなんだそう。

お菓子を食べたりジュースを飲んだりして、寝間着で夜更かしして楽しむのだそう。もちろんメインイベントはおしゃべりなんだとか。私も、お菓子を持っていきましようかと言ったら、それは私の楽しみにさせてと断られてしまった。いったいどんな夜になるんだろう。

「私は、月の御子様の専属侍女」

自分の唇から漏れた言葉の響きにうつとりしながら、初めてのミヤ様とお泊まり。

「勝負下着用意しなくっちゃ！」

私は再びハタキを手にステップを踏むような足取りで掃除を再開した。

番外編 1・月の御子様の専属侍女（後書き）

番外編を考えてたら、まず浮かんだのがラクサちゃんでした。
侍女の一日でも、と思ったのに、痛い子エピソードになっちゃった…
清々しいほどにミヤを慕ってるのが伝われば幸いです。

あともう1作、次回も番外編の予定です。

番外編 2 ・運命の輪の先に

――縁の齒車の上に生きとし生けるものがある。

齒車がまわると、かの人が近づく。

近づいては離れ、離れては近づく。

かの人は、想い人は、我の心をあざ笑うように少し先を進む。

このまま噛み合うことなく、また横を過ぎていくのか。

人間はそれを過ぎ行くひとつのそれを運命と呼ぶ。

だが、我らには果てしなく繰り返す現実。

かの者が過ぎていく度に与えられる失望で、次第に心は愚鈍となり、凍り付き、期待しなくなる。

それでも、手を伸ばさずにはいられない。

巡り合い一つになる、その時まで。

魔王の城と呼ばれる古城の中庭に湧く泉、水面を白く揺らす水鏡の前にこの城の主である魔王は立っていた。

黒い衣を纏い、月光が溶けたような髪が風に舞う。繊細で美しい面立ちは、静かに微笑みをたたえている。

やがて、水鏡の上に天頂の月が重なる。みるみる青白い光を放ちはじめたその中に、衣の袖が濡れるのも構わず彼は手を差し込んだ。その青白く長い指先は、鏡の底に触れることなくその下にある闇へと潜り込む。そして唐突に彼の指は触れた。吸い付くような柔肌に。

闇の奔流を漂っていたその少女は、水鏡の中へ、そして魔王の腕

の中に抱き上げられた。水鏡の中でしとどに濡れ身体にまとわりついた濃紺の布を、彼は躊躇することなく裂き床に落とす。すっかり生まれたままの姿になり月光を浴び怪しく輝く白い肢体を黒い衣で包み抱くと、庭の奥にひっそりと立つ塔の石のアーチをくぐった。

中央に豪華な寝台だけが横たわるだけの部屋。その上では、腰掛けた魔王が眠る少女の身体を拭い用意した衣にを着せ、濡れ髪をそっと布ではさみ乾かす。

「我が王よ、それが当代の月の御子でございますか」

月明かりに照らされ、床に落ちた影の中から声が響く。

「ゴウラか。そうだ、待ちに待った我を解き放つ鍵だ」

「王の手はそのようなことをするためにあるのではありませぬ。どうぞ下僕共にお任せを」

「この鍵はその身の役目を果たすまで、誰の手にも触れさすつもりはない」

星の光を宿すサファイアの瞳はやさしく少女を見つめ、蝶の羽ばたきよりも静かに指先で髪の毛をとかしつけていく。乾いてもなお濡れているかのように妖しく艶やかな黒髪。黒いレースのような睫毛で縁取られた瞼の下には、同じように黒く輝く瞳が隠れているはずだ。魔王の指は、彼女の肌を甘く滑る。

本当にそこに存在しているかを確かめるように、愛おしげに頬を、喉を、肩を、胸を、腕を、腹をと彼女の隆起をたどっていく。

「王、皆が待つております。下に降り皆にお示してください。鍵を手に入れたと」

「もうこの鍵とはひとときも離れたくないというのに。そう急くな」

「近頃は城の外に魔王討伐隊なる人間達が頻繁に現れるようになりました。」

森に住む下級の者達は皆恐れております。

一刻も早く儀式を！王の力を縛りしこの鍵に命のあがないを！」

魔王は、その猛る言葉に喉を鳴らし笑った。そして、冷たく激しく燃える瞳で影の中にあるものを見据える。

「鍵は、あくまで鍵。我の力を封じているのは、月の御子ではなく大いなるサリーツァの意思。」

我の為に鍵としてここに連れてこられたこの者に何の咎がある」

「王の転生の度に、月の御子が我らを失望させてきたのは事実。時には勇者と通じ、時には自ら命を断ち、王が我らの完全なる王として君臨するのを妨げた…。封印を解くまでまでは、庭に飼う鳥も同じこと。鳥かごに閉じ込めておかねば王の手から逃げていきますぞ」

「ならばその時がくるまで、この部屋を籠としよう。我はこの者を縛ることも傷つけることも望まない。」

むしろ、我らの鍵として生まれこの地に来た感謝せねばならぬ。そして、その為の犠牲の対価を与えねばならない。例え我の封印を解くことが出来なくても、我の側を離れてもだ。」

「王よ、王はこの人の子のを…」

魔王は、窓の外の月に目を向け、力無く微笑んだ。

「我は今まで、月の御子に守ると誓いながら、心を傷つけ、その手を離し、約束を果たせなかった」

「それは、いつも人間ら、勇者らに阻まれたからではないですか」

「人の手に倒れるのまた運命と定められていると思ったこともあった。だが、いつもその運命に甘んじることもあるまいよ。我らと違い、月の御子や勇者ら人の子がその生を懸命に生きるように、我ら輪廻の中に生きる者も抗わねばいつまでも抜け出せまいぞ」

月の御子の名のもとに異世界で生まれ出た日から、月の夜になると魔王は水鏡に映る御子の姿を見守ってきた。正確には姿ではない。彼女の中に宿る光をだ。感情により、様々な色を宿す光。彼女の放つ緋色の光は暖かく魔王の心を癒した。眩しい黄色の光は、魔王の心を高ぶらせた。月の光のような淡い青い光は、魔王の心を鎮めた。だが、彼女が成長するに従い、光はまたたき、時には光を弱めることが増えてきた。

光は生命、そして心の強さを表す。何に心を揺らし、何を憐れんでいるのか。御子の身を案じ一刻も早くここへ喚び寄せたいと願うも、異界から渡る日は運命に定められていた。また、異世界からこちらに連れてこられることで彼女が心を痛めたら、そして自分を否定されるかもしれないという恐れも抱いていた。

そんな魔王の手の届かない所で時は刻々と進み、御子は、少女は運命に定められた通り来るべくしてここに来た。

だからこそ、魔王は少女が目を覚ませば、自分が求め異界より呼びよせたと告げるつもりだ。大いなる意思ではなく自分が求めたともし悲しみにくれるなら、運命を嘆くのではなく自分を憎んで欲しい。それが、少女にとってこの先を生きる光の源になるならそれで構わない。

この魔王の意思は、彼女の歯車の軌道をその瞬間ほんの少し変えた。同時に魔王の歯車も…。

己の命運の些細な変化に気づくことなく、魔王は少女の寝顔をみつめ、愛しげに枕の上で広がる一房の黒髪に口づける。魔王の目には人の子の姿に重なり身の内から溢れる見慣れた光が見える。今はこの世界の月の影響で穏やかさの奥に不安が混じった青い光を放っていた。

この瞳が開いた時、彼女はどんな光を放つのだろうか。

界渡りによる身体の衰弱で少女が目を覚ますのはしばらく時間がかかるだろう。それまでに魔王はやるべき事がありすぎた。影の中の者にこのまま見守るよう命じると、後ろ髪を引かれながらもそつと部屋の扉を閉めた。

彼女が目覚めたのは、3日後のことだった。

番外編 2 ・運命の輪の先に（後書き）

おまたせしました。今回の番外編は短め。

プロローグの直前を描いてみました。

ネタバレにならないように気をつけましたが、もちろん後に通じる部分もあります。

本編ではなかなか書けない魔王様をお楽しみください。

それでは次回からはまた本編となり次の章がはじまります。
更新までしばらくお待ちくださいね。

28・月の恋守り

「ミヤ様？そこで何してらっしゃるんですか。早くお戻りになってこの書類を片付けていたただかなくては」

書類の束を抱え通りかかったベルナンが、廊下から庭にいた私を一瞥し、軽く眉間に皺を寄せる。

「ちゃんとジャンに断ってきたよ。今は休憩中」

夏に入ったとはいえ、木陰では涼しい風が気持ちいい。

日本と違い乾いた空気で広い海原を臨み、館は白亜の建物だし、まるでここはリゾート地。

一歩外に出れば、だけど。

修羅場と化してる執務室でのデスクワークに一区切りつけた私は、庭に出て厨房でもらった冷たいお茶を飲み一息ついていた。

「ではほどほどに。のんびりしていると今日中に終わりませんよ」

「はい」

今夜中も無理なんじゃない？と心の中でつぶやきながらにこやかに手を振った。

ドストから戻ってからもう1月が経とうとしている。

あの時、館に戻ると皆が涙ながらに迎えてくれ、私は一人一人に心配かけたことを詫びた。

ラクサはどうして自分も連れていってくれなかったのかと怒り、次は連れて行ったださいねと私にしがみつき、約束するまではなか

なか離してくれなかった。

そして覚悟はしてはいたけど、マルコとベルナン二人揃ってに雷を落とされ、10日間の外出禁止の謹慎を食らってしまった。

だけど、とつくに謹慎が終わった終わった今も館に缶詰状態。

私が館を抜け出したことで、あたりを搜索したり、パットとロッドという戦力が抜けていたから、戻った時の書類の柱に囲まれたジャンやマルコの形相といったら…

そう、そのジャンとは出かける前に言い争いをしていたこともあり、帰り道にどう顔を合わせたらいいかと悩んでいた。

だがそれは杞憂に終わった。

机から顔をあげたジャンの顔は、青ざめて幽鬼のような表情だった。それが私を見た途端に薔薇色に染まり、机を飛び越えんばかりに駆け寄って、息が止まりそうなほど私を抱きしめた。

そして、とても心配したよと瞳を潤ませながら顔を極近距離まで近づけてきたと思ったら、頬に熱烈なキスをした。

びっくりして固まる私に、遠慮なく頭中に降り注ぐキスを見て仰天したゴウラが、ジャンの後頭部に飛びかかり私からべりっと引きはがしてくれた。

恋愛のキスと違うのは分かっているもやけに恥ずかしかった。

時々ジャンは、感情的になると人目も気にせず大胆な言動をとる。

日本人は過剰なスキンシップは苦手だからやめて欲しい。

ああ、思い出すだけで照れくさいのがまたむかつく。

「いたい！なんでボクの髪をむしるのさ！」

自分の手を見ると、金色の糸が数本、太陽の光を受けてきらつきら輝いている。

そういえば、横にやった手にぶちって感触が…。

「きゃー！ごめんね。ちょっと嫌なこと思い出してつい。大丈夫！3本、いや4本、違う5本だ。5本だけだからっ！パットは剥げないから大丈夫！」

「…なんか色々つつこみたいところだけど、まあいいや。ボクそんな気力ない」

パットも私も帰ってから仕事をに追われ、今も休憩といいながらパットと二人で貧乏脱出大作戦会議を開いていた。

戻ってきてすぐに、私たちは「バルザック貧乏脱出大作戦2」にとりかかった。

以前、貧乏脱出大作戦会議で話題に出た「恋のお守り」案。

実はドストからの帰り道にダコタ紹介に立ち寄った際、イーザに相談に乗ってもらい協力してもらえることになり、実行に移すことにした。

最初は試験販売からということで、乾燥の段階で商品にならない破れたり砕けた月光草をタダ同然で貰ってきた。

次に喪服が正装くらいしか需要がなく投げ売り価格の黒い生地を買ってきて、ラクサと手の空いていたグリーンにも手伝ってもらい、小さい巾着を100個を作った。

紐には、間に合わせて以前宝石をとったドレスを解体しレースや絹布を使う。

袋の中にはちぎった月光草と、地元の特産でどこの食卓にも並ぶ薄紅のシャル貝の一片の殻と一緒に入れる。

そう、これは月光草のポプリ。

最後に油紙で包み、街の印刷屋さんで刷ってもらった紙を折って封筒を作り、中に1枚チラシを入れる。

袋は薬袋をイメージした、レトロポップなレイアウトで「月ノ恋守り」という日本語を横書きで入れてもらった。

もちろん、読めないと困るので下にはこの国の文字で読み方を振っている。

裏には、バルロック領観光課謹製と入れ、

月光草のハーブとしての効能と使い方をシンプルに載せている。

そして、中に入れたチラシにはある短い恋物語が印刷してあった。

人魚姫をベースに創作した、海の姫が竜の若者に報われない恋をし月光草で思いを遂げた後小さい貝になってしまう悲恋の物語。

イーザに協力を頼んだ晩に、一緒に寝台に入ったエリーは寝物語の人魚姫の話しをとても気に入った。

この世界では、物語は吟遊詩人が語る伝説や神話くらいで、本は貴族が読むものでフィクションの作品は少なく、あまり身近なものではない。

恋のお守りといっても神社や曰くがないなら作ってしまえと、明け方まで、エリーと一緒に話を考えて完成したのがこの物語。

帰ってからラクサに読んで聞かせると鼻水まで出しながら全力で号泣した。

この物語をつけて例の月光草をポプリにして売り出したいと言うと「月の恋守り」がいいと勝手に命名し、それがそのまま商品名に決まってしまった。

この世界では商品ではなくパッケージやコンセプトにこだわることに馴染みがないらしく、商品本体だけでもっと安くしたほうがいいんじゃないかという懐疑的な声もあがったけど、ロッドが「これは御子の英知ですよね！」と一人で興奮し始めたので、とりあえず試しでやってみようということになった。

完成したバルザック領観光課謹製月光草ポプリの試作品は、ハリエツトの店で20個、残りをダコダ商会へ送り売り出してもらった。ダコダ商会は薬問屋で医療に携わるする客ばかりだが、エリーの女友達にサンプルでいくつか渡してもらったところ口コミで話題になり、店を訪れる若い女性が急増した。ファッション小物ではなく薬草のポプリなので、月光草本来の価格を壊さないように1000ダルとちょっと強気の価格に設定。

悲恋の物語に、実際に惚れ薬にも使われる月光草のポプリ、そしてこの世界ではあまり馴染みのない黒いデザインは乙女心をくすぐり、あつという間に売り切れて追加の催促が来た。

急いで追加を送ってもまたすぐに催促と領主館の女手ではとうてい間に合わなくなったので、計画はすぐに第二段階に進むことになった。

第二段階は、製造や販売を領内の人々に委託し増産体制を整える。農家から月光草の出荷できないくず葉を、相場の半額で買い取る。黒布は業者と契約し安く卸してもらうぶん、紐はレースや端切れ、組紐などをエリーにバロナの市場で見繕ってもらい、送ってもらう。

貝は、街の料理店や家庭から出たシャル貝の殻を、綺麗に洗って二つに分け乾かしたものに限りバケツ1杯100ダルで買い取ること

にした。

袋は材料と型紙を渡し、婦人会の主婦達に1つ10ドルで縫ってもらい、数が集まれば公民館を借りて婦人会総出で一氣に袋詰めをする。

領内の販売は顔役のとりまとめであるハリエツトさんに取り次ぎをお願いし、領内のお店であればどこでも扱えるようにした。

領外の販売は、バロナのダコタ商店に一括してお願いする代わりに、手数料をかなりまけてもらった。

こうして形になったところで、改めて責任者をパットが勤めることになった。

婦人会の奥様方に可愛がられ、最初は仕事を面倒がっていたパットも、今では喜んで作業場に顔を出している。

既に、第4便で送った500個もすぐに売り切れて入荷街の状態で、一度開封し持ち歩くと1月くらいで香りが抜けてしまうので、これからリピート客も見込まれる。

最初の1月で初期投資費を取り戻せそうなほどの勢いに、私たちは嬉しい悲鳴だった。

昨日エリーから来た手紙では、既に王都にも噂が広まり、庶民の女性はもちろん、色恋の華やかな貴婦人達が見逃すはずもなく、コルセツトの胸元に「月ノ恋守り」の黒い袋を忍ばせるのが流行り初めているのだとか。

香水と混じるときつい匂いになりそうだなと、城内で見た華やかな女性達のことを思うとちよっと心配になった。

そんなわけで、そろそろ第3段階を考えようと暇をみつけてはパッ

トと作戦を練っている。

「やっぱり、庶民と貴族が同じものをつてちよつと抵抗あるみたいなのよね」

エリーの手紙に添えられたお客からの要望をまとめたものを見て意見を出し合う。

「貴婦人の方々ってどんなものが好きなんだろうね。ボク全然想像できないんだけど」

「やっぱり、高いものとか流行のものがいいんじゃない？貝のかわりに真珠とか？でも、そもそも薬草がメインだからあまり値段を上げられないしね」

「お城にいた時に、貴族の女の子の友達を作つとけばよかったな」

といつても城にいる間、私に近づく貴婦人はおらず、世話をしてくれた女官ですら事務的なことしか口をきいてくれなかった。

「ジル様に聞いてみたらどうか？侯爵令嬢だったって言うし」

「…あのジルがこういう乙女グッズを好きだと思つ？」

「ほら、可愛い女の子好きじゃない？」

「可愛い女の子が好きなんであって、自分がかわいいものを持つのは違うでしょ」

「あーどこかに貴族のお嬢様、いないかな」

「ここにいますわよ？」

どこからともなくパットに応える声がし、ぎよつとする私たち。すると目の前の茂みから水色のドレスをひるがえし、一人の少女が現れた。

「ごきげんよう。あなたが月の御子ね」

まるで不思議の国のアリスを思い出させる、金髪の巻き髪に濃紺の瞳の可憐な美少女だった。

28・月の恋守り（後書き）

おまたせしました。

新章に入ったのですが、章題が浮かばず、すぐとりあえずになつてます。後で思いついたら直します。

このお守りに添えた似非人魚姫な物語は、本編で載せようかと書きかけたのですが、さすがに無理があるので後日番外編で載せたいなと思っています。

そんなわけで、新たに現れた少女。

彼女はこの領主館の台風の目にして、この章の鍵になる予定です。
どうなることやら…

29・婚約者

「あたくしは、フランセスカ・ドノワール。ジャンの婚約者よ」
「はあ、そうでなんだ」

絵本から抜け出たような金髪の少女は、形の整った鼻をつんと上に向けた。

「なにその口の聞き方、育ちが分かるというものだわ。ジャン様にはあたくしがいるの。とつとお国に帰ったら？」

「ごめん、あなたが何を言いたいのかよくわからないのだけど」

「まあ、頭も悪いのね。ではあなたのレベルに合わせて差し上げてよ。婚約者のあたくしがいるのに側に女を置くのは私に無礼だし、変な噂がとびかって迷惑だから、ここから消えなさい」

あまりに堂々と好き勝手いう彼女に、怒るより感心してしまった。

「フランフラン、あなたジャンの事が好きなの？」

「え？ええええ、ええもちろん。あたくしは昔からお慕いしてましたもの」

「そっか。わかった」

「あつ、あなたはそれでいいんですか？」

「フランフラン、私はあなたのこと知らないから応援しないけど、好きな人なら意地張ってないで素直に気持ち伝えなきゃ駄目だよ。あ、あとここを出ていけっていうのは無理だから」

「どうして無理なんですの！」

「ジャンが私に約束したからよ。私が国に帰る方法が見つかるまでは彼が保護者になるってね。あなたはただの婚約者でしょ？」

「まー！ジャン様を呼び捨てにするなんて無礼な！」

「私とジャンは友人なの。私達の関係に口を出さないで」

私がにこりと微笑むと、彼女は口ごもった。

「じゃあまあ、これからよろしくね！フランフラン」

「さっきからそのフランフランってなんですか！私はフランですわ！」

「語感が可愛いでしょ？フランフラン」

「私、あなたのことが嫌いです！きつとあなたをここから追い出してみせますわ」

金髪美少女にびしっと指を鼻先に突きつけられ、私は何故か笑みがとまらなかった。

「ようこそ、バルザック領主館へ。フランフラン」

「ジャン！庭に貴族のお嬢さんが来てたよ」

ばたばたと執務室に駆け込んだ私が目にしたのは、頭を抱えて机にうつつぶしている領主の姿だった。

その横では、ベルナンが深刻な顔で、グリーンに細かな指示を与えていた。

「ジャン、大丈夫？」

「最悪だ！どうしよう、まさか今更……」

「ねえ、ジャンったら。彼女にジャンの婚約者だから私に出て行けって言われたんだけど」

「もう、君の所に行ったのか」

「色んな意味ですごい子だったんだけど」

「すまない、昔からなんだ」

「で、彼女が婚約者つてのは本当なの？」

「いや、元婚約者だ」

ジャンはそう言うと、私の手をつかむと執務室を出た。そして左右に目を配りながら足場早に、上の階の私の部屋へと駆け込んだ。

「ちょっと、なにがどうしたのよ」

私はソファーに座ったジャンの隣に腰を下ろした。

「ごめん。なんかどうしていいかわからなくなっさ」

「元婚約者が現れて今も婚約者だつて言ってること？」

「ああ。女つて何考えてるんだ？」

「さあ、フランフランはジャンのことが好きだからここまで追いかけてきました！って風には見えないのは確かだけど」

「フランフラン？」

「私の国では、フランといえばお金の単位かフランフランなの」

「変だな」

「でも、フランフランって呼んでごらん？にくたらしいのが可愛く見えるから」

私の言葉に、ジャンはかすかにほえんだ。

「彼女にはここにいて欲しくないんだ。だけど僕は彼女に出来ればわかりたくなうて。その、助けてくれないか？この館の女主人として」

「女主人で、奥さんのことでしょ？」

「本来は妻か娘の役目なんだけど、僕は独身だろ？家の中を取り仕切るところまで手がまわらないんだ。もちろん具体的なことはベル

ナンやグリーンさんがしてくれるけど、彼らはあくまでも使用人だから、客人に対してもてなし取り仕切る役目は負えないんだ。男所帯で男性客が来るならいいけれど、女性客の場合は後々問題になっても困るから」

「私は貴族のしきたりとか知らないよ？」

「いいんだ。貴族のしきたりに合わせたもてなしは今のこの館では無理だしね。子爵といっても武功での成り上がりだ。僕達らしくいこうよ」

「わかった。女主人として彼女の滞在の件は私に一任してくれるのね？」

「おねがいします」

「じゃあそのかわり、どうして彼女を避けるのか教えてくれる？ 婚約のいきさつとか。ただの好き嫌いであたき出すわけにはいかないしね」

「長い話なんだけど、聞いてくれるか？」

「うん」

ジャンが私に軽くよりかかってきた。

私は何もいわず、そのまま黙って肩を貸す。

「前に話しただろ？ 僕の母は、南方の血を引く人だった。」

ジャンはぼつぼつと身の上を語り始めた。

ジャンの母ファニタは、身持ちを崩した男爵の4男と南方から来た女の間に生まれ、母の血を濃く継ぎ、漆黒の髪と目を持つエキゾチックな少女だった。

両親が事故で12歳の時に亡くなり、孤児となったファニタは借金のかたに家財をとられ無一文になり途方にくれていた。

そこへ父の血縁者を名乗る男が現れ、実家の男爵の屋敷に引き取られた。

だが、異国の血を引く卑しい娘だと実の祖父母に受け入れられず、かといって血縁の者を野放しにするのは家の恥と、下女として飼ひ殺されることになった。

屋根裏部屋の自室と洗濯室の往復の毎日。

いつも薄汚れた姿で、髪や瞳の黒色が目障りだと言われて頭巾を深く被り隠していた。

来客がある時は、部屋に鍵をかけられ閉じ込められる。

祖父母は使用人に厳しい人だったので入れ替わりが激しく、すぐに彼女がこの家の血縁の者だということは忘れ去られ、奴隷だと思い込まれていた。

使用人達から嘲り笑われ、時には暴力も振るわれたが、彼女はここに行く宛もなく、ただ命が尽きた時に神の国にいる両親に合うことだけを夢みて黙々と毎日を過ごしていた。

ところが、ファニタが16歳になった時に館に賊が入った。

邸内にいた者は皆殺しになったが、屋根裏に閉じ込められていた彼女だけが助かった。

この時、再び彼女に転機が訪れる。

事件の2日後、調査で屋敷を訪れた監察官が彼女を発見し保護した。2日以上閉じ込められ衰弱していたファニタは、彼女を保護したマリア侯爵家の嫡男、ハインツの手厚い看護で無事回復した。

保護した時には全くわからなかったが、清潔になり身なりを整えられた彼女は、美しくとても魅力的だった。

また生い立ちゆえに、常に表情に影を落とす薄幸な雰囲気には庇護欲をそそられた。

屋敷は別居していた長男が取り壊しを決め、姪であることは認めながらも祖父母同様に卑しい娘と蔑んでいた彼はファニタの引き取り

を拒んだ為、ハインツは彼女の後見となり、下宿先と療養院のまかない婦の仕事を都合した。

彼女の8歳年上だった彼は、最初は兄のような気持ちで面倒を見ていたが、次第に心を開きく可憐な少女に心を惹かれていき、とうとう男女の仲となった。

彼は結婚を申し出るが、ファニタは首を横に振った。

いくら男爵家縁の者でも、異国の血を引く庶子は忌み嫌われる。

父の実家で暮らした年月の間に植え付けられた卑屈さと元の生活に戻ることに恐怖から、彼の説得もむなしく彼女は彼の申し出を受け入れず、そして彼の前から姿を消した。

住み慣れた王都を離れたファニタは、近郊の街の宿の住み込みまかない婦となる。

一人で生きていくことを決意した彼女だったが、少しして身体に異変が訪れた。

ファニタはハインツの子を身ごもっていた。

彼女を娘のように思う宿屋のおかみさんのお陰で無事男児を出産した彼女は、両親を亡くして以来、初めて生きる喜びに身を震わせた。

「それが僕だよ」

「ジャンは、両親共に貴族の血を惹いていたんだね」

「親の因果は子に巡るといふのかな。結局、その貴族の血は母と僕に幸せを与えてはくれなかったんだ」

そう嘲笑しながら、ジャンは話しを続けた。

ジャンが9つの冬にファニタは息子を残し流行病で亡くなった。

宿屋のおかみさんは、ジャンを孫のように可愛がっており引き取るつもりだったが、ファニタの日記で死んだと言っていたジャンの父が存命だと知り連絡をとったんだ。

ジャンの父は侯爵家を継ぎ他の女性と結婚していたが、子供がいなかったこともありジャンを喜んで引き取った。

今までの償いと父親は優しくだったが、子供が出来ずに焦る義母からは憎まれ、夫がいない所で冷たくあたる毎日。

板挟みになったまま、侯爵家の跡取りとしてのプレッシャーの中で暮らしていたジャンだったが、16歳になった年に義母に待望の息子が誕生した。

ジャンは義弟の誕生を心から祝福し、喜んで自分から相続権を生まれたばかりの弟に譲り家を出た。

「じゃあフランフランが元婚約者っていったのはその時の？」

「うん。フランは侯爵家嫡男として親が決めた婚約者だったんだ。

だから相続権を捨てた僕はすぐに彼女から婚約破棄を言い渡された」

父の家に住むようになってすぐに引き合わされた、水色のエプロンドレスの可憐な少女。

いつもつきまとって「ジャンのお嫁さんになるの」と言い続けてきた彼女。

恋や愛はよくわからなかったけれど、気持ちの休まることのない辛い生活を忘れてくれる、同じ年のお人形のように可愛い少女を大事に守りたいと思っていた。

それが初恋だったのかもしれない。

だから、ジャンは家名を捨てた時の彼女の宣告に、覚悟をしてはいたものの深く傷ついた。

「ジャンはそれから一人で生きてきたの？」

「ミヤ、そんな悲しそうな顔しないで。

士官学校を卒業するまでは父が支援してくれていたから一人で生きたというとおこがましいけどね。母が僕を生んだ時のように、マイアの名を捨て、ジャン・ルークとしての人生を決めた時に僕はそこ

で初めて自由の喜びを知ったんだ。

剣ひとつで生きて行こうと決めてから、どんなに辛くても一人で生きて行けると思っていたんだでも、戦っていくうちに大事な友人が出来た。そして、血ではなく力で貴族になった。」

ジャンはうつむいた。

私はジャンのつむじを見ながら、そつと髪を撫でる。

「自分の家を手に入れたんだ。それに家族も。僕は僕の帰る場所が出来たんだ。」

そう、ここはジャンの館。

帰ってくれば迎えてくれる人がいる家。

彼を大事に思い支える仲間がいて、皆口に出さないけど、ここは皆の家になっている。

もちろん今の私の家はここだ。

「だけど私はいつかここを、この世界を去るのよ」そう喉元まで出かけた言葉をこらえた。

もちろん彼も分かっていることだから。

だからここにいる間は自分のことだけでなく彼の力になりたい。

私がいなくなっても彼のこの家が、生活が、領が盤石で幸せなものになるようにして去りたい。

お互い、目頭に滲んだ涙をみられないように、そつとぬぐった。

「でも意外だったな。ジャンが16の頃ってことは、あの子は2歳？4歳？よ。幼児と婚約だなんて貴族様も色々大変ね」

「えっ？それは違うよ！フランは僕と同年だったはずだよ。さつき会った時びっくりしたんだよ。まるで16のあの時に時間がとま

「つたみたいだった」

私はあっけにとられた。

ジャンも童顔で若くみえるほうだが、26歳だったはず。
つまり彼女は…

「私より年下じゃなかったの？」

「ああ、しかも彼女って婚約破棄の後に新しい相手が見つかって輿入れしたって聞いたけど…」

ジャンの口から衝撃の事実が飛び出したところで、廊下をばたばたと走る音が聞こえて私の部屋のドアが開いた。

「ジャン様！ 見つけましたわ！！ んまー！！ なにをくつついてらっしゃるの！」

ロリータな元婚約者、もといフランがあらわれた。
私たちはあわてて身体を離す。

「あら、元婚約者のフランフラン。ごきげんよう」

「私の婚約者と破廉恥な！ 早く隣からおどきなさい」

「保護者との親愛のスキンシップを邪魔しないで」

どうやら、私がつけた愛称を素直に受け入れたみたい。

「フラン、何か僕に用ですか？」

「そうでしたわ、ジャン様。あたくしにあてがわれたあの部屋はな

んですの？あんなところに一晩たりとも滞在できませんわ。それにうちの女官の手を煩わせる気？侍女を2人は用意してくださらないと」

「フラン、悪いけど今の当家では客人を迎える余裕がないのです。我が家の客間に不満があるなら街の宿屋を手配するのでそちらに滞在してください」

「ま、まあっ！！男爵家の令嬢であるあたくしに田舎の宿に泊まられていうの？卑しくも子爵様ともあろう方がそんなことをおっしゃるなんて。」

「そうね、部屋はこの部屋で我慢してさしあげます。誰かにあたくしの荷物をここに移させてくださいな」

この部屋は、前の領主の娘の部屋だったそうで、壁の装飾や作り付けの家具など年期が入っているが華やかさの名残がある。

本来は館の主人が変われば内装を全部入れ替えるのだが、ベルナンの指示で奇麗に掃除され、カーテンとリネンを新しいものに入れ替えただけが随分と明るい雰囲気になっている。

何より、ラクサや侍女達が庭の草花を館のあちこちにこまめに飾ってくれるお陰で館に命が吹き込まれ、とても居心地の良い場所になっている。

確か客間は、身分の高い客人が来ても恥ずかしくないよう重厚感のある落ち着いた佇まいになっていたはずだけど、出来る限りの心遣いはしてあるはずだ。

「申し訳ないが、この部屋はこのミヤの部屋だ。まだこの領は色々問題が山積みで貴族の令嬢であるあなたが快適に滞在してもらう人手もお金も余裕はないんだよ。来てしまったものは仕方がないが、今夜は客人として客間に泊まっていただき、出来る限りもてなそう。そのかわり明日帰ってくれ。」

「あたくしはジャン様の婚約者です。この女を側に置かれるのであ

れば私はここを離れるわけには参りません」

「10年前に婚約解消を申し出たのはあなたですよ。」

「ジャン様がいけないのですよ？あの時爵位をお捨てになるなんて男爵家から庶民に嫁がせるなんて屈辱ですわ。許せるわけないじゃないですか。でもこうして私の為に再びご自分の力で子爵になりました。これでもうあたくしたちに障害はありませんわね」

「フラン、申し訳ないけれど僕はあの時君との関係は終わったんだ。僕はもうジャン・マイアじゃない、ジャン・ルークだ。おとなしく帰ってくれないか」

ジャンの顔が青ざめている。

そうか、彼女は、彼の捨てた忌まわしい過去そのものなんだ。私は、立ち上がるとジャンの前に立ちはだかった。

「フランフラン、私の部屋が良いなら荷物を持っていらして。」

「あら、ようやく身の程がわかったようね」

勝ち誇ったフランに、私はそつとはじらってみせた。

「そんなに私と寝たいなんて、照れてしまっわ。私、お姉様に抱かれるのは初めてだけど、やさしくしてくださいね」

「い、いえっ、私はあなたなんていりません。部屋だけおよこしなさい」

「お姉様ってツンデレですね。そこがまた萌えますわ。お姉様ってタチですね？ネコですね？私、どちらでも頑張らせていただきます…」

「っ、っんでら？ な、なんのことがよくわかりませんが、ともかく私はそんな気はないですわ！もう結構。あなたが使ってた部屋を使うなんて不愉快極まりないし、今の部屋で我慢してさしあげますわ」

「それは残念。では気が変わったら、いつでも枕を持っていらしてくださいね」

「二度とこの部屋にはこないわよ！」

ふふふと微笑む私にジャンが小声で、このまま帰ってもらってささやく。

「あと、この館への滞在はいつまでも構いません。好きなだけ逗留なさって」

「ミヤ！それは…」

「ただし、ジャンは貴族の前に武人。他の者も私も貴族ではないので、この館は武人と異国のライフスタイルをとりいれています。郷に入れば郷に従え。当家のおもてなしが気に入らなければいつでもお帰りください」

「ジャン様、この女の無礼をこのまま許しておかれますの？」

「フラン、ミヤは僕が保護して家族同然の者でこの館の女主人です。あなたのことは全て彼女に任せています」

「や、やっぱりその女がジャン様をたぶらかしたのですね。あたくしはジャン様をゆずるつもりはなくてよ。ミヤ、容赦しませんわよ」

私は笑みを浮かべると、立ち上がってスカートの端を持って礼をした

「改めまして、ようこそバルザック領主館へ。フランフランお姉様」

29・婚約者（後書き）

ようやく、ジャンの生い立ちがかけました。
長い話でしたが（笑）

押し掛け（元）婚約者のフランフラン。
美少女に見えて、実は26歳のロリータ令嬢でした。
フランフラン旋風は、次回も吹き荒れる予定です。

30・ウィルドカード

「おいミヤ、あの金髪の子をなんとかしてくれ、訓練の邪魔だ」

「馬鹿女、なんであんなのとつと追いつかないのさ。ジャン様にまわりついてボクを威嚇するんだ」

「ミヤ様、お使いに出ようとすると、フラン様にご用を申し付けられるんです」

「ミヤ様、お忙しいところ申し訳ないのですが、フラン様が顔を合わせる度に私に眼鏡をとるように申し付けられて仕事にならず困っております」

「お客さんが、わしの用意した昼食が口にあわんと突き返されたんじゃないが、都会っぽいのは無理だと言ってもらえんかの」

「姫様！なにやら変な女が我輩を無理矢理抱きにくるのでおちおち昼寝もできません。二度としっぱをひっぱれんようにしてもよろしいか」

館へきて半日もたたないのに、フランへの苦情が続々私のもとへ寄せられた。

それみたことかというジャンの視線を痛いほど背中に浴びながら、私フランのいる客間を訪れた。

フランは、バルコニーで夜風に吹かれながら食後のお茶を飲んでいました。

「皆でカードで遊ぼうと言ってるけど、降りてくる？」

「いえ、今日は色々疲れたから早く休みたいです」

「そうだよ。王都から長旅だったもんね」

「それより、侍女の件はどうになりましたの？そのあたりにいる者に声をかけても一つ用事を済ませるといなくなって、不便極まりないですわ」

「何を頼んだの？」

「お茶を頼んだり、ジャン様に伝言を渡したり、荷解きを手伝わせたり、私の足をマッサージさせたりですわ」

「連れてきた女官の人は何をするの？」

「だいたい私の話し相手ですわ。あとは侍女を指示したり、お茶を入れたり、着替えたり、館の様子を探ったりくらいですわね」

「その人は身の回りの世話をしたりしないの？着替えを手伝ったり、洗濯ものをまとめたり部屋の掃除をしたり」

「それは侍女の仕事でしょう？」

私は女官の仕事を誤解していた。

ラクサのように身の回りの世話をしながら、常に側に使える人だと思っていたが、指図をする人だったのか。

フランが言うには、身分の高い女性には必ず1人はつくらしい。

今も、フランの背後にひっそりと立つ女官、イリーがすごい形相で私を睨んでいる。

なるほど、私はイリーの手が、フランと同じ用に白くてつややかで爪も長く磨き上げられているのを見て納得した。

「この館は、普段でぎりぎりまわっているからあなたがたに専用でつける侍女の余裕はないのよ。」

身の回りのことはあなたの女官にしてもらってください。

全く出来ないわけじゃないんでしょう？もし出来ないならこの館に滞在する間に出来る用になりましょう？」

微笑んでみせたが、二人とも全く理解不能という顔をしている。

「当家では、侍女はそれぞれ仕事を担当してるの。」

洗濯物の回収やベッドメイキング、部屋の掃除は、侍女が朝食の間に全ての部屋をまわることになってるわ。

飲み物はリビングに控えている侍女に声をかけてくれればいつでも用意してくれるし。

この部屋で飲みたい場合や侍女に用事があれば、廊下の端にあるベルを鳴らすといいわ。

侍女か侍女頭が用件を承るから。

基本的に必要なものは部屋に揃えてあると思うけど」

侍女3名と侍女長1名でどう館をきりもりするか。

これは最初ベルナンの頭を痛めていた問題だったが、新しい館の主の方針によりすぐに解決した。

男性陣は武人なので身の回りのことは一人で全て出来てしまう。

そしてミヤもだ。

侍女達はお世話する人達が世話を拒むので仕事が無くなると不安がつていたが、日が経つにつれやはり慢性的に人手不足ということもあり、すぐに手いっぱいになった。

特に、ラクサがミヤの専属としてつけられ、休みをとれる状況でなくなってしまうた。

それでミヤとグリーンが相談し、今までの「部屋付き」侍女の概念を打ち砕き、新しい体制をとることになった。

行き届きながら干渉しすぎない、旅館かホテルのサービスを参考にした。

もちろん、家には専属侍女が8人もいて、身の回りの世話と掃除や片付け担当が別かれているフランには、共用の侍女というのは思っても寄らなかつたらしい。

ラクサが私の専属なのを知ったようで彼女をよこすように粘っていたが、ラクサが私にかかる手間は朝のコーヒーと風呂上がりの飲み物の用意だけで、領主の仕事を手伝う私の使い走りをしていると説明すると、さすがにそれ以上はごねなかった。

「わかったわ」

観念したようにうなだれるフラン。

「お嬢様！男爵令嬢にそのような礼の欠けたもてなしは聞いた事もございます。断固ご領主様に抗議を！」

「イリー、控えなさい。ジャン様には最初から無理だと言われているのですから。あきらめざるをえないでしょう。だけど…」

フランは、華奢な首をそつとかしげながら私をみつめた

「やれるだけやってみますが…湯浴みは二人では無理よ」

「え？どうして？」

「普段五人がかりなのよ？イリー１人でどうしろというの」

「ご、五人？」

男爵って貴族といっても一番位が低いつて聞いたけど、よく娘にそんなにお金をかけるものだ。

貴族のお嬢さんというより、もはやお姫様な境遇といっている。どうやったら風呂に入るだけで５人もいるのか、純粹に興味を持った。

「じゃあ、行きましょうか。フランフラン」

「どこへ？」

「私の部屋。ここに比べるとシンプルだけど広いのよ、お風呂が」

「だからって、どうしてあなたとこの魔導士と湯浴みをしなければ

なりませんの！」

「どうやったら風呂に入るのに5人も必要なのか分からなかったから、私が手伝ってみようと思って。あ、ジルはもしもの時のヘルプをお願いしました」

「私は美少女二人とお風呂に入れるなんて、だーい歓迎よ！誘ってくれてありがとう！なんでもお手伝いするわよ！」

「きゃっ！その魔導士、どこを触ってるの」

「うふふ。まさか女の子の服を脱がせる日がくるなんて思わなかったわ。ほら、しっかりこすらないと私が前もお手伝いしちゃうわよ」
「」

館に来た時、この部屋をあてがわれて驚いたのは、部屋に広い浴室がついていたことだった。シャワーはないが、ちゃんとお湯と水が出る蛇口がついている。

この領はイティファースの住んでいる休火山、ヌルカ山がある。

昔、力ある魔導士が掘り出したという温泉が近くに湧いていて、前領主は館に温泉を引き、それを各部屋の浴室で使えるように設備していたのだ。

もちろん街まで引いて、かけ流しの共同風呂として地元の人の宝となっている。

本来は侍女がお湯を用意して、浴室に据えた桶にためて入浴するとうっかり手間なものだが、この温泉のお陰でかなり侍女の負担は軽減された。

そしてなにより、広い窓の先に広がる海。

休みの日に昼間から入るといふ贅沢は応えられない。

「ちょっとジル、どこ触ってるんですか。もうちょっと詰めて手は自分の膝の上に置いて。ね、フランフラン。自分で身体を洗えたでしょ？」

「え、ええ。自分で泡立てるってなかなか面白いですわね」

「でしょ。それに、一人でお風呂にゆっくり浸かるのもいいものよ。考え事するのにぴったり。長く入る時は冷たい飲み物を用意するといいわ」

湯気で煙る浴室の半分を締める、一人だと手足を十分伸ばせる広い浴槽。

三人が一緒に浸かると、膝を抱えて肩を寄せ合うようになる。

ジルは戦いの中に身を置いてきたからか、裸を見せることに抵抗はないようだし、フランは人に全てをしてもらう生活をしていたので恥らうこともない。

私も女子校育ち。人に洗ってもらうのは抵抗があるが、一緒に入るのは合宿気分でなかなか楽しい。

「今まで入浴はもちろん、部屋でもほとんど一人になったことないですから想像できないですが…」

「フランちゃん、全てを用人に任せるのは令嬢としてのたしなみだと思うわ。だけど、必要になれば一人でも出来たほうがいいと思うの。私の経験としてね？」

「え、経験？」

「私はマリーの姓を名乗ってるけど、マリーは母の姓。父はコンジツト侯爵だったの」

「コンジツト侯爵って、前軍務大臣で王弟派だった？陛下が即位なさった時に爵位を剥奪されたと聞きましたか」

「ええ。私が14の時だったかしら。所領も職も失った父は自殺し、母と貧乏子爵だった田舎の祖父の領地で暮らすことになったわ」

「そうだったのですか。お気の毒に…」

「もう昔の話だから気にしないで。それで侯爵令嬢だった私はちようどフランちゃんみたいだね。身の回りの世話をしてくれるのがばあやだけになってすごく不自由したのを思い出したわ。」

フランちゃんの家がどうかなるっていうんじゃないのよ。これから

大人の女性になって行く中で、人生になるかわからないけれど、一人になることってあると思うの。だから少しでも不安は減らしておきたいじゃない？

それに逢い引きの時に、相手に脱がしてもらおうとして、自分で服を着れないのは恥ずかしいわよ。殿方の私室でお湯をお借りする事だつてあるというし」

色気漂う火照った顔で、ジルはフランにやさしく微笑む。

「きゃ、きゃージル様ったら！それもご経験ですか？逢い引きだなんて恥ずかしいですわ。でも、あたくし俄然やる気が出てきました。ここにいる間一人で入れるようになってみせますわ！」

「フランちゃん、なんていじらしくて愛らしいの！もうあたし抱きしめちゃう！」

「きゃあ、ジル様ー！その褒め言葉、ぜひジャン様にもお伝えしてくださいませ」

すっかり仲良くなったのはいいが、二人がじゃれ合うと湯が揺れて飛び跳ね、二人の間に座る私の顔を直撃した。

「あーもうっ！もう少しおとなしく入ってよ。お姉様方二人ともいい年して」

「お姉様方？二人とも？」

「ジル、フランフランでジャンと同じ年なんだよ？」

「ジャンと同じ年って、え…私より年上？こんなに小さくて愛らしいのに？」

「ちっ、よくもばらしたわね」

豊かな双球を隠す事なく湯に揺らし、引き締まりながらもむっちりとした身体のジルは、私越しに華奢で凹凸の少ないスレンダーな身体をまじまじと見た。

透き通るように白い肌は、湯の熱で朱に染めながら、青い蕾みのようなスタイルからは想像できないとろけそうなやわらかさと色気を醸していた。

「ジャンの元婚約者というから、てつきり幼女を騙して好みの女に育てようとしていたのかと思ったけど…」

お風呂のせいじゃない汗を浮かべた額を拭ったジルは、のぼせてきたのでそろそろと断り湯からあがった。

その後、フランは身体を自分で拭くことにトライし、ほとんど残った水滴を私によってガシガシと全身をくまなく拭かれた。

寝間着はなんとか一人で着る事が出来、生乾きの頭にタオルを巻くところまでこぎつけると、

冷たい果実のジュースですっかり茹だった身体をクールダウンさせた。

このまま一緒に寝ればと誘ったが、そこまで馴れ合うつもりはないと部屋に戻っていった。

「こんなに疲れるくらいに湯浴みをしたのは初めてですわ。でも、楽しかった。あなたって相当変わってますわね」

そう去り際につばやいていたフランの後ろ姿は微笑ましかった。

「あの小娘、もう部屋に戻りましたか」

灯りを消して寝台に入ると、風が入るよう少し開いていた窓から闇夜にまぎれ猫がするりと入ってきた。

「ゴウラ、おかえり。今までどこ行ってたの？」

「これ以上私の大事なしっぱに何かあってはたまりませんからな。月を見ながら庭を散歩してありました。そこで勇者と出会いました」

「何か話したの？」

「男同士の話を少し」

「そう」

「あれは、変な奴ですな。勇者というから剣と運だけの傲慢な男かと思ってましたが、未熟さを認め、考え、自分で答えを出そうとする。それを我輩に隠さず、姫様を守ってくれと頭を下げるのですぞ。憎むに憎めんようになってしまいました」

「でしょう。私も最初はそうだったわ。だけど自然に心に入ってきて信じれるものを残していくの」

「出会い方が違っていれば、魔王様とも…」

「彼のあの寂しそうな瞳を変えることが出来たかもしれないね」

私の腕の中にゴウラは身体を潜り込ませると、喉を鳴らし頭を腕にこすりつけた。

「ありがとう。私ね、彼を陥れた奴に敵をとりたいの。そして魔王は悪という伝説を正したい。魔王を倒す為の使い捨ての道具な勇者をなくしたい」

「姫様…」

「私、この世界に来てずっと考えてた。どうしてここに呼ばれたか。禁忌の伝説に残っていた繰り返される魔王と月の御子と勇者の伝説を教えてもらって、月の御子が賢者の封印を解く鍵だと分かって気づいたの。」

魔物を束ねる為に魔王は不可欠だから転生する。そして魔王を、とどまることを知らない人の欲望を抑制する為に、魔王を倒せるのは正義の名のもとにしか生まれない勇者。

そして私は、あの賢者が眺める盤上の駒に与えられたワイルドカードなのよ。

どちらの力にもなれるご褒美カード。

魔物と人が棲み分けして暮らしているなら何も問題はなかったはず。魔王の封印は、必要以上の力を持たせない為の枷。

だけど、人は欲を抱える生き物だから、人が魔王の領を命を力を奪おうとしたりして分を越えると、魔王は御子を召還し力の封印を解くことが出来る。

それが戦いの始まりなのね。

一線を越えると人の欲はもはや止まることが出来ず、悪とされた魔王は倒される運命。

勇者は、魔王を倒すだけ存在する。

じゃあ、残ったカードの運命は？

今までの月の御子は、魔王と共に亡くなるか、勇者と共に生きた例しかない。

誰かさんの力で、第三者の手に渡らないよう運命づけされているのかもしれないわね」

誰かさん、会ったら一発なぐってやらなきゃ。

そうつぶやきながら、私はぎりりと歯を鳴らした。

手の中のゴウラがびくりとしたので、あわてて頭を撫でてやる。

「魔王も勇者も、私の過分な力は必要とせず、家族として私を側に置いてくれる。

だけど、私の持つ力と、裏の事実を知り始めた私をあの人達が見逃してくれると思う？」

「あの人達といますと、王を貶めた奴らですな」

「歴代の勇者は王から疎まれ、謀略で亡くなるか行方をくらまし、そして王を捨て新しい国を作った。

一国の王となれば、勇者の王を抱いた国には早々手は出せないわよね。だけど、ジャンは地方の弱小領主の侯爵。

嫌な予感がするの。賢者の遺物の封印を解いたことはともかく、滅びの村へ行ったのがそろそろバレて怪しみ始めたはず。

身边が一段落ついてから大賢者様を探すつもりだったけど、それまで待ってくれないかもしれないわ

私はジャンを、ここにいて皆を守らなきゃ」

今朝のジャンの告白で情に流されたのもある。

だけど、勇者であるジャンは私に無関係と

「姫様は我輩が命に変えてもお守りいたしますぞ」

「ありがとう。頼りにしてるわよ」

私は、黒い毛玉から香る日だまりの匂いをかぎながら、今夜はあの人の夢が見れるといいなと深い眠りに落ちていった。

30・ワイルドカード（後書き）

今回は入浴シーン。

もうちょっとキャツキャウフフにしたかったんだけど、それほどになりませんでした。残念！

息抜き回はこのくらいで、次回は悪役登場です。

31・姫の力

城壁の外に広がる国民という名の人の壁。

流れる血を持つその壁は、王の懷を豊にする蜜。

それを貴族という働き蜂が王の下へ運んでくる。

国を豊かに育むはずのそれは、王の欲望ばかりを確実に膨らませていく。

人払いをした私室の窓から、王は下界を見下ろしていた。

「このコーヒーという豆茶は、苦いが慣れるとくせになる味わいですな」

「豆といってもな、この南方クリユタニア産のカフレの実を煎つて砕いて淹れる「コーヒー」という茶は、眠気や疲労感を取り除き、思考力や集中力を増すそうだ。心の臓や他の腑を助ける働きもあるのだと」

「薬草茶のようなものでしょうか」

「薬士の婆共が淹れるあのまずい薬茶と違い、香ばしき香りに奥深いコク、苦みを美味いと思わせるとは初めての味じゃ」

「なるほど、月の御子の英知…」

客用の椅子に座る男は、飲み干したカップを皿に戻しテーブルに置いた。

国教でもある、光の神を奉るアウグスタス聖教の神官と巫女はその神をあらわす白い神官衣を纏う。

だが、この神官は黒い神官衣を纏っている。

彼は机に広げた書類に目を通し鼻で笑った。

「乳製品を用いた菓子や料理の調理法に、豆を使う保存食に調理法、

なるほど、かの土地は水はけが良すぎるゆえに麦が育たず内陸は貧しいと聞いておりましたが、それを利とするのは確かに英知ですな。女性の美容法に託児や教育施設の充実は女ならではのいったところでしょうか。

月の恋守りという、たいして毒にも薬にもならぬ薬草をここまで売りさばいているのには驚きましたよ。ここへくる途中にすれ違う女官達から始終匂いが漂っておりまして」

「つまりらぬ。月の巫女とはこんな女子供の浅知恵しか持っておらぬのか。戦に使えぬのであれば飼っている意味がないではないか」

「そうですね。たかが一地方領主の益などせんないこと。彼女には国の役に立つてもらわねばなりませんまい」

王は、毛皮に縁取りされた羽織った輝くように赤い絹のマントを踏むのも構わず、神官の前の豪華な椅子に無造作に腰を降ろす。

そしてひとりごちるようにぼやいた。

「そもそも勇者の、あやつの手元に置かせる気はなかったのじゃ。

ええい、こちらにいれば、役に立つことを鳴かぬのなら鳴かせるまでのことなのにく。黒い瞳も魅力的だが、あの珍しい真珠色の乙女を散らしてやるのも楽しかるう。だが…」

「だが、魔王の魔力を持つ者を側に置くには恐ろしい。魔王が滅びても彼女の中に生きている。」

本来なら王の言葉を遮るなど不敬に値するのだが、神官は王の心が読めることを示すかのように言葉を続けた。

「その為には、勇者の側に置く事が国にとっても最善策だが、勇者と御子、先代の伝説と同じ結末になってもらっては困る」

「その通りだ。ユラヌス神の使徒よ。あの小娘が恐ろしいのだ」

臣下がきけば驚きのあまり卒倒しただろう。

好戦的で野心的なこの王が恐ろしいなどという言葉を口にするとは。だが、神官はただ淡々と王の言葉を受け止め頷く。

「王のお気持ちは我が身が震えるほどに感じます。あの力を御子の一存で利用でき、勇者の手の中に入れて置くのは危険。

そこです。その魔力を意のままに出来る術があるとしたらどうでしょう」

「それは如何にすればいいのじゃ」

「それを陛下のお耳に入れる為に、あの方より遣わされて参りました」

神官は、見るものに膝をつかせ祈らせるような神聖さと誠実さをたたえた微笑みを浮かべ、厳かに立ち上がると王の後ろへまわり、そつと耳打ちをした。

魔王を倒し勇者、奢りし王ケンネルの手より月の御子を奪還し、夜のトルーレ山脈を越える。

その腕に御子を抱き5日走り続けた勇者は、カリアナ砂漠のへそたる場所で、魔王を屠りし光の剣を突き立てた。

その時、地中より湧き出し聖水が、砂漠を浸し。

そして御子が夜空を仰ぎ月に祈ると、あたりに生命が満ち豊かな森となった。

万物の祝福の中で、勇者と月の御子は永遠の協定を結び手を取りあった。

即ち、カリアナ公国の誕生である。

「嬢ちゃん、探したぜ。こんなところにいたのか」

突然背中から声をかけられた。

振り向かなくてもすぐに誰だか分かる。

私を「嬢ちゃん」なんて呼ぶのは、そしてこの気持ちいい低音ボイスは一人しかない。

私は手のものを置き振り返ると後ろに立つ男の逞しい腕に飛びついた。

マルコは私を抱きとめた勢いで抱き上げると、いつものようにごりごりと無精髭をすりつけ力強く抱きしめてくれた。

こういうマルコの体育会系なスキンシップは、遠慮のない兄のような親しみと安心感を感じさせてくれる。

「マルコ。おかえり！今回は早かったね」

外回りの折衝担当を任せられたマルコが久しぶりに私の前に立っていた。

「おう、ただいま。頼まれた用の報告しようと思ってたのにかなり探したぜ。あんま手間かけさせんなよ」

「おかえりなさい。マルコ武官長」

「役職で呼ぶのはやめてください、マルコでいいですよロッドさん。邪魔しても大丈夫でした？」

「問題ないですよ。ねえ、ミヤ」

「平気よ。疲れてるでしょ、その椅子の上に積んでる本を降ろして使って」

「ああ」

今日は久しぶりの休日。

朝から遊び相手を確保しようと思っていたフランから逃れ、書庫に籠り本を積み上げた広い机に向かっていた。

ロッドは休みの度にここに籠って窓辺のソファを陣取り、棚の端か

ら読破していつている。

マルコが覗き込んだ私の手元には、紙を真ん中で閉じた手製のノートがあり、表を作り広げた本のページに並ぶ言葉を日本語で書き並べていた。

「何を書いてたんだ？」

「簡単な大陸史年表を作って、そこに月の御子と勇者と魔王の伝説をあてはめてるの」

「なるほど。それで何かわかるのか？」

「うーん。まずは歴代の御子の状況把握ってことかな。物語の状態で表現が気になって具体的なことが頭に入ってこなくてね。それにこうすると周辺の国の状況もよくわかるでしょ」

「ほら、皆知ってる「勇者伝」は先代の勇者と月の御子の伝説だけど、カリアナ公国誕生はここね。で、物語には出てこなかったケネル王の治めるラダトニス王国はほら、2年後に滅びてるのよ」

「へー！勇者伝は大陸の子供は一度は懂れる話なんだが、月の御子に振られたケネル王のことなんて思っても見なかったぜ」

「で、こつちの本はロッド先生に借りた『ラダトニス全史』なんだけどね。勇者誕生のことは触れてあるけれど、彼らが国を去ったことは書いてないの。そしてここ、ちょうどカリアナ公国誕生の年から国内に魔物が増え始めているの」

「魔物が？」

「ええ。増えたっていうより割合は昔に戻ったってかんじのようね。ラダトニスは魔王が現れる前は、森や草原に魔物が住むことは普通だったみたいなのよ。その数が増えていった頃に魔王が誕生し、魔物は魔王領へと集められ一時的に魔物が減ったとあるわ」

「ふむ、興味深いな。確か前に言ってたよな。魔王は魔物を統べる王だと」

「私も以前この国の古い記録に目を通していた時に同じ事に気づい

たのですよ。魔王誕生と共に魔物の出没件数が減り、魔王が倒れた後に再び魔物被害が増えていました」

「そういえば昔、じいちゃんの子供の頃は街を出ると魔物が出て、今みたいに旅が楽に出来なくて、むしろ命がけだって言ってたな。待てよ、じゃあキャラバンと商談するついでに各国の噂を集めてこいっていったのは」

「魔物の話し、出てきたでしょ？」

「ああ。この国以外は、ほんの僅かだが魔物との遭遇率と凶暴性があがったって言ってたぜ。まだ定期的に旅を続けている者が気づくか気づかないかほどの変化だ。キャラバンの奴らも違和感を感じていたが問題視するほどじゃないらしいが」

「歴史は繰り返す、か」

「まさか、やつぱりそれが魔王が倒れたせいだと？ また昔のように魔物が生活を脅かすような日々がくると？ でもな、ミヤ。それならなんでこの国だけ魔物に変化がないんだ？」

マルコは目を細め、詰問するような口調で尋ねた。

私は、もてあそんでたペンを置くと、そつとのど元に触れた。

「魔王の力…のせいなのか？」

「もしかしたら、ね」

「姫様、深夜にこのようなむさ苦しい人のオス共と部屋に籠られるなど危険でござる！ すぐにお部屋にお戻りください」

「ジルはパットは領境の村の視察に出てるからしょうがなでしょ」

深夜のジャンの私室で、ジャンとマルコ、そしてロッドは、ゴウラを膝に抱いた私を囲んだ。

三人に向かってしつぽを膨らませ威嚇するゴウラを私はなだめるよ

うに撫でた。

のど元をくすぐられる心地よさにうつとりと喉を鳴らしかけたが、その場にいる全員の視線を集めていることに気付き居住まいを正した。

「むむう、それで我輩に何を聞きたいのでござるか」

「魔王が滅びた後に魔物が増える謎、そして私との関係よ」

「謎もなにも、魔王様がお倒れになった後統べる者がおりませんか。皆故郷に戻り、元の生活に戻っただけのこと」

「魔王領にいた魔物が出て行ったってこと？」

「もちろん、移動の難しい者もおれば戻る場所のない者、領内が気に入ったものもおりますから完全に元の通りとはまいらぬが、時間をかけて子に孫と数を増やすでござろう」

「やつぱり……」

「姫様やおぬしらが心配しているのは、この国のことでござろう？」

「ああ。他の国も心配だが、この国の民が困らぬよう対策があれば講じたいんだ」

ジャンの言葉に、ゴウラは鼻で笑った。

「ここに姫様がおられるではないか」

「私？」

「姫様は我輩のように主従の契を交わした魔物でなければ触れられぬ。そして統べることはできずとも、姫様に抗うことはゆるされぬ呪がほどこされているのだ。その効力が一国に及ぶのは全て魔王様のご威光。」

そこなる下郎共、魔王様と姫様にかしぢゅきい……」

「仲間を下郎とか呼んだらだめよ」

「も、申し訳ありません、姫様……」

ゴウラの襟首をつまみあげた私は、メツと叱った。

「ゴウラ殿、では魔王の魔力を宿すミヤがここにいる限りはこの国は魔物の被害から免れるのですね」

「そういうことだ」

ロッドの問いにゴウラは鷹揚に頷いた。

「では、先代の御子が勇者と共に建国したカリアナ公国が、建国当時他国と変わらず魔物の影響で大いなる苦難を乗り越えたところなのですが、同じ月の御子でも魔王の加護がなかったと？」

「カリアナ…ああ、先の月の御子、確か血のような髪の子でござった。あの娘はずっと魔王様や我々に怯え泣き叫んでおり、魔王様が差し出された手をあの姫は拒み続けたのだ」

「先代の月の御子は、炎の神を持ちながら水のような青い瞳のビビアンという名のお方だと言われています。ミヤと同じように異国から攫われたと。あなたは、もしや先代の魔王にも仕えていたのですか？」

生きる魔王史の前に、ロッドは興奮を抑えきれず震える声で尋ねた。それに対し、ゴウラはジャンに冷たい目を向けると静かに応える。

「我は常に魔王様の片腕としてお仕えしてきたもので。魔王様と同じように記憶を持ち、人間の過ちと共に輪廻を回る者だ。常に魔王様と共にあり、こたびは人の子である勇者の手で魔王様が倒れる時に私の命も散る定めであればどんなによかったか。だが、魔王様はお許しにならなかった」

私の手を抜け出したゴウラは、私の見知った二つ足の姿に変わったかと思うと声をあげる間もなく、剣を抜くとジャンの首に押し当て

た。

「こうやっていつでも魔王様の敵、おぬしの命を奪うことが出来る
ところにいるのに、口惜しや。魔王様が、そして姫様が望まれぬ限
り我は勇者の血を勝利の杯ですすることはできぬ。姫様がこの世に
いる限り私はその命に背くことはできぬのだから」

部屋の中に剣呑な空気が張りつめた。

ジャンは黙って座ったままの姿勢を崩すことなくゴウラを見据えて
いたが、マルコはいつの間にか隠し持っていたナイフを手にもつで
も飛び抱えるよう構えをとっていた。

「みんな、そのへんにしておいて。ゴウラ、剣をしまいなさい」

私の声で緊縛の呪文が解けたかのように、ゴウラは剣をさやに戻す
と元の姿に戻った。

マルコは剣をしまったがゴウラから目を離さない。

ジャンは苦笑してマルコの肩を大丈夫と叩いてなだめた。

場は収まったように見えたが、まだ収まってなかったのは私の心だ
った。

興奮おさまらない様子のゴウラを抱き上げこちらを向かせると、胡
乱な目でみつめた。

「ゴウラ、前から気になっていたのだけど、私を姫と呼ぶのも私の
持つ魔力の欠片と関係あるの？」

「姫様は魔王様が自らの力を分け与えられました。そしてそれを受
け取られたお方ですゆえそう呼びしておるのですじゃ。」

「今までの月の御子はこの魔力の欠片をもらわなかったの？」

「今までの御子の方々は魔王様を畏れ、我らに恐怖しておりました。

お手を触れられることすら拒む者達がどうやって魔王様の力を受け取れましょう」

確かに、今でもあの時のことを思い出す度に、我ながらよくあれを受け入れたなと驚いてしまう。

あの綺麗な瞳の中に寂しさを見てしまったせいだ。

くすりと思い出し笑いをしかけ、あわててゴウラにしかめつつらをしてみせる。

「じゃあ、私の中の魔力には、私が教えてもらった以外にも力があるの？」

「我輩が魔王様から伺ったのは、姫様もご存知の通り、言解きの力の他には敵意ある魔物は触れない力。国内の魔物達が鳴りを潜めているのは、魔王様に力を分け与えられた姫様を畏れ敬っておるからで魔力の力ではござらぬ。姫様がご存知ない力はあと一つだけ」

ゴウラは得意げにヒゲを広げて動かしてみせた。

「魔物を使役することが出来るのです」

「使役？」

「意志を呪としてそれを耳にした魔物を意のままに命じることが出来るのです」

「それってミヤが魔王と同じ力を持つということかい？」

腕を組んでいていたジャンが思わずうなる。

「小僧、魔王様の力は王の力、魔物全てに及ぶ力じゃ。ミヤ様の力はそれには及ばぬ。姫様のお側で声を、意志を感じれるところにいる者に限られる。だが、一度命じればそれを果たすまで死ぬまで呪から逃れることはできないだ」

「では、ゴウラ殿はミヤ様に使役されてということになるのですか？」

「そのもやし学者、馬鹿なことを言うでない。我は姫様と主従の契約を結んである。命じられなくとも、いつでもミヤ様のために尽くせるのだ。だがこの契約は魔王様の名のもとで結ばれたもの。魔王様がいらっしやらない今は新たな契約はできませぬ」

「なるほど、これはとても興味深い」

「この場にいるだけ、げふんげふん、ミヤ様を守る者共よ。今のことは他の者に伝えることはまかりならん。特にそのもやし学者、書き留めることはならん」

「わわっ！そんなあ、私の研究が…」

こっそりロッドがメモしていた紙がいきなり風に攫われて舞い上がると、火を發したちまち灰になった。

そして、マルコとロッドの周囲を黒い霧が一旋した。

「悪いが、今我輩が話したことは口外せぬよう沈黙の呪をかけさせてもらう。姫様の安全の為だ、許せ」

「今の、僕だけ何もならなかったんだけど」

何も変化のなかった自分の周囲をみわたしながらジャンが声をあげると、ゴウラは舌打ちし苦々しげに声を吐き出した。

「我の呪は光の加護を持つ勇者には効かぬようだ。だが、小僧は勇者だ。よもや姫様を危機に陥らせることはしまい」

「僕を信用してくれるのかい？」

じつと見つめられ、居心地悪そうなゴウラは、ふいと目をそらすと私の膝に丸くなった。

「都合の悪いところだけ猫のふりかよ」

笑いを含んだマルコの声を無視し、あくびをひとつすると寝た振りをきめこんだ。

「これで、ミヤの持つ力がはつきりしたが。ジャン、やばいな」

「ああ。今の状況では誰かが気づくのも時間の問題だな」

「どうということなの？」

「ミヤ、君の持つ力は魅力的すぎる。悪意のある者達が君を狙うかもしれない」

「私の力って、私がいれば魔物避けになるってだけでしょ？」

「いや、もうひとつのほうだ。ぐっ！くそう、これが呪ってやつか。口に出そうとすると喉が締まる」

「ええっ？ 苦しいの？ 大丈夫？」

「ああ。命を奪うようなものじゃなくて言葉が出ないだけだから」

「本当です！ これはすごい、文字にしようとする手が動きません！」

ロッドがペンを持った自分の手を目を丸くしてみている。

「じゃあ、不便だし何か暗号にしちゃえば？ 関係ない言葉なら言えるんじゃない？」

「では「姫の力」はどうでしょうか？ 漠然としてますし、姫と呼ぶのはゴウラ殿だけですから第三者には分からないでしょう」

「なんだか恥ずかしいんだけど」

「いいんじゃないか？ えー、姫の力。お、今度は大丈夫だ。話を戻すぞ。この姫の力を悪用しようと思う奴が出てくるかもしれない」

「それは、私が命じゃなければいいだけの話じゃない」
「馬鹿だな。嬢ちゃんが命じゃなくても、命じゃないといけない状況は作れるぞ。誰かの命を奪うとか脅したり。薬を使うという手もある」

それは、暴力団とか裏の世界の怖い人達の手口じゃないか。だけど、元いた世界では縁のないところにいた私と違い、今の私が置かれた状況はそう甘くない。

「そんな状況はごめんよ」

「じゃあ、身辺には気をつけていかなーと。今までののんきな生活や前にたいに脱走されたら守れるものも守れないからな」

「ハイ」

「マルコ、今はまだ心配しすぎじゃないか？魔物の異変に気づいた者がそれとミヤを結びつけるとは限らないさ。ここには勇者である僕がいるんだからさ」

「だが、賢者の遺物の封を解く鍵の力があることは王に報告してるんだろ？それだけでも注目は避けれないだろ」

「そうか、それもあつたな」

ジャンは重い声で応えた。

「多分、俺たちがまず警戒しないといけないのは王だ。例の滅びの村の件もあるからどんな手してくるかわからん。幸い衛兵の数も揃ってきて領境の守りも立てれるようになったし、館の警備も置けるようになった。ミヤには自覚を持ってもらって俺らで出来るだけの準備は整えておこうぜ」

「ああ、そうだな」

「お、お手数をおかけします」

「姫様のことは我輩がお守りするからお前らの手は借りん」

「強がるなつて。おまえさんは出来るだけ普通の猫のフリをして最終兵器として側についてくれ」

「最終兵器か、その言葉氣に入ったぞ。あいわかった。猫として姫様に害をなす者の目を見事たばかってくれる！」

面々が意気込みを口にしたり、具体的にどう警備をするか口々に言い合っている時、その異変は起きた。

「あれ、この光ってる模様ってなに？」

「姫様！！」

私の声に気づいたゴウラが慌てて私に飛びつくようにするが、私の周囲を取り囲む光る模様が発する赤黒い光のベールにはねとばされた。

「ゴウラ、大丈夫？これなんなの」

「魔導、転移の術紋か！くそ、ジルがいれば」

「転移術？ミヤ！おいミヤ、すぐに助け！」

「姫様っ！！！」

私は仲間達の声を耳にしながら、強く光った暗い光に包まれた途端に襲われた頭を強くぶつけるような痛みと深淵の闇に落ちるような感覚の中で意識を失った。

同時に、私の姿は皆の目の前から消え去った。

31・姫の力（後書き）

前回の更新からWeb拍手を設置していました。

さっそく、たくさんの方の拍手＆コメントをありがとうございました。

もちろん、感想も投稿していただきありがとうございます。

読者の皆さん大好きです！！！！

と、嬉しくて張り切って書き始めたのですが、今回は産みの苦しみを味わいました。

よくばりなので、ついあれこれ書きたくて迷ってしまいます。

結局2話に分けようと思っていたところを1話分にまとめて詰め込んだのでいつもより長くなりました。

さ、ミヤはいつたいてどこへ消えてしまったのか。

また館の外に場所を移して物語は進みます。

どうぞ次回をお楽しみに。

32・黒蜘蛛

目を閉じるとそこは暗闇のはずなのに、赤黒い光がまとわりつく。その粘つくような光の残像に絶えきれず目を開けると、

月明かりの下で、森の中だろうか。

木々に囲まれた泉の側に投げ出されるように、私は横たわっていた。泉に落ちたのか服は濡れ、身体にまとわりつくそれは、夜風を受けてどんどんと体温を奪っていく。

周囲を見渡し、誰もいないことを確かめて立ち上がろうとすると、風の仕業ではない茂みをゆする音が聞こえた。

身を固くして振り向くと、そこには薪を抱えた男が現れた。

黒い男。

目をこらすと、ジルが着ているような同じデザインの黒い導服を纏った茶髪の男は、杖を脇に抱えている。

「魔導士……」

「ああ、気がついたかい。濡れて寒いだろう、今火を起すから」

魔導で灯された火種は自然ではありえない早さで薪に炎を纏わせた。揺れる灯りに照らされ、杖に嵌った琥珀色の大きな鉱石がゴウラと同じ目の色で光を揺らす。

「あなた誰、転移の術だっけ、使った人？」

「ああ。俺は見ての通り魔導士さ」

「私が誰だかは分かってるの？」

「ああ。さるお方から君を内密に連れて来て欲しいと頼まれたんだ。有名な月の御子様だろ？そりゃあ勇者の住む館から君を連れ出すんだ、念入りに下調べしないと。まあ今回はほとんど依頼人が準備してくれたけど」

「……なら、寝てる場所をこっそり連れ出せばいいだろうに、あんなに派手に転移させるなんてそれも上の人からの指示？」

「え、皆の前？お前の部屋の灯りは消えてたぜ。寝てたんじゃなかったの？」

「…偶然、内緒の夜更かしをして皆でおしゃべりしてたところだったのよ」

「あちゃー。寝間着にただの転移マーカーをつけただけじゃだめだったか。やっぱり慎重を期して、人は宛てにしないで居場所を特定できる術も併用すべきだったか…」

「なにそれ、誰かが手引きしてこれにマーカーってをつけたの？」

「ああ、俺は触ったものを一緒に転移させる術を使うんだが、対象物だけを移動させる場合はマーカーをつけておくんだ。それでも移動距離は歩いて1日くらいの距離に限られるけどな。さすがにあの屋敷に入るのは無理だったんでちよいとツテを使ったのさ」

とりあえずマーカーで私たちの会話が聞かれてなかったことに安堵しながらも、それを悟られないようみせながら、このおしゃべりな魔導士に質問を続けた。

「そんな簡単に色々手の内を明かしていいの？」

「もちろん全てを明かさないさ。ただこういうことが出来るって能力のウリを一部でも公開しておけばそれに見合った仕事が舞い込むんだ」

「ふーん。転移つてもっと遠くの街や領や国をまたいで出来るもんだと思っただけど、一発で目的地に行けないって不便ね」

「ああ。力の強い魔導士なら領をまたぐことは可能だが、この領はなんらかの魔導の干渉が仕掛けてあつて領外に転移させることが出来ないんだってさ。それに魔導士の力が強ければ強いほど痕跡で特定されやすい。」

「って、俺、何のんきに説明してるんだ。お前寒いだろう、すぐ火をつけるから服乾かせよ」

「あ、ありがとう…」

私は男から毛布を受け取って身体を被うと、手早くローブに寝間着と下着を脱いで、起してもらった火のまわりに組んだ枝にかけた。私に警戒をみせることなく、のらりくらりと手慣れた風に準備を整える。

寝間着を脱ぐ時にどこにマーカーがついているのか調べてみると、後ろ身ごろの裾裏に消えかかった黒い紋様があった。

何かが張り付いているようだけど、手でこすっただけではとれない。

「…お前、男に堂々と下着見せんな」

「ああごめんなさい。まだ恥じらう気持ちの余裕もないのよ。この格好じゃ心細いから一刻も早く乾かしたいだけ。ところで、寝間着にマーカーを仕込んだってことは私が寝間着で、しかも泉で濡れることも分かってたのよね。まさかこのまま移動するつもりじゃないわよね？」

「えっ…」

「さあ、早く出して。まさか寝室用のローブに寝間着姿の私を連れて、王都まで連れていくつもりだったの？」

「それは…考えてなかった。」

「じゃあ、着替え持つてる？」

「ああ、下の替えなら…。御子様はズボンでもいいのか？」

「ええもちろん。あ、私はミヤって呼んで。あなたの名前は？」

「名前を教えないが、二つ名なら。黒蜘蛛だ」

「くろくも…　なんか噛みそうだね。じゃあクロで」

「ちよつとそんなペット呼ぶような口調はやめてくれよ。クロさんとか、クロクモの旦那とか呼んでくれや」

「クロスケ」

「なんか微妙な響きだけどしっかりくるな」

「私の国でね、闇の中に潜んでいて、どこからともなくあらわれる生き物の名前よ」

「ほほう、なんかカッコいいな。じゃあそれで頼むわ」

黒くてもふもふコロコロした小さい生き物の集団という説明はあえて割愛しておいた。

逃げ出すチャンスを探して口を動かしながら周囲や黒蜘蛛と名乗る男を観察する。

下着を投げつけてでも、なんなら「きゃ、毛布が落ちちゃった!」とでも油断を誘えるならなんだってする気だったけど、口にする反応と裏腹に動揺している様子はみじんもない。

なけなしのお色気攻撃などは通じそうにないのを悟り、様子を見る事に徹する。

まだ領内のようなだが、見覚えのない場所でどちらの方向を見ても同じような茂みと木で囲まれている。

長めの髪の色を更に濃くしたこげ茶色の瞳は、狐のように細い切れ長の目からのぞき表情が読めない。だが、会話の反応から人は良さそうだ。

下調べをしているといいながらいきあたりばったりさが漂うやり方に、私は彼の甘さを感じチャンスだと思った。

だが、それは私の甘い判断だとすぐに痛感することになる。

乾いた下着と与えられた白いシャツにズボンを手にしげみに入ったら私は、手早く服を身につけた。

もちろん、服にメーカーがついていなかを確認した。念のため寝間着とローブは捨てていくことにした。

帰ったら新しいのを買うからとズボンの裾を私の長さに切ってくれ、ベルトがわりにローブの紐を外してウエストを絞る。

シャツはぶかぶかなので、それだけでシャツワンピースのようだ。長い

袖をまくり、裾は外に出したままにする。

皮の室内履きは底が薄いので、考えた末にローブを裂いた布を巻きつけ歩きやすくした。

なんだか、以前吟遊詩人に変装した時のようだと、浮つく心を抑えて茂みごしに黒蜘蛛を見た。

私に背を向け、私が目を覚ます前に狩ったという野うさぎを料理している。

このまま逃げれるかな。

私は茂みに触れないよう、足音を立てないように中腰になってそっと歩き出した。

「どこに行くんだい？」

いつの間にか、背後に黒蜘蛛が立ち、私の背中に杖を押し当てていた。

「……ここがどこかなと思っただけよ」

「そ。あ、ひとつ言っておくと、マーカーがないから君を転移させることは出来ないけれど、僕はいつでも君の側に転移できるからね」

「どうして？」

「僕の名は黒蜘蛛だって言っただろう？ 職業は運び屋。調達屋とも呼ばれてる。君はもう僕の糸が絡めた獲物だ。さすがにこのやり方は企業秘密だけだね。だから逃げても無駄だよ」

「ちえ、残念」

「雇い主からは傷をつけるなと言われてるんだ。だけど追いかけてこも面倒だから、次に僕から逃げようとしたらお仕置きするからね」

私は、彼の目が孕む殺意を感じ、冷や汗をかきながら黙って頷いた。

「よし、いい子だ。僕はただ君を指定の場所に運ぶだけだからそれ以上のことはしないから安心しな。こうみてもプロだからな」

黒蜘蛛は言葉通り、私には紳士的に打ち解けた態度で接した。

私はどこかでチャンスをと狙っていたが、それを察した彼が説明したおしおきがかなりえげつないことだったので、大人しく従うことにした。

夜が明けると私たちは出発した。

黒蜘蛛は私に術を使って髪の色を自分と同じ茶色に変え、近くの村で靴とマントを買いそろえると、私を導師見習いの少年のふりをさせた。

彼も導師服の上にマントを着ていて、一見魔導士だとは分らない。

私たちは街道を阻む領壁から二つ向こうの山を抜けてマドカナル領へと侵入した。

この世界に来てかなり歩き慣れたものの、こんなに徒歩での移動は初めてだ。

人目につかないよう道なき道を進むことが多いので馬車は使えず、酷使して痛んだ足は魔導で回復の術をかけてもらいながら、私たちはひたすらここまで進んだ。

「クロスケ、ここからどこへ向かうの？直接王都に行くんじゃないの？」

「俺、王都に行くなんて言った覚えはねえが？」

「だって、あなたの雇い主の心当たりは王都にいる人しか思い浮かばないのよね」

「おっと、それは俺に言うなよ。それでも雇い主は正体がわからないように間接的に頼んできてるんだ。お前が心あたりがあるからっ

「俺は興味ねえからな」

「なるほど、命は惜しいってことね。確かにやな相手よね、あれは」

私は一度だけ会った男の顔を思い出した。

顔を合わせたら何を言ってるのかと、罵詈雑言の限りを心のノートに綴っていく。

「じゃあ領境を越えたいし、そろそろ転移の術を使うのかな？」

「俺は賢い女は好きだけどさ、小賢しいのは命取りになるから気をつけな」

「はい」

尾根を越えた私たちは、人気のない山中をもくもくと下る。

すでに日が傾き、麓が見え始めた頃、黒蜘蛛が立ち止まった。

「今夜で俺達の旅は終わりだ。短い間だったがこんなしくりくる相棒は初めてだったぜ」

思いがけない賛辞にとまどいながらも、短く礼を言う。

「俺と別れた後に待ってる奴は俺以上にろくな奴じゃないんだろうけどさ。最後まであきらめるなよ」

「クロスケって変な人だね」

「お前だってな。俺が魔導士なのに裏の仕事をしってるって知ると、だいたい奴が鼠か蠅を見るような、汚いものを見るような目をするもんだぜ」

「もちろん、悪い事はいけないよ。必要悪もあるだろうけど、でも悪は悪よ。クロスケは悪い仕事をするけど、こうやって一緒にいればいい人だよ。一つが悪いからその人全てが悪いとは思わないし、一つがいいからその人が無条件でいい人だとも思わない。」

光があれば闇があるのと同じように、人間も表と裏を両方持つてゐるんだとうよ。だからクロスケを全部信じてはいないけれど、旅をしている間は命を預けても大丈夫だと思った。

私の国の古人は二面性を持つのが人つてもんだつて、それを色々な形で芸術として表現してるのよ。面白いでしょ」

黒蜘蛛は喉を鳴らすように笑った。

「やっぱり、ミヤつて面白れーわ。ちつ、もつと別の出会い方がよかったな」

「ふふつ。クロスケはどんなに私を気に入つても、仕事は最後まで果たすでしょ？」

「そりゃ、プロだからな」

「私もクロスケのそういうところが好きよ。違ふ形で出会えたらよかったけど、それだとこんなに親しくならなかったかもね」

「ありがとうよ。俺が引き渡した後は何が待つてるのか分からねえが、もしかしたらいいことやチャンスもあるかもしれんだろ。希望は捨てるなよ」

「うん！」

「よし、じゃあ最後の晩くらいはたらふく美味いもん食つて布団で寝ようぜ」

その言い方は、死刑囚の最期の晩餐みたいじゃない。

頭をうつすらとかすめる予感を打ち消し、私は笑顔で頷いた。

山を降りた所にある大きい村と呼べるほどの小さな街に着くと、私たちは宿をとり近くの酒場に入った。

よそ者に警戒の色を浮かべた村人らしい客達に、黒蜘蛛は酒を振る舞った。

予め正体をばらすなと念を押されている私は、見習いの少年をしつかり演じ、黒蜘蛛に酌をしたり料理をとりわけて世話をしつつ自分

もしっかりごちそうになった。

存分に食べて飲み、村人達と盛り上がっているとあつというまに夜が更けた。

すっかり酔って足下危うい黒蜘蛛を私は肩で支えながら宿屋の部屋へと運んだ。

祖末だが清潔なベッドの上に黒蜘蛛を横たえると、私はてきぱいきと導服の上着と靴を脱がせ、シャツの喉元を開いた。

と、その手を黒蜘蛛がつかむと私を引き倒し胸に抱きしめた。

身体を強ばらせる私に、大丈夫何もしないというようにぼんぼんと背中をたたいた。

そして、掠れた声でつぶやくように言った

「お前、ほんと馬鹿だな」

「仲間の一人に、しょっちゅう馬鹿女って呼ばれてる」

「これは寢言だ。俺は今日すっかり飲み過ぎた。どうしようもなく酔って魔導も使えないくらいなんだ。だからお前が逃げたら失敗したと思って身を隠さなきゃならん」

私は、手を伸ばし、頭上の男の鼻をつまんだ。

「クロスケはプロフェッショナルじゃないの？情に流される二流じゃないでしょ。ちゃんと最後まで仕事しなさいよ」

返事は返ってこず、沈黙が流れた。

もしかして本当に寢言だった？

私が身を起そうとすると、黒蜘蛛はふたたび私を抱き寄せ耳元でささやくように言う。

「お前、ほんとに馬鹿だ」

「私はね、クロスケを気に入ってるの。直接の依頼人が誰かは知ら

ないけれど、後ろにいる人なら分かってる。もし失敗したら、どんなに隠れてもクロスケの命なんて軽く消しちゃうよ。それに……」
私はためらった。

だけど、ここで言うっておかなきゃいけない。

「仕事とやらが終わったら、ちんたらしないですぐに全力で逃げるのよ。とにかくこの国から出なきゃだめよ。国を出ても油断しちゃだめ。絶対口封じしようとするはずだから。そういう陰険な顔してたもの」

黒蜘蛛は何も言わず私を抱いた手も緩めなかったので、連日歩きづめだった疲れと人肌の心地よさから、そのまま腕の中で眠ってしまった。

翌朝、目を覚ますと、ベッドの端に黒蜘蛛が身支度を終えて座っていた。

「ちゃんと寝れたか？朝飯食ったそのまま出るから、早く支度しろよ」

昨夜のことに触れなかったのも、私の忠告が届いたか心配だったが彼の指示通りに手早くしたくを整えた。

朝食後に街を出た私たちはしばらく道を歩いていたが、森にさしかかったところで道を逸れ、廃墟の神殿へとたどり着いた。

姿を偽る必要がなくなっただので、髪の毛の色を術を解き黒に戻してくれた。

神殿の奥に湧く泉につくと、黒蜘蛛は自分の荷物を下し中からロープと布きれをとりだす。

「これから転移の術で雇い主のもとに送る。向こうからの指示で、送る時に動けないように縛って目隠しをしるってことなんだ。すまないな」

「いいのいいの。気にせずやっちゃって」

黒蜘蛛は、私の手足を痛みのないように慎重に、だが動かないようにきっちり縛った。

そして、私を抱き上げると何か長いことばを呟く。

目隠しをされていて何も見えないが、ジャンの部屋で赤黒い光に包まれた時のような、肌に熱のような空気のゆらぎを感じて術を使おうとしているのがわかった。

「ミヤ、今からお前を泉の中の転移紋に通す。水は入り口だから濡れるが溺れたりしないから安心しな。心配だったら、おもいつきり深呼吸して息をとめな。10数える間に向こうにつくさ」

「クロスケ、ううん黒蜘蛛、今までありがとう」

「馬鹿、お前を攫った悪党に礼なんて言うんじゃねえよ。これだからお前は…。ロープに細工をすると俺の仕業がばれるから何もできないからこらえる。でもいいか、目隠しを外されたら、その黒い目をよく開いて状況を良く見ろ。お前は賢い、生き伸びるチャンスは自分で作るんだ」

「うん。頑張るよ。もし頑張ったらまたクロスケに会えるかな」

「さーな。俺は裏の人間だから会わないにこしたことないさ。でも俺は会いたいぜ」

「ありがとう。じゃあまたね！」

黒蜘蛛は私の頭にキスをし「幸運を」とつぶやくと、泉の中にそっと私降ろし手を離れた。

高層エレベーターが降りていくような、落下していく中に浮遊感を

感じて、自分がどちらに向いているのか分からず不愉快で気分が悪くなり始めた頃にそれは終わった。

また水の中か…。

ズボンの中、下着まで水がしみ込む感覚に顔をしかめた。

「ようこそ。お待ちしていましたよ、月の御子殿」

晴れ晴れとした男の声が響いた。

声の主は濡れるのもかまわず私を軽々と抱き上げられた。

「美しい黒髪だ。きっと瞳も美しい黒なのでしょう。早く拝見したいが、申し訳ないがもうしばらく我慢してくださいね」

抱かれた感覚からすると、黒蜘蛛と同じくらいの背で細い腕だ。それでも男らしい力強さで私を運ぶ。

私は黙ったまま、されるがままにしていた。

やがて、ドアが開く重くきしむ音がし、私は暖かい部屋に入った。

夏とはいえ、今までひんやりと冷たい場所だったので地下だろうと想像していたが、この季節に暖炉に火が入っている様子から確信を強めた。

男は私を抱いたまま歌うように何かを唱えた。

すると、私と男の身体に服を張り付かせていた服と水を吸い私の身体に食い込みかけていたロープの水分が全て消え、感触は乾いたものになった。

そして、しばらくこのままだと謝罪の言葉と共に告げられ、ふかふかのベッドの上に私を置き去りにし男は部屋を出ていった。

それからどのくらい経っただろうか。

朝ご飯がすっかり消化され、身体が空腹を訴えはじめた頃に再びド

アが開いた。

一人ではない。複数の足音がなだれ込んでくる。

「ふむ、これはいい姿だのう。月の御子よ。色気のない男装だが、これはこれで面白い趣向ぞ」

私は、耳に入った覚えのある声に肌を泡立たせた。

目隠しが乱暴にとられ、眩しさに細めた視界にとらえたのは、口元をゆがませて私を見下ろすエソニア王ダルド3世の姿だった。

32・黒蜘蛛（後書き）

黒い神官に次いで黒い魔導士の登場です。

って、投稿後にゴウラの二つ名「黒き疾風」と黒がかぶってるじゃないかと気づいてしまいました。

だけど「クロスケ」がツボにはまったのでこのままいってしまいます。

時間経過の表現を加筆しました（2010・2・5）

33・探索

「これはどうということなのです。ジャン様、ご説明くださいまし。」

ミヤが部屋から消え、邸内は大騒ぎになった。

現場で指示を出し状況を検分している所に、騒ぎを聞きつけたフランがやってきた。

ミヤが消えたと知り血相を変え胸元に詰め寄ったフランに、ジャンはたじたじになる。

「すまないが僕達もまだ状況が把握しきれてないのです。後で説明するからここから出ていってくださいませんか」

「あたくしに向かつて、下がれとおっしゃいますの！」

「少なくとも今の状況はあなたには関係のないことなのでから、邪魔しないでください」

「じゃ、邪魔ですって！私は関係なくありませんんことよ！」

紳士的に出ていってもらおうとするジャンに、ガウン姿のフランは胸を張って宣言した。

フランの言葉に、男爵令嬢がミヤの消失の件に何か関わっているらしいことにあたりは騒然となる。

後ろに控えている女官は、主人の申し出は当然というように慥然とした顔をしていた。

「どういうことだ、何を知ってるのですか」

「いくら二人きりじゃないからといって、あたくしを差し置いてジャン様のお部屋にあの女が入るなんて許せません。婚約者としての私の問題でもありますわ」

その場に沈黙が流れ、真っ先に口を開いたのは当直の衛士に指示を出していたマルコだった。

「フランお嬢様、申し訳ありませんがね、ジャンの言う通り部屋に戻ってください」

「なっ、汚らしい庶民の一武官があたくしに命令するんですの？」

「フラン、彼は私の片腕と同じ側近です。彼の言うことは私の命と同じです。どうぞお引き取りを」

「くっ、男爵家令嬢を愚弄するんですの！あのどこの馬の骨とも知れぬ娘がそんなに大事ですの！」

「フラン！……」

ジャンの叱責を遮り、マルコは穏やかに、だが目に力を込めて言葉を続けた。

「嬢ちゃんと違って、ミヤは俺らの仲間でただ一人の月の御子だ。

これは一刻一秒を争う命にかかわることだから邪魔しないでくれ。

男爵のご令嬢だろうがこの家にいる限りは武官長である俺の命令に従ってもらう」

マルコはきっぱり告げると、衛視に男爵令嬢を部屋まで送り扉を封じるよう命令した。

「この騒動で警備も手薄になっています。令嬢になにかあったらいけませんから、落ち着くまで部屋から出ないでください。必要なものがあれば用意させますから」

衛士にかこまれ強制的に連れていかれるフランから投げつけられた、男爵令嬢にあるまじき罵詈雑言を、残った衛士を引き連れて外に向いながら聞かなかったことにした。

マルコが外へ向かうと、ジャンはベルナンにハリエットの家を訪問するよう指示した。

視察に出ているジルとパットに連絡をとるためだ。

本来は領主館には各街や村などの代表者とやりとりするための伝話の魔導具が設置されていた。だが非常に高価な物だったために、ジャンへの嫌がらせの一環で前執政官が持ち出していた。

今はそれを買直す予算がない為、ハリエットに頼み領内の顔役用の伝信という伝言を送る魔道具を使わせてもらうことにした。

ハリエットにだけは事情を伝えるが、混乱を招かないために彼女以外領主館からこのことが漏れないようジャンは執務室から指示を出す。

執務室に司令本部が移されたが、ロッドとゴウラはジャンの部屋に残っていた。

事が起こった直後からゴウラは再び猫から二本足の戦士の姿になっていたが、使用人達が怯えるので再び猫の姿に戻り、ロッドの肩に乗っていた。

「我輩が側にいながらなんたる失態。あの時姫様のお膝を降りてねばこのような術ごとき跳ね返したものを…」

「ゴウラ殿、しっかりしてください。あなたのせいじゃないです。まさかこんなにもすぐ手を打たれるとは皆思いもしなかったのですから」

「学者どの、我輩は魔王様にも姫様にも顔向けできぬ。どうお詫びすればよいやら」

しっぱを股の下に押し込み耳をへなっとさてしよげるゴウラを、ロッドは捨て置けず恐る恐るはげましていた。

「今こそ、あなたの力が必要なのです。これは単なる欲にかられた愚者の衝動的な蛮行ではありません。恐らく魔王と勇者、そして月の御子の伝説ではなくて繰り返す歴史が関わっているはず。

それを解き明かすためにも、是非生ける魔王史であるあなたのお話を伺いたい！」

「学者どのよ、それは本当に姫様を助ける手がかりになるのでござるか？よもや私情は入っておらぬよの？」

「ももももも、もちろんです。ただ追うだけではなく相手の手の内や思惑を探るためにも必要なのです。でも、確かにまずは手がかりが必要ですよね。

ほらっ、ミヤはあなたの大切な魔王の力を持っているのです。それを感じるのはあなただけではありませんか」

「ふむ。そうであつた。まだ姫様の中のお力を感じれるところになればよいが。しばしまたれい。ふんっ！ふんふんふんふんふんっ！」

ゴウラは思い出す。

ミヤの中にあるのは魔王の魔力。

それは魔王城の中庭に咲いていた、夜にしか咲かないオモヤツミの花に似た澄んだ夜の香りに似ていた。

研ぎすまされたつららが再び凍り付く香りに近い。

そして後を引くのは月光を浴びた青水晶の香りと同じ。

ゴウラは、魔力をその鼻でかぎわけることが出来た。

目をつむり鼻先に神経を集中させる。

だが、奮闘むなしく感じ取ることが出来なかった。

あの時、ドストの森の中で再会した時にたどったあの匂いが今は感じられない。

自分のふがいなさにたまらず、しっぱをロッドの背中に何度も打ち

付ける。

「ゴウラ殿、落ち着いてください。つかぬことを伺いますがどのくらいの距離なら感知することができるのですか？」

「う、うむ、我輩の鼻は魔王様ならどこにおられても決して見失うことはない。だが、姫様の魔力は姫様ご自身のお力に包まれているゆえ、あまり離れてしまうと見つけれぬのだ」

「そうでしたか。では、近くに転移したわけではないのですね」

「何か特殊なちからで妨害されていない限りそのようだ。くつ。ふがない。誠に我輩は不甲斐ない……」

「では、やはり明日ジル殿が戻ってからが勝負ですね。それまでひとまず休みましょう」

「いや、姫様が今どんな目に会ってるかわからぬのに寝れるわけがなかるう」

「ですが、私たちには今なす術がないじゃないですか」

「い、いやっ 我輩はあきらめぬ。鼻が届かぬなら、追うまでじゃ」

「はやまらないで！事はそう簡単じゃないのです」

ロッドは悲鳴まじりの声をあげた。

すでにバルコニーに足を踏み出したゴウラは剣呑な声をあげて立ち止まる。

「学者よ、我を止めるのか」

「ええ。事は簡単ではないはずなのです。もし万が一私の予想が正しければ、あなたがミヤを見つけ出しても事はそれで終わらない」

ロッドは、滅びた村々を思い出し身をすくませた。

ここまで早く動いたことには何か理由があるはずなのだ。

魔王領侵攻の時に張り巡らそうとしていた罠のような、何かがある気がする。

「姫をここに置かねばいい。そうだ、お助けしたらそのまま他所の土地へお連れするのもいいな。追ってなど振り切ってしまうがいい」
「…彼女がそれを望むでしょうか。ここで国へ帰る方法を探すと言っていた彼女が。私たちはあなたと同じ、彼女を助きたい気持ちでいっぱいなのです。ですからお願いです。共にミヤを探しましょう」
「学者よ、おぬしは我輩が怖くはないのか。我には魔王様と姫様以外命ずることはできぬ。勇者と違い剣もなくささやかな魔力しかないおぬしなんぞ、いまこの瞬間にとって食らうことなど雑作もないぞ」

「怖くないと言えは嘘になります。ですが私たちと同じように、いえそれ以上にあなたがミヤのことを大事に想っているのですから。悪い人、いえ魔物には見えません。

それに…これは全く今の状況と関係なく個人的なことなのですが。禁じられた勇者伝にあった『魔王の影に控えし黒い豹頭の騎士、闇色の剣は雷鳴と共に大地を裂き、その足は空を翔け、呪を唱えば暗き炎で焼き尽くす』。これは黒い疾風、あなたのことですよね。」

「あ、ああ。魔王様を影の中でお守りするのは確かに我輩だけに与えられた栄誉だ」

「あなたには不本意でしょうが、私はゴウラ殿とこうして言葉を交わすことが出来て本当に嬉しいのです」

「…変な人の子もおったものだ」

ゴウラは、ヒゲを立てて鼻息をひとつ吐いた。

「確かロッドという名だったな。して、ロッド、我輩はどうすれば良いのだ」

翌日、朝食後にはジルとパットが館に戻ってきた。

緊急の連絡を受け、未明のうちに出発した彼らは夜通し馬を飛ばしたのだ。

「ジャン！　いったい何があったの？」

「ジャン様、マルコ様、何が起こったのですか！」

二人は挨拶もそこそこに、ジャンの私室で昨晚集まった顔ぶれと共に説明を聞いた。

「ここに、ミヤちゃんがいたのね」

「ああ、床に魔導の紋が浮かんで、赤黒い光が包んだと思っただけなんだ」

ジルは、その場所に触れてしばらく黙っていたが、ひとつ頷くと顔をあげた。

「確かに召還ではなく転移の術ね。恐らく転移先から術を発動させたのね」

「転移の術は、召還のように特定の人物を移動させることが出来るのか？」

「いえ、自分の転送でない場合、召還とは違いいくつか条件が必要なの。まず転移先で魔導士が術を発動させること。そして転移した人物や物が触れる目印をつけること。例えば夜に攫われるならベツドにしかけておくとかね」

「目印……僕の部屋で攫われたということは、実は狙いは僕だったのか？」

「うーん、昨夜はいきなり集まったって言うてたから、この場所っていうのも不自然だし、ミヤちゃんが身につけていたものじゃないかな」

「じゃあ、ミヤが飛ばされた先の見当はつかないのか？　さっき、魔

導の痕跡をみたんだろ？」

「ええ。確かに痕跡は残っていたけれど、時間が経って消えかけてるから術の種類が分かるだけで移転先までは…いえちよつとまってるわ！完全じゃないけど座標が残ってる。近くまではいけそうよ」

「ジルは転移の術を使えるのか？」

「いいえ、ごめんなさい。私は地の魔法はあまり得意でないの。昨夜の星の位置からおおよその場所の見当をつけたらすぐに出発するわ」

「いや、ジル、まず少し休め。探索はそれからだ」

「でも、早くしないとミヤちゃんが…」

「焦る気持ちは分かる。だが今までさんざん駆けてきたんだ。その状態で行かすわけにはいかない」

「ジャン様、僕は大丈夫です」

「パットも、これは命令だ。新しい馬を準備するにしても時間がかかる。3刻は寝ておいで」

「…馬はいらん」

「ゴウラ？」

「我輩が背を貸そう。人間の1人や2人乗せる程度ならば空を翔るぞ。そろえに場所ははつきりせんのだろう、もし魔力が感知できぬようにされていても、姫様の匂いをたどれるやもしれぬ」

「ではゴウラ、ゴウラ殿もお願いする。手を貸してください」

ジャンはゴウラに向き頭を下げた。

ゴウラは一つ頷くとソファに丸くなった。

「では、我輩は一時休むとしよう。翔るのは簡単だが、この背に乗るには人にはきついかもしれん。体力と胆力のある者を選ぶのだな」

日があとふたつぶんて海に沈もうかという頃に、一向は出発した。館の裏庭で、ゴウラはパットとロードが初めて相対した四つ足の巨大な獣の姿になり、背にジルとジャンを乗せた。

背には鞍はないが、胸に革帯を巻き二人の身体が振り落とされないようにする。

そして乗せごこちを確認するために二三歩飛び跳ねた後「では参る」と声をかけ北東の方角に向けて駆け出した。

姿を領民に見られないよう、ゴウラは疾風のように翔けた。

二人はその背から振り落とされぬよう、必死に身体を伏せて毛を握りしめていた。

ジルが示した場所についたのはすっかり日が落ち星が瞬き始めた頃だった。

森の中をゴウラは慎重に歩く。

「ここは人の足で1日ほど。なるほど、悪くない腕前の魔術師だな」

「それはつまり、手強いってことだよな」

「そうともいうわね。ねえゴウラちゃん、ミヤちゃんの匂いはするかしら」

「うむ、風上からはせぬから風下の方へいってみよう」

ゴウラは二人を乗せたまま慎重に森の木々の間を歩いていく。と、急に立ち止まると首を伸ばした。

「姫様、姫様の匂いがするぞ！」

少し進むと泉が見つかった。

ジャンとジルはゴウラから降りるとランプに灯りを点し、さっそく調べる。

泉の周囲には踏み荒らされた人の足跡とたき火の後があった。

「これは2人分の足跡だな。たき火の後は冷たいから朝のうちに移動したに違いない」

「泉を出口に使ったのね。館にあったのと同じ力の痕跡があるわ」

「徒歩ならここから半日以上の移動距離だが転移の術を使っただけならもつと先に行ってしまっただろうな」

「そうね。少なくともここからは歩いて移動したみたいだけど…」

ジャンとジルは足跡が向かった先を湛然に調べていた。

「こつ、これは姫様のお召し物っ!!」

ジャンとジルがあわてて声のする方へかけつけると、茂みの前でゴウラが立ちすくんでいた。

茂みの中に押し込むようにしてあったのは、あの時ミヤが身につけていたローブと寝間着の切れ端だった。

「ひつ、姫様に何がっ!! もしや不埒なものの手にかかって…」

「ごうらちゃん落ち着きなさい。ほらよく見ると寝間着が破れているっていつても誰かに破られたんじゃないわよ。多分何かに使う布が必要だったんじゃないからしらね。奇麗にまっすぐ裂いてあるわ」

ああ、なるほど。ミヤちゃんを攫う目印はこれだったのね」

ジャンに寝間着だった布の端にうつすらと残る黒い紋様を見せた。

「これは術紋か？」

「ええ。これは書いたんじゃないくて粘着性の術紋を貼りつけたみたいね。術を発動するまでは魔導力を感じさせないようにうまくつくつてあるわ」

「その魔導士はどうやってミヤの寝間着につけたんだろう」

「館に侵入できるなら、こんなことより直接自分で転送したほうが早いわよ」

「自慢じゃないが、不審な人物が館の中はおるか周囲をうろついてたら絶対目立つし誰かが目にするはずなんだ。田舎の良し悪しなところだけだね」

「魔導を使つて忍び込んでも、ゴウラちゃんがいるから気づくはず」「ああ、人の魔導の匂いは、姫様が攫われる時までせなんだぞ」

「ということは、誰かが手引きをしたか…」

「昼間に洗濯されたはずだから、干してる時に取り込んでミヤちゃんを着るまでの間よね。館の人なら誰でもチャンスはあるんじゃない？」

「しかし、内通者の心当たりなんて…」

「姫様の匂い…洗濯の匂い…いつものよく喋る侍女の匂い…はて、あの晩に姫様の膝におった時に他にも何か匂った気がしたが…」

「ゴウラ殿、覚えているかい？」

「ん、んー。館に戻ればなんとかなるかもしれないが。それよりもこのまま姫様の匂いをたどって行方を追ったほうがいいのではないか？」

「いや、一度戻ろう」

「勇者よ、姫様を助けるほうが先であろう」

「もちろんだ。だが相手も追いかけてくることは計算済みだろうし、内通者をこのまま置いておくわけにはいかない。僕達にはもっと情報が必要だ」

「むう、しかし…」

「頼むよ。そのかわり、ミヤを奪還する時は必ず君も一緒だ」

「…あいわかった」

「二人とも、ここで得られる情報はこれ以上ないようだ。戻るならすぐに出よう」

二人は再びゴウラの背に乗ると元来た道を戻った。

ゴウラの足は、はやる心と同じように来た時よりも更に早いスピードで翔け、まるで空を飛んでいるようだったと、後にジルは語った。

33・探索（後書き）

ゴウラとロッド回とっていいでしょう。

もやし学者だったのが名前を呼んでもらえるようになった。
友情とまではいかないけど、仲が進展の様子。

さて、次回は館に仕組まれた罠が明らかに…

34・自白

夜半、再び館の裏口に戻ったジャンとジルを、ベルナンが出迎えた。彼らの帰りをいつでも出迎えるよう、使用人達が交代で待っていた。ジャンは休んでいるマルコとパット、そしてロッドを起すように命じる。

皆が集まったジャンの執務室の机の上には、布切れとなったミヤの寝間着が置かれた。

それを目にしパットは軽い悲鳴をあげた。

もしやまた…と、家出したミヤを発見した時のことが頭をかすめる。

「パット恐らくその心配はないよ。これがあつた状況からしてこれはミヤの手によるものようだから」

ジルは、それを机の上に広げると、術紋があつた場所に手をかざした。

「興奮時にあつた思念の残滓は、触れていた物に記憶として残されるわ。魔導が発動している間は無理だけど、それより前か後なら見えるはずよ。」

この寝間着でミヤの思念が残るような出来事があつたのはこの事件に関係することだと思う。もしくは…」

「緊張し転移の術紋を仕込んだ犯人ということだな」

「さすがマルコね。その通り。じゃあいくわよ」

ジルの唇が音のような言葉をつむぐと、寝間着に触れる手元から白い光球があらわれる。

そこに映し出されたのは…。

一同はおもわず息を飲んだ。

映し出されたのは、鬼女のような笑顔だった。

「いけません、まだお休みになっっているお嬢様の部屋に殿方が入ってこられるとは」

「申し訳ないが、今は礼儀を気にしている暇はないのでね。失礼」

声を押し殺し立ちふさがる女官を押し分け、ジャンは寝台で横になっ
っているフランに近づいた。

ミヤが見たなら、おとぎ話の、呪いを受け王子の助けを待ち眠り続
ける姫君と表現しただろう。

時折、美しい眉をひそめるのは何か夢をみているからか。

愛らしい口元から、吐息のような寝息がこぼれる。

「ジャンさま…」

いきなり眠りの中のフランから自分の名を呼ばれ戸惑った顔を浮か
べたジャンだったが、フランの肩に手をかけるとゆすって呼びかけ
る。

「フラン、起きるんだフラン」

「…んっ…ジャンさ、ま？ジャン様！とうとう来てくださいました
のね、あたくしの閨に。ええ構いませ

んとも、あたくしもいつまでも17のおぼこではないのですわ。こ
れは夢か現か。それもどうでもいいですわっ！」

腕に張り付き寝台にひきずりこもうとするフランを押しとどめ、壁
にかけてあったガウンをとるとフランに投げた。

「フラン、起きてください。話があります」

「え、ええ。そういえば皆様も一緒なのですね。レディの寝室に無粋な。急ぎのご用なのかしら」

「僕はフランと顔を合わせることを避けていた。これは僕の失態だ。最初に問いただし王都へ返すべきだった。悔やんでもしょうがない。あなたは何を目的に、誰の指示でここへ来たのです」

「あたくしはお父様からジャン様との婚約を認めるとお許しを頂いたのですわ。ジャン様は勇者となり子爵として立派にご領地まで下賜された。田舎とはいえ、ご領地にはこの国で唯一竜も住まうというではありませんか。」

竜の君と海の姫との恋のように一度は引き裂かれる運命にあったあたくしたちだけど、二度目のチャンスなのですわ。」

「フラン、君は僕と婚約を解消した後で結婚したと噂に聞いたけど」「ど、どうしてそれを！あれはしょうがなかったのです。あなたはあの家を去って、代わりに跡継ぎとなったあなたの弟は生まれたばかり。侯爵家での縁は望めないと分かった父はすぐに他の婚約者を探し始めました。」

ですが、長年あなたの婚約者として名が広まっただけでお相手に恵まれず、あたくしは王に取り入れるためにドルト伯爵の息子に差し出されたのですわ」

フランは顔をゆがめ俯いた。

次に顔をあげジャンを見つめる瞳には、涙がたまっていたが気丈な光をたたえていた。

「あたくしがあの人達をどんなに軽蔑していたかご存知でしょう？貴族の責務を果たさず国は荒れ、王に取り入ることしか頭にない俗物。ただ欲望のままに暮らし憤りも誠実さもないのですわ。」

そんな中にあたくしは投げ込まれ、形ばかりの妻となったのです。

あたくしはあの汚い手を触れさせることを拒み続けました。妾だけでなく、女官や侍女、街の下賤な女にまで見境なく手をかける痴れ者に近づくなと部屋に籠りました。

ですがあの男と伯爵様は…。

運が良かったのは、すぐに私に飽きたことですわ。

妻の役目を果たそうともせず、毎回力づくでせねばならないのは面倒でつまらないと褒めていただきました。

もちろんそれから、男爵家の娘であるあたくしをあなどる姑のいびりなど幸せな日々ではなかったですけど生き延びて参りましたわですが、とうとうあたくしに起死回生のチャンスが来たのです。

お父様が、あなたが爵位を賜ったゆえ離縁とあなたとの結婚を許すと言ってくださったの。

あの男も執心の妾が正妻の座をねだってあたくしを煩わしく思っていたところでしたので、伯爵様共々気持ちよく送り出してくださいました。

ジャン様。あたくしは後がないつもりでここに参りました。あなたの妻になりに」

妻になり来たと毅然と言い切るフランを、ジャンは呆然と見つめることしか出来なかった。

自分が新しい人生を踏み出した時に、この人の人生を狂わせてしまったのか。

十年ぶりの再会で、昔と何も変わらない美しく可憐な元婚約者だと思っていた自分は間違いだった。

彼女の中には、自分と道を違えた自分の知らない10年間があったのだ。

「フラン、すまな…」

「謝罪は結構ですわ。申し訳ないと思うなら、今すぐあたくしと結婚してくださいまし」

「いや、それは…」

「ふふ、今はこんな話をしている時ではなかったですね。この先は二人の時にゆっくりとお話しましょう。それより、あの女のとでいらしたのでしょうか？皆様」

フランは、黙って二人のやり取りを聞いていたこの場にいる者達を一瞥した。

「ミヤは、見つからなかったのですか？それとあたくしと何か関係が？」

「手がかりを見つけました。それから、あなたとの関わりが分かりました」

「あたくし？あたくしは魔導など使えなくてよ。確かに、あの女がここから消えてくれればと毎晩願っていたけれど」

「軽口は結構。お父上から何か頼まれたのではないですか？ミヤに何か細工をするように」

「失敬な。あたくしは卑しくも男爵家の娘ですよ。ライバルと認めた者とは正々堂々と戦いましてよ」

「ライバル？」

「ええ、ミヤはこの館に滞在することを受け入れ。ジャン様に気持ちを伝えないと駄目だと言ってくれましたの。これ以上策を弄する必要がありません？あのぽつと出のがさつな女と生まれた時からジャン様と将来を共にする為に育ったあたくしとどちらが有利かわかり？」

「優位かどうかは分かりませんが…。では、男爵から他に命は受けてないですね」

「お父様は、自分の娘なら根性であなたを籠絡して子爵夫人の座を手に入れられると、今度こそ幸せをつかめとおっしゃってくださいました」

ジャンは振り返ってマルコを見た。

マルコを頷くと衛士に合図を送り、フランの側で控えた女官の腕をとった。

「イリー殿、あなたをミヤ様の誘拐幫助の罪で逮捕します」

女官は、もともと青かった顔を更に青くし、身を翻して逃げようとしたがマルコがつかんだ腕ははなれず、衛士達に捕縛された。

「おまちなさい！あたくしの女官に何をなさるの！」

「フラン、彼女はミヤの寝間着に転移の術の目印を仕込んだんだ」

「そんな、嘘ですね。イリーは私の命には忠実ですの。あたくしはあの女に手を出すと命じているからそんなことするはずありません」

「あなたの命にはそうかもしれません。ですが、他の者から命じられていたら？」

「イリー、どういうことですよ！」

「あ、あたくしは何もしりませんわ……」

女官は胸を押さえながら、身体力が抜けたように床に崩れ落ちた。その時、ジルが投げたナイフがつむじ風のような素早さで彼女の手のうちのものをはじき飛ばした。

「これは……毒？」

手からこぼれ落ちたのは液体が入った小瓶だった。

女官はマルコに腕ごと床に押さえつけられた。

「イリー、あなたがやったの？ミヤはどこ？」

「私は、私はあの女の行方なんて知りませぬ。旦那様よりこれがお嬢様の助けになるとくださっただけ。私の大事なお嬢様を害するようなら、邪魔をするならあの下賤なあばずれを消してくれるからと」

「イリー…」

「だが、ただ呪紋をつけるだけじゃなかったんだろ。まさか毎日寝間着につけてたわけじゃあるまい。毎回仕込むチャンスがあるわけではないだろうしな」

マルコは女官を押す力を加え、女官が呻いた。

「イリーをお離しなさい。乱暴はよしてちょうだい。イリー、あたくしの質問に答えなさい。お父様に何を指示されたの？お父様が独断で思いつかれることではないわ。誰が入れ知恵したの？」

「お嬢様…いえ、これは命にかけても口には出来ません」

「イリー、お願い」

女官はフランから顔を背けた。

「我輩に任せるが良い」

「猫が喋った？」

フランの前では猫の猫をかぶっていたゴウラは、動揺するフランを見て舌うちした。

「姫様に叱られるだろうが、この状況ではやむをえまい」

「自白させることが出来るのか？ ミヤには後で僕が謝しておく。できれば今の姿のままで頼めるか？戦士の姿だと二人に気絶される時間がもつたいない」

「我を誰だと思っておる。その者の顔を我輩のほうに向けてくれるだけで十分だ」

「ひっ！猫が人の言葉を…化け物っ…」

ゴウラは女官の前に立つと、恐怖に見開かれた目を見つめた。ゴウラの橙色の瞳がにわかに輝きだす。

目をそらそうとするがままならず、光る瞳から目をそらすことが出来ない。

しばらくすると、それに同調するように女官の瞳が同じように輝き始めた。

それを確認したゴウラは、ヒゲをぴんと張った口元から冷え冷えとした低い声で問いかける。

「いつどのように、姫様を陥れるようそそのかされたか説明するのだ」

女官はうつろな瞳を橙色に輝かせながら、ぎこちなく口を開いた。

「ワタシハ…ワタシ…私は出立の前の晩に男爵様のお部屋に呼ばれました。

そこには、男爵様のお客様がいらっしゃいました。黒いお姿の方です。

男爵様は命じられました。客人はいつものお前が見たいのだと。

私はお言い付けどおりに服を脱ぎ、お机の上に乗りました。

旦那様は、あさましい姿をお見せした私をお褒めくださいました」

「そんな。イリー、お父様と…」

常に側に付き従っていた女官の口から漏れる言葉に、フランは否定の叫びを押し殺した。

フランの言葉だけでなくゴウラの問いかけ以外耳に入らないように、淫猥な内容を淡々と無表情で語る女官は、頬を染めることも言葉を濁すこともない。

「旦那様のお望みを全て果たした私は、いつものようにユラヌス様の祝福を頂きました。

そしてこの身の敬虔さを認められたご褒美に、お嬢様をお守りする為の力を授かりました。

バルザックでお嬢様と勇者様の邪魔になるだろう、くだんの娘の寝間着にそれを仕込むようにおっしゃいました。

そして仕込んだ後、旦那様から頂いたロケットの中にある石を壊せば二度とお嬢様の前に現れることはないとのこと説明でした。

ただ、術が発動すれば魔導の力を感知されるので、出来るだけ魔導士がいない時に実行せよと。

そして旦那様はお嬢様を敬愛する私の心をことのほかお喜びになり、恐れ多いことに女神様の涙をお授けくださいました。

勤めを果たした暁には、これで女神様にご奉公へあがるようにと」

「女よ、客とは誰だ」

「屋敷の者は来客のことを誰も知らなかったようです。黒いローブを着込まれ顔も見えませんでした。唯、おだやかに微笑む口元だけ……そう、指輪……旦那様と同じ、ユラヌス様の黒い石の指輪をつけていらつしやいました」

「女よ、ユラヌスとはなんだ」

「ユラヌス様、清き闇の女神は、心の底にある、あさましい本性をお見せするほどに慈悲を与えてくださいます」

ゴウラはちらりとジャンを見た。

「なぜそこまでフランを大事に思いながら、フランの意志ではなく男爵の命を優先した。何が目的だった」

ジャンの悲しみを讃えた問いをゴウラの声が繰り返す。

「旦那様を優先したではありません。屋敷に上がった時から私の心も身体も旦那様の物だけれど、私のお嬢様を想う心は尊重してくださった。私の願いは、あの幸せそうな顔でのうのうと暮らしてい

る女を追い出してお嬢様に悲しみを忘れ幸せになって笑顔になって頂くこと」

「イリー……」

フランは枕で涙をぬぐった。

主を想う必死な心に周囲が言葉を飲む中、ゴウラは冷やかな言葉を告げた。

「これ以上言うことがなければ、心残りもなかるう。姫のおわすこの世から、自らの手で消えるがいい」

ゴウラが女官に背を向け歩き出すと、女官の目の輝きが消えた。

正氣に戻った女官は、意志なく口にしたことを全て記憶しているように、フランに申し訳なさそうな、だが後悔がみじんもないことを示すように笑みを見せた。

「全ては私が一人で行ったこと。お嬢様は何もご存知ありません。

お嬢様、申し訳ありませんでした。命にそむき、そしてこれからお側におれず……」

「イリー？」

「ちいっ、しまった」

女官は、後ろ手に押さえつけられた手の先に当たる衛兵の短剣の束を掴むと素早く抜き、それを無茶苦茶に振り回すことで自分を床にはりつけた手から逃れた。

そして這うように前方に転がる薬瓶にとびつくと口寄せ、中からこぼれたもので吸い上げるように無色の液体を飲み干した。

慌てる無数の手で、元の場所まで引きずって離されたが、女官は口から泡と血を吐き喉をかきむしってのたうちまわった。

「ゴウラ、お前…」

「ジル、治せるか？」

「とりあえずやってみるけれど…。そこをどいてちょうだい！」

「ジル様、結構ですわ。このまま逝かせてやってくださいまし」

「だがこれは…」

「恐らく今助けたところで遅かれ早かれ再び自害することは明白。

恐らく私を巻き込まない為もあるのですが、せめて哀れなこの女にご温情ください。治療は不要ですわ」

「フラン…」

フランは枕元に置かれたシヨールを手にとると、一糸の乱れもなかった結い上げた髪を見出しスカートの裾をまくりあげた姿で命が尽きたばかりの女官に近寄った。

凄惨な死に顔にそつとそれをかけ、服の乱れを直す。

「ジャン様、皆様、申し訳ございません。あたくしの女官がしたことは、主人たるあたくしの責任。どのようにでもご処断ください。どのような償いも致します」

ジャンを見上げたその顔は、いつものようなあどけなさや甘さのない、心を決めた一人の女の厳しい顔だった。

34・告白（後書き）

前回に続き、マルコとジルの探索の旅を書くつもりだったのですが、そこまでたどりつけなかったので、次回に…

女官さんの死に方を最初安易に舌を噛むことにしていたのですが、ご意見をいただきちよっ手直ししてみました。ありがとうございます！

35・追跡：マルコとジル<1>

「エソニアはアウグスタス聖教を国教とし、陛下は大神官でもあらせられることは皆さんご存知ですよね。

ユラヌス神というのは、アウグスタス神の双子神、闇を司る女神なのです。

ああ、闇の女神といって決して忌まわしき神ではありませんよ。

光神は、裁きの神にして猛き戦の神。闇の女神は、癒しと許しの神。お二方は対なる聖なる神です。

古代の多神教の時代には、双子神ゆえに同じ神殿に奉られていました。

他大陸では未だ多神教の名残が残る国もありますが、この大陸では時代と共に、アウグスタス神ばかりが求められ、唯一神とする国が増えました。

政治的に利用しやすいということもあったと思います。

ですが、双子神なのでユラヌス神を疎かにすればアウグスタス神の怒りに触れ、平和な御代での国の安寧が続かないとも言われていました。

それで密かに王都の大聖堂の地下に、ユラヌス神を奉る神殿が設けられました。

このことは、もちろん国民には公布されていません。

私はこれを王宮の記録などで知り得たのですが、一応王家に連なる方々に伝えられることですのでここだけの話とさせていただきます。

えー話を戻しますが、表向きは大神殿の奥神殿で神に仕え余生を送られることになっている先王陛下ですが、実はユラヌス神殿の大神官となられるのです。

当初は直径の姫君を大巫女としていたのですが、6代目のマーティナス国王の御代にお世継ぎ一人しかいなかった為に、先王が大神官となりました。

以来、王子が成人なされれば王は退位なさり大神官としてユラヌス神に仕えられることとなりました。

まあ退位なさるといっても、新王にご助言される立場として影響力は王に匹敵しますからね。崩御された場合は、王位継承上位にいる王家の姫君が大巫女となられ、その際には継承権を失うということなんですよ。」

「今のくだりだけで、そんなやばそうなカルト的な集団には思えないよ。むしろ神聖で国には欠かせないものじゃないか。どうなったんだ」

延々と続きそうなロツドの講釈をジャンのつぶやきが遮った。

イリーが亡くなった後、後を衛士に任せ私たちは執務室に戻った。

フランはシヨックを受けていたので、別の客間を用意し休んでいる。女官にあのような行動を起させた、今回の事件の鍵であろう「ユラヌス神」とは何なのか。

この国の唯一無二の歴史学者でもあるロツドが語ったのは、王家の秘密ともいふべき事実だった

「どうりで、聞いたことのない神様だったのね」

「ボク、この話し聞いちゃってよかったのかな」

「そこなんですよね。本来は王家の中だけで伝わっていたことです。が、いつからか6貴族会の当主達にも知らされるようになりました。80年前には宗教歴史学でも非公式ですが存在を認めています。

ですが、ユラヌス信仰は広める意義などどこにもないのです。そもそもこの神の名を男爵や一女官が知り得て口に出来るはずないんですよ」

「これってあれと繋がらないか？ワルノーゼの瞳とさ」

黙って話を聞いていたマルコが口を開いた。

ワルノーゼの瞳、パットの村を滅ぼした黒い騎士、奥神殿におわすと言われている先王陛下神殿兵。

マルコはパットを気にしたのかちらりと視線を向けたが、淡々とその名を口にする。

「確かに、本来のユラヌス神殿が絡むのであれば関連はあると思うのですが、私にはどうしてもその怪しげな信仰と結びつかないのですよ」

「じゃあ、別にユラヌスを奉る奴らがいるってことか？ミヤを狙ったのはそっちで陛下や先王陛下は関係ない？」

その場にミヤがいなくてよかったとジャンが安堵したほどの衝撃的な自白。

それが皆の頭を混乱へと導いた。

「こうやっていいる間にもミヤがどんな目にあっているか。とりあえず、まずは動こう。マルコとジルは一緒にミヤの足取りを追ってくれ。例の泉の場所からするとそこから北東のマドカナル領境を歩いて越えたはず。その付近にある村に手がかりがあるはずだ」

「そつえば、なんで転移の術を使える奴が、そのまま王都なりまで跳ばないんだ？」

「それは、私が結界を張ったからよ」

「結界？俺は聞いてないぜ」

「だって最近私たちろくに顔を合わせてなかったじゃない。この間、東南北の領境に沿って視察に行く度に結界の術紋を施してきたのよ。ただでさえ、今はまだ守りの人手は少ないしね。他領や王都から変なちょっかいをかけられないようにって、転移の術対策はしてたのよ。」

大賢者ならいざ知らず、そのへんの温室育ちな魔導士には破ることは出来ないわ。ただねえ……」

ジルは美しい顔を悔しそうにゆがめた。

「何かあればすぐに領壁の門は閉じられるか警備が厳しくなるし、徒歩での領境越えは高位の魔導士は面倒がるからそれだけである程度の抑止力にはなるのよ。それに魔導力を持つ人の館への出入りは警戒してたんだけどね。さすがにここまで用意周到にくるとはお手上げだったわ」

「もう一度転移の術を使うにしてもマドカナルってことが。とりあえず手をくだした魔導士を探しながら王都に向かうわ。それから知り合いに神殿兵やつてる奴がいるから探り入れてみる。それでいいか？」

「私も、魔導院であてがあるから情報を探ってみるわ。大丈夫。それなりに地位のおクチの緩いじい様がいるのよ」

「わかった。これも姫様の為じゃ」

「それでお前はとうするんだ？」

「フランとイリーの遺体を届けに男爵に会いにいつてくるよ」

「お前一人で大丈夫かよ」

「我輩がついていこう」

「ゴウラ殿、いいのか？」

「おぬしに協力するのではない。姫様を助けるためだ。勘違いするでないぞ」

「では頼みます。ただ、人前ではその、猫でお願いしますね。いいですか、にゃあですよ。にゃあ」

「わ、わかつとるわい、にゃあ」

それから半刻もたたぬうちに、旅慣れているマルコとジルは、解散するとすぐに身支度を整えると、馬上の人となり街道を走った。鉄の胸当てのついた皮鎧のマルコいつもの青い導服のジルは、そろいの麻のフードマントをなびかせる。

海風に乗り、草原を渡り、途中2度ほど馬を休めながらも二人は目的地に向かって疾走した。

まずは、転移先の泉へ。

ゴウラの背に乗れば3刻と少しだったものが馬だと半日かった。前日来た泉に立ったジルは、マルコにその時の状況を説明する。

「なるほど、相手は一人か。争った跡はないし、ミヤは大人しく着いて行ったみたいだな。背は俺と同じくらいだが細いな。靴底はかなりすり減ってるし、近くに村があるし特に長居した様子はないが火を焚いて飯を食ったらしい。夜明けまでここにいたか。野営の組み方を見るに随分旅慣れた奴だな。こいつ、本当に魔導士なのかよ」「魔導士が全部温室育ちってばかりじゃないわよ。それにしてもすぐにそこまで分かるなんてさあすがね、ハンターさん」

「その呼び方はやめろよ」

「あなたの二つ名でしょ？ 赤鷹の狩人」

「昔の話だよ、女王様」

「いいじゃない。私の中のあなたは、出会ったあの時のままよ」

「俺も、おまえはいつまでもあの時の生意気女のまんまなんだがな」「失礼なのも相変わらずね」

ジルは眉を寄せて非難して見せたが、目は笑っていた。

「確か近くに村があつたわよね、そこで話を聞いたら早くしなきゃ」

「奴らが進んだ方角はちょうど村の方角だ。お、らつきー。馬じゃなく徒歩だ。ミヤがいるしそう早いペースじゃないはずだ」

二人は、再び馬上の人となり森を抜けた。

森を抜けた所にあるコツポルの村に着く頃には、すでに日が暮れていた。

マルコはジルに馬を連れて村の入り口で待っているように言つと、きつちりと後ろで束ねていた赤髪を崩しながら、酒場へと入つていった。

そしていくらかからずに、ご機嫌の酔いの男達に見送られながら出て来た。

「おつ、あれがにいちちゃんのかあちゃんか。えらいべっぴんもらつたなあ」

「ええ、いい女でしょう。そのかわり尻に敷かれちゃってるけどな」
「いやいや、夫婦円満の秘訣はかかあの尻に敷かれてやることだあ」
「くそう、のろけやがって。途中馬から落ちちまえ！」

「ボル、負け惜しみいつてんじゃねーぞ。早く隣村のフィリに告白しちまえよ」

「うるせー。いいなー、俺も馬に乗ってどっか行きたいぜ」

「じゃあな、皆ありがとうよ」

「おつ、早く妹さんが見つかるといいな」

「がんばれよ！」

馬に水を飲ませ休ませていたジルは、見送る男達ににこやかに手を挙げるマルコを咎めた。

「ちょっと尋ねるのだけど、かあちゃんてなんのことかしら？」

「ああ気にするな。こういう小さい村で犯罪に関わるような人探しっていうと警戒されて訊ける話も訊けないんでな。嫁の妹が家出したんで心配して追いかけてるって話しをしたんだ。そしたら店の客全員が同情してくれて、勝手に情報集めてくれたんだ」

「あら、手間が省けてよかったわね。でも家出娘ってありきたりでつまらないわね」

「聡い子で変装してるかもしれないし、旅人を巻き込んで二人連れかもしれないと言ったら、それらしい二人連れを見たって服屋の親父が教えてくれたよ。魔導士と見習い風の少年の二人連れだよ」

「前は吟遊詩人だったけど今回は魔導士見習い？あらあら、ミヤちゃんらしいというか。でも師弟として動いてるなら、怪我をしたり薬を使われたりはしていないってことね。少し安心したわ」

「髪は茶色だつて言ってたけど、このあたりに旅人は珍しいって言ってたし、旅用の靴とマントを買っていったそうだ。体格的にも合ってるから間違いないだろう」

「術で色を変えたのね。相手の男はどんな奴？」

「黒の導師服で俺くらい年の頃の男だそうだ。細めでちょっと陰気な雰囲気だったけど二人の仲は悪くはなかっただよ」

「行き先は言つてなかったの？」

「ああ。買い物だけ済ませてすぐ村を出ていったらしいから。食料は特に関わなかったとよ。荷物も軽装だったそうだ。朝一番の客だったからそこから一日もかけずに領境を越えるつもりだろうよ」

「とすると、領壁よりも東の山のどこかを越えるってことよね。そこですぐにどこかへ転移しているか村か街に立ち寄って泊まっているかね。このまま後を追って山越えをするの？」

「いや、このまま山へ続く道は足場が悪いし、夜の山越えは危険だからペースが落ちる。それよりもこのまま街道を通って領境を越えよう。そこから山沿いの村や街は3つ。端から当たれば何か手がかりはあるだろうよ」

「そうね、私もそのほうがありがたいな。悪路は私の綺麗なお尻が痛んじやうもの」

「じゃ、それで行きますか」

「え、お尻のことはスルー？待ちなさいよ！置いていかないでよ」

青白い光に照らされ、静謐な大地は群青色に染められていた。

月は既に頂点から西へと傾き、流れるように疾走する二人を見守るやがて、星の光のように小さな領壁の篝火が少しづつ近づき、その灯りの元までたどりついた。

夜中絶やされることのない昼間のような篝火の下で、衛士にはジャンが王都へ向かう先触れだと説明し、二人は休む間もなく夜の世界へと駆けて行った。

「本当なの？魔導士の2人連れが来てたって」

ジルの輝く瞳に見つめられ、鍋の中をかき混ぜていた主人の手が止まる。

「大丈夫？お鍋が噴きこぼれそうだけど」

「おっとっと。あぶねー、ありがとうよ」

「いえいえ、それでもう少しその2人の話を聞かせてくれるかしら？」

街道から一番近い村には1軒だけ食堂と酒場を兼ねた宿屋があった。だが昨日は一人も外からの客はいなかった。

そして今、二つ目の小さな街で、手分けをして宿屋と酒場をまわる。狭い街なので店の数は少ないのですぐ回り終えると思ったが、夜営業の酒場は閉まっている店が多かった。

でも運良く、早くに店へ出て仕込みをする店の主人が二人を覚えて

いた。

「ああ。魔導士の先生も弟子も揃って細っこいのに、よく食って飲んで、気持ちのいい奴らでしたさあ。あの先生は店のもんだけじゃなく店にいたお客みんなに馳走してくれましたよ」

「連れの弟子ってのはどんな様子だったの？」

「ああ、無口だったがよく動く子で、先生の面倒をしっかりみてて感心だったよ。ちっこいのに酔った先生を一人でかついで宿に帰っていったしな」

「何か言ってなかったか？次の日どつかへ行くとか」

「五月蠅い連中ばかりだったからな、特に言ってなかったような気がするが。おい、お前はなんか聞いたか？」

主人は、カウンターごしにフロアを掃除している妻に声をかけた。

「そうねえ、そういえば旅の連中はだいたい朝早いから宿に戻るのも早いんだよ。それで遅くなったけど大丈夫かって聞いたら、近いから明日はゆっくりなんだって言ってたわ」

「ゆっくり、ですか」

「おや、この街に知り合いでもいたのか？」

「いや、街は出るって言ってたわよ」

「お前の聞き間違えじゃねーのか？このへんじゃ街の外には何もないだろうがよ。あるといえば、木こりん家と羊飼いん家くらいだよ」

「そうよねえ」

「この街の外に泉ってありません？」

「そりゃあ森ん中にはあるだろうが場所までは知らんなあ」

「そうですか。色々お話をありがとう」

「いやいや、よかつたらまた営業してる時に来てうちのうまいもんを食って飲んでくれ」

「ええ、その煮込みを食べてみたいわ。この街に来たら是非寄せ

てもらわ

酒場を出たジルは待ち合わせの場所へ向かった。

花屋の角を曲がると、既に広場の片隅に佇むマルコの背中が見えた。

「おにいさあん、アタシとイイコトしない？」

「…収穫は？」

「ちえっ、ノリが悪い人ってやーね」

「気配の作り方はうまくなったけどな、これでもう何度目だよ」

「そっちこそいい加減に違うリアクションとりなさいよ」

二人は広場に面した食堂に入った。

昼食時も終わり、客はお茶をすすする老人夫婦だけだ。

遅い昼食を食べながら、お互い聞き込みの結果を報告し合った。

マルコは二人が泊まった宿屋を見つけ、魔導士の師弟が日が高くなる前には宿を出たことを聞き出した。

だが、行き先などは聞かなかったという。

かろうじて得た収穫は、魔導士の杖に琥珀色の珠がはまっていたということだけだった。

「黒い魔導衣に琥珀の杖…」

「知り合いか？」

「ううん、知り合いにはいないわ。どこかで聞いた事があるような気がしたのだけど気のせいかも」

ジルはかき上げていた首を戻すと、今度は自分の得た情報を伝えた。

「泉、かぁ」

「ええ。転移の魔導には二種類の方法があるの。まずは自身を転移する。そして自身以外のものを転移する。前者は、魔導士の術言だけで実行できるわ。ただし後者は術紋が必要な。そして、術紋の効力を安定させるには、水を『門』にするのが一番なのよ。」

水といっても底まで見える透明度の高い清らかな水でなければなら
ないし、術紋を固定する為に流れが強い川も駄目ね。そういった意
味では泉がベストなの。ほら、例の泉は館から転移した時の門に使
われたから、もしかして……」

「近隣にある泉が行き先ということか」

「ええ。他にめばしい目的地になりそうな場所がないし。でも、酒
場の人は詳しい場所は知らないって言ってたんだよね」

ジルは、狐色に焼けた鶏肉に品良くナイフを入れ頼張った。

「おい、そのまま食ってろ」

マルコは席を立ち、窓の外を眺めほこほこと日に当たっている老夫
婦の所へ向かった。

「おくつろぎのところを失礼します。お二人はこの街のお方ですか
？」

「ええ、そうですよ。私たちは生まれた時からずっとここで暮ら
しているわ」

老婦人はマルコをまぶしそうに見上げると、穏やかな声で答えた。

「我々はこの近隣にある泉の調査をしているのですが、ご存知の場
所があれば教えて頂けませんか？」

「ええ、私たちでお役に立てればいいけれど。ねえ、お父さん」

35・追跡：マルコとジル<1>（後書き）

更新おまたせしました。

色々ありつつ本格的に追跡に乗り出しました。

まずは、マルコとジル組。

魔王討伐で共闘し絆の深い二人ですがどことなくぎこちないのは私の筆がぎこちないせいデス。

ミヤ誘拐後時間経過をはつきりさせてなかったので、30〜33まで少し加筆修正しています。

そして読後の拍手をありがとうございます！

また誤字等のご指摘もありがとうございます。

書いて出しの為、荒い文章でごめんなさい。

今後どうぞよろしくお願いします。

36・追跡：マルコとジル<2>

「まさか、森の中にこんな場所があるなんてね」

「神殿というより、これは遺跡だな」

街から馬で少し行った森の中に、青々と茂る木立に埋もれる、石造りの崩れかけた廃殿があった。

壁には窓があった場所から蔦が侵入し、血管のように壁を這い回っている。

優美であつたろう、柱や壁の装飾の多くは削りとられ、割れた床板の間から草が顔を出していた。

まるで森から愛されているような神殿。

薄暗い内部には破損した天井から木漏れ日のように光が舞い降り、二人が舞い上がらせた塵が金粉のようにきらめき舞う。

その美しい光景に心を奪われながら、二人は慎重に周囲を警戒しながら奥へと進んでいった。

建物には長い間人が住んでいた形跡はないものの、時折人の訪れがあったことを示す跡が残っていた。

街で会った老夫婦の説明では、ここは古き神、狩りの神にして森の女神ダリアンヌを奉る神殿だったそうだ。

国がアウグスタス神を唯一神と定めた時に、古き神の神殿はこのように打ち壊された。

それでも、初恋の神でもあるダリアンヌを奉るここは、初々しい恋人達の秘密の逢瀬の場所として使われた。

それも今はほとんど忘れ去られ、知る人も僅かとなってしまったらしい。

恋人達の甘い逢瀬の名残、ダリアンヌに永久の愛を誓う二人分の名と術紋というより恋愛成就のまじないの印が柱の至る所に刻まれている。

祭壇には、そこいらで積んだ野花や枝を削った女神像や動物の象が供えられていた。

「ねえ、マルコ。私たちも名前彫つとく？」

「お前でもそういうおまじないなんてやるのか？」

「女性はいつまでも心に少女が住んでいるのよ。可愛いものが好き、甘いものが好き、恋が好きってね。占いやおまじないもそうよ」

「はいはい。だけど少女なら、抜き身の剣を振り回しながらそんなこと言わないと思うぜ」

「だって、そこにトカゲいたのよトカゲっ！ちらつと見たんだからっ」

「相変わらず、トカゲー一匹でドラゴンとの遭遇並にてんぱるな」

「悪かったわね。どんなに小さくても、どんなにご立派なドラゴンでも、足のある鱗の生き物は駄目なのよ」

「まあ、気絶して役立たずになるわけじゃないからいいけどさ。おい、だから剣を俺に向けないでくれ」

「あらごめんなさい。その束ねた毛先が奴に見えたからつい」

「勘弁してくれ。いいからしまつとけよ」

「ところで、泉ってどこにあるのかしらね。本殿にはなさそうね。もつと奥かしら……」

当時、民らが祈りを捧げた拝殿を抜け渡り廊下を進み離宮のような奥殿に踏み入った。

ここは、森の木々をあらわすレリーフが多く残り、その中には鹿やウサギといった動物の姿もみてとれる。

「なあ、覚えてるか？俺達が出会った時のこと」

「出会った時？ああ、あの時もこんな廃墟の神殿だったわね」

ジルはマルコに困ったような顔を向けた。

ジルにとつては少し苦い思い出。

マルコにとつても良い思い出とは言えないはずだったからだ。

二人が出会ったのは、魔王討伐隊が編成されるより5年前にさかのぼる。

当時ジルは、初めて実務についたばかりの新米監察官だった。

王都から東にあるケシン領の田舎街シーアンに配属され、平和な場所ゆえに暇な毎日を送っていた。

警務所は、神殿と魔導院が共同で運営している。巡回警護は神官の警護官が、事件の究明は監察官が行う。

これは領主の持つ衛士とは別組織で、領主の栄枯に左右されることなく、領主の勝手に罪状を動かすことが出来ないようにして民の生活を守る為に設けられた仕組みだ。

所長は官吏が任命されるが、その下につく警護官と監察官は、神殿と魔導院の力関係が対等になるよう各街村に同数ずつ配置された。だが、それが徒となり内部で対立することもしばしばあった。

ジルが配置された所内ではそれが特に顕著だった。

警護官は日々定められた巡回警護を行っているが、監察官の仕事がない。

事件といっても、酔っぱらいが暴れたり、度を超した夫婦喧嘩程度で、警護官がその場にかけてなだめ仲裁することで解決してしまう。

その為、仕事のない監察官は所内のお荷物になっていた。

同僚の3人の監察官は、朝警護所に出勤するとさっそくカード遊び

に興じる。

近所の食堂で昼食をとると、日当りの良い窓辺で午睡にお茶に再びカードと遊び暮らしていた。

そんな彼らが、警護官達から反感を買わないはずがない。

ジルは着任以来、一人資料室に籠り過去の事件資料を閲覧し整理していた。

昼食は持参した軽食で済ませ、残りの休み時間は庭で剣を振る。美人だが男装をし愛想がない。

その上に魔導士なのに帯剣しているジルは同僚からも煙たがられ孤立していた。

2年勤めれば任期が終わり、転属か監察官として他所の土地に移動となる。

その2年間で、ジルは資料室で過ごすつもりだった。

だが1年が経とうとする初春のある日、シーアンを揺るがす大事件が起こった。

街の若い娘が次々と誘拐される事件が起こったのだ。

部屋で寝ているはずの娘が、翌朝部屋から煙のように消えたことに住民達は戦慄した。

ジル達監察官は捜査に出るが手がかりを得ることが出来ない。

そして7人目が消えた翌日、誘拐されたはずの娘が近くの川辺で死体で発見された。

それでようやく、思念抽出の魔導から彼女らが川の上流にある山中の古い神殿跡で殺されたことをつかんだ。

一同が神殿跡にかけつけた所、剣を帯びた赤毛の傭兵がいた。それがマルコだった。

突然取り囲まれ剣を抜いたマルコに、ジルは剣で挑んだがそれは決して互角とは言えなかった。

押されて倒れ込んだ時、焦って魔法を放った同僚のお陰で、ジルも共に負傷しながら、なんとかマルコを捕縛することが出来た。

折しも、それ以降連続誘拐がぴたりと止まったことも重なり、誰もが現場にいたマルコを犯人だと思った。

だが、何度取り調べをしてもマルコは犯行を否認するばかりで娘達の行方はわからなかった。

連続誘拐犯の逮捕はジルの功績とされたが、取り調べのマルコの様子に納得のいかなかったジルは彼の証言をもとに再度調査に乗り出した。

結果、北から流れてきた人身売買組織の仕業と判明し、そのアジトで娘達が無事保護された。

実行犯の証言から、7人目は抵抗し逃げ出そうとしたので殺されたことが分かった。

それを、通りかかりの街人に見られたと勘違いし、潮時と切り上げターゲットを他所の街に移したのだった。

マルコは他所の土地で娘を攫われた親から救い出してくれるよう依頼を受け、独自に犯人達を追っていて偶然居合わせただけだったのだ。

「スタイン殿、本当に申し訳なかった」

「いいさ、もう終わったことだ。それに監査官は、俺を信じてその手でここから出してくれたろ」

「でも、長い間こんなところで不自由させてしまった」

「居心地はいいわけじゃないが、悪いわけじゃなかった。それにたった1月さ」

「これからどうするんだ？」

「依頼を最期まで果たすさ。売られた先が分かって大助かりだ。ところでマリーー監査官、もっと肩の力抜いたらどうよ」

「肩の力？」

「無理に男物の導服着て綺麗な髪をそんな刈って、固い喋りなんか

しなくてもよ、女らしいことは悪いことじゃねえんだ。その剣技と魔導力にその美貌、怖いもん無しじゃねえか。何か余裕がないように見えるんだよな」

「余裕がないか……」

「勝手なこと言つてすまん。なんか監査官を見ていて、いい女なのにもつたいないなつて思つてたんだ。」

「あはは、貴殿は面白いな。そんなこと言われたのは初めてだよ。髪は別に短いのが気に入ってるだけなんだが、そうか、この喋りも固いのか」

「ああ固えよ、監査官さん。貴殿でなんだよ。俺はマルコでいいつて言ってるだろ？なんだ、もしかして自覚がなくやつてたのか。杖の代わりに剣を持つ魔導士は初めて見たが、俺は気に入ったぜ。またいつか手合わせしてくれ」

「ジルだ」

「え？」

「ジルと呼んでくれ。来年、来年私は王都の魔導院に戻る。魔導騎士を目指すためにこれから更に腕を磨くから強くなるぞ。次はマルコ殿には負けないからな」

「ああ、いつでも受けて立つぜ。じゃあな、ジル」

「でも、結局剣だけじゃ勝てたことはないのよね」

腰を落とし床を注視しながら進むマルコの後ろ姿を見ながら、ジルのひとりごちた。

あの時あてのない再会の約束を交わしてはいたが、魔王討伐隊の選考で再会し、こうして共に生きる仲間となった。

まさかこんな深い縁になるなんてと、懐かしさに氣をとられて踏み出した足先をマルコが掴んだ。

「おい、跡を踏んでるぜ。ちゃんと見るよ」
「あらやだ、ごめんなさい」

壁や天井の崩れが少ない為、積もった誇りにはジルにもはつきりと分かる足跡が残されていた。

その跡を追って回廊を進んだ先に目的地があつた

巫女達が身を清めたであろう、浴槽のように石を敷き詰めた円形の泉。

ジルは泉の前に膝を付き、彼女を映す水面に手を触れた。

「ここね。人目につかないうゑに神殿の泉は魔導力を高めるわ」

「ここから送られたか」

「これは…一人の力じゃないわね」

「どういうことなんだ？足跡はミヤと魔導士のものしかないぞ」

「いえ、転移先にも魔導士がいたのよ。そっちのほうはかなりの力を持つているようね。こっちの魔導士は門を作っただけみたい」

「二人がかりか。ここから二人がどこに転移したのかは分からないのか？」

「残念だけど、転移の後のポイントの情報を後から消してあるのよ。ただこの門をくぐった、転移したのは1人だけのはずよ。これだけ手をかけているのだからそれなりの距離なんでしょうね」

「一人というミヤか」

「状況的にもそうね。だからミヤちゃんをここまで連れて来た魔導士はどこへ行ったか…」

「そいつがただ一つの手がかりか。そろそろ日が暮れる頃だ、急ごう」

マルコは床を調べ、彼らに残された手がかりの後を追った。

マルコを先頭に追跡を再会した二人だったが、森を抜け街道に出た

ところで日没となつてしまった。

ジルは魔法で剣先に辺りを包む光を灯りに、マルコは地図を広げた。

「私たちが追つてゐる奴はどこに行つたのかしらね」

「星の位置からして俺達は森の北に抜けた。ここの近くに街はないか？」

「村ならジルームかテニーの２つがあるけど」

「いや、街だ。村は余所者は少ないから目立ちやすい。追われてる自覚はあるだろうから街へ行くはずだ」

「街は……テルノとバロナが少し遠いけど同じくらいの距離よ。やっぱり王都から遠いバロナかしら」

「いや、テルノだな」

「どうして？ミヤを送つたのにわざわざ王都には行く必要はないはずでしょう？それにバロナは交易都市だから身を隠すにはうつつじゃない」

「金だよ。こういう仕事は、前金をもらうが半金は仕事の後で相場が決まつてゐる。とすると、王都かその近辺で取引するはずだ」

「そういうものなのかしら。ノコノコ顔を出せば用済みで消されることもあるんじゃないの？」

「その可能性もあるだろうな。そうなる前に早いところ奴を捕まえないと」

だが、テルノの村で黒い魔導士の情報を得ることは出来ず、焦る気持ちを抱えながら二人は一路王都へ向かった。

36・追跡：マルコとジル＜2＞（後書き）

ちょっと間が空いてしまいました。
更新おまたせしました。

マルコとジルの出会いの件。

どこまで書こうと思いつながら大筋を書いちゃいました。
このまま1話がつつりと書こうかとも迷ったのですが、書くなら番外編ですよ。

マルコ&ジル編はひとまずここまで。
今回はジャンとフラン編です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6178p/>

おかえりなさい、勇者様。

2011年2月13日20時16分発行